第三種郵便物認可　毎月一回五日發行

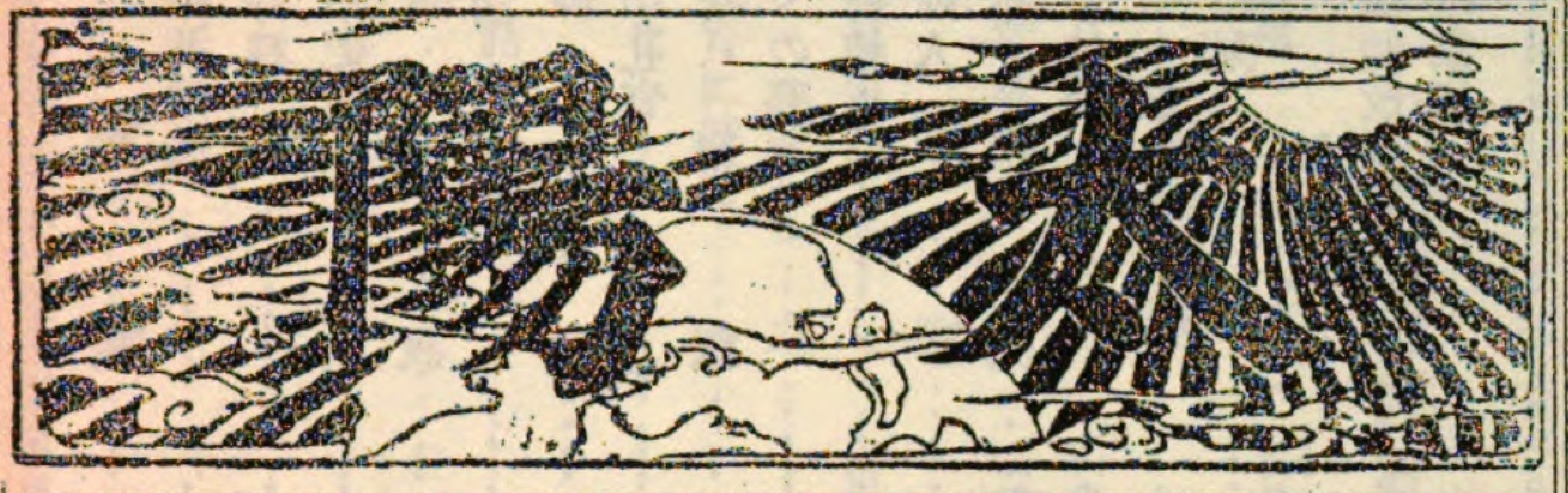
女學世界

第一巻第五號




季節向新柄流行品を取揃へ階上階下總體に陳列致有之
尚御休息室をも取設け置候間御慰に御子様方御連れ遊
ばされ緩々御遊覽なし下され度奉願上候
地方よりの
御注文に對
してはくわ
しき御案内
書有之候間
御一報次第
御送り可申
上候
東京日本橋駿河町
三井呉服店
大阪高麗橋三丁目
東京電話本局
特五一一五
一二二七
一八六〇
大阪電話東
特四七三
一六五〇

女學世界第五號目次



口繪

◉和蘭女皇ウイルヘルミナ陛下◉在清國聯合軍總指揮官獨逸元帥ワルデルゼイ伯◉米國ロッキー山脈◉羅馬の古彫刻◉公爵近衞篤麿◉貴族院の四名士◉清國の三總督◉韓國京城駐在本邦武官◉在天津各國郵便局長◉物故諸名士◉歐州の二碩學◉英國工業界の二名家◉東京の櫻花◉隅田川上流◉五重塔◉川合玉堂筆湘君◉横山大觀筆老子出關其他

第七卷第四號　四月五日發行

定價　一册金三拾錢○半ヶ年分(増刊共八册)金貳圓二拾錢○一ヶ年分(増刊共十六册)金四圓一拾錢○郵稅一册三錢

近刊豫告

群馬縣師範學校教諭附屬小學校主事
利根川與作君著

家庭教育法

洋裝全一冊

全編家庭敎育の原理家庭敎育の方法の二大部より成り詳に家庭に於ける兒女敎育の方針を示せり此種の著書寥々晨星も啻ならざる今日大方の歡迎を受くるや疑を容れず

東京市日本橋區吳服町一番地
合資會社　普及舍
發兌元

（甲の二）

(甲の三)

干川岸貫一君編撰

續近世百傑傳

全壹冊洋裝袖珍
紙數大凡五百餘頁
正價金
四月上旬發兌

續百傑傳人名

○長沼澹齋　○皆川淇園　○間長涯　○賴春風　○大野拙齋　○松平寒綠　○齋藤鑾江　○山岡八十郎　○三條實萬　○清川正明　○世良修藏　○小川靖齋　○釋胤康　○川路聖謨　○玉松操　○山寺常山　○古賀茶溪

○秋山伊助　○泉豐洲　○山東京傳　○山梨稻川　○宇田川榛齋　○摩島松南　○佐藤信淵　○八尾正朋　○大久保要　○緒方洪庵　○宮部鼎藏　○中村無二　○池藏太　○和田三兵衛　○田口文藏　○那珂梧樓　○山中靜逸

○宇田川槐園　○桂川月池　○中井履軒　○市野迷菴　○中島子玉　○林述齋　○高野長英　○鳥山義所　○堀織部正　○間崎則正　○眞木和泉　○武市半平太　○木下韡村　○高橋正助　○山口兵武　○井口晉作　○小永井小舟

○西山拙齋　○那波網川　○杉田玄白　○大槻磐水　○狩谷棭齋　○川西士龍　○岡本花亭　○釋月性　○吉田東洋　○藤本鐵石　○川述虎一郎　○戸田銀次郎　○月形洗藏　○牛牧方士　○渡邊樵山　○菊地海莊　○林鶴梁

○前野蘭化　○廣津臺山　○式亭三馬　○平山行藏　○古賀穀堂　○猪飼敬所　○篠崎小竹　○賴古狂生　○中島晴虎　○多田海庵　○大久保忠敬　○高島秋帆　○草場佩川　○吉田守隆　○林鶯溪　○大鄉學橋

○中井竹山　○賴春水　○太田南畝　○松平冠山　○長野豐山　○古賀侗菴　○帆足鵬卿　○茅根伊豫介　○來原盛功　○錦小路賴德　○增井北洋　○川瀬太宰　○水筑佩絃　○植原靜淵　○鹽谷簣山　○成島柳北

發兌元　博文館

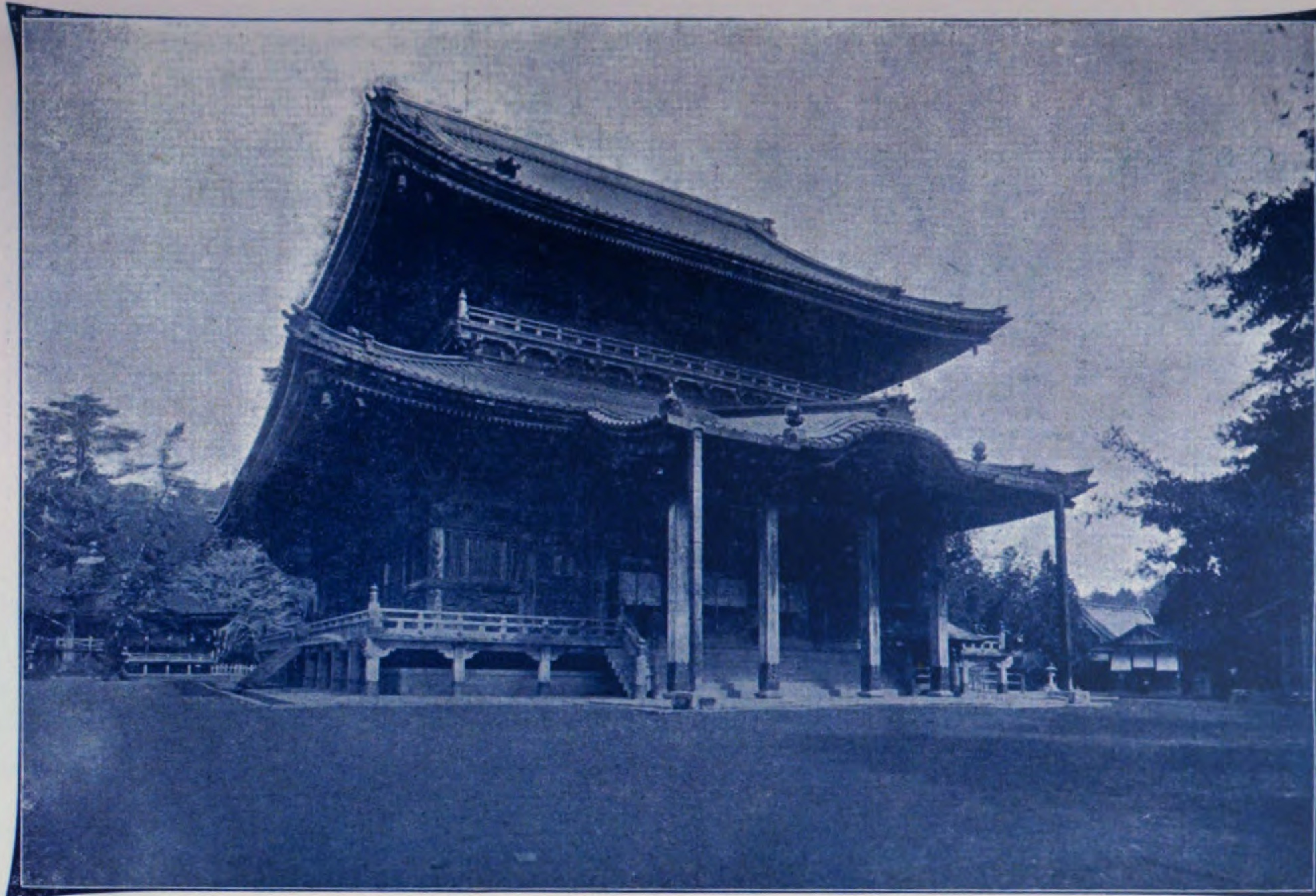


伏見宮御息所利子殿下



伯林圖書館

日本名刹



高野山黄金堂



（齋藤紫白氏撮影）

牡丹　（橋本雅邦翁）

每月一回
一日發行

少年世界

定價 一册金十錢 四册前金卅八錢 八册前金七拾五錢 郵税一册一錢

明治三十四年 第七卷第五號 四月一日發行

口繪

特別
英國皇太子殿下
英國皇孫殿下
アートペー

○武藏の二名園○普國建國二百年祭○歐行通信端書○南洋風俗○魚形水雷發射の光景○天の橋立○外國皇族の應對○米國南北戰爭の紀念大砲と砲彈

記事摘要

（博文館發行）

（乙の一）

内外遊戯全書

健全なる精神は健全なる身體に存すると實に精神身體の保育は須らく兩々相並行せしめざる可からず殊に學生の體軀健全活潑ならざれば中途に廢學する虞あるのみならず往々夭折の不幸を見るあり今や内外遊戲全書の出づる豈に偶然ならんや

全部拾五冊

第壹編	端艇競漕術	法科大學	遠山熈君著
第貳編	新游泳術	法科大學	稻田實君著
第參編	ベースボール、クリッケット	工科大學	津田素彦君著
第四編	射的術及弓術	工科大學	津田素彦君著
第五編	銃獵案内	農科大學	佐野信三郎君著
第六編	庭球術	工科大學	野田圭園君著
第七編	玉突術	法科大學	三宅鐵骨君著
第八編	陸上競走	農科大學	志岐守二君著
第九編	鳥獸狩獵法	農科大學	志岐守二君著
第拾編	室内遊戯法	農科大學	志岐守二君著
第拾壹編	昆虫採集	農科大學	安藤謙吉君著
第拾貳編	漁魚術	中洲	滿尾藤次郎君著
第拾參編	馬術	法科大學	遠山熈君著
第拾四編	福引集	農科大學	安藤謙吉君著
第拾五編	蹴鞠と自轉車	法科大學	三井末彦君著

正價〔㊀壹冊金拾貳錢㊁六冊前金六拾六錢㊂拾貳冊前金壹圓貳拾五錢㊃郵税一冊金四錢㊄御注文前金

袖珍美本

（その三）

東京日本橋區本町三丁目

博文館

發兌元

續帝國文庫

既刊

第一編……眞田三代記
第二編……近世說美少年錄
第三編……日本歌謠類聚上
第四編……日本歌謠類聚下
第五編……修紫田舍源氏
第六編……竹田出雲淨瑠璃集
第七編……朝夷巡島記
第八編……兒雷也豪傑譚

第九編……江戶作者淨瑠璃集
第十編……前々太平記
第十一編……太平記
第十二編……紀海音淨瑠璃集
第十三編……近松淨瑠璃集
第十四編……後太平記
第十五編……近松半二淨瑠璃集
第十六編……脚本傑作集上

博文館編輯局校訂

第卅二編

校訂 万物滑稽合戰記

（四月中旬發行）

全壹冊洋裝
背皮金文字入
正價金六拾錢
郵稅金拾六錢

堅く言へば斗不知守、平たく言へば大守し浮世の眞相の古來の文學者の華さける、抱腹絶倒の合戰記にして全部、略目次に示すが如く、何れも珍篇秘冊ならざるは無く、特に附錄のインップ物語の如きは、寛永萬治の古板其まゝの縮刷にして、內容に趣味なきと、普通小說の比に非ず。是非一本を購讀せられんことを希ふ、

第三十一編　常山紀談　江見水蔭校訂　新刊

既刊

第十七編……京山全集
第十八編……落語全集
第十九編……並木宗輔淨瑠璃集
第二十編……紀行文集
第廿一編……一九全集
第廿二編……漂流奇談全集
第廿三編……邯鄲諸國物語

第廿五編……續水滸傳
第廿六編……文耕堂淨瑠璃集
第廿七編……傾城水滸傳
第廿八編……白縫物語上
第廿九編……白縫物語下
第三十編……北雪美談時代鏡

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（乙の四）



(齋藤紫白氏撮影)

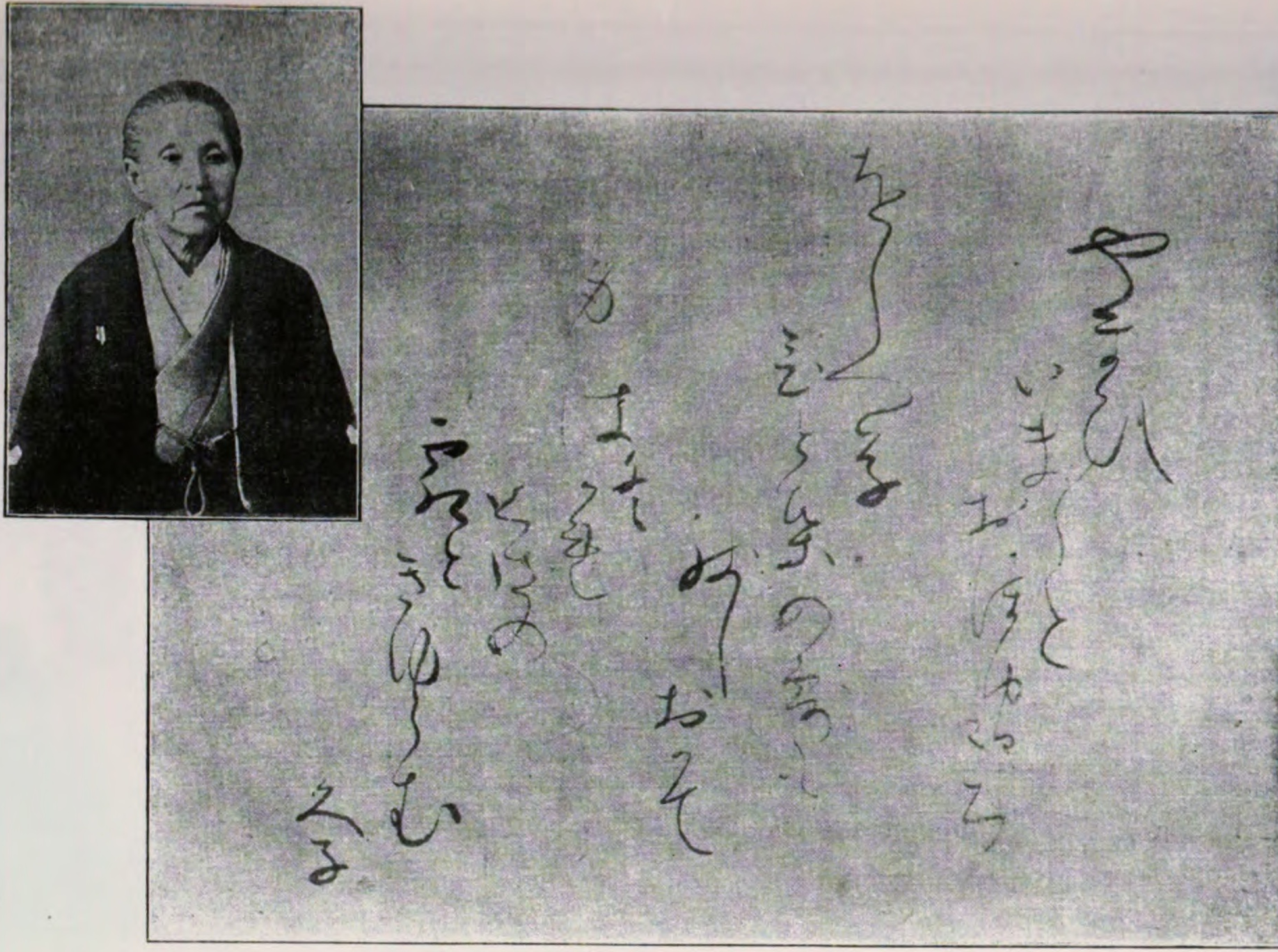
堀川御所　(木村武山筆)

名流筆蹟

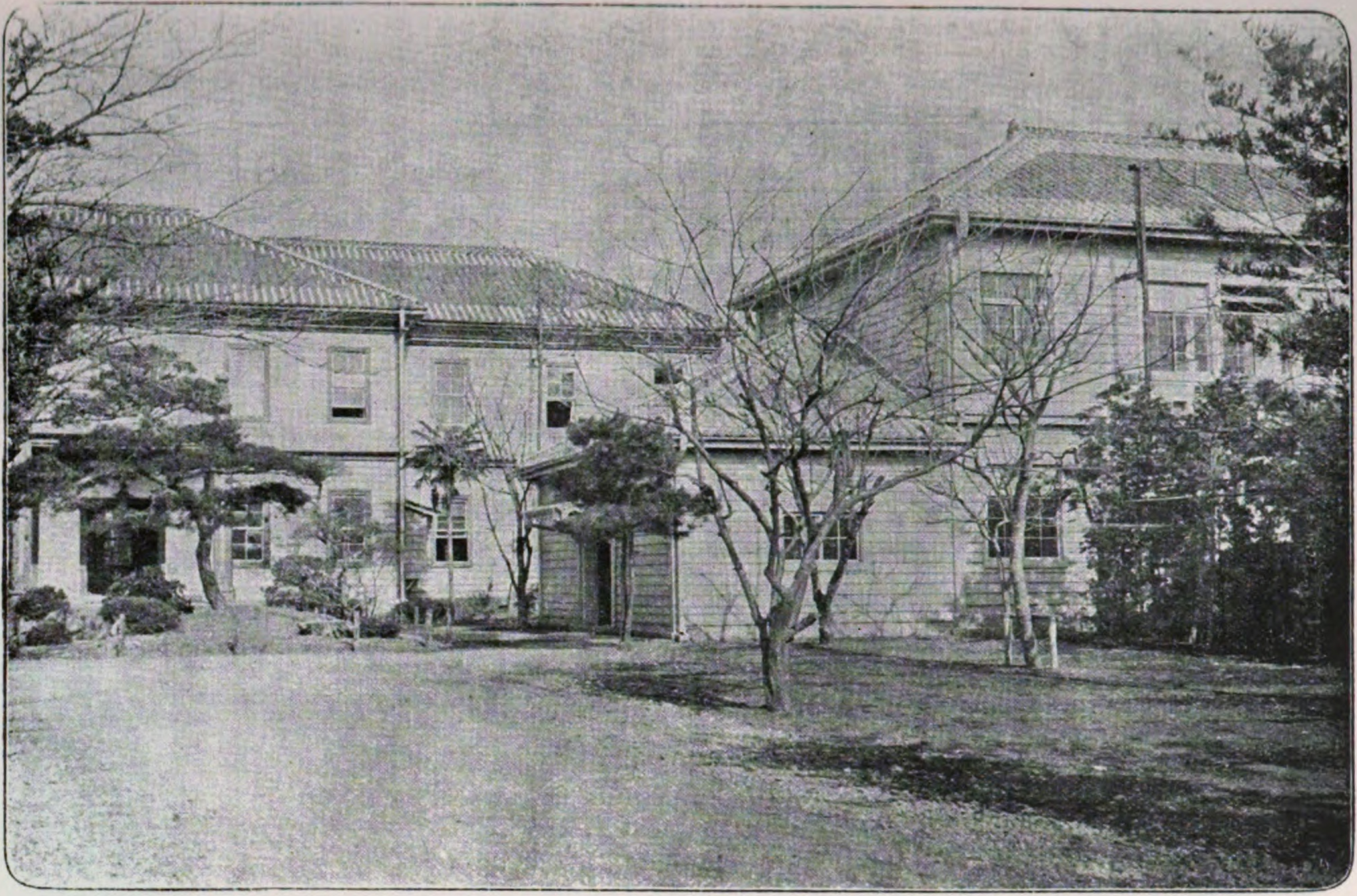


（柳原權典侍）　（三條公令妹）　（鍋島侯爵夫人）

（坂正臣氏所藏）



鶴久子刀自と其辭世

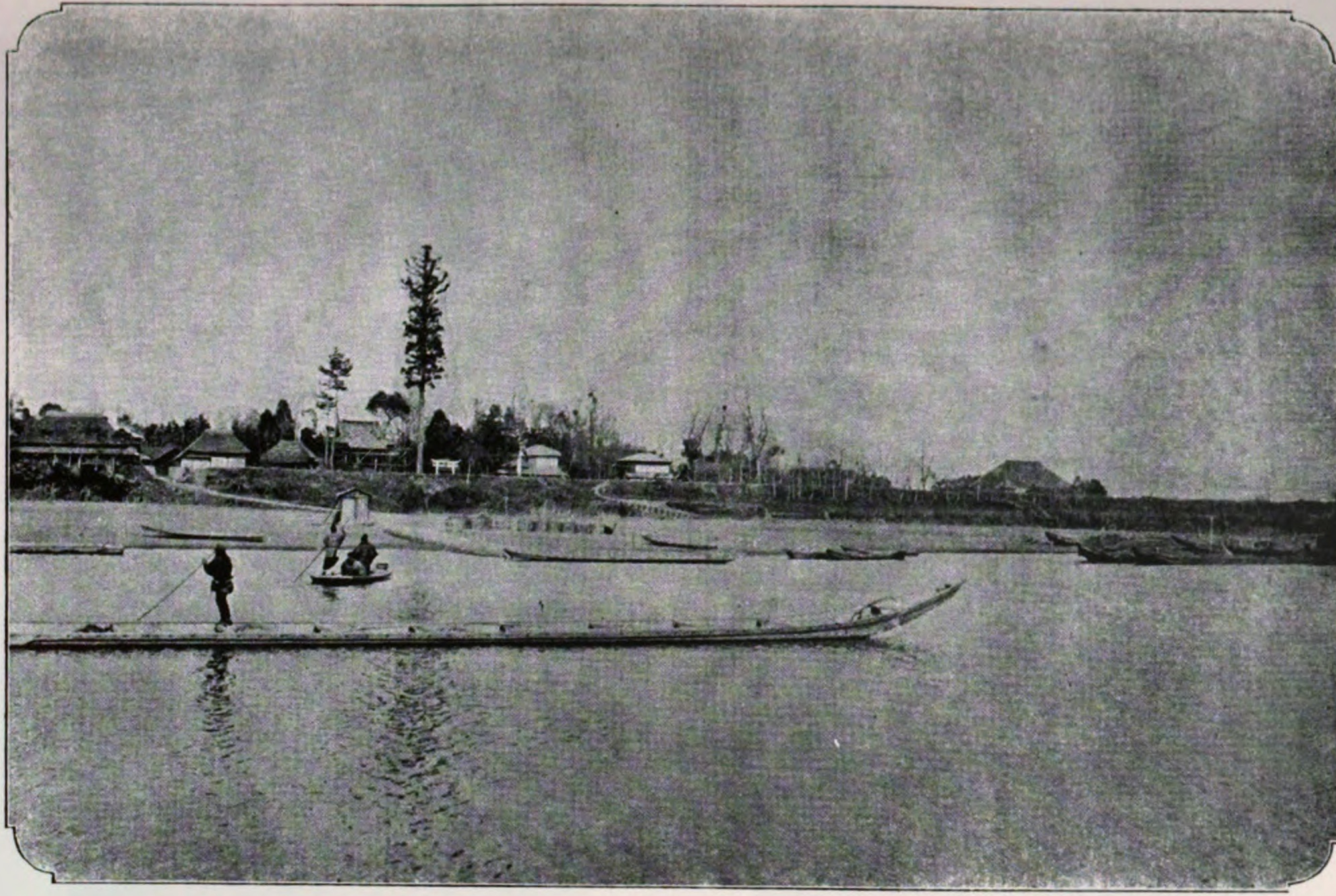


第二高等女學校及女子師範學校



京城日本婦人協會員

(齋藤紫白氏撮影)

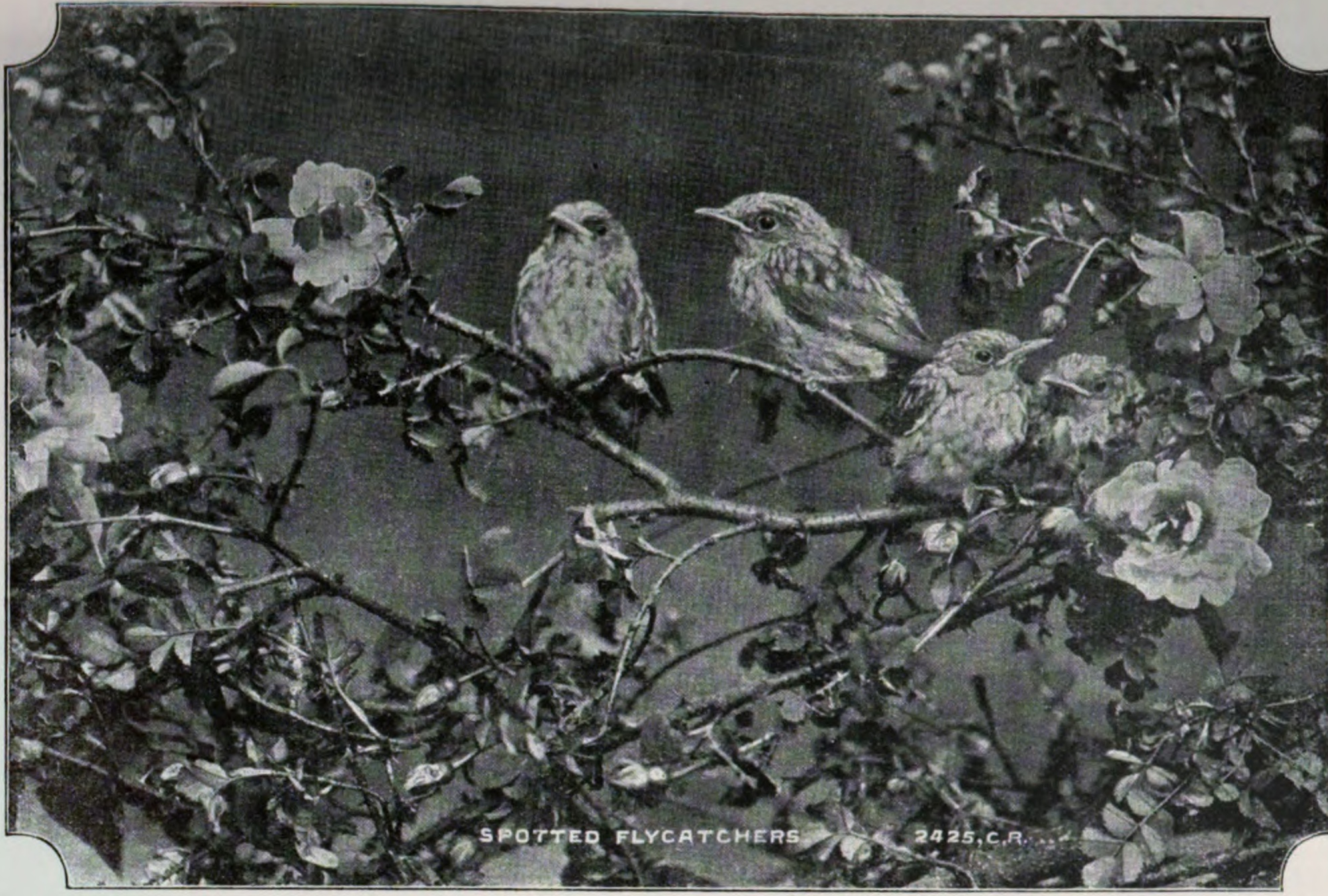


矢口の渡

才媛墨蹟







薔薇と鶺鴒



第七巻第五號

三十四年四月一日發行

△藤花（表紙） 山中古洞筆
△落花錄（口繪） 武内桂舟筆

定價

一册金廿五錢〇三ヶ月分五拾九錢（半ヶ年分壹圓八拾錢〇一ヶ年分（十六册）三圓五拾錢〇郵税一册三錢

每月一回一日發兌

本文紙數三百二十頁寫眞銅版八丁木版口繪二丁兩面菊判繪表紙

發兌元 博文館

（丙の一）

少年讀本

我邦近古の英傑碩學名士賢婦の事蹟を錄す一冊一人を傳して作者は皆當時知名の大家に屬し文辭は暢明にして讀むに易く以て立志修身の模範たらしめ以て家庭第一の讀物たらんことを期す。

既刊目

◉第壹編 高島秋帆 全壹册 福地櫻痴君著 水野年方君畫
◉第貳編 白河樂翁 全壹册 中村秋香君著 富岡永洗君畫
◉第參編 河井繼之助 全壹册 戸川殘花君著 梶田半古君畫
◉第四編 三條實美公 全壹册 佐田白川君著 寺崎廣業君畫
◉第五編 曲亭馬琴 全壹册 饗庭篁村君著 下村觀山君畫
◉第六編 井伊掃部頭 全壹册 巖谷小波君著 山中古洞君畫
◉第七編 山田長政 全壹册 遲塚麗水君著 菱田春草君畫
◉第八編 錢屋五兵衛 全壹册 桐生悠々君著 富岡永洗君畫
◉第九編 春日局 全壹册 岸上質軒君著 菱田春草君畫
◉第拾編 水戸烈公 全壹册 野口珂北君著 横山大觀君畫
◉第拾壹編 桐野利秋 全壹册 春山鶴峯君著 小坂象堂君畫
◉第拾貳編 藤田東湖 全壹册 大和田建樹君著 中村不折君畫
◉第拾七編 木内宗吾 全壹册 松原廿三階堂君著 宮川春汀君畫
◉第拾八編 西郷隆盛 全壹册 川崎紫山君著 池田輝方君畫
◉第拾九編 阪本龍馬 全壹册 坂崎紫瀾君著 水野年方君畫
◉第貳拾編 横井小楠 全壹册 大野酒竹君著 中村不折君畫
◉第廿壹編 貝原益軒 全壹册 石原笠堂君著 宮川春汀君畫
◉第廿貳編 渡邊華山 全壹册 渡邊霞亭君著 筒井年峯君畫
◉第廿參編 中濱萬次郎 全壹册 石井研堂君著 遠藤耕溪君畫
◉第廿四編 近衛忠凞公 全壹册 勢多章之君著 中村不折君畫
◉第廿五編 間宮倫宗 全壹册 笹川臨風君著 山中古洞君畫
◉第廿六編 周布政之助 全壹册 堺枯川君著 高橋松亭君畫
◉第廿七編 荻生徂徠 全壹册 内田不知庵君著 中川蘆舟君畫
◉第廿八編 松平伊豆 全壹册 森山吐虹君著 鈴木華邨君畫

正價 壹册金拾參錢○六册前金七拾錢○拾貳册前金壹圓參拾錢○貳拾五册前金貳圓六拾錢○全部五拾册金五圓○郵税壹册金四錢宛

發兌元 東京日本橋區本町三 全

次　新　刊　部

◎第拾參編 **伊能忠敬** 全壹册 幸田露伴君著 富岡永洗君畫

◎第拾四編 **新井白石** 全壹册 武島羽衣君著 山田敬中君畫

◎第拾五編 **水野越州** 全壹册 中村桂軒君著 小林永興君畫

◎第拾六編 **池大雅** 全壹册 田山花袋君著 横山大觀君畫

◎第廿九編 **中江藤樹** 全壹册 國府犀東君著 山中古洞君畫

◎第參拾編 **島津齊彬公** 全壹册 春山鵜峰君著 中澤弘光君畫

◎第卅一編 **高野長英** 全壹册 干河岸貫一君著 宮川春汀君畫

◎第卅二編 **橋本左內** 全一册 桐生悠々君著 中川蘆舟君畫

第卅三編 釋月性

干河岸貫一君著　宮川春汀畫

全一册洋裝美本
正價金拾三錢
郵税四錢

周防大島郡妙圓寺住職月性師は吉田松陰の親友にして大樂源太郎赤禰武人世良修藏は其門人なり師は僧中の豪傑也詩人也勤王討幕論者也説教家としては防長を風靡し護法家としては佛教を活用したり是等種々の方面より師の性行を觀察し其逸事を掲ぐ苟も師が作れる男兒立志出郷關の詩を稱する程の人は必ず一讀すべき價値あり

續刊目次

◎熊澤蕃山　文士幸田成友君著

◎林子平　松居松葉君著

◎野中兼山　北村香陽君著

◎大鹽平八郎　堀紫山君著

◎僧月照　佐々木信綱君著

◎烈女お藤　藤本藤蔭君著

◎岩倉具視　中川重麗君著

◎雲井龍雄　玉木懿夫君著

◎小栗上野介　勢多章之君著

◎平野國臣　文學士白河次郎君著

五拾册洋裝菊判○每編著名文學大家執筆○和洋有名畫家精密插繪御注文都て前金

丁目八番地　**博文館**

(丙の三)

中等教育

作文教科書

小宮山弘道君編

本書は主として中等教育に入りたる學生の爲めに編著せらる、凡そ初學文を作らんとするに、文字未だ富贍ならざるため、思想を表現するに當りて、筆端窘束の憾なき能はず。仍て本書は之を救はんが爲に部門を分ちて熟語、連句、練習問題、及び作例を掲げたれば之に習熟せば以て自己の思想を自由に發叙することを得べし

全壹冊洋裝菊判
紙數四百四十頁
正價四十錢郵稅八錢

刪定徒然草

大和田建樹君刪定
佐藤寛君校訂

文部省檢定濟

兼好法師の徒然草は其文の妙、想の奇を以て久しく世間に傳誦せらるゝ所なるが、本書は中等教育の用書に充てんが爲に風俗を害し、もしくは宗教に僻したる個條を刪り、叙事と論説と二類に分ち、所々頭書を加へたれば、亦以て好個の家庭讀本に供すべし

全壹冊洋裝菊判
正價金拾八錢郵稅六錢

發兌元　東京　博文館

（丙の四）

多田親愛先生筆

在原業平朝臣

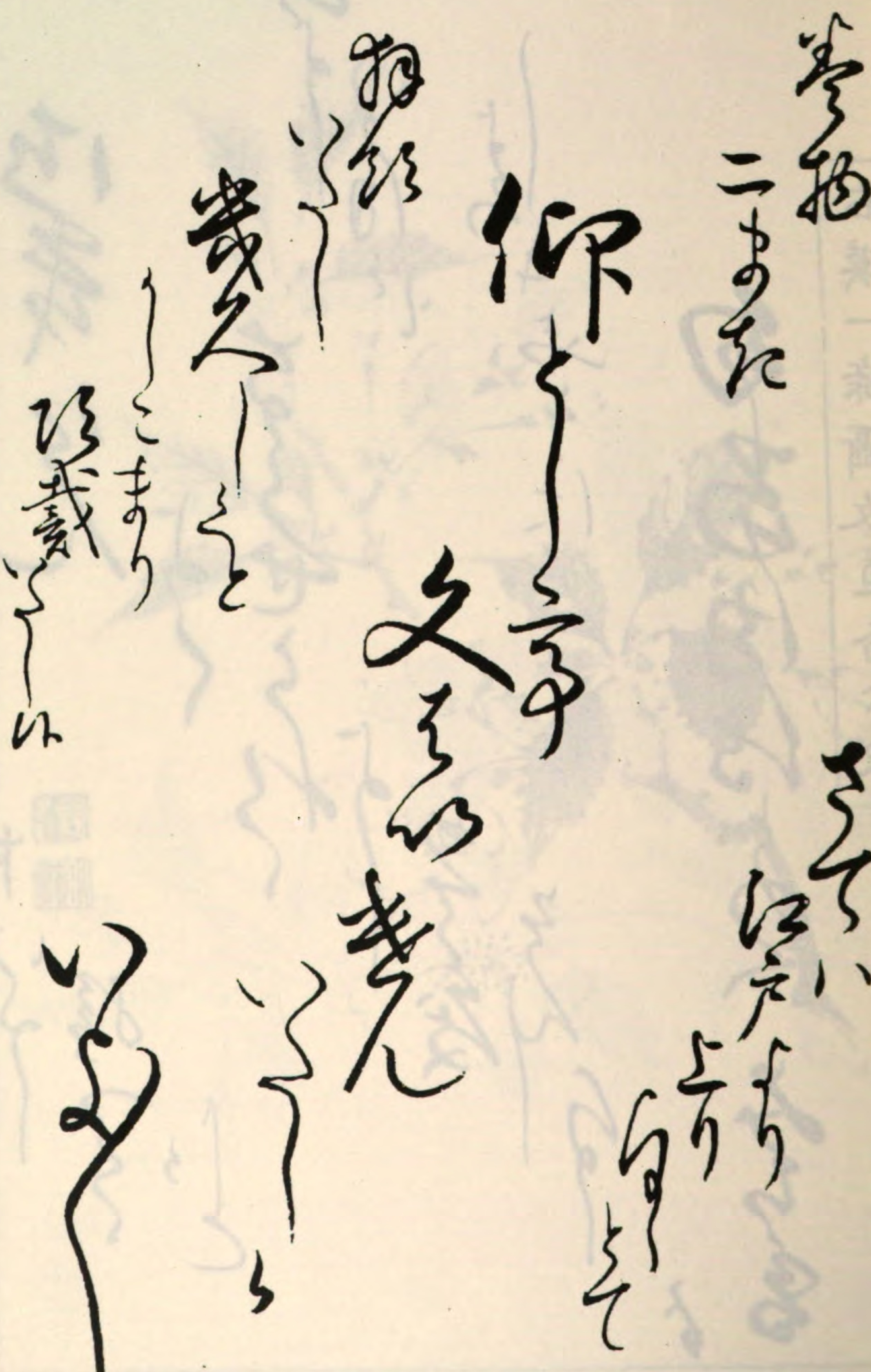
よのなかにたえてさくらの
なかりせば
春乃心は
のとけからまし

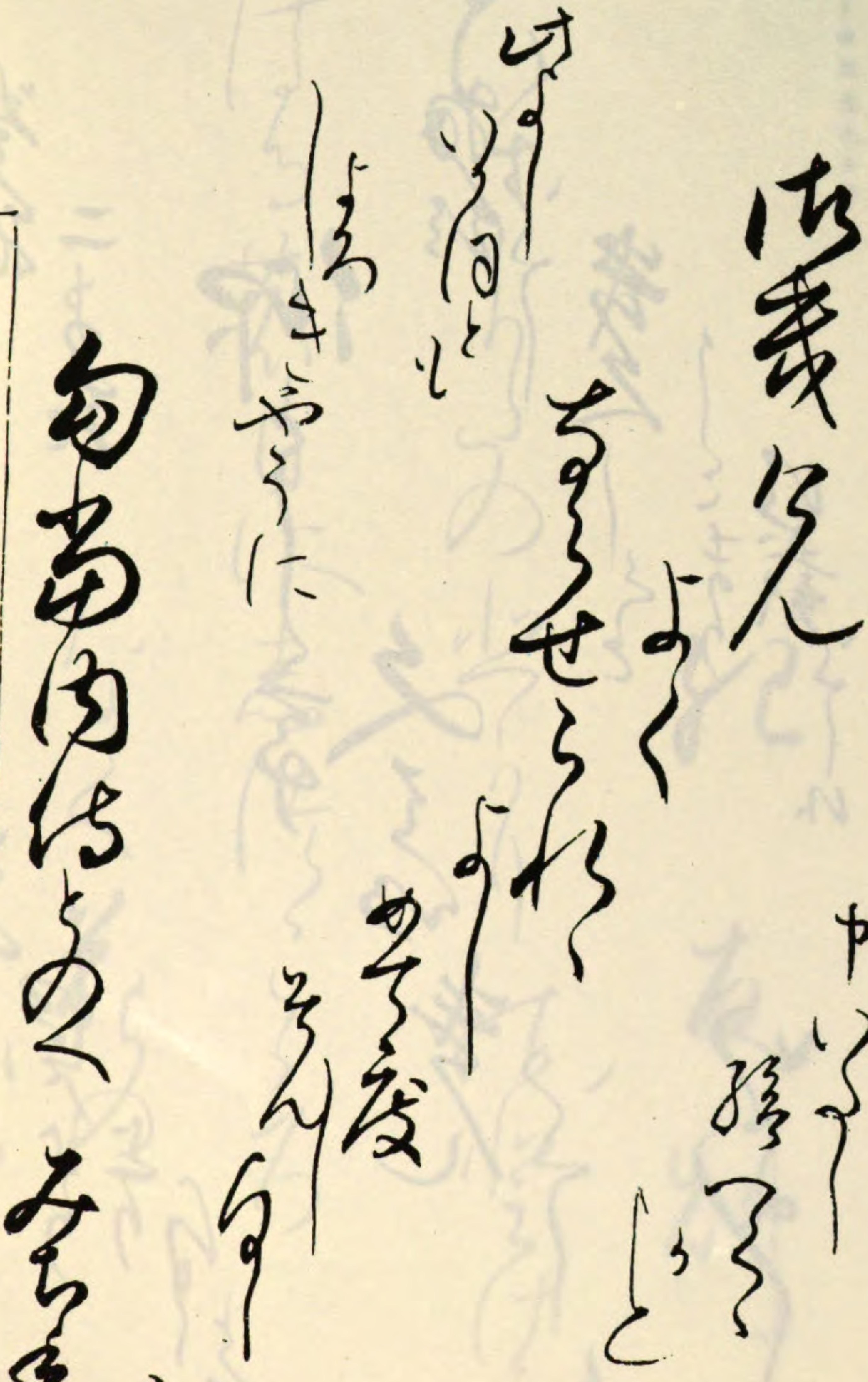
多田親愛先生筆

紀友則

ひさかたのひかりのとけき
はるの日にしつこゝろ
なく花の
ちるらん

多田親愛先生筆





右摸一條攝政道香公柬



野口小蘋女史筆

野口小蘋女史筆





野口小蘋女史筆

野口小蘋女史筆



(丁の二)

（丁の三）

新文藝

編輯主任　久保天隨　八杉荔舟　大谷繞石

第壹卷　第四號　四月一日發行

目次

本誌體裁四六二倍
毎月壹回一日發行
定價 一冊金十二錢 六冊前金六十六錢 十二冊前金一圓二十錢 外に郵便税一冊壹錢づゝ

本誌は廣く江湖諸君の投稿を歡迎す
但し投稿は本郷區西片町十番地に
ノ二十一號新文藝編輯所へ宛送附の事

發行所　東京市神田區仲猿樂町　新文藝社
發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

女學世界

第壹巻　第五號

明治三十四年四月五日發行

紀元二千五百六十一年　西暦一千九百一年（辛丑）

論説

風俗改良意見

伯爵　板垣退助

日本人を西洋の人に比較して見るに、まづ第一に異つて見ゆるのは男女の身長の差の著るしい事である。如何なる小男でも普通の婦人よりは脊が高い、これは實に日本に固有する一種の奇觀であらう。西洋あたりでは決してそんなに差はない。公園などで男と女が脊を並べて歩行して居るのを見るに男女の身長の差はそれ程違ふて居ないのに、日本では實に此の差

が著るしいのである。これで日本婦人の體格が如何に不發育であるかといふ事が明かに解かる。(此時老伯は女學世界第三號口繪ヨーク公家庭の圖を參看しつゝありたり)、そしてその體格の短小であるのは年來の習慣であるから元より一朝一夕に變はる事は出來ない、殊に日本婦人は裁縫といふ家庭に於ける一種の責任があッて日常室內に坐つて居なければならない習慣であッたから脚部の發育が非常にわるい、それを直して行くには、何でも戶外運動を奬めねばならない。西洋人が鎌倉あたりへ避寒してゐるのを見るに男女に拘らず、毎日海濱を散策するのが迚も日本婦人などに眞似も出來ない。婦人の體格を善くしやうといふにはまづ務めて戶外の運動を奬勵せねばならない。

扨て私が風俗改良會を企てた趣旨といふのは、近來此の日本國が勝捷の威光で俄かに列強の仲間入をしたといふ譯で、國の交際其外萬般の事がすべて列國環視の中に立つ事になつて來た、然るに我國で此の社交の有様といふものが、非常に幼稚で、且つ外國人から見て不體裁な事が夥だしい。どうかこれを改良して世界中の人に試驗されても恥しくないやうにしたいものである。如何に國が富んで軍が強いといふた處ろが、肝腎な社交上の有様が野蠻であつたならば眞誠に世界の仲間入をする事は出來なからう。そして畢竟外交上の不利益となるの

である。外交は唯外務省の役人がやるのでなくて一般國民の社交上の位地が進んで來なくては到底外交上に好結果を得る事はむづかしからうと思ふのです。

そこで私が風俗改良の主意はまづ外部から矯して行くといふ方針で、そして廣ろく行渡つて効果を收めたいと思ふのです。成程内部の方から矯めて行くといふのは、それは誠によい事で、人間萬事が心から改まつて行かねば眞實でないといふ事は私も承知してゐる、けれどもそうすると區域が誠に隘ひ、精神の方から改良して行く事になると其の區域が甚だ狹い事になつて仕舞ふから、私はそれを世の道德家とか教育家宗教家とかいふ側の人々に任せて置いて更らに外部の方から廣ろく改良して行きたいと思ふ。私の考は唯外部の改良であるが。併し人間が普段の着物でゐる時と禮服を着た時とは心持も幾何か違ふであらう。まづ外部を改めて漸々内部の方へ移して行きたいと思ふ。譬へば蓄妾の弊風にせよ。宴會席の不體裁にせよ、亦は田舍の風俗上に就て又衣食住其他日用の事に就て、色々不體裁な事が中々數へきれぬ程ある、皆それ〳〵其の案を具して追々世の中に出さうと思ふて取調べた改良案は山のやうに積つてゐるが、それをまだ一つも持出さない。といふのは外でない、唯今地方へ支部を設けつゝあるので、其の支部が悉く出來た曉に、議案を支部へ廻して十分討議をさせた上で發

表しやうと思ふてある。それでまだ一つとして改良案といふものを出して居らない。
まづ其の一例を言ふて見ると宴會で盃の獻酬をする、これ等は習慣上よろしくない事で猥りに酒を强ゆるといふ事であるから改良せねばならないであるが、まだ世間へ發表しない、唯時間を亂すといふ事は今日即刻人の妨害損失にもなる事であるから嚴重に守る事にしました。又日本の習慣として人を訪問するに手土產を持參するといふのもよろしくない、又は田舍の人男女に拘らず道傍で放尿するなどゝいふ事は別段道德上に缺ぐる事はないにした處で、不體裁は甚だしいから努めてその習慣を改めねばならない。

それから衣服に就て改良せねばならぬ事は色々ある、第一日本人の着流しに兵見帶といふやうな風俗は世界中何處へ行つてもない風俗で、東洋の未開國といふ朝鮮であらうが、暹羅であらうが、又新領土の臺灣ですらも衣服の體裁から言へば日本よりもずつと整ふてゐる。我國でも幕府の時代には今のやうな不體裁ではなかつた、彼の兵見帶といふのは薩摩から流行して來たものであるが、薩州でも維新時分には決してそんな風俗ではなかつた、キチンと四角な帶を〆て必らず袴を穿ちてゐたものである。明治になつてから諸事社會上の制裁が弛んであんな風になつたものと思はれる。それから旅人宿等に就ての不體裁、汽車中の不行儀、男女

混合して憚りもなく酒を飲んだり。大聲で傍客の迷惑となるにも一向顧みないなどの惡風は速かに改良して行かねばなるまいとおもふ。

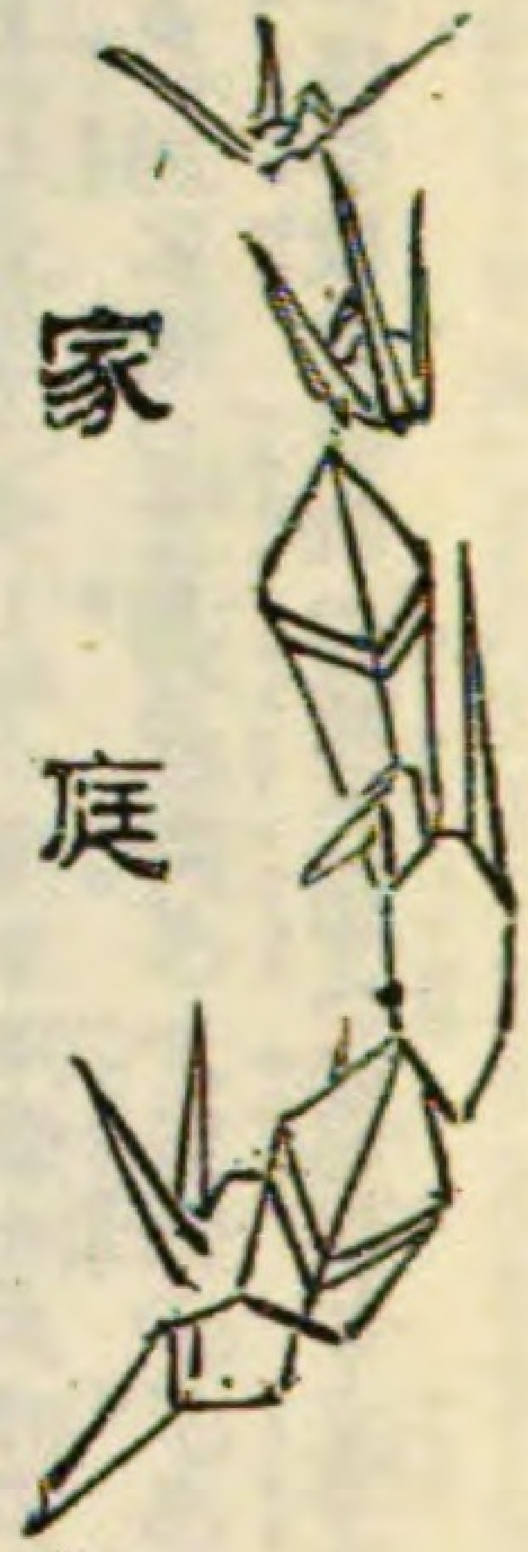
といふ次第で此の風俗改良會は先づ形の上から改良して段々内部に及ぼすの主意ですから會員の中には立入て見れば隨分蓄妾等の事をしてゐる人もあらうけれども、それを嚴しく詮議をすると區域が狹くなつて來るのみならず容易に實効が上らぬ、如何に主意が立派でも實効に益がなうては何の役にも立たない、それでまづ精神上の改良は道徳家とか宗教家とかでやつて貰ふて私共の方は外部に顯はれた方から廣く實効を收めて行かうといふのでありま す、そして段々家庭の趣をも外形から改良して行つて小供の中から恥といふ事を知つて來れば自然と惡事は隱すといふ樣になつて、それから段々精神に及ぼして行かふといふのであります。

凡て此の風俗改良にせよ、社會の問題の研究にせよ、唯才智とか學問とかでは出來ない、どうしても社會上に重望があッて、徳の高い人達が率先して遣つて呉れねばならない。さういふ人達が先に立つて遣るとなか〳〵効力があるけれども、見渡した處今日の元老などいふ向では唯老後の樂しみに金を貯へるとか別莊の立派なのでも建てやうといふ位で、社會の改良など

といふ事には少しも念がないのである。又これが平素多忙な人であると自から今日の用事に驅られて献身して遣る事の出來ない場合もあらう。幸い自分は今では政治上の縁もきつて居るし、元とそういふ事が自分の樂で、つまり改良事業など遣るには自分の性質が極めて適して居る、それ故これから自分は老後の樂しみとして追々此の改良事業に献身して見る積りで居ります。

(本篇は板垣伯爵が殊に本誌の爲めに談話せられたるを記者の筆記したるものにて文字上の責任は記者にあり)





家庭教育について

棚橋絢子

近頃世間では、德育のことや、家庭教育のことを隨分八釜しくいひますが、これが默つて靜かに爲る時期は始めに喜ぶべき時で、いま世間で騷々しく唱ふるのは、却て憂ふべき現象であると思ふ、實に當時は德育といふものは地を掃つたといふてもよろしい、また家庭教育のことは八ヶ間敷說かれますけれども、昔のに比較すれば實際廢つて居る、殊に學校へでも出で授業をして居る人は、能く家庭教育のことをお話いたしますけれども、兎角無教育の者は何にもいひませぬが、それで理屈を語らぬ人の方が却て實際に行つて居るが、理屈を行つて居る人は行つて居らぬものが多いやうである、全く人に行らせる積りでいふのかは知りませぬが、凡ての物事は、先づ自らやつて、さうして人にも行らせるのが順序である、然るに今は自分の行は捨て置いて、他人に向て八釜敷理屈をいふやうになつて居る、それでどうか先づ默つてあまり八釜敷言はずに、自分でも一つ實踐に努めて貰ひたいものです、さうなつたら本當の家庭教育や德育のことも盛んに行はるゝやうになりませうが、今日さかんに言はるゝのは、言ふほど却て廢つて居るのであると思ふ、それで家庭教育については、女子も惡いですが、男子の方でも家庭教育の無い者をば、口やかましく言つて實際に擯斥する樣にして、御嫁に貰つても女子の本分たることを知らないものは知らないといふ風に認めて、また能く心得て出來る人は、非常に尊ぶといふ工合にして、學問は左程でなくとも實地に出來て、今日一家が治まることの出來るものは、大變都合のよろしい人と賞する樣になれば宜しいです、只口でばかり八釜敷いつて實際其宅に往つて見ると、どうも不取締の家があるのであります、此ごろ或る學

校の卒業生であつて、今では立派な敎員をして居りまして、大分高い月給を取つて御暮しになるけれども、どうも家政のことが出來ぬので、多額の收入があつても、女一人の經濟が立たないで、金が何時でも足りなく、却て何處の學校でも何でも卒業しない者の方が優つて居るやうに見られます。

私が知つて居る人で、別に學校へも行かず、たゞ家稽古位な所でありましたから讀み書きは通例です、これといふて藝も無いが怜悧の女子でありまして、この人なぞは此頃良人を亡くしましたが、能く一家を維持して立派に治つて居ります、子息も律義な實に良い子息であります、此ごろ或る婦人がこの未亡人の許に參りまして、貴婦は別に何處の學校も卒業したといふでなく、それで立派に御整理になりますが、私は良人と二人して敎員を仕て居りまして、常にお金が足りないで窮々して居る、別に奢つて居るかといふ奢つても居らないで、自分は學校に便利の良い所へ轉宿して車にも乘らないで通ひますが、それでも不足であるといひました、さういふわけで、八ヶ間敷い人は實際に行つて居らないで、却つて學問も無く何にも言はない人の方が、實際に家庭敎育が行はれて居るものが多い、前にも申した通り、反對の結果になつて居るやうに見えます、女子はそれ程讀み書きの力がなくても、實地經驗の積んだものが眞の勢力を得る樣になることで、また世の益にも爲るであらうと信じます。

さうして、その何處を卒業したとか、立派な人は家事などは賤しき事とし、また家に居ることを五月蠅がつて、兎角に敎師に爲りたがり、机に凭れて敎へることの方が樂だといつて居ります、一家の整理といふものは中々容易のものでないから、男子の方では能く其所を認めて、婦人を賞する樣にならば、自然に世の中も進んで大變國家の爲めになるであらうと思ふ、つまり一家の不經濟は一國の不經濟となり、一國の不經濟は即ち國家の不經濟といふことになりますから、一家の經濟を能く立つて、自分が小供を二人でも三人でも能く立派に育て擧げて行くといふことを、世間一般でやつた

ならば何にもいふことはないです、それを自分の子は下婢に任かして置いて、學校へ勤て十把一紮に人を敎ふるといふことは、誠に不得策のことであらうと思ふ、そりや未亡人になつて、モウ外に別段用も無く、國家の爲めに人を敎育して立つて行かうといふ人もありませうし、また家の都合に依つて良人を迎へることも出來兼ねるとか、また良人を迎へるにした所が相應な人物を迎へやうと思つてもさうは行かぬといふやうに、其所に故障があるやうな人が、外へ出で人を敎育しまするは、大變立派なことであつて、誠に賞すべきことでありませう、世間一般の人は成る可く、學問よりも實地の經驗に富んだ方を貴ぶやうにするのが、私は宜しからうと思ひます。

私が世話をした敎育のある女子がありましたが、その女子が嫁に行くときにも色々と話をしました結果、是迄貴女は學問はしましたが、唯實地に於ては少し不案內な所がありますから、御嫁に行つたならば、是非何處其處を卒業したといふ立派な人達の御模範になつて貰ひたい、今日家政を取つて立派に行つて人の母たるべき資格を充分に保つて貰ふのが、兼々私が望む所であるから、貴女も是非一つ行つて下さいと言つて聽かしたことがあります、それがどうも敎師でも仕たら、家政の事を五月蠅がつて、さうして何分にも細〳〵しきことは出來難いやうな有樣がある、書物も隨分讀めるし、何をやらしても立派に出來ますが、裁縫は時間もあり、出來ぬことは無いけれども、不得手であるから、仕樣といふ氣がなくつて、自分の着るものも外方にて裁て貰ひ、小供は一人しか居らぬに、矢張外方で裁てもらうやうである、また下女を使ふにも譴めることが酷い、自分は理か分つて居るからといつて、理論を以て下女を責めるからして、下女も居堪らずしてどうも長く續かない、また自分で何か買ひたい物でも、良人に頼んで買ふて貰ふといふことを仕ない、それでも此方から頼むといへば、良人に對して減價を取るやうだといつて頼まず、良人の方では與へたいと思ふても、さういふ譯柄であるから、まさか頼んで與へられもせず、妻女の

方から頼まるれば、喜んで良人の方でも拵へて與る氣になるのであるのに、縱令内心はさうなくとも、折角拵へてやつた物を當前と思ひ、つまり良人より禮でも受る樣な風であるから、始終口論が絶えない、姑も無く、小舅も無く、夫婦掛向ひでそれで喧嘩ばかりして居る、さういふ樣に良人が質朴風であつても一方が當世風であつたならば、家内が能く折り合ふものでない、隨分世間にはさういふ樣な傾きが餘程ある樣であります、中には順良な人もありますけれども、さういふ樣な風が時より見えると、順良な人までおかるれに逢はなければならぬ、實に歎かはしいことであります、どうか後來は教育のある人にして、能く氣をつけて本當の婦人たるの資格を立派に保つて貰つたならば、此上なき結構と思ひます、かくて漸く家政學なり、家庭教育なりの緒についたといふことでありませう、故に氣や口にて八釜敷言ふうちは、却て實地行はれて居らない事と思はれますから、どうか物靜かに實行に勉められんことを祈ります。

此ごろ、或る婦人會で法律の解釋を聽かすとか、聽くとかいふことでありますさうですが、或人の家内にも入會して呉れと勸められたが、全體此會は婦人方の交際を厚くすることを謀るさうでありますけれども、妻女の子供があるやうになつて、斯ういふ會に這入つては、却て又餘り交際に耽る樣になるかも知れない、私は家政學とか、または家庭教育とか、また婦人の爲めになる婦人會ならば出しますけれども、法律の解釋などでは出しませんでしたと云ひましたが、實際法律の解釋を婦人が聽くといふことは、如何なものでありますか、中々法律學は男子でも六ケ敷ものである、外國では婦人が法律を研究するものもあるやうに聞いて居りますが日本の婦人の法律の解釋抔は腦髓が未だ不適當であらうと思ふ、此間混雜の有つた證文の事を聞きましたが、一方の人は最初から欺瞞つもりで契約をしたのであつて、他の一方の人は、正直なる爲めに欺瞞られたことは知りませなんだ、いよ〳〵公事にも成らうとする時、辯護士などに聞合はすると、その證文は殆んど一字一點

も脱けた所が無かつたそうです、私共がよく／＼解釋して貰うて、初めてハハア成程と感服した位であります、僅かに一二字の違いで大變の違ひとなつたのである、法律といふものは其位綿密なもので、一字一點で勝負を決する位のものであります、餘程理解力の有るものでなければ容易に知られませぬです、人口解釋を仕て貰へば成程と思ひますれど、即今我國の女子の頭にては此の如き綿密なる理解は、中々六ヶ敷からうと思ふ、必竟するに惡いことを仕た人は惡い結果を得ることで、善い事を仕た人は善い結果を得ることは當然である、右の混雜抔は最初から惡意を以て仕組みましたことである故、終に正直の人が勝を得ることになりましたは、當然のことであります、碁打が碁を打つと同様で、餘程先方が強い人でも、自分の石を堅めずに人の石を取らうとすれば、忽ちにして負るは當然であります、故に法律の註釋を聽くより、自分の身を方正し、その餘暇にて道德學、性理の講釋を聽きましたら、益を得ること多くして、國家の爲めになる事は十倍で有らうと思はれます、是より其人もさういふ様にして、妻女を法律の解釋をする會抔には出さぬが、家庭學を敎へるとか、德義のことを敎へます所には出しますといつて、漢學や和學を習はせて居りますといふことです、私は是迄内弟子の人々には小學を講じて見ましたが、至極結果がよろしいやうです、餘り古くて當時の世の中には合はぬといふ人もありますが、決してそんなものでない、能く今日に當箝めて行かれるものであります故に、宅で預つて世話をする女子抔には是非右の小學を敎へます。

　私が或る女子を預りましたとき、先づ漢籍の講義を聽かせましたが、その女子は中々怜悧な子で有つて、能く私の言ふことを聽いて用ゐ、また當時の事や世間に連れ、普通必要だけは心得居りしが、その女子が御嫁に行つてからも良人に從順であり、また日用に事缺くこともなく、一家至て睦しく、尤も算鑑が有りまして、大變都合が宜しうござりました、それが宅にて世話を致します時に、この女子に向て、私の身体を良人と思つて、

起臥、出入より、衣類の出し入れ、其外の雜用に至るまで毎日々々爲せまして、さうして或る學校の專修科に通學させ、一家を治むるに必要のことを修業させましたのであります。

右に演べましたのは、先づ實際の御話しで御座りますが、斯ういふ譯になりますと、折角骨折つた學問が餘り益に立たず、無くてもさのみ不足に思はぬ有樣ですから、世間に無闇に八ヶ間敷いふので有りませう、それでは何時迄經ても日本婦人の位置が高まる時が御座りませぬ故に、どうぞ、何處卒業とかいふ人は、最早六ヶ敷方が出來て居るから、家事抔を賤藝抔といはずに人の妻となりたらば、一と奮發して靜肅と落付て、家の整理を實地に能く行つて治つたなら、彼の八ヶ間敷のも止め、又女子の位置も高まるであらうと思ひます。(未完)

身だしなみ

宮城野小萩

這は或る令孃のもとめによりて書きつけたるくさぐさに候

◎朝は定まり時刻より少し早く目覺めて、其日の日課を一通り考へたまひ、時來らば直ちに起き出でたまふべし。

◎皮膚に召す物は嚴寒の時にても悉く脱き換へたまふべし、又火にて温めたる物を召したまふべからず、是は甚だ皮膚を弱はむるものなればなり。

◎齒は隨分丁寧に磨きたまふべし、齒の養生惡しければ胃弱となり、延いて樣々の疾病となることあり。

◎毎朝コップに一杯斗りの冷水を以て喉深く含嗽したまふべし、さすれば感冒を防ぎ音聲の養生ともなりぬべし、又新鮮の大氣中に二十回斗りの新呼吸を執りたまふべし、是をなすには鼻より吸ひて口より吐きたまふべし是は肺の養生なり。

◎又朝は成るべく唱歌をしたまふべし。

◎髮を整へたまふことは日課の中にて大切のことゝ思召たまふべし、西洋諸國にては知らず我國にては髮かたちといひて髮とり亂したるはいと見にくし。

◎召し上り物は能く噛みてあまり熱からず冷たからざる程を以て、消化よきものを成るべく多く取りたまふべし、召し上り物に好き嫌ひなきやうにつとめて試みたまふべし、後には大方の物は食べ得らるゝやうになるものなり、是は嫌ひ彼は好まぬなどのたまふは人々の感情を害するものなり。

◎甘き物は婦人小兒の躰質上必要の物なれば召し上りたまふことは宜しけれど、間食は成べく愼みたまふべし、されど目上の御方の下さるゝ時などは喜ばしく受けて樂しく召し上りたまふべし。

◎朝禮は恭しくなしたまべふし、折節の天氣によりて御機嫌を伺ひたまふべし、殊に病める人に對しては猶更勞はりたづねたまふべし。

◎幼き君たちのむづかりたまふことあらば其原因をさぐりたまひて、理によりては戒めもし又慰めもしたまふべし、幼き者は樂しく遊ぶが常なれば泣き怒りなどするは必ず原因なくてはかなはず。

◎召使ひたまふ者の不平を鳴らし、又は互々の間に爭ひなどする時にも、皆其起りを考へたまひ穩に理をいひきかせ、程よく治めたまふべし。

◎御氣に召さぬ事にあひたまふ時には「わがよきに人のあしきはなきものぞ人のあしきはわがあしきなり」といふ古歌を繰り返したまふべし。

◎召し物は汚し又害はぬやうにしたまふべし、一枚の着物を洗ひ張り又縫ひて着る迄に費す時と金と勞とを思ひたまへや。

◎御身に費したまふ金錢は、悉く帳簿に記して一ケ月に幾何一ケ年に幾何を惠まれ居るかを知り、父母祖先の鴻恩を思ひたまふべし。

◎夜は定りたる時刻に眠りに就き眠りに不足なきやうにしたまふべし、眠足らされば一日の務に懶け起りて樂しき一日を送ること難く、積り積りて遂には病ともなるべし。

◎宿題などは正しく出したまふべし。

◎運動時間には十分活潑に遊ひたまふべし。

◎惡き友あらば戒めて改むべきものは眞實に戒しめ望

みなきものは之を避けたまふべし。
◎試驗に臨みては決して決して盜見などしたまふべからず。
◎家長の許を得ずして學友と妄りに約束などしたまふべからず。
◎何事を學びたまふにも、かりそめになしたまふまじく、常に急がず休まず怠らずといふ意を思ひたまふことを忘るゝ勿れ。
◎夕方には幼き方々を集めて遊戲などしたまふべし。
◎時には養育院など見舞ひたまひて慈善の何たるかをも知りたまふべし。
◎返辭は明かに短くしたまふべし、鈍りたるは不敬なるべし。
◎物は足ることを知りたまへ。
◎婦德の中最とも貴きは、人を思ひやるてふ心なるべし。

盆石談

武田鶯塘

婦人の手藝とし云へば、茶道、生花、琴、編物、裁縫、押繪、縫取など、其他にも數あるべけれど、此中には娯樂と裝飾とに供する遊藝と、單に實用にのみそなふる手藝との別ちはあり、畢竟婦人が一の手藝に巧なるは、自から其人の品位を昂むる所以にして、如何容貌美はしく、詞清しき女にても、手藝の扶けなき時には甚だしく、見劣りのせらるゝ心地す、譬へば貫之が古今集の序に大友黒主の和歌を許して、薪負へる山人の花の陰にやすめると云ひしが如けん。

されば遊藝はなにゝまれ修めて身の飾りともせんには女一生の德ばかりかは、琴は聽く者をして感に堪えざらしめ、花は見る者をして現ならしむべし、手巾の縁縫、卷煙草、燧木の箱張も焉れ手藝の中に入るべきも、こは洵に止を得ず修むる手藝にて、ものする人も見る人も只小忙しきばかり、何等の趣味も感ぜざるべしと想ふ

なり。

茶道、生花、琴、皷、書、畫、盆石、盆畫、細工物等は遊藝中の高尚なるものなれども、其中さまで煩はしき手數を要せず、趣味も深く、雅致もありて、容易に試み得べきは盆石の心得なるべきか。

◎盆石の特色

盆石は茶道の虚式に倣はず、生花の不自然に流れずして、優に天下の山水を一盆の中に蒐め、床の間を装飾して生花よりは遙かに優美ならしむるのみかは、由來日本の婦人が不活潑にして郊外の散歩すら爲し得ざる所より、自然天下の山水と親むの機なく、各地の名勝に疎きをもて、此處にその眞を寫して、聊か觀光の模範を示すものなれば、我國婦人の遊藝としては、こよなき具たるを疑はず。

◎盆石の起源

抑も盆石の起源を原ぬるに、世に東山殿と稱する足利將軍義政の代にありと傳へらる。史を按ずるに東山將軍義政は、驕奢古今に列びなかりし義滿以降、義敎、義勝の後を享けて、其第宅には金銀珠玉を鏤め、京の大路には白馬金鞍の美を競ひて、義滿に劣らじとや、金閣寺あるが上にも銀閣寺を創め、高倉御所の腰障子に價二萬錢を費やせしは愚かや、あらん限りの奢りを極めければ、京師の風俗疾みに其美になづみて、宴舞遊樂此處を先途と時めきけり。蜀山禿として安房出づと云ひけん、東山御所の繁榮は六十餘州の水旱を他所にして、遊藝は全國に瀰漫しければ、畏れ多くも後花園天皇は一首の御製を義政に下し賜ひ、當時の奢侈を戒しめ給ひぬ、されば東山殿の治世には、驕奢の極め種々の遊藝を生みたるが、更に翻つて應仁の變を生みたるこそ是非なけれ、茶道、生花、盆石の此御代に起れりと云ふは未だ確かならざるも、有繫由緒なき傳説にはあらじと想ふ。

◎盆石の器械

さて盆石に具ふべき機械は、『塗盆』とは楕圓形のものと長方形のものとあり、普通幅一尺より一尺二三寸、長さ一尺五寸より一尺七八寸のものを用め。『砂』白きものと黑きものと各細疎あり。『石』山に似たるもの、岩に

似たるもの種々。此他『匙』『刃箒』『餝』『箸』等他二三の器具と、種々の金屬製摸型とを要すれば足れり、尤も流派によりて多少の相違を生すれども、大方は右にて足るものにして、(色砂を用ゆるは主に石州流と覺ゆ)凡そ五圓を投しなば一通りの機械を購ひ得べきものなり『石』の如きも敢て高價なるものを求むるに及ばす、拾ひたる石にても形の面白く盆上に装ふに足れば盆石となすべく、河沿ひの道ともに落ちりある石に存外面白き珍石のあるものなり、盆も小道具も、さまで美しきを衒ふに及ばす、要はたゞ自然の景に合致すれば足れるものなれば、箸は杉箸にても、摸型はぶりきを撓めたるにて澤山なりと知るべし、細身の大小は能く伐れず、黄金作りの冠は重き道理にて、餘りに貴き具を購ふときは、反つて道具負けのするものなり。

◎盆石の流派

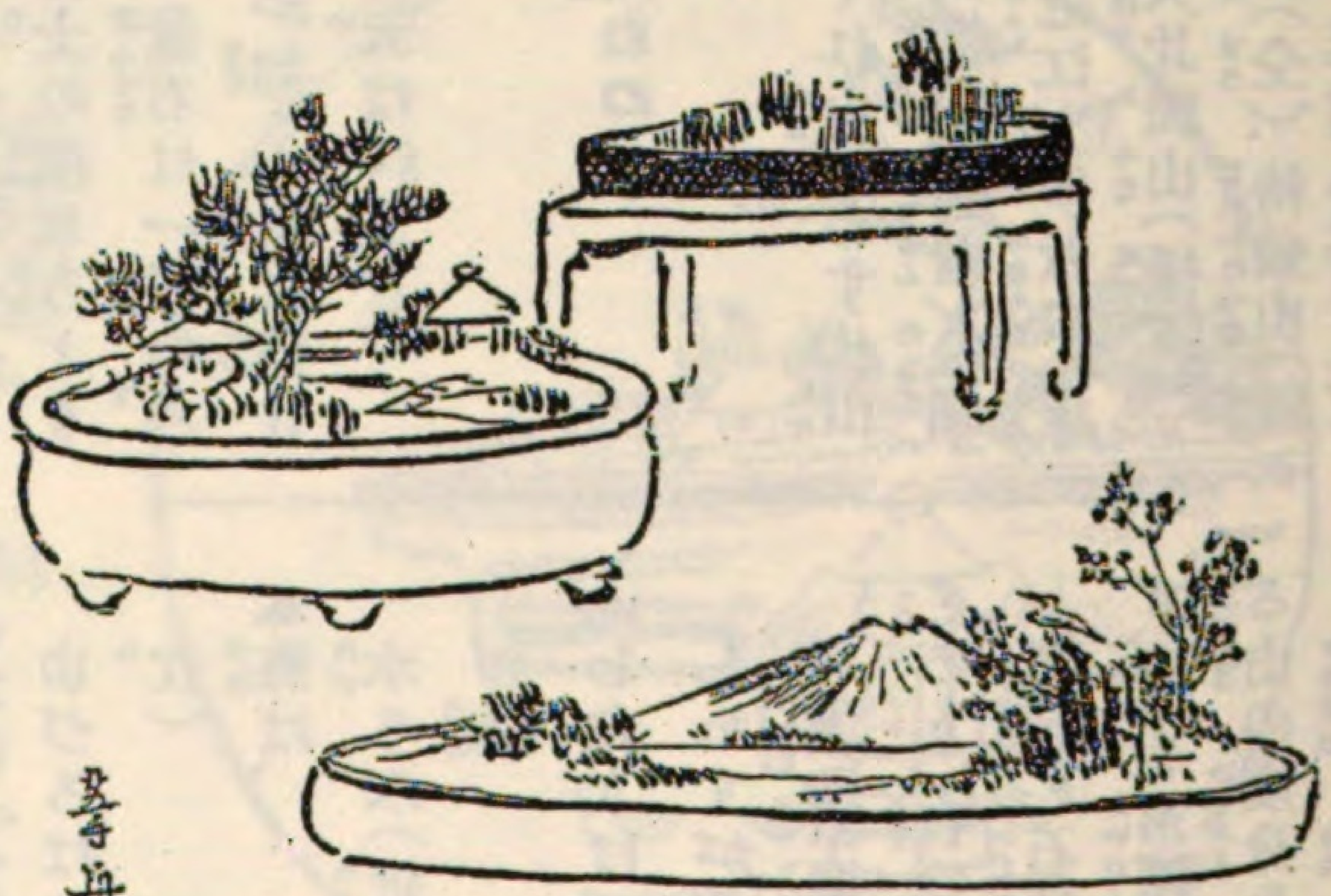
われ専門家にあらざれば詳しき事は得知らず、知るも語るの愚かなるを思ふ。故に今其流派の甲乙を論ずるは偏に田夫が政を評するの譏りを免るべからざるも少くわが眼に映じたる流派の甲乙を擧げつらうべし。

盆石を假りに東山殿の治世に出でたりとして、其後種々の流派に別れ、今なほ利休流、細川流、揚春流、石州流、清原流、遠州流、日野流、遠山流他一二はあるべきか曾て日本橋倶樂部に開かれたる盆石品評會には主に細川流、揚春流、石州流の三派なりしと覺えしが、今尤とも行はるゝ流派はまた以上の三流派なるべし、此三流を評すれば、細川流と揚春流とは寫生派の畫かるべく石州流は光琳派の畫柄とや云はまし、一つは畫なり、一つは模樣なり、一つは自然を主とし、一つは脚色を多とす、一つは梅花に比すべく、一つは櫻花に較ぶべし、濃淡各々其特色はあれ、わが見たる所にては石州流は細川揚春二派の自然に若くべくもあらず、其打ち方の巧拙は第二に置き、盆石はまづ山水を縮寫せるものか、山水を模樣として現はすものかと云ふの問題を定めざるべからざるなり。

世に繪そらごとゝ云ふ事あり、競馬、競漕、火事、落雷等之を寫眞せるものよりも繪きたるに壯美あり、されば

とて繪きたるものを實地に推しなば、到底不自然を免れざるべし、さては實際にてはさまで感興を惹かざる景物も、畫きて趣味を生ずるものなきにしもあらねど、自然に對する繪そらごとは繪の上の大汚點にして、更に感興を惹かざるが如く、盆石にそらごとあるは其實躰にそぐはざるやうなり。

前にも述べたらん如く、盆石は天下の名區を縮めて盆上に仰ぐの技なれば、聊かも自然を離るべからざるものなり、自然を離れて模樣らしき邊に工夫を凝すは心得ず、山水を他所にして模樣を見せんとならば、石を立て、水を劃するの要はあらず、只模樣らしく砂をうちて、模樣らしく見えなばよからん細川流にせよ、揚春流にせよ、模樣らしき所なきにあらねど、石州流に比べては自然に近く、石州流は生花に於てもまた模樣らしき撓め方を以て得意とするものなれば、此派に入れる人々は少しく自然てふ事に意を注がれたきものなり。



孝舟

◎盆石と繪畫

水は畫くべからず、波は畫き得べし、風は描くべからず、周圍の光景をもて之を現はすとは由來畫道の原則にして、山水に淺絳、青綠、金碧の法あるが如く、盆石にもまた、山皴、波濤の打方あるは勿論なり。されど畫は一管の筆に遐邇を描き、其風物を生かしむる事なれば、盆石の模型をつかひ、種々の器械に訴ふるに比べては霄壤の差別あることなるが、盆石の難しとする所は、立ちたる實躰の石と、砂もてうちたる『山』乃至『波』との配置照應にあり、海邊の岩は盆上に聳ち、山と波とは盆上に横はるものなれば、此配置に充分の意を注がざれば、岩は岩ばかり聳へ、遠山は其岩の邊りに横りて、宛然函嶺湖水に

逆富士を仰ぐの奇觀を生ずべきなり。則ち立ちたる岩と書きたる山との遠近を調和して之をうれば、岩と波と、月と山と、渾て一幅の山水を盆中に仰ぎ得べきなり波の打ち方よりも、石の置場よりも、富士の描き方よりも、先づ肝要なるは此照應にあるべし、盆石は一種のパノラマなれば、石は立ちたるも描けるが如く、山は描けるも立てるが如く見えざれば盆石とは云はれまじ。

◎盆石の風景

清少納言は枕の草紙に多くの山水を列ねぬ。

▲山は、

小倉山(嵯峨)、三笠山(奈良)、このくれ山、わすれ山(陸奥)ひらの山(近江)、鳥籠の山、五幡山(越前)後瀬山(若狹)、笠取山(山城)、ひらの山(近江)、伊吹山(近江)、朝倉山(筑前)、岩田山(山城)、大比禮山(攝津)、手向山(山城)、三輪の山(仝)、音羽山(仝)、待兼山(攝津)、玉坂山(仝)、耳無山(大和)、末の松山(陸奥)、葛城山(大和)、美濃のお山、柞山(山城)、位山(信濃)、吉備の中山、嵐山(山城)、更級山(信濃)、姨捨山(仝)、小鹽山(仝)、淺間山(仝)、たかゝめ山、かへる山(越前)、妹背山(紀伊)

▲峯は、

ゆづるはの峯(攝津)、阿彌陀の峯(山城)、彌高の峯(近江)

▲海は、

水うみ(近江)、與謝の海(丹後)、かはくちの海、伊勢の海

▲わたりは、

しかすがの渡(三河)、みつはしの渡(越中)、こりづまの渡(須摩?)

とあり、右の中には今の世に無き所もあり、盆石が主として砂と石とより成るものなるが故に、山は多く採らず、景を海濱に得たるが多ければ、次漸此女史が列ねたる山の幾分をも打つ事なし、尤も石州は前云へるが如く色砂を用ゆれば、山をうつ點に至つては自在なるも、白き砂のみにても打てざると云ふ法はなかるべし、現に富士は諸流に於て描かれ、三笠山の美しく盆上に打た

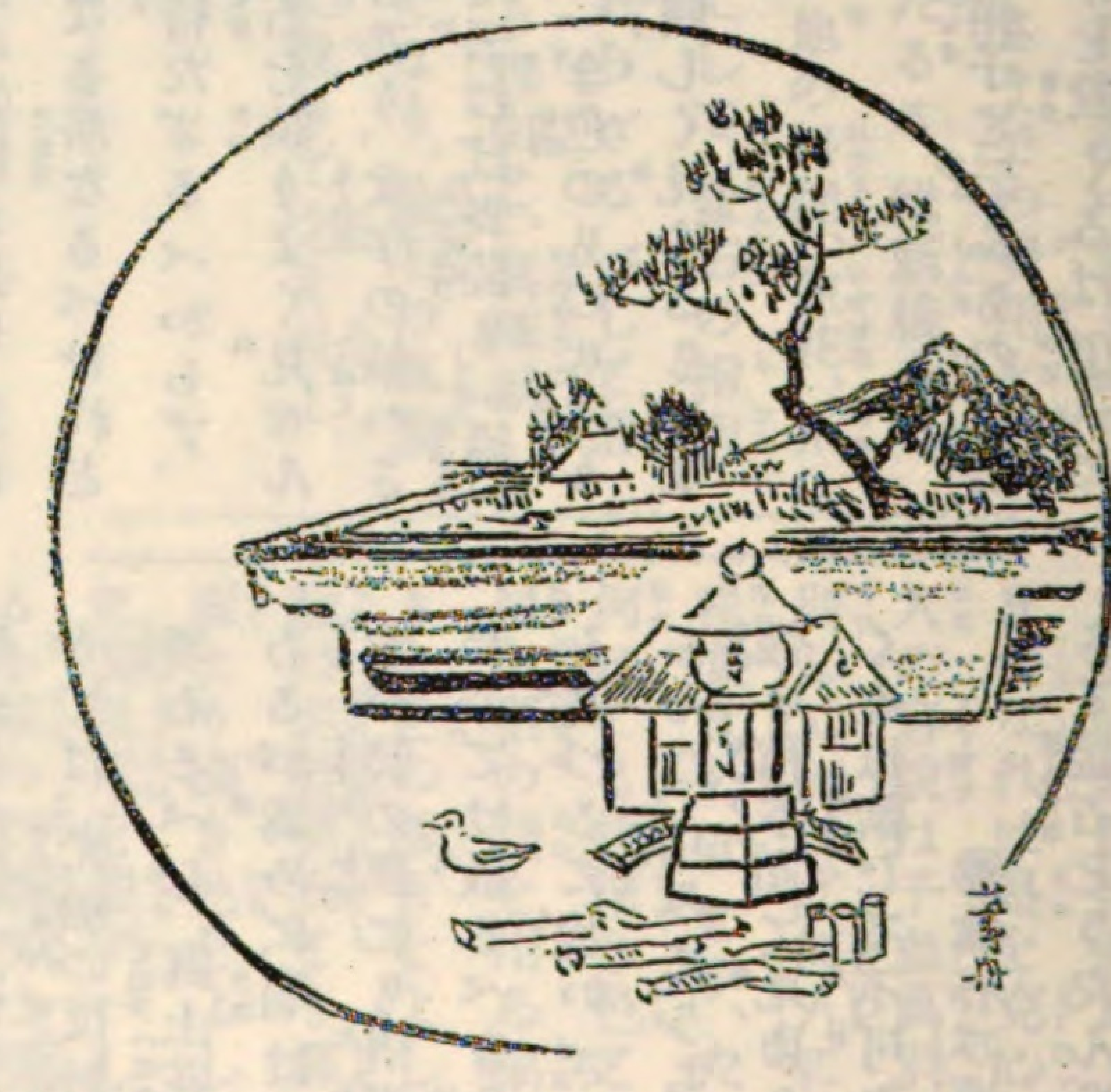
れたるはまたなき壮観なり、海はあながち右の三つに限らず。

熊野浦、和歌の浦、屋島、清水潟、松島、近江の八景、天の橋立、厳島、田子の浦、須摩の浦、七里ヶ濱、由井が濱、小動ぎ、今切、濱名湖、親不知、洞爺湖畔、伊豆の出島、霞が浦、鏡の海

凡て盆中の材料たるは勿論、瀧には、

華厳、裏見、霧降、布引、奈知、皷、玉簾

等手際よくうちたるへ、模型もて紅葉など散したるは見ばへするものなり。春夏秋冬と晝夜の別を問はず古詩に寄せての風景、古歌の心を汲める名勝、孰れ盆石中のものなれども、描き短冊など添へたるは反つて風致を損ふ心地す。



◎盆石の配置

盆石を置くは床の間に限るが如く想ふ人あるべけれど、こは盆石を床の間に飾るにはあらで、床の間を賑はすに盆石を以てする類なるべし。古より日本の美術は餘りに光線と色の配合とに注意せず、奈何なる場所、奈何なる方に向へる床の間にても、巧みにうてる盆石を置きなば立派なるべしと云ふ考へより、小暗き床の間に盆石を据へて其技を誇る人もあらんかなれども、盆石は自然より成るものなれば、其置場にもまた注意せざるべからず凡て物は正面より光線を享くるが好く見ゆるか、後ろより享くるが映りよきかと云はゞ、少しく斜めに光線を迎へたるが美しく見ゆるものなり、寫眞にせよ、繪畫にせよ、正面より光線を享けたるものよりも、稍斜なるが多きにあら

ずや。

かくてまた盆石は主として『白』と『黒』との配合よりなれるものなれば、若し工合好き光線を享くる床の間にありては、固より其處に据えて室内の裝飾を扶け、更にうちたる砂の散逸を防ぐは最も妙なる所なるべけれど上に掲ぐべき軸にも充分の注意を待たざるべからず、『白』と『黒』との配合よりなれる盆石を映りよく見せんとならば、上には山水の軸は不似合なり、文字の軸かさらずば花鳥等に限るべく、立入りて云はば表裝も、『綠』乃至は『黄』など妙なるべくや、『赤』き色のものも映り惡からざれど、總じて『赤』き色は賤しく見ゆるものなれば、餘り好ましき色にはあらず。

◉盆石の塵避

昔はさる事もなかりしなるべし、硝子と云ふものゝ出で來しより、何物にもこれが塵避けを設くるは偏へに便利なるものにて、近來盆石にも硝子に枠を組みて塵避けとなす事流行し來れり。月を入佐の山に惜み、花を散際の風に喞つは人情の自然にして、殊に婦人の緻密なる所より、折角巧みにうち得たる盆石を、そよとの風に吹き消すまじとの心懸け、固よりさる事なるべけれど、室の躰裁の上より云ふも、床の間に硝子もて製れる棺ども飾りあるが如く見え、また客の座りやうによりては、光線の反射によりて、折角の盆石も見えで竭む事あるべし、其上花は散るが爲めに惜まれ、月は群雲のあるが爲めに唱はるゝ歟、盆石もまた砂もてうてる山水が裝の風にも得堪ふまじき所に味あるものにして、やがては散るべき生花に塵避けを設けなば、畢竟造花を賞づるに若かざると同じく、盆石に塵避けを設けたらんは、巧みにうち得たる盆石も、美はしきうち人の品性も稍下りて見ゆるの損あるべし、盆石に塵避けを設くるは斷じて不可なり。

◉盆石の進運

さて盆石をうたんとならば、只手本にのみ依り、古式にのみなづむべからず、交通不便なりし時代には、婦人が近き名區にすら親むに臆劫なりしならんも、今は汽車の便四方に開けて、一瞬百里を飛ぶの今日なれば、序あ

れば其實地に就きて親しく觀察し來るをよしとす、茶道、生花、琴等の遊藝中、其法式に自由なるだけ盆石は益々進み來るべく、進み來るだけ其うち方も模樣を避けて實際に入り來るべしと想ふ。婦人の遊藝中最も高倘優美にして、虛禮の嫌なく、倚むるにさまでの費用を要せざれば、近來流行の兆を帶び來りたるも、維新後永く不振して、之に關する書とし云へば、他の料理、生花、茶道等に比べては洵に寥々たるものにして、盆石の指南も極めて尠なく、未だ多くの家庭に入らざるべしと思ひて、こゝには只其技の他に勝れたる理由と、其流派、其配合等に聊か愚言を陳ねたるまでなり、盆石の眞意義、盆石の式法等は他日斯道の名人に就きて之を糺し、本法の餘白を借るの機あるべきなり。

衣服の話

水原翠香

衣服も又髮とひとしく其人々に依て各々好みを異に爲ざるべからず、いかなる美服も其人に適せざれば却て見苦敷中々に容貌までも損じて異樣に見ゆることあり其物品のよきとあしきは貧富によりて差あるべしと雖も身躰容貌に適當するを撰ぶ事は貧者と雖も爲能ふべき事なれば是を克心がけておろそかに爲べからず勿論人の容貌は千差萬別なれど一概には論ずべからぬも大別していはば何人に拘はらず服裝の要は其色下薄く上程濃きを宜とす、たとへば肌着は白ならずば鼠にても何にても極薄き色とし下着は襦袢と異なりたる薄色銀鼠白茶の類を用ゐ縞ならば替り八丈の類上着は下着よりも色の濃きをよしとす帶は又全く色の異なれる物羽織は老若男女とも黑を最上とし外色らなば何にても衣服より濃き色をよしとす是に反して下濃く上薄きは大に其風釆を損ずべし或は黑紫などの上に白めがちなる小紋の羽織又は襦袢の衿と上着の薄色なる中に下着ばか濃りき色の挾まりたる紺などの黑ずみたる縞物の上に薄色無地の紋付羽織等皆其配合の宜からざるが爲に其人柄迄あしく見ゆるもの也。

◎總じて薄色は生質色白き人にはよろしけれども色黒きに薄色を着れば彌黒くみゆる物なればいかに流行する時にても薄色は我生質に適せぬ物と明らめて用ゐる事勿れ儀式事に白衿を着ねばならぬ事あらばはき込白粉をして(けはいの所參照)手先にも薄く白粉を摺込て着るべし

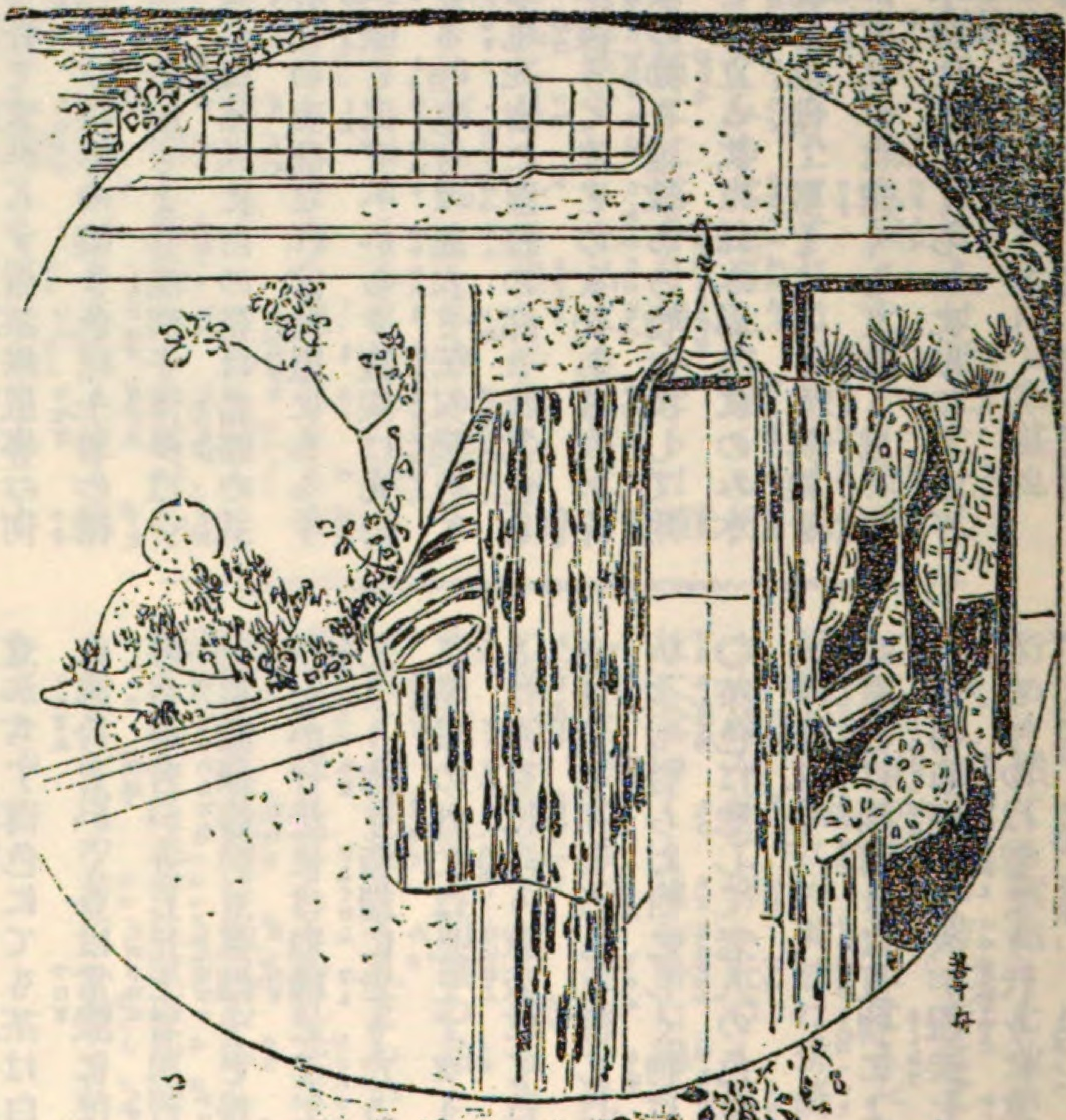
◎夏物は總じては薄色の方涼し氣にてよし紺がすりは單ゆかた、常服はよしかたびらの紺地は洗濯すれば大に色あしくなるなれば數多からぬ人には損也但し夏物とてもすぐれて色の黒き人は白縞白がすりはきるべからず、薄色のうちにも光澤のなき物を撰ぶべき也。

◎身躰肥滿せる人又躰格の逞雄なる人は縞にても摸樣色ともにじみなるを宜とし小形に細く瘦肉の人は色の花やかに摸樣も縞も派手なる方をよしとすたとへば爰に二人の女兒あり共に十五歳なれども一人は脊高く肥太りて十七八ともみえ一人は尫弱に細く少さくて十二三にもやとみゆ此兩人相應の服裝をいはゞ大なる方は中荒の小紋縮緬に生壁色の裾廻し下着は對かさなくばかき更紗とし衿は藤紫帶は花色か鳶色葡萄茶の類の織物然るべく扱は醬色か藤色なるべし髷には金糸を優かに掛て鹿子等を用ゐず束髮ならば白薔薇の簪房なきを宜とす一の小なる方は赤衿に紅入友染の上着藤紫の裾廻し時色紋縮緬の下着帶は白茶金入に桃色の扱髮には緋鹿子を掛て房長き花簪等が適當の粧飾なるべし然るに大の方年の增てみゆるを嫌がり若くみせんとて派手に粉裝すれば演劇の道化方の如くみえて馬鹿派手也と譏嗤はるべし又小なる方ませてじみなる粧飾をすれば子供演劇の女房めきて愛なく憎らしくさへみゆるもの也更てみゆるも若くみゆるも天性なれば是非なし各々受得たる生質に背かぬ樣に造ればそれ相應によくみゆるものなるをや。

◎外套　男女を通じて黒にしくはなし外色ならば濃き色にすべし薄色は色白の美人には宜けれど十人並ならは似合はぬが多し況や色黒き人の薄色羽織はいよ〳〵醜を添ふるを覺ゆ地紋ある物は被風には宜きも羽織には適せず女は縮緬を最上とし外品ならば和らかなる地を撰ぶべし男は羽二重を最上とし七子龍紋の類地の强

くシヤンとしたる物を可とす縮緬は柔弱にみえて宜からず縞物は商家の男女ともによし官員及先生部類の人には似合はず紬木綿たりとも無地紋付なれば人柄を損せず被風は老人と少見によろし但し中以上の品よき人の着物なれば下等社會には似合はず老少ともに羽織に限るべし少女の被風は愛らしき物なれど十五歳以上は宜からず況て大人の被風きたるは妾者などの風俗也若後家の事はのちに別に云へければ爰には省く

道行ぶりと稱する物歌俳諧茶人など男女ともに着るなれど下賤にみえて被風の上品なると同日の論に非



ず畢竟するに被風の略したる物衿なしにて細きれを折廻し昔の半合羽に似て夫よりも物入少なし絹紐もなく縞にても何にても構はず只有合の直し物にて間に合す新調するにも羽織程の丈も入らず衽半巾遣ひを勘略して中より細物を出して衿廻りとし衽を下より折返し上にきれをつぐ等すべて儉約主義の服なれば卑しくみゆるも其筈なり此道行とは徳と號する物(十徳の略服)とは下等の婆々嬶々の寺參に多く着るなれは少しく身分ある人は心して着る勿れ況や貴婦人をや。

◎帶　衣服と全然異なりたる色をよしとす藍鼠の如き衣服によくある色はさし合て宜からず白茶銀鼠等は何の上にも大概よし紺花色及び茶等の濃き色は上着の薄色なるによし小紋の上には黒地もよし黒繻子博多は少し下品にて縞物の上によし白無垢に白の帶は婚禮の式服黒無地に黒繻子帶は葬祭の喪服なれば此限にあらす序に云白無垢を葬の式服と混ずへからす喪服は光澤なく地紋もなく煉らさる物也昔は藤衣と云又鈍色ともいひて今の鼠色の事也死者に血縁の深き程其色を濃くする也故にくろみ渡りてなどの文句あるなり今は白を用れとも綸子綾の如き地紋ある物は決して用ゐましきなり又た帶を仕立るには結ふ處ろにのみ木綿を入れて其他は眞綿を極薄く敷をよしとす眞綿を引は眞の離れさらんが爲なれは薄くして卷く處の嵩まぬを要し結ふ處は木綿にてふくらかに皺のよらざらむが爲也。

◎襦袢の衿　老人は夏冬ともに白よし若き人の白衿は儀式ばりて平日は宜からす外の薄色を撰ふへし紫も藤色の方よし濃紫黒地等は縞の衣服にはよし無地紋付に宜からす薄色にても茶は白茶の外は衿に適せす又上着に黒衿をかくるは常服には宜きもよき物にはいかゝ也翠香が若かりし比上着に衿かくる事流行して友染縮緬御召縮緬等にも黒繻子を掛十二三迄の女兒は縫入の上衿をかけ後には羽織にまて長衿を掛て意氣がりしのと元より餘り極端に走りたる事なれはいく程もなく廢りて常服の外には見えずなりぬ少女の服に淺黃の衿を掛るは東京に限り京阪にては絶てせず又男子の夏襦袢に水淺黃を用ゐるもしばしは流行したれど今は止みたりいつも替らぬ白にしく物はなかるへし。

◎茶色は惣して老人の色也若き人には誰にても似合はぬやう見ゆ。

◎草色は極薄きは夏物によし濃きは田舍めきて野卑にみゆ白石噺の信夫が服裝をみても知るべしすべて演劇なるものは昔より代々に意匠を凝して其人物に相應せる粉裝を考へ出せし物なれは其意のある所を克見て察すれは採るべき物多しともすれは演劇を惹出て申すは

此故也かつや誰人も見てよく知れる事なれは讀者の解り易からむと思ふのみ此後も猶いふ事多けれは例のと嗤ひ賜はで其言の違はざるを味はひたまはゝ幸甚也

◎女兒十七八に及びて大體に太り肉なるは肩上を止て成人造りに爲たる方よく見ゆる物也然るをとかく女兒は是を嫌ひいつ迄も肩上をとらじとすれは裄短かく成て腕顯はれて野卑にいかつくみゆ其上肩上は尠くも折て七八分あればよけれとも僅に二三分斗摘みたるは縫目立て折れず甚みぐるし物語文にも上品なる姫君などは皆御衣がちとて裄たけ共に長く身の埋もれたるが如きをいへり女は手足を顯さぬが人品よくみゆる物なり

◎惣して何人にても處女のうちはともあれ既に一家の妻と成たる人は其年齢より少しふけたる造りにする方高尚におとなしくみゆ兒なき婦人などいつ迄も若々として三十に餘るも猶花嫁の時と同し粉裝なるは甚だ心得違なり自らは若くみせんの意なるべきも他人より視て然は受とらずいか程若造りを爲ても年は年なり三十を越ては顏色おとろへて艶なくなり四十に近づけば額に小皺の波よせて交る白髮の二三本我ながらも疎ましやと拔捨ゐ跡より又生し生際に薄くなり髮も次第に枯行めり然ても猶造りを改めざるは思ふに六十七十にも及べる老俳優の若女形などするをみて造りさへ若く爲ばよき事の樣に思ふなるべけれど演劇は舞臺面とて一種特別の物なり其故は俳優は舞臺に在て見物は皆遠くより望み見て傍へ近づく事なければ遠見を專とするが故に其つくり樣白粉は濃く塗眉は墨にて畫がき紅をさへ添て眦をゑがき凄味を見するには眶を青くし又衣服の摸樣も尋常とは十倍もあらく夜具の如き縞柄を用ゆ之をばもし常人同樣の品とせんには無地の如くいかなる縞とも摸樣とも見えわかずして甚引立ざるが故也畢竟遠見なればこそかれ花道際に居て立止りたる時に克御覽あれ其顏は怪化の如く其服裝は只馬鹿派手にして常人ならば悉皆狂氣の沙汰にて見られたざまには非ざるなり年増の若造り殆ど是に類す反省て愼むべき事ならずや。

◎若後家の造りは尤も老たるをよしとす切髮束髮など

は却ていよ〳〵若くみえ殊にみめよき未亡人の紅白粉をつけて袖口八ツ口等より紅きものを隱顯させ切髪に被布きたる姿人の目にたちて嫌忌にさへみゆるぞかし貴婦人ならば白無垢の衿を重ねて緞子繻珍の被布といふ高尚の好みならば切髪も又よかるべし中以下にては夫よりも根かもじなしのちいさき丸髷に手柄なしの毛巻とし普通四十斗の年増の如く厚當に造りたる方奥ゆかしく其貞操も推はかられて氣なげなるべし勿論紅白粉は廢すべく奥裏の外赤氣を用ゆべからず。

◎女兒幼年の時附紐を乳下にて結びたるが癖となりて成長してハシヨリて着るに及ても腰にて紐を結ばず腰骨より下を締ては究屈也などゝ嫌がる物なれど腰上のあるうちはともかく既に是を卸して成人並に褰げ（ハシヨリの事）爲に腰の締らざるは甚不恰好にて見苦敷物なれば勉て腰骨より下にて締習ふべし扨衿附を正すには乳下を今一ッ締へきるり何事にても習慣を改むるは始心あしく思ふ物なれど勉て習へば漸々と第二の習慣となりて後には其方が心よく却て始の事は出來ぬやうに成もの也

◎衣服の着樣　先其きるべき品々細帯下括帯締等一切の品一も殘さず取揃へ置着かけて何が見えぬなどゝ立走り簞笥の引出しを搔探す不體裁なき樣一包としおくべし扨着更るには第一番に足袋より始め次に帯を解て腰巻を更今迄のを手早くちいさく丸めて袂に入置へし是を其儘に引ちらして人に見らるゝは女として甚恥べき事也扨下肌付より長襦袢をきて紐を結び衣服をきぬ先に手捷く脱衣をたゝみて押入に仕舞込（侍女あらば脱衣の片付は自らせずともよし）扨後上下の衣服を重ねて（是は前以なしおく方よし急場は如斯）下括もし結びてあらば解て採よき處に置然て袖に手を通し蹲踞て上下の裾の褄先を上まへは下着を一寸斗引込二枚下着ならば次第に引込べし下まへは反對に一寸宛下着を出し双方を持てツハトうしろの方へ撫ち揃へ扨衿附の處を左右比しく揃へて左手にて持ながらソツト立脊は疊を摺程に前は足の甲にかゝるを度として褄先斗を少し高く引上て打合せ下前の衽だけを折返して扱を掛腰骨の下にて結ぶ（此紐三つ迫るをよしとす）右の脇の方へ少し廻る

程の處に打合すべし合せめ前方にあれば身の動作につれて前開き裾を顯はして見苦しきのみならず人に對して失敬也又腰骨の下を締ざれば裾ほら〳〵とシダラナキ姿と成故に必腰骨下にて緊と締括るべき也裾を一寸ツヽいぢらせるは下着の出過ざるが爲なり男のは下着を脇にて五分宛縮めて仕立べし女のは巾を同じく爲されば折返して着又座する時左右へ袘を出すに揃はずして不都合なり着る時只重ねたる儘にて注意せざれば下着必ず出過て直しても〳〵出たがる物なれば始にかく爲てきれば程よく揃ふ事秘傳なり試み賜はゞ其言の違はざるを知らるべし扨締たる上の處より手を入てよく突出し衿を揃へて乳の下の處に細紐を掛て假結しおき脊筋の歪てなきやを注意し脊の兩脇にてひだを取て衣服の皺にならぬ樣にして後十分に締て結ぶべしもし手傳人あらば裾の一寸づゝ違へたる處を手傳人俯て左右の手に持居て打合す時共に合せ而て手を放ち扱をとりて參らすべしかくすれば獨り爲よりは大に爲易く早く着らるゝ也。

◎裾引摺　昔は町家にても少しよき家の婦女は大かた裾長く着たる物なりしが今は貴婦人の外は裾引は藝妓のみと成たれば中以下は知らでもの事ながら婚禮などの時は今とても引摺らぬにも限らず其着やうを心得置も又一の嗜みなるべし裾長に着る時は下着をいぢらすに及ばず當り前に重ねて下前を折て打合す迄は替る事なし唯長裾は前の開き易き物なれば褄よりも腰を緊く締ざるべからず上前を少し折返すは例の舞臺の扮裝也常人の爲べき事に非ず乳下にも細帶して衿附を調べ帶は折らず巾廣の儘にして後は尻に掛前の左右を上げて斜の入違となる樣にし脊の結びめは高く上て帶揚を入下の方に帶留を爲立て歩行に褄を兩手に持ながら裾を顯はしてあるく樣の事を爲べからず藝妓よく此事を爲癖あり不行儀千萬なり良家の婦女長裾にきる程の身が庭に下るの外はいかなる場所にも褄を引上裾を人に見するなど昔は甚く卑められし事也。

因に云京都の婦女子物見遊山に出る時裌とて裾を上へ折返し紐にて結ぶ習慣あり御所方にては決して

爲ざれども中以下にては爲ぬ者なし元來は田舍の賤女の風俗なるを京都婦女が是が爲に高金をかけて立派なる裾除を製し意匠を凝したる摸樣を染縫を入て新樣の爭ひ褄したる女兒など五六人も連立ゆけば裾の美なる事花の如し東京の如く高くはせず足の踵に懸る程長くぞろりとして巾も廣ければ足の肌のみゆる事なく衣服の裾を折返すはよからぬも裾除の美にして長きが故に其姿は見苦敷もあらず

翠香の若かりし比維新前には良家の婦女は皆長裾なりければ幼少より腰上といふ物をせず常服も長く引摺てのみ着る事と習ひたれば手に物を持て二階に昇降するとても長裾の儘にていさゝか苦しとも思はず雲上の女官か緋袴長く引ながら廊など走ありき給ふに比しかりきたまさか他家に行時褰て歩行は腰のあたり痛き心地したり故に女客あれば主方の侍女玄關に出迎へて小座敷に請し入先御裾を卸して御休息あれど挨拶す客も又必ず是を聞けば然らば御免蒙るべしと答禮して腰帶を解からげを卸し長裾となれば眞に身の樂に成しを覺えたり扮後座敷へ通りて主婦に對面するが定例なりき歸る際も又此休憩所迄退きて衣服を褰に着なほして玄關に出、然れ共歸りは多分乘物を以て家より迎の者來るよく〳〵の事情あるにあらざるよりは歩行にて歸宅する事なかりし今の婦女子は夢にも思はず察しがたき事なるべし却てたまに長裾をひかせたらば嘸や困りて苦しむならむ人の習慣は奇妙なる哉と獨りほゝゑまるかし。

◎帶は幼少より脊にて結び習ふべし前にて結びて廻すは宜からす折角衣服をうまく着ても帶を廻す時爲に締たる衣紋付緩み崩れて恰好あしくなるの上に帶も衣服も摺て損するなり始より脊結びに爲ならふにしかす是も又習慣なり。

花見鮓

春江女史

九十の春光中にありて、魁たる梅の花も、いつか散はてゝ香をだに留めず、まゆに籠りたる柳もはやひろがり

て、青柳のいとも長けきうら〱たる春の日に、うからやから又は朋達など打連立ちて摘草に、或は花見に、一日を打ち興じたらんには、いかに樂しかるべきぞや、さればとて斯る時の辨當に、料理店などにて物調へんは、費も多く又興薄すかるべきものなれば、各々おもひ立ちたる調理をして用意し行き、打寄りて食ふべなば其樂み深かるべし、重詰は何くれとなく煮たるものを適宜に入ればよしとして差措き、玆にまづ手輕なる鮓の調理方をいさゝか述べし。

◎握鮓、上等の白米をかしぎ、水を少しく減じて炊き、其の飯を大なる平たき板臺に移し、團扇にてあふぎながら、鹽を僅か程混ぜたる酢を振り掛け飯と酢とをむらのなき樣に丁寧に混ぜて程能く握りて其上に具(實の事なり)を置べし、飯の上に付ける實は、何品を付くるも好みによるも、通例は鷄卵燒、鮪、鳥貝、烏賊、鯛、鯔、針魚、章魚、おぼろ、おなど等にて飯と實の間に少し山葵をすりて用ゆべし。



鷄卵燒は薄燒にして握りたる飯の上に程能き樣に切り置き貝類はよく洗ひ、水氣は注意して去り、酢味淋に食鹽を少し落して鉢に入れ漬け置くべし、鯔、針魚は酢に食鹽を加へて漬け置くべし、而して酢に漬けたるものは雫を暫くきりて用ゆべし。

◎海苔卷と鷄卵卷、飯の下ごしらへは前と同じ干瓢を味淋と砂糖醬油にて味のよき樣に煮、程よく雫をさるべし、先づ平たき板の上に布巾又は簾(小さき)を置きて其上に淺草海苔を延ばし、酢を混ぜたる飯を薄く平にならべ、手前の方によりて干瓢の煮たるを四五筋計をき、片端より押し付ける樣にして布巾又は簾を中に挾まざる樣調子を取りて卷き、よく

つかみて布巾は簾を去り、よき程に輪切にすべし、其中に椎茸を煮て細く切りて入るゝもよし。

卵子巻は卵子を厚く焼きて同樣に卷くなり。

◎五目鮓、酢を混たる飯に、筍、蓮根、慈姑、干瓢、鹿尾菜、細き昆布、白瀧等を味淋砂糖醤油にて煮、澁を去りて丁寧に混ぜ合せ其の上に浅草海苔を焼きて細かにして振りかけ、卵子燒又は紅生姜を細切にて用ゆるもよし。

◎稻荷鮓、飯は前の如し、油揚豆腐を煮て（小形なれば尚よし）二つに切り、其の身を庖丁にて掻き出し、蓮根、昆布、筍などを味淋醤油に煮あげて飯と混ぜて油揚の中に入れ、干瓢の煮たるにて之を結ぶ。

其他箱鮓、切鮓、壓鮓、鯖鮓、筍鮓等あれども今は右通例世の人の口に馴れたるものゝみにして餘は他日述ぶる機あるべし。

家庭のしほり

◎鷄卵に關する注意

鷄卵は之を割りたる時黄味の散れざるものなりとて必らず滋養あるにあらず若し箸などにて一寸黄味をつき試むる時直ちに黄味の散亂するものは死卵とて最早孵化せざるものなれば從つて滋養の効薄しと知るべし。黄味を箸にてチギリ得るやうなるは産立のものなり。また黄味の白色を帶ぶるは母鳥の滋養のあしき證據なれば、良好なる卵にあらず、鷄卵は暑中と雖も産後三十日間は腐敗せざるものなり、然るに市中にて賣捌くものは既に日數を經過したるものを買入更に店ざらしとなれるものなればよく〳〵注意して之を買取らざれば夏向など別して腐敗の卵又は死卵を賣つけらるゝ事あるべし。今其の鑑定法を記さんに、明るき方に透かし見て半透明なるは新鮮のものなり、卵の底を舌にて舐むるに冷たく感ずるは良質なり。食鹽一分水九分の割合なる液中に卵を浸すに沈むものは善良、浮ぶものは不良と知るべし。

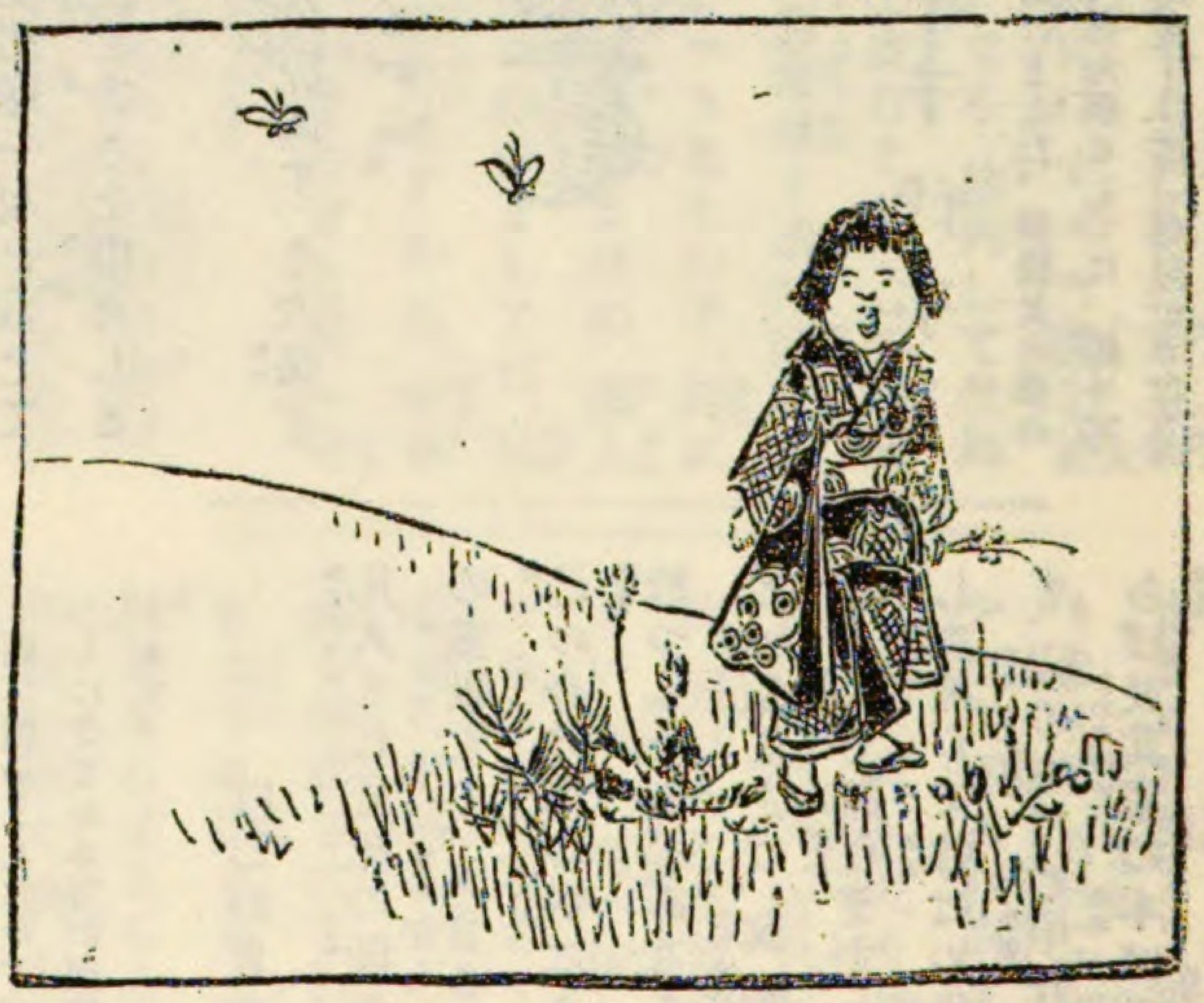
又鷄卵の保存法を記さんにすべて鷄卵は乾燥せる處に置くを要す、若し少にても水分殼にかゝる時は黄味は直ちに其方に寄り腐敗すべし、故に穀殼等に入れ箱の

中に入置くを可とすれどもこれにても不完全を免かれず、故に食鹽液中に善良なる鶏卵を投じ暫らくその沈める後、引上げてよく乾かし箱の中に貯ふべし、またバラフヰン油を薄く表面に塗抹し置く時は善く腐敗を防ぐの効あるものなり、但し既に腐敗に傾きたるものにはその効なければ成丈け新鮮のものを選むを可とす。

◎特効ある野菜

◎韮、蒜、葱類はいづれも氣根の効あり、唾液胃液を増し、筋骨を丈夫ならしむ。醫學博士シユーツフといふ人の説にも葱類は神經の强壯剤にして且つ血液の循環をよくすといへり全體肉類は血液を鬱滞せしむるの傾あるものなれば牛肉に必らず葱を副食するが如き大に衛生法に叶へるなり。

◎韮及蒜は發汗に効能あり小児等が鼻より出血する時韮を揉みて挿入せば血止の用をなす、蒜は邪氣を攘ふの効あり不眠を憂ふる時蒜の臭氣を嗅げば大抵安眠すべし。



◎球葱は利尿剤なり、葱雑炊は消化器の衰弱に効あり、菖蒲湯、及干葉湯は善く發汗せしめ血液の鬱滞を治す、所謂暑氣拂ひなり。

◎大根卸は消化を助く、又酒毒及び魚類の中毒を和らぐに効あり、大根卸を水飴に和して用ゆる時は咳嗽及び喘息の藥となる。

◎胡蘿蔔は逆上を下げ腸胃を利す。

◎蕪菁の卸汁は皹の藥なり。

◎西洋赤茄子は肝臓の藥なり。

◎甘藷及び馬鈴薯は大便の秘結を和らぐ。

◎薯蕷及び慈姑が腎藥なりとは我邦にて古へより稱する處なり。

◎萵苣は血液に効あり。
◎胡麻は氣根の薬といひ、老後に胡麻を食すれば中風起らずとの諺あり口中のやける時生胡麻一匁を煎じてこれを含み度々うがひする時は口熱を去るを得可しとなり。
◎胡瓜は血液を清め、身體の組織を清涼にす、また渇を止め、胸のいきりを除き小便を利すといふ。



修身

女徳

野中千代子

是は、女學世界の臨時増刊の壺すみれに掲けました、新撰女大學の衍義みたやうなもので御在ます。つまり、女大學としては、餘り冗長なのは、却て煩はしくて、朝夕の讀本と致すには、如何かと存じますのみならず。もと〳〵、新撰女大學は、既に先號の緒言に、おことはり致して置きました通り。字數を限つた懸賞文であつたので御在ますから、猶更勝手に長くは書けなかつた所から、自然辭簡にして意を盡さぬ所も御在まして、隔履搔痒の憾を免れまいと存じますから。這般女徳と題して、新撰女大學の意義を少し敷衍して、微意のある所を、明かに致して見たいと存じます。十ヶ條に分て説きましたのは、一見内容を窺ひ知るに易からしめん爲に、勉めて十ヶ條に纏めましたので、子女の爲め朝夕讀本と致すには、一くさりづゝに分てある方が便宜だらうかと存じまして、斯う致したので御在ます。

はしがき

凡人として此の世の中に生れたらんものは、都と鄙との差別なく、又貴きも賤きも、老若男女おしなべて、自己の身の不心得なきやう、又不取締にならぬやう、常に取つくろふのみならず、一家をも亂れぬやう鑒み正すといふことは、禽獸でさへ其幾分を心得て居るものがある程で御在ますから、况て萬物の靈たる人間には、誰しも無くて叶はぬ役目と存じます。昔の人のお言葉にも、國の本はと申せば、取も直さず各自の家である、さらば又其家の本はとたゞせば、結局各自の身である、と申されましたが、實に其の通りに相違御在ません。其故に各自の身を取つくろはないで居ては、迚も家の内が、、、キチンと齊ふ道理は御在ません。丁度立木に虫が入た

と同様で、如何に青々と空に聳えて榮えて居るやうに見えても、何時倒れるか寸時も油斷は出來ませぬ。此の虫が枝葉即ち國で申せば、各自の家だけに止まればまだしもで御在ますけれども、國といへる幹に、一軒二軒三軒と次第に喰込で行く日には、終にはサシモ雲を凌がん計りの大木即ち隆盛なる國とても、枯死して仕舞ふ外は御在ませぬ。國もはや斯様に成行ましては、如何に之を挽回せんとて、一人や二人奮發致す者が御在ましたとても、大風を團扇で扇ぎ返すやうなもので、神にあらざる限りは之を防ぎ得る事では御在ませぬ、個人の不心得不取締から若し箇様の事に相成ましては、第一國家に對して相濟ぬ事の極みで御在ますから、何卒亂れぬ家の一軒にても多かれかし、治まらざるは一日も速かに齊へかしと祈ることで御在ます。

斯様の次第で御在ますから、其の大本たる各自の身は、扇子で申せば、つまりかなめ、車で申せば丁度軸にあたります。是があるので扇子の用をなし、車の用をなすと申す程の大切なもので御在ますのに、自己の身であるからどうでも宜し、自己の家であるから傷つけやうが勝手次第などゝ申すやうな了見違を起しては、軸に申分あれば車が滑かに廻らぬと同様に一家の器械は礑の止まりて廻りませぬ。此の間違たる理窟の推してまゐりますと、自己の國であるからどうでも宜しひといふやうな事に相成まして、此天地に容るべからざる言葉を吐くにあたりますから、呉々もおのれ一身だからと思はないで、自己に過失があつたならば、家に傷をつけた、國はそこなふたと、かう思ふて、何卒物事は可成大きい所へ考へ廻しませぬと、つい些細な事だからどうでも宜しいなどゝいへる等閑な方に傾き勝にならぬものでも御在ません。然るに前に申す通り、是は決して些細な事柄ではないと存じますから、此の一くさりは、單に女子に限らず、老若男女貴賤都鄙の別なく、誰しも心得をらねばならぬ事であると存じます。

扨此の家を齊ふといへる大切なる仕事は、おもに誰の役目かといふに、なべて男子は外に働くもので御在ますから、萬々餘儀なき外は女子が受持たんければ、內を

守る人は他には御在ません。男子は女子をうか〳〵と何一つ爲す事もなく遊ばせておく爲に、寒暑を厭はず或は危險をも顧みず、汗膏を絞るのでは御在ません。されば、女子も男子の汗膏にむくふだけのことを致さんければ相すまぬといふのは、當然の道理と存じます。其むくふ道は、貧富貴賤によりて幾分の相違あるは勿論でありますが、前に申した餘儀なき事情の爲に、女子も外に出て働くの必要ある場合は格別と致しても、內を治むるといふ事は、女子に取りてはおしなべて異る事は御在ませぬ。さすれば男子は家の爲に外に働くかはりに、女子が內を治むるといふ事は、均しく家の爲に免れ得ぬ先天的の職分で御在ます。實に女子も容易ならぬ役目を持て居るといはなければなりませぬ。

さらば、女子は之に應ずるに如何なる心得を要するかといふに、先以て女德と申して、其の大本の心根があしくしては、草木に麗はしき花や實のならぬのと同樣に、人のおもてにあらはるゝことも、いかでか良き道理が御在ませうや。故に第一心持の曲らぬやう、ねじけぬやう、常に心がけて磨くことが先何より大切と存じます。御覽ぜよ、彼の薔薇といふ木は、見受たところ如何にも立派で無いのみならず、荊棘までもたちて、稍もすれば人を刺して傷つくる程の、眞にいやな木であるにも拘らず、人から愛せらるゝのは、全く一種の可愛らしい花に得もいはれぬ香を放つからであると存じます。人も其通りで御在まして、如何に傾國の美人であつても、心に荊棘がありては、たとひ巧に表面を粧ふとも、誤て一時之を愛する人のあるかは存じませんが、終には荊棘に刺されて、當人は申すに及ばず、之を乙に傳へ甲に傳へて、次第に世間から疎むぜらるゝに至るは必定で御在ます。何と嘆はしき事では御在ませぬか。其故に女子は內心曲らず、ねじけぬやう心持を正しくして善良なる香を放てば、其顏かたちは薔薇の荊棘ある如くに醜くとも、決して人に見捨られ世に愛せられぬ事は御在ません。

然るに人はおしなべて身形をかざることは知りても、其心をかざる事を知らないやうだと、昔の人の申され

ましたが、如何にも左樣になり勝であるのは眞に嘆はしき次第で御在ます。全體心をかざるといふ事は、内に善からぬ心がありても、表面に善を粧ふといふ事では決して御在ませぬ。おのれは斯樣の惡い心の起る事があるが、どうも善くない事であるよと、惡きところを改めて善くなすといふ事を申すので御在ます。其上形は生れ付でありますから如何に醜しとても變じやうはありませんが心は怠たらぬやうに氣を付けて、善き道へ〳〵とならつてまゐれば、終には何とて善き人とならぬ事が御在ませうや。玉も磨けば光ありで、屹度善き人になれやうと存じます。

さらば常に氣をつけて磨くべき女徳とは、如何樣の事かと申すに、細かに數ふれば切りもない事で御在ますが、先大要十ヶ條と存じます。第一貞操、第二温順、第三儉約、第四恭謹、第五親切、第六寛容、第七仁愛、第八忍耐、第九和樂、第十勤勉で御在ます。是等は何れを先き何れを後と前後輕重の差別は御在ません、何も〳〵大切なる事ばかりで御在ます。

史傳

女傑コルデー

中内蝶二

(上)

纖手を以て國難を排せむとつとめた佛蘭西の愛國家で、ジヤンヌ、ダルクと好一對の女傑は、シヤルロツト、コルデーである。ジヤンヌは自から矢石の間を馳け廻つて、敵國の大軍を討掃ひ、コルデーは單身匕首を懷にして、政府の元兇を仆した。しかも其最期の哀れなことも能く似て居て、ジヤンヌは焚刑にあうて、ルーエンの原頭、野火一片の烟と化し、コルデーはまた、刎刑に處せられて、斷頭臺上、秋葉一團の露と消えた。余は前號の紙上に、ジヤンヌの傳を紹介したから、玆に少しくコルデーの事蹟を述べやうと思ふ。

コルデーは羅綺にも堪へざるたをやかなる女の身でありながら、何故に政治上のことにかゝはり、大膽にも人を殺すやうな始末になつたか、それを詳らかにせむが爲めには、先づ當時の佛蘭西の狀態を說かねばならぬ。

佛蘭西の革命は、まことに前古未曾有の大變である。君主政治を倒して、共和政府を作り、狂人のやうな人間が上に立つて國家の政事を執ることになつたので、後先きの考へもなく、無暗やたらに革新々々といふことを唱へて、幾百年來此國に行はれてゐた風俗や、習慣や、制度や、文物や、あるとあるものは悉く打ち破られた。君主は廢せられたのみならず、無慙にも死刑に處せられ、人民の腦中には、たゞ自由、平等といふことのあるばかりで、王族とか、貴族とか、士族とか、平民とかいふ階級の區別は殆むど破壞せられた。

たゞ舊いものが廢せられて、新しきものが作られたといふのみならば喜ぶべきことであるけれど、革命の結果は、單に人民を奴隸の境遇より救ひ出して、自由の身とならしめたといふだけで、國王に代つて、政權を握つた多くの人間は、何れも過激粗暴の輩のみで、國家を統御する技倆もなく、事務を處理する經驗もないから、何事にも破壞的の態度を取つて、自黨の爲めに都合の惡いものは、直に擒へて獄に下し、殊に恐怖時代に至りては、捕へられたものは悉く殺され、斷頭場裏の鬼となつたのも數知れぬほどである。去れども反對黨のみを暴壓してゐる間は、まだ〳〵殺される人數も少ない方であつたが、其やり方が餘り過激なもんであるから、同じ共和黨の内でも、之れに慊き怠らぬ派が出來るのは自然の勢である。さうなれば、もう同黨、同僚の好しみも顧みる所でない、門地、血族、材識、德望など、苟も自分に勝つてゐるものは、何となく邪魔になつて、自分等の地位までも危うくなる虞があるから、片端から殺して行く、彼の猛惡なるマラーの徒が、かつて『二十六萬人を鏖殺しなければ、佛蘭西共和國の安寧を保つことは出來ない』と云つたのを聞いても、當時の悲酸なる光景が思ひやられる。

ジロンド派は、共和黨の中でも、比較的に温和で、物の道理もわきまへ、黨員も多く、聲望もあつたが、過激派は之れを烟がつて、種々の悪い風評を立てゝ人民を煽動し、遂にたゝき滅して了つた。ロベスピーヤとか、ダントンとかいふ人々は、何れも政府に立つて、暴虐を恣まゝにした人であるが、是等の人々よりも、まだ一層過激であつたのはマラーといふ人だ。

マラーは身の丈低くして五尺に充たず、頭が大きくて、容貌見るから恐ろしく獰悪の相をあらはし、性質は剛膽放恣で、きはめて意地のわるい人間であつた。若い時から醫術を學び、巴里の街に出で外科醫をして居たが、折柄革命の波瀾が盛になつたので狂熱の血汐は、ムラ〱とマラーの胸に湧き、自から『民の友』と稱する新聞を發行して、叛逆、虐殺、鹵掠等あらゆる過激の文字を列べて人民の心を鼓吹した。是に於て、政府では治安を妨害する徒であるといつて、警吏をやつて其家を圍ましめたが、マラーは幸ひに其場を遁れ出ることを得て、暫らく或女優の家に潜んで居たけれども、政府の探索は益々嚴しいので、或時は友人の家の窖倉の底に隱れ、或時はまた寺院の塔の天井に隱れて居たこともあつた。此樣な危險な場合に立つて居ながら、新聞の發行はなほ依然として續けて居たといふから、隨分大膽な男には違いない。

千七百九十二年八月、ジロンド黨と山岳黨との聯立内閣が出來た時、マラーは警視廳の長官に任ぜられた。かの名高き『九月虐殺』のあつたのは其翌月のことで、マラーは實に其首唱者であるといふことだ。またをしてバスチルの牢獄を焚かしめたのも、マラーの數唆である。かく種々の暴動を起さしたので、温和派の議員等は、國會に迫つて、マラーを逮捕せよとすゝめたけれども、當時の政府の有力者なるダントンやロベスピーヤが保護したから、遂に其効を奏することが出來なかつた。

其後間もなく山岳黨の首領となつて、大に勢力を得るやうになつた。マラーは隨分材能のあつた男で、口も筆も達者であつたが、萬事粗雑で、亂暴なやり方であ

つた。其盛なる勢にまかせて、虐殺を恣まゝにして居た間に、不意に其身に被るべき罪の報ひは、既に胚胎してゐたのである。

頃は千七百九十三年の始め、ジロンド派の根據地なるノルマンヂーの首都、カンといふ所に、有名なる悲劇詩人コルネイユの曾孫にあたる若き婦人が住で居た。その名をシャルロット、コルデーといつて、芳紀正に二十四、明眸皓齒、容姿の艶麗なるのみならず、物に熱心で、情の強いのは、さすがに詩人の血統をひいてゐた。父は多少學問もあり、世事にも通じた人で、夙に國家の不幸を嘆き、何うかして之を救濟するの道を講じやうと勉めてゐた。

コルデーははやく母に別れ、父は國事に熱心であるから、敎育の事などに干渉するものもなく、自分で勝手に好きな書物を讀で勉強してゐた。中に就いても、尤も愛讀したのはプルタークの書で、此書に依つて心を刺戟せられた所は實に少からぬのである。

此時ジロンド派は、過激黨の爲に抑壓せられ、議會に勢力を失ひ、捕へられて斷頭臺の露と消ゆるもの數知れず、一揆の暴動は益激しくなつて、正義の士は日一日と減じ行き、巴里の街は全く惡魔の横行する暗黒の世界となつてしまつた。しかも此亂暴狼藉の張本人は即ちマラーである。

コルデーは此殘虐なる有樣を見て、痛憤の情に堪へず、いたくマラーを惡んで、彼一人さへ世にあらずば、佛蘭西には暴虐の跡を絶つて、人々も安堵することを得るであらうと、日夜此事ばかりを腦裏に描いて居たが、遂に此妄想を眞實の現象として、愈よコルデーをして大決心を起さしむるに至らしめた一大警報が耳に達した。

その恐るべき警報は何であつたらう。殘忍なるマラーは飽くまで暴虐を逞うして、苟も己に敵意を抱き、己を惡み、已れに仇をせんとする疑ひのあるものは、事實の有無に拘はらず悉く鏖殺しやうと決心したといふことである。しかも其嫌疑を被つて、愈よこれから斷頭場裏に引き出されやうとする人々の姓名も、數も既に

確定せられて、其忌まはしき名簿も出來たといふとだ。あゝ此名簿の中に列記せられた人々は、何たる不幸な運命であらう、實に哀れとも、氣の毒とも云ひやうのないわけだ。

さて其殺されると決つた人は誰れ〳〵であるか、餘り數が多いので一々姓名を列擧することは出來ない。その人數だけを玆に擧げて見やうなら、リオン府で二千五百人、マルセイユの市街で三千人、巴里の都で二萬八千人、ブレターニュ及びその他の諸州で三十萬人、都合三十三萬三千五百人といふ多人數である。これ丈けの人數が、あはれなる人身御供に上つて、斷頭臺上に送られやうとは、實に殘酷な話で、話に聞いてさへゾッとする。

コルデーは此恐るべき報知を耳にするや、熱血胸に迸つて悲憤の涙にむせび、をのれ惡きマラーめ、我身一つの驕奢をきはめんが爲めに、幾十萬人の貴重なる生命を奪はんとは、言語にたえた沙汰である。彼さへ無くば、此澤山の同胞の生命は助かるのに、何とかしてマラーを除くべき方法は無いかと、種々心を苦しめた末、遂に最後の手段を取ることに決した。最後の手段とは云ふまでもない、マラーを殺すことである。コルデーは物の數にも足らぬ我身一つを捨てゝ、幾十萬の人間の生命が買へるかと思ふと、我ながら嬉しく感じて、非常なる勇氣を起したのである。

それにしても、用心怠りなき男一匹を、女の身で首尾よく殺すことが出來るであらうか、何うも覺束ない話だ。

七月七日、コルデーは自分の父や妹の住で居るアルジャントーの街へ行つて、餘所ながら暇乞ひを告げた。もとより眞實の事を語つたならば、父は留めるにきまつてゐるから、わざと口實をこしらへて、自分は佛蘭西に居てもつまらないから、暫らく英吉利へ行つて、この恐るべき革命の餘波を避けやうと思ふといふ旨を語つた。父は夢にも娘が決心を知らないから、それは善い考へであると贊成をしてくれた。コルデーは此れで思ひ殘すことはない、けれども、さすが親子の一世の別れで、

今別れては再び顏をあはすことも出來ないかと思ふと後髪をひかるゝやうな心持で、熱き淚の溢れ出づるのを禁めることが出來ない、せめて二三日逗留して、名殘を惜しみたいは山々であるけれど、時がたつに隨つて、恩愛のきづなにひかされて折角の決心が鈍つては大變だから、たち難き情をたちきつて、其日直にカンの街に引返し、目的を達すべき大計畫の準備に取りかゝつた。

このカンといふ處は、巴里を去ること二十餘里の小都會で、コルデーは幼い時から、叔母と共に此處に住まつてゐたのであつた。

父と妹に別れを告げて歸つたコルデーは、翌日直に巴里に向つて出立しやうと思ひ、叔母には父に話したと同じやうな事を話して別れを告げ、平素親しかつた友達や、近隣の人々にも暇乞をした。自分の所有して居た品物は、悉く友達に分ち送つて、手に殘つたはプルタークの書物一冊のみである。これは巴里へ行く旅のつれ〴〵を慰めんが爲めに殘して置いたのだ。

用意は全く整うて、もう出發するも差支へがないやうになつた。けれども、公然と出發のことを觸れ知らしては、見送りの人もあり、目をつける人もあつた、自然巴里へ行く道筋が知れる虞があるから、わざと知らさず、叔母に向つては、これから野邊へ出て、收獲の景色を寫生して來ますと云つて、畫帳を携へて家を出た。

斯くて近郊へ立ち出でゝ、畫をかいて居るうち、折よくも平素自分の可愛いがつてゐた隣家の小兒に出會つた。コルデーは其小兒を近く招いて、自分の寫生した畫を遣つて。

『これをお前に遣るから持つておいで、姉さんは、これぎり、もうお前に會はないから、お前も達者で、大きくなつたら、賢い人におなりよ』

と云つて、つく〴〵其子の顏をながめて居たが、やがて其場を立ち去つて、再び叔母の家へ歸らなかつた。

小兒は畫を貰つた嬉しさに、喜びながら家の方へ歸つた。今聞いた言葉こそ、コルデーが此地へ殘した最後の言葉で、其貰つた畫こそ、コルデーが此地へ遺した最後の筆であるとは、無心な小兒は、夢にも知らなかつたであらう。

（未完）

家庭歴史三十六歌選

中郁 秋香

國の富强は國民の愛國心に本づき、國民の愛國心は其國の歴史に依て養はるゝものなることは余すでに愛國唱歌の緒言に於ていへるが如し、さて其の歴史の素養をなす方法に於てはもとより手段多しと雖も、兒童家庭の薫陶に依るもの實に緊要にして、歌に依りて人を知り、人に依りて傳を知るは、最もその捷逕なり、されば今神武天皇をはじめ奉り、世にすぐれたる人々三十六人を撰び、先づ其の歌をあげて大意を解きこれに因みて其の傳記を示し、名けて家庭歴史三十六歌選といふ、是れ小學に於て通讀すべき歴史中まゝ其詳細を知らしめて其興味を皷舞し、内外表裏相應じて果して能くかの愛國心を養成せしめんことを期してなりけり、

神武天皇

あしはらのしけこきをやにすかたゝみ
いやさやしきてわかふたりねし



此御製は天皇大和の國橿原に皇居を御造營ましく〵正妃伊須氣余理媛をこゝに迎へさせられたる時其の初め正妃と御結婚あらせられし時の事を思し出でさせられて詠ませ玉へるものにて、正妃、御父は大和の大物主神

にまし〳〵、御母は勢夜陀多良媛と申し奉り、参内の後皇后に立たせ玉ふ、天皇曾て大和の高佐士野に行幸まし〳〵ける時、伊須氣余理媛他の六女と相伴ひ、この野に出で、遊び玉へるに逢はせ玉ひしに、その御容貌の世に比類なくすぐれさせ玉へるのみならず、風度動止のいかにも高貴に氣高くまし〳〵けるを御覽じて、深く大御心に叶はせ玉ひければ、即ち御供に侍ひける大久米命して媒せしめ玉ひ、狹井川の上なる姬の家に行幸ありて御婚儀を擧げさせ玉ひし事なれば、其時の事をよませ玉へるなり、あしはらは、葦の一面に生ひ茂りたる野原をいふ、當時國土いまだ開けず、至る所いづこも〳〵一般葦生ひしげり、其間に人家ところ〳〵散在せしさま思ふべし、さるからに古く、我國の稱を葦原中國ともいへりしなり、しげこきをやは、醜き小屋にて作りかた粗末にて、小やかなる家といふこと、姬はもとより御家柄も貴く、神の御子にまします御事なれども、太古の事とて、其の狹井川の御家はかく葦の生茂りたる中にありて、粗造なる小屋なりしなり、菅疊は菅にて

(付二)

編み製りたる敷物をいふ、疊は敷物、即ち薄縁の類にて今言ふ疊にはあらず、いやさやのいやは彌にて、幾重も敷き重ぬる事、さやは清にて、清淨潔白をいふ、天皇行幸まし〳〵つる事なれば、家は粗末なれど、清潔なる菅むしろを幾重も重ね敷きて御坐を設けしなり、されば今日正妃を宮中に迎へさせらるゝに就きて、以前の事を思へば、葦の一面に生茂りたる野原の中に立てる粗造なる小屋の内に、菅むしろを幾重も清潔に敷き重ねて、坐を設け、そこにて我等の婚姻をば結びし事にて、いかにも手輕く假初なりし事どもなりけり、されば今かく此宮中に迎ふるにつけても、最初の事がそゞろに思ひいでられて、あはれに感ぜらるとの大御歌なり、そも〳〵事に臨み物に觸れて過去りし始の事を思ひ出して感ずるは、人の常情にして、これ天性の美德、報本反始とて、何事に依らず、其本を思ひ、始を忘れずして能く之に報ゆるの心も、畢竟これよりして生ずるもの、殊に夫婦は人倫の始にして父子、君臣、長幼、朋友の道皆之に本づくものなれば、神代にしては素盞鳴尊の八雲立

の神詠あり、又人皇にしては天皇の此御製あり、まことに尊く畏き事なるよしは先哲もすでにいひおかれたり、

◎神武天皇の話

天皇御諱は神日本磐余彦尊と申し奉り、彦波瀲武鸕鷀草不合尊の第四の皇子にまし〳〵、御母は海神の御女玉依姫と申し奉る、天性叡聖明達まし〳〵ければ、御年十五にして太子に立しめられ、吾平津媛を妃に迎へて、手研耳命を擧げさせ玉へり、當時皇居は日向の國にありて、天下いまだ皇化に霑はず、在々所々に蠻屬の酋長ありて、おの〳〵互に相爭ひ、攻伐戰鬪しばしも絶ゆることなく、生民塗炭に苦みければ、天皇深く之を歎かせられ、いかにもして天下を一統して民を水火の中より救はばやと常に大御心を惱まし玉ひけるが、御年四十五の御時皇兄方を初め、諸皇子と議らせ玉ひ、大軍を起して東の國々を征伐し、王澤を浴く四方に布き施さんことを思し定め玉ひ、即て數多の舟師を率ゐさせられ、速吸水門より筑紫の菟狹に渡り、又崗の水門より安藝に至り玉ひ、埃宮にまし〳〵て、近國を綏撫じまし〳〵、その翌る年吉備に入らせられ、高島の宮に留りましますこと、三年に滿ちぬ、こは大に舟檝を作り設け、糧食を貯へ備へしめられ、一擧しく天下を平げ定め玉はんが爲とぞ聞えたる、かくて總ての準備全く整はせ玉ひければ、無數の軍舟舳艫を列ねて東征の途に向はせられ、即て難波の水戸に入らせ玉ひ、これより河内の草香津に至りつき玉ひ、陸路より進みて龍田に入り玉はんとす、されども當時開闢の始といひ、殊には蠻屬の巣穴となり居る土地の事なれば、道路いまだ更に開けず、見渡す限り茫々として荊棘雑莽生茂り、たま〳〵木樵の踏分けし路なきにしもあらざれど、險しくして且細く二人と并び行くべからずして、數多の軍衆の超ゆべきに非りければ、已むを得ずして引返し、更に道をかへ、膽駒山より大和に入り玉ふ、時に長髓彦といふ者あり、此部落の酋長にて蠻屬中最も暴力強く、四方の敵に打勝ちて土地を得る事多く、隨て部下の兵も多かりけるが、是より先つかた櫛玉饒速日命といふ天神あり、天の

磐船に乘りて天より降り來り、我こそ天神の御子なれとて、四方の酋長を服從へけるに長髓彦之を信じ、やがて其妹三炊屋媛をもて饒速日にめあはし、自ら其部下となりて權を振ひ居しことなれば、今天皇の日神の御子と稱し玉ふをば却て之を疑ひ、是必ず僞りてしか稱する者ならんとて、大軍を率ゐて弘舍衛阪に邀へ、火花を散らして烈しく戰ふ、皇軍は不知案内の土地といひ、且は險阻の山路に疲れたり、賊はもとより地理に明かに、しかも究竟の兵をすぐりてこゝを先途と戰ふ事なれば、皇軍ほと〳〵戰ひ苦しみ、殊には皇兄五瀨命流矢にあたりて痛手をさへに負ひ玉ひければ、一と先之を引揚げて、草香津に却き玉ふ、こゝに天皇仰せられけるは、我は是日神の御子なり、さるに今日の戰日に向ひて賊と戰ひぬ、これ天道に逆ふものにて、軍の利なき所以ならん、いでや日神の威を負ひ、日光を背にして伐つべきなりと、即ち茅渟山の城水門より進みて紀伊の竈山に至り玉ふに、五瀨命の御矢傷ます〳〵甚しく惱ませ玉ひ、遂に軍中に薨じ玉ひしかば、天皇歎かせ玉ふこと大方ならず、やがて竈山に葬り玉ふ、かくて此地の酋長名草戸畔、丹敷戸畔などいへる豪族をそれ〴〵征討まし〳〵、更に大和に向ひ玉はんとするに、山路いかにも險峻くして、一面雜木生茂り、踏入るべき道も分たさりけるを、八咫烏の嚮導に依り、艱難辛苦を凌ぎて大和の菟田の下縣に達し玉ふ　こゝに此部落なる酋長兄猾、弟猾といへる兄弟の豪族あり、弟猾は性質順良にして且鋭敏かりければ、能く順逆を明かにして、皇軍の敵すべからさるを知り、軍門に詣でゝ服從ひまつり、且兄猾驕傲にして逆謀を構へ、天皇の爲に新に宮殿を造り、こゝに行幸を乞ひまつり、饗應し奉るべしといひなし、竊に宮殿中に機を作り設け　天皇を害し奉らんとする由告げ奉りければ、天皇先其の歸順を嘉し玉ひ、直ちに道臣命に仰せられて兄猾の家に至り、嚴しく之を詰り責めしめ玉ひければ、兄猾遂に其罪に伏し、深く愧ぢ、大に懼れて自ら其の機に觸て死し、部下の兵こと〴〵く降伏す、されども蠻屬猶四方に充滿し、おの〳〵軍勢を盛にして皇軍に備ふる由聞えければ、天皇菟田の高

倉山に登りて、遙に四方を見渡し玉ふに、國見岳には酋長八十梟帥、雲霞の兵を備へて陣取り、男阪には男軍を置き、女阪には女軍を陳ね、又墨坂には赤炭を備へ、透間もなくひし〳〵と供へ、しかのみならず、兄磯城の大軍は磐余の要害に據りて、行手の道路のこゝかしこ、稲麻の如く固めたり、天皇之を見そなはして、御心頗る安からず、是容易く攻め落すべきものにあらず、所詮靈妙不測の神力に依りて之を討滅す外はあらずと思し定め玉ひ、即ち大に祭祀の器具を整へしめられ、丹生川上に登りて謹みて天神地祇を祭りて御勝軍を祈らせ玉ひ、さて後皇軍を國見岳に進められければ、怪しむべし、皇軍の向ふ所前なく、さしも堅固に陣取りたりし八十梟帥の軍勢をこと〳〵く誅伐し、更に道臣命をして大久米部の兵を率ゐて、餘黨を忍坂に逐ひて之を平げ、破竹の勢をもて兄磯城の軍を瞬くひまに討滅し、猶進んで長髄彦を征し玉ふ、されども長髄彦の兵は相もかはらず剛勇にして勢鋭く、皇軍ほと〳〵苦戰する折こそあれ、一天俄にかき陰り、暴風忽ち吹起り氷雨を降らすこと飛礫の如く、忽然として金色の靈鵄天の一方より飛び來り、天皇の執らせ玉へる弓弭の上に止れり、其光赫〳〵として電光の如く、長髄彦の一軍皆眼眩き、手足萎え慄きてはたらくこと叶はざりければ、皇軍得たりと此虚に乘じ烈しく撃ちていたく之を破る、長髄彦此奇瑞を見て初めて畏愕の心を生じ、使者をもて天皇に申しけるは、我はすでに天神の子饒速日命に服從ひ、これを君として仕へまつれり、天神の子何とて然か多人數あるべきや、漫りに天神の子と稱して人の國を奪ふ事なかれとて、やがて天神の子たる證據として、饒速日が佩びし天羽々矢並に歩靫を見せ奉る、天皇之を御覽ありて仰られけるは、天神の子もとより種類多し、饒速日もとより天神の子に紛るべからず、されども我は日の大御神の子孫なりとて、即ち持たし玉へる天羽々矢および歩靫を示し玉ふ、長髄彦こゝに於て始めて其眞實なることを悟り、深く驚き大に懼れしかど、已に一たび敵對し奉りける事なれば頑として過を改めず、時に饒速日命、天皇の親しく征討まします事を承り、大に驚

き長み、又長髄彦の頑固にして、條理をもて諭し教ふべき者ならざるを知りしかば、即てこれを殺し、其軍勢を率ゐて軍門に伺候す、天皇もとより饒速日の名を聞しめされければ、其歸順を賞し玉ひ、物部といふ氏を賜ひて寵ませ玉ふ、斯くの如く諸方の酋長蠻厲漸次に誅滅し、又は歸順まつりしかど、猶波哆の丘岬に新城戸畔といふ者あり、和珥坂下に居勢祝といふ者あり、臍見長柄の丘岬に猪祝といふ者あり、これらをはじめ尾張の土蜘蛛などいへる蠻厲豪族こゝかしこに割據して、緊しく王師に抵抗しけるを悉く討伐し玉ひ、皇軍を起し玉ひしより六ヶ年、御年五十にして天下を平らげ玉ひ、大和の國畝傍山の東南なる橿原に地をえらび玉ひ、都を定めて宮室を建築せしめられ、其翌くる年正妃を宮に迎へしめられ（前にあげたるは此時の御製なり）又その翌年即ち辛酉の歳の正月、大御位に橿原の宮に即かせ玉ふ、これを紀元元年とす、こゝに正妃を立てゝ皇后となし奉る。

よく〳〵皇后は御容儀世に比類なくまし〳〵けるのみならず、御性質賢明くまし〳〵て婦徳すぐれさせ玉へる御事は、神武天皇崩御の後、異腹の御子手研耳命、久しく朝政に關かり玉ひしより、竊に不軌の志をいだき、皇后の御腹なる日子八井命、神八井命、神渟名川耳尊（即綏靖天皇なり）等の弟皇子達を害して大御位を奪はんとし玉ひつるを、皇后早くも之を知しめされ、御歌を詠ぜさせられて、其事を皇子達に告げしめられ、速に之を除きて禍根を未萠に防ぎ玉ひしにても明かなり、かゝる賢明の御性質にましましればこそ、皇后にも立てしめられたる事なるべけれ、

天皇の二年、即ち御即位の翌年諸臣の功を定めて、おの〳〵賞を行はせられ、四年に至り、蠻厲の餘黨ことごとく平らぎ、天下始めて治平に至りしかば、御祭場を鳥見山に設けしめられ、大に皇祖大神をはじめ奉り天神を祭らせらる、されども天下年久しく亂れたりし事なれば、民殺伐に馴れて、速かに泰平を樂むに至らざりしかば、政治に深く大御心を砕かせられ、民を撫で慈み玉ふ

こと、さながら父母の赤子を保育が如くなること三十一歳にして、始めて四海波穏かに、民皆太平を謳ひ樂しむに至りければ、車駕諸國に巡幸ましく／＼て、親しく民を愛恤し玉ひき、此時腋上の嗛間丘に登らせられ日本國の姿勢蜻蛉の曲れるに似たりと仰ありて、秋津洲とぞ號け玉ひける、蜻蛉はあきつと稱すればなり、かくて四十二年皇子神渟名川耳尊を立てゝ皇太子となさしめられ、御在位七十六年にして橿原宮に崩御ましく／＼き、御壽一百二十七歳にぞならせ玉ひける、

和氣廣蟲

鹽井ふく子

もつ人の心によりて寳とも
あだともなるは黄金なりけり

こは、かけまくもかしこき皇后陛下の御歌なるが、げに黄金も機に應じてよく用ゆればこそ、やんごとなき寳ともなれ、いたづらにあつめむとも何にかはせん、たゞあくたに異ならぬを、世の人ともすれば、これををしみて人情を害ひ、義理をやぶる事少なからず、いみじきは其身はしろがねにも黄金にもます寳としてはぐくまれながら、たゞ此の黄金ををしみて親をなほざりにするもあれば、屍をおきて、兄弟垣にせめぐあり。孤子が飢渇に泣くも救はず、餓莩の途は仆るゝも省る事を知らず、君に背き、親に背き、人に背き、心に背く。大方は黄金故なり。

仁あれば人と云ふ。禮あれば人と云ふ。人として仁なからんか、鳥獸にしかず。人として禮なからんか、鼠の皮あるにしかず。財のよく用ゐるべき事を知りて、人を救ひ、道をたもつ、これ君子なり、智者なり。いたづらに金銀をちりばめ、富貴にほこるとも、敗德、不義の行ひありては、決して尊ふべき人にはあらず、たゞ利欲に迷ふ小人のみ。これをさかしき人とするは、大なるさかしら事なるを、ともすれば利欲に迷ふ人心、仁義を省みざるぞあさましき。

今も世に護王のやしろとて、いみじき日の本の守りの神と尊びゐつかるゝ和氣の清麿公の姉君を廣蟲と稱へ

て世にまたありがたき人にこそありけれ。其の祖先は鐸石別の命にして、應神天皇の御世に、その曾孫弟彦王軍功を以て吉備磐梨縣を玉はりければ、子孫世々此處に住ひけりとぞ。廣蟲人となり温順にして、人をあはれむの心深かりけり。若うして從五位下葛井の戸主に嫁ぎぬ。貞直よく夫にかしづきけり。後、夫を失ひて、大内に事へ、またよく誠を致しければ、時の帝、孝謙天皇いたくいつくしみ、且つ信じ玉ひて、正五位の下を授けられけるが、天皇御位を淳仁天皇にゆづらせ玉ひ、かざりを下ろさせ玉ひし御時、廣蟲もまた髮をきりて、同じく法の御弟子となり、法均と名けて、尼位進守大夫を授けられたり。はじめ、孝謙上皇、藤原仲麿をいたく寵愛し玉ひ、名を惠美押勝と賜はりけるが、後、上皇、僧弓削道鏡をいつくしみ給ひ、道鏡の威權日に盛んになりゆきて、押勝が寵のやゝおとろへけるに、押勝之を怨み、兵をあつめて道鏡を誅し、上皇を押しこめ奉らんと謀りけるが、事あらはれて誅せられ、之にくみするもの甚だ多く、斬罪にあたるもの數百人もありけるに、法均之をいたみ、上皇を諫め奉りて、此の人々の死を減じて、流に處せしめけり。

世はかやうの亂れのために、民の多く時を失ひ、業を廢しける故にや、翌年世の中いたく飢疫して、民間に子を生むもの、往々之を養育するの力なしとて、棄子するもの多く、あはれむべし、たま／＼世に生れながら、しら玉とかしづかるゝ親にそひねの夢も結ばず、直ちに餓鬼道におちゐりて、露命、やがて道の草葉にかゝらんとす、悲鳴の聲を聞きて、仁あるもの誰れか悲しまざらん。廣蟲いたくあはれみて、人を四方に走らし、捨てたる子をこと／＼く拾ひて己が子として養育したりとぞ。其の子八十三人、後、天皇、之をよみし玉ひて、その子たちに葛木の性を賜はり、神護景雲二年、廣蟲に從四位の封戸ならびに位祿位田を賜はりたり。あはれ、如何に貧窶にせまるとも、恩愛ならびなき子を原野に捨つる殘忍の親もある世に、法均血脈の親にもあらぬを、寶ををしまず、力をつくして之を救ひ、節儉己れを持じて、以て此の子たちをいつくしみはぐくみ、之に學を敎へ、業を授け、

遂に一身を立てしむるに至る。かく費してこそ金も寶なれ。かのいたづらに倉庫に充たしめて、人をも省みざるの徒、少しく思ふべき事にこそ。

さるほどに、上皇、再び天位にのぼり、道鏡を寵し玉ふ事限なく、遂に太政大臣禪師とし、法王の位を授け玉ふに至る。道鏡いたく寵に誇りて權を恣まゝにし、勢ひ比ぶものなかりしが、神護景雲三年、宇佐八幡の神主道鏡に媚びて奏し奉るやう、宇佐八幡の神託に、天位をもし道鏡に讓らば天下は太平ならんと託宣ありたりと奏す。天皇、さすがにまどはせ玉ひて、廣蟲が弟、和氣の清麿を宇佐に遣はし玉ひて、神意を問はしめ玉ひぬ。清麿やがて齋戒沐浴して發せんとするや、道鏡劍を按じ、眼を怒らして曰やう、汝、我をして志を得しめば、汝を太政大臣とせん、もし我が旨に違はゞおもき刑に處すべしと。危いかな皇室の安危、唯清麿が一心にかゝれり。」清麿、はやく死を決して出でぬ。歸りて神旨を復命し奉るやう、我が國開闢以來、君臣の分定まれり、未だ臣として君となりしものあらず、道鏡何者なれば敢て天位をのぞむぞ、無道の者は速かに誅すべしと宣へりと奏するや、群臣みな色を失ひて、手に汗をにぎりぬ。道鏡大いに怒り、清麿の名をけづりて、穢麿となし、大隅の國に流しぬ。法均もまた詔して俗に還さしめ、位をもけづられ、名を狹蟲と改められて、備後の國に流されたり。身を殺して皇室を護る、清麿が誠忠、たれもかくあらまほしき事にこそ。

天定まりて人に勝つとかや。光仁天皇御位を踐ませ玉ふに及び、和氣氏姉弟を召還し、もとの位に復し、法均の名をもとの如くし、のち、從四位の下を授け、典藏となし、吐納を掌らしめ玉ひぬ。法均心誠忠、よく上を戴き、下を率ゐて、つゆよこしまの行ひありし事なし。天皇、かつて感歎し玉ひ、諸侍從、執御は、毀譽紛紜、つねに耳に絶えざるを、法均のみは未だかつて一度も人の短を云ひし事あらずとの玉はせけるとかや。かくても其の人となりはさつせらるべし。のち、正四位の下にすゝみ、つゞきて正四位の上に累進し、典侍となり、延元十八年みまかりたり。時に年七十。天長二年、正三位を贈ら

れけりとぞ。其のみまからんとするや、弟清麿に遺言して、妾死なば、必ず法事を盛んにいとなむ事を要せず、たゞ二三の僧侶に齋をあたへて、法事を行はしめば足りなんと。法均またよく弟清麿と和し、敬愛共に誠をつくして、日來かつて財物を分たず、和氣うちにみちければ、時の人、其徳をたゝえぬはなかりしとぞ。實に法均は當時のさかし人の如くたゞ利を得るに走らず、また世に稱せらるゝ女丈夫の如く、ともすれば權をふるひ、人をおとすの擧動なく、たゞ善良己れを持し、媚びず、ほこらず、誠忠公けに報じたるものにして、和氣氏姉弟の如きは實に日本國の臣民の仰ぎてあまりあるものとすべし。あはれ、女一人の力にて、八十餘人の棄兒を育てし博愛、これを世界萬國に求むるも、幾んど其比を見ず、而して終始一の如く、赤心君につくせり。廣蟲の如きは、貞婦にして忠婦也、又古今獨歩の女流の慈善家也。女子はことに物のあはれを知るを尊ぶ。今の世の貴婦人、令孃、この廣蟲の神々しき心にかへりみ給へや。

文苑

和歌

柳風　伯爵　津輕承昭

吹くとしもなき春風はわが門の
柳にのみも見え渡る哉

水鄕柳　伯爵　松浦詮

むつた川水のみどりも色そひて
柳の糸は春風そふく

行路柳　子爵　前田利鬯

うちけふる春の柳の下陰は
雨のなかゆく心地こそすれ

大磯百首の中　侯爵夫人　伊藤梅子

大磯の夜の海を

いさり火のにきはふ見れば此夕べ
にはをよろしみ漕出てぬらし

大磯の町を

なりところ數そふまゝに大いその
ちまたいよ／＼にきはひにけり

大磯の汐干狩を

ゑほひきしなきさに出てゝ皆人の
磯菜とりつゝあそふ今日かな

花水川の蜆取

花みつの小川にいてゝゆふまくれ
蜆とりをれはなつわすれけり

筆草

心さへふかくとゝめてふてくさを
とるもたのしきこよろきの磯

嵐はけしき日

ふきしきるけしきおそろし高殿に
松のあらしのうちあたりつゝ

夕暮にふしを見て

あしからは雲間にきえし夕くれの
み空ににほふ富士のかみやま

蓮の花を見て

池みつのにこれる中にありなから
きよけににほふ花はちすかな

高麗園に行きて

若菜さす木陰によりて見おろせは
みれともあかぬ海のおもかな

輕井澤なる末松夫人より文の中にいかつちの鳴りける折のおのか事おもひやりけるよし記せるをみて

いかつちの音におとろき我を思ふ
きみのなさけを思ひやるかな

竹柏園歌會兼題

春風

西　升子

すゝなさく畑の中みちわけゆけは

こかねの波にはるかせそふく　竹屋雅子

つはなぬく少女の袖にかをるなり
梅か香ふくむ野へのはるかせ　板倉止子

梅にわけし窓さむからてこの比は
ふくとしもなく春かせそふく　板倉藤子

さきそめし花の小枝をうこかして
のとかにふくか春のあさこち　松平岳子

花の香をあなたこなたに運ひくる
風こそはるのしをりなりけれ　大河内桂子

吹風のなからましかはいかにして
花のにほひを四方につたへむ　高木富子

朝こちのふきこそわたれ心地よく

ねふれるてふも夢さますらむ　芦田操子

花かけのこゝにかしこに圓居して
語らひをれははるかせそふく　小幡八重子

辛崎やまつひともとつき消えて
波まをわたるはるのあさかせ　大澤國子

ちるはなも折々みえてかけわたす
をすに入くるのきのはるかせ　印東富貴子

春風のしらへのとかになるまゝに
うくひすうたひ梅そほゝゑむ　奥村岸子

いかなれは小草の上にゆるくして
花にはつらきはるの山かせ　竹山静子

もえそめし柳のひまのあつまやを

をり〳〵みせて春かせそふく
一川虎子

うくひすのおとつれそめし朝より
のとかになりぬにはのはる風
坂井園子

こゝろにもふく春風をいたつらに
やなきにのみと思ひけるかな
三宅貞子

のとかにもくれゆく春の夕かせに
月かけなひくかとのをやなき
大橋時子

打つとふひとのこゝろもはれ行て
たもとのとかに春かせそふく
橘糸重子

もえいてし垣の小草のさゝやかに
さゝやくほとのはる風そふく
片山廣子

花をわけかすみをわけてさほ姫の
みさきおひゆく春のあさかせ
大竹いせ子

しきしまの大和ことはの花のかを
よもにつたふる春のかせかな
里井柳枝子

園のうちに打つとひたる少女子か
かさしの花にはるかせそふく
峯百合子

上野山はなちるなかをかへりゆく
人かけさむしはるのゆふかせ
水橋康子

佐保姫かかすみの袖をふることに
ふきかいつらむ野への春かせ
島崎松子

春かせは園のみならてみなひとの
むねのうちにもみち渡るらし
村山元子

春かせのめくみのいかに厚けれは

かれしを草もはなのさくらむ
佐藤朝惠子

そま人か戸さしていてし山まとは
花にうもれてわさかせそふく
松永曾代子

夕まくれ野へをみすてゝ歸る子の
ふりわけかみにはる風そふく
佐々木春尾子

春かせにひもときし花やかてまた
このはる風にちらむとすらむ
鈴木光子

ちる花のゆくへおくりて春やきの
枝にをさまるはるのゆふかせ
瀨川久可子

ゆるやかに小草のうへをふく風の
なと花にしもつれなかるらん
（未完）

竹柏園の歌會に鶯を

伊藤梅子
ふく風はなほ寒けれとうくひすの
こゑきく今日は春めきにけり

増山三雪子
春たてとまた肌さむきあさとてに
うれしくきゝぬうくひすの聲

板倉止子
白ゆきのなほきえのこる谷の戸に
うちとけそむるうくひすの聲

板倉藤子
またさかぬ老木の梅にけふもまた
花をさそひてうくひすのなく

瀨川久可子
妹まつとやすらひをれは岡こえの
やなきのかたにうくひすのなく

松永曾代子
うくひすの聲なつかしみ里とほき

野中のもりをたどるころかな　　坪野柳子

谷をいでゝ幾日へにけむうくひすの
みやこになれし聲そきこゆる　　大竹伊勢子

よき友にならひてしかないつしかも
なくうくひすの聲そまされる　　久子

去年の雪なほきえやらぬつき山の
小松かくれにうくひすのなく　　琴陵八千代

うらやまし今日は昨日にまさりつゝ
しらへとゝのふうくひすの聲　　前田美子

たか園になくうくひすそ我やとの
かきねの梅はいまたさかぬに　　佐々木信綱

ことさらに都にいてすおくやまを
わか春にしてうくひすのなく

山わけごろも（上）

佐々木信綱

うらゝかなる日影に催ほされて、大井川の流に掉さし、吉野山の花陰にあくがれし程の言の葉どもを、日記なども〳〵しうしるさむは煩はしう、唯思ひ出るまに〳〵かいつく。

*　*　*　*　*　*

大森の岡はなつかしきところなり。月の夜雪のあした訪ひなれて、故郷の心地す。

大森の沖邊はるかにとぶ鳥の
羽田も見えずたつ霞かな

大磯を過るに、西升子君停車場のほとりにゐ給へり。昨日かへしゝ詠草の奥に、明日朝とく旅だつべき由しるしつればなりけり。窓でしにしばし語らふ。

みよしのゝ花に心の急かすは
霞む磯わにおりたゝましを

小山御殿場あたりの富士のけしき、しば〳〵此裾野を過ぎしかど、今日のごと能く晴れたるはいと珍らし。

朝づく日うらゝにさして富士の嶺の
　裾野までこそはれ渡りけれ

沼津は、ことしの一月奥平伯の牛臥山の麓に病をつくろはれし頃、一度とはんと思ひてえはたさゞりき。歸さには、

靜浦のしづけき春の海原に
　小舟うかべて磯めぐりせむ

と思へばいかゞあらん。興津、

いほ原のこぬみの濱の朝なぎに
　興津の海士の網引する見ゆ

靜岡にて車しばしとゞまれり。此處には只野績子野口直子など教へ子あれど、え訪はず。舞坂、

遠つあふみ濱名のわたり春みれば
　波の花こそ咲つゞきけれ

名古屋には社友美濃部氏毛利氏などあれど、こゝをもたゞすぎにすぎゆく。

夕づく日菜の花畑にかたぶきぬ
　名古屋の大城遠く霞みて

一宮を過るに、さいつ年の夏長柄川の鵜飼見に物せんとてしばしとゞまりゐし森ぬしの庭園を思ひやりて、

うき草の萠え出る春に成にけり
　池の心ものどけかるらむ

又森和平氏を思ひて、

みやびをの心すさびや多からむ
　菜の花匂ひ雲雀なく頃

關が原にて日入りはてつれば、伊吹山もわかず。近江の海も見えず。

近江の海打いでの濱の打いでて
　見るべくもあらぬ闇の夜半かな

こゝかしこにてよめりし歌、

松山の絶間〳〵に花見えて
　朝けのけぶり遠くたなびく

春の日の長き旅路のつれ〳〵に
　眠りをるあり毛糸あむあり

つゝじさく小松が原にむしろしきて
　此處に彼處に遊ぶさとひと

一むれの中にめだつや此里の
　花とよばるゝ少女なるらむ

夜ふけて京都につく。出迎へられし渥美ぬしにともなはれて、七條住吉町なるぬしの邸に至りぬ。まづ我まうけにと物せられし湯に入るに、終日のつかれぬぐひ去りし心地す。あるじまうけはたねもごろなり。

淺からぬ人の情のいつはあれど
　旅こそ殊に身にはしみけれ

＊　＊　＊　＊　＊　＊

ふりはへてとはれしを今日は自ら案内せんと渥美師のいはるゝまに〳〵、二人打つれて嵯峨に物する滊車に乘る。朱雀大路のあとなりといふ千本通を右に見つゝゆく。今は檳榔の車ならで、賤のをのこが荷車引つゝけて行すぐめり。

いにしへのすさか大路の右左
　菜の花さけり麥生まじりに

あかねさすひんがし山の山眉に
　匂ひあひたる朝霞かな

嵯峨よりおりて、しばしゆけば大井川なり。けふの明方雨いさゝか降りしけるにやあらん、人もさわがしからず、塵もたゝず。

靜なる心にかなふ日なりけり
　人しげからに花の下みち

渡月橋はわたらで、川添をしばしゆきて、小督局の墳にまうづ。

竹村のおくいきどころ今もなほ
　雲居の月のかげやさすらむ

さそひきて風こそ花を手向けゝれ
　かしの木陰の奥つきの上に

岸のさずきに客人よぶ聲、小原女の物うるさきも、あづまとはやう變りてみやびたり。唯三軒茶屋の前に、三軒屋株式會社と筆ぶとにしるせるは、ことさましふぞ覺ゆるや。船にのりて川上にゆく。

底までもすきとほりたる青淵に

二ひら三ひらちる櫻かな

岩陰に舟をとゞむ。此はたり落花多し。

嵐山松の葉しろくちる花の
　　ちりのまがひに春やゆくらむ

温泉に至りて、樓に登るに、若鮎ひがひなど調じていだしたり。樓より見おろせば、

あはれなり花の盛もよそに見て
　　みを引のぼる春の舟人

花見んと丹波路よりや下るらむ
　　たきゞ積みし舟に人の乗りたる

川のあなたは龜山なり。なにがし鐵道をものすとて、樓に向へる山のなからに隧道をまうけたり。あたら景色をと思ふは例の心くせなるべし。

萬世もくづれじと思ふ龜山の
　　岩根きりひらく世にこそありけれ

川岸に線路きづくとて、工夫あまたをり。石をくだくあり。石をつむあり。來るあり。去るあり。いとらうがはし。

たくみらが石切り碎く槌の音も
　　靜にきけば靜なりけり

又舟を川上にすゝむ。岸の岩高く、水の勢はげし。網ひく男の苦しげなるはいとほしけれど、いひしらぬながめなり。

なみたてる波間をぬひてゆく舟の
　　しぶきも寒く川風ぞふく

書物岩屏風岩などを見て、山城丹波の國境までさかのぼりぬ。右左の川つゞきに、つゝじ山吹白藤こゞめ花など咲つゞきて、松の木間に鶯の聲しば〳〵聞え、岩角を鶺鴒の飛びめぐるなど、歌枕の繪卷物を引のべたらむやうなり。

山たかく水せばまれる川くまに
　　咲亂れたる山吹のはな

世の中の早瀬をすぎて見かへれば
　　小舟に似たる我身なりけり

かはそひの丹波山城ふた國に
　　さきつゞきたる岩つゝじかな

川くまの司に家あり。桃二本三本たてり。雞なく。

音にのみきゝつる桃のみなもとを
　まのあたり見る家のさま哉

のぼろ折のくるしさに引かへて、歸さには船箭を射るが如し。

大井川早瀬さしくだすはし船の
　あやふきながら面白の世や

温泉のあたりは、今朝の靜けさに引かへ、遊び船廣き川とに滿ちていとらうがはし。殊にドン〳〵節とかいへる俚歌を、船の上も木の下蔭も諸聲に謠ひかはせる、あたら境をそこなへり。

三の船うかべし春を思ふにも
　人の心のくだりゆく世や

渡月橋のもとにて船よりおりぬ。花の梢に匂ひあひたる夕ばえ見捨がたし。

大井川入江の岸に舟とめて
　又かへり見る山ざくらかな

＊　＊　＊　＊　＊

こたひの旅は、むねと吉野の盛にあはまほしく思ひたちしなれば、平野御室の花は歸さにと思ひ殘して、奈良鐵道にのる。携ふる書は菅笠日記、花染日記、山家集。ともなふ人は昨日嵯峨の停車場にておひし大竹ぬしなり。

＊　＊　＊　＊　＊

奈良の町をすぎて猿澤の池にいたるに、あたりに家ゐ立並び、心にゑがきし池のやうならず。釆女の衣かけ柳も若木なり。さて御社に詣でむと公園に行くに、老木の杉石の灯籠數しらず立つゞき、木陰を鹿のむれゆくさま、こと所には見えぬおもぶきなり。何とかやいひし白き花、こゝかしこにさけり。

妻戀の聲あはれなるさをしかも
　遊ぶ姿はのどけかりけり

さく花の匂ひし御代は夢なれや
　ふるき都の春の夕風

御社を拜み、神樂殿にて巫女の舞を見る。鈴打ふりて立舞ふ姿の神さびたるに、つま琴かきならし青柳うたひ

いづ。

　春日山神の少女がとる鈴の
　　ふるきにかへす舞の袖かも

若草山にのぼるに、奈良の町手にとるやうなり。

　みどりなる若草山をなつかしみ
　　うなゐと共にのぼりつるかな

二月堂三月堂に詣づ。東大寺にて、

　たけ低く心ちひさき世の人を
　　打見おろして笑ひますらむ

興福寺、

　御門べに御輿ふりけむいきほひを
　　夢としらせて飛ぶ蝴蝶かな

＊　＊　＊　＊　＊

法隆寺の塔を霞のひまにながめ、高田にてのりかふ。西にそばたてる金剛葛城は、力士の立並びたらん如く、東に横をれる三輪山は、几帳に寄そひたるあて人のさましたり。葛につきしは夕つ方なり。里川の岸づたひにゆく。車坂は九折にきりひらきたる者から、石をいと厚うしきつめたれは、河原をあゆむやうなり。あへぎ〳〵越えゆくもあり。牛車のあとに人力車をつなぎ合せてひかせ行くもあり。

　大和路の春の長閑けさみ山路は
　　のれる車を牛にひかせて

下淵檜垣本をすぎ、吉野川を右に見つゝゆく。柳の渡を渡るに、水清く流静にして、底のさゞれも數へつべし。渡りはつれば六田の里なり。

　山かこにのりておりくる少女子が
　　手にとりもたる花の一枝

長峰をのぼる、いとけはし。

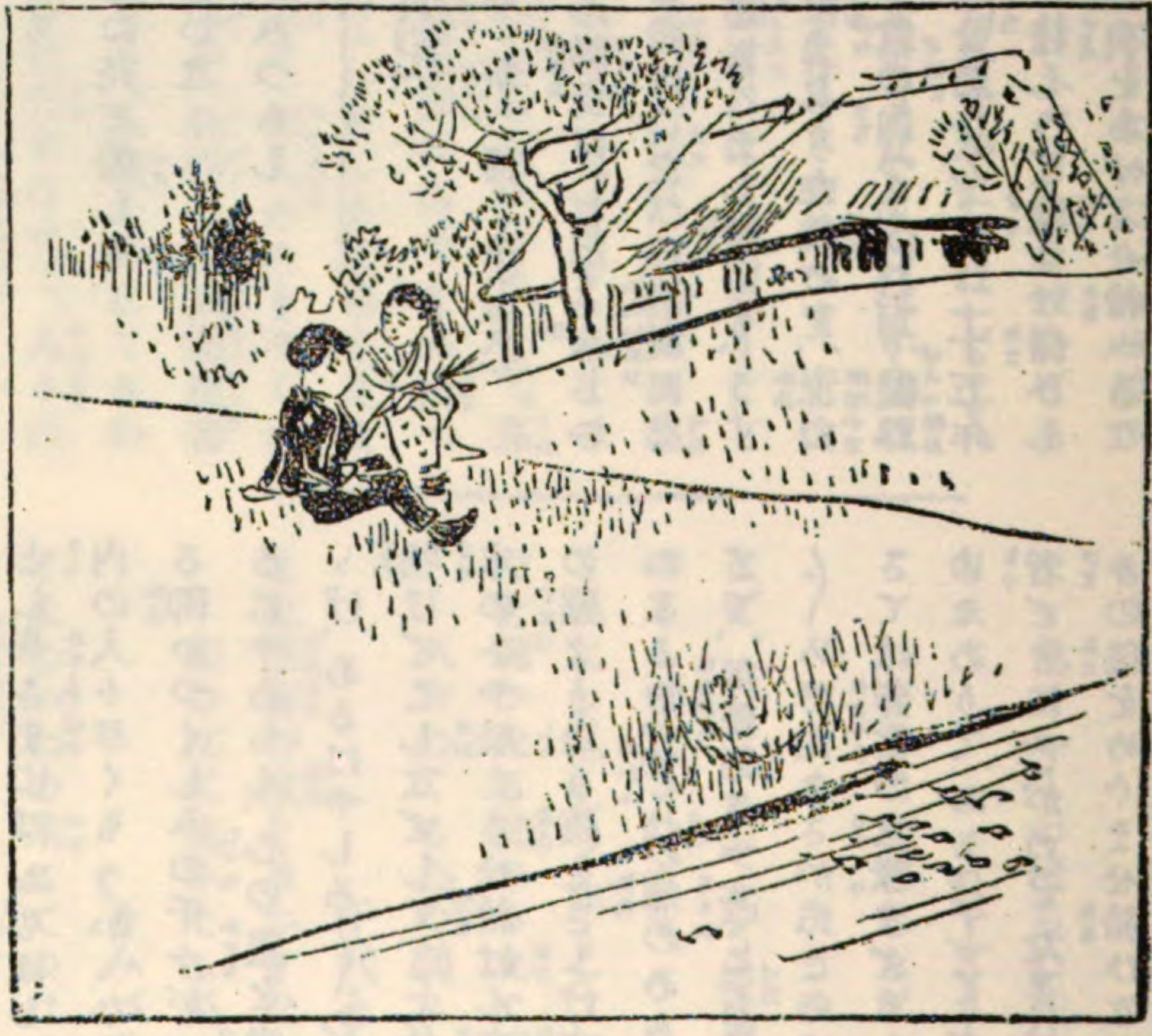
　長峰を夕こえくれば久方の
　　雲井にかすむかつらきの山

並木の花蔭にいたるに、花は今を盛なり。まづいと嬉しう、しばしたゝずむほど、やう〳〵暗うなりゆきて、花の色も見えずなりぬ。くらき坂道をたどる〳〵吉野の里につき、辰巳屋に宿りぬ。隣の室に外國人あまた宿れり。鴃舌に語りあふはかしましけれど、敷島の大和心に

さき出づる此花を見んとて山路こえ来つる心を思へば罪もゆるさるべし。湯あみをへて後、宿の提灯を借て、今こし道を下りゆくに、山風身にしみ渡り、そゞろ寒き夜のさまなり。

九折のぼりくだりて　くらき夜の
花の木かげを　たどりゆくかな

花のもとを時久しうさまよひて宿にかへりぬ。花染日記をよみつゝ眠につく。ふす程もなく目さめたり。宿の女の唯一人今しも起出て、竈の下たきつけんとするに、門の戸あけてよといへば、眠げなる眼まろくしてあやしめる面もちなり。やう〳〵あけさせて、まづ下の一目千本に至り



ぬ。あたりは未たくらけれど、花の梢の白う見えゆくさま、何にかはたとへいはむ。月は入方の空なり。

しらみゆく有明の月を　見つるかな
吉野の山の　花陰にして』

鶯の聲より外の　聲もなし
花にあけゆく　三吉野の山』

さきつゞく花の木間の　あさつき夜
わが世の春の　思ひでにせむ』

吉野山千本の花の　下かげを
獨しめたる　朝ぼらけかな』

我園の一木二木をいく春か

見つゝしのびし三吉野の山

吉野山千本八千本にほへども
たがものならぬ花ぞ嬉しき

天つ日のほがら〳〵と匂ふかな
花の匂や空にみつらし

大婚二十五年盛典記

税所篤子(故人)

久方の天のみ柱めぐりましけん神世はしらず、來しかた行末にもためしあらじと覺ゆるはこたびの御祝になんありける。古へひじりの御世ときこえし時にも、うす〳〵はいかにぞや思ゆる事も打まじりためるを、上のみ心いと正しくおほしまして、宮の內つゆばかり亂れたる事なく、きさいの宮の參らせ給ひしより二十五年一日の如く、御なからひあらまほしうて過させ給ひしを、今年三月九日といふに、其盛典をあげさせ給へるなりけり。こは銀婚式とかいひて、外國のみかどにも殊更に祝ひ給へる事とぞ聞えし。もとよりうはべのかざりを好ませ給はぬ御本上におほしませば、かうことゞとしきさまにはおもほしおきてざりつらめど、大御國內の人々早くもうかゝひ志りて、この年月からぶりたる御いつくしみの千々が一つをもむくい奉らんと思へるにやあらん、心の限を盡してさま〴〵なる物どもさゝげ、あるはやしろ〳〵の祭をなし、又はまどしき者に物ほどこしなどして、こたびの盛典をほぎ奉り、なほ行末のいや榮えさせ給はん事を祈り奉れる時しも、美濃の國より白き雉をさゝげ來たるぞいとくすしうめづらかなるや。昔この雉のあらはれし時には、太平の志るしとて、年號をさへ改められしためしもあれば、いとゞ〳〵めでたきさがにこそと、人々こぞりてほぎ奉れり。さては非常の大赦などもおこなはるべうきこえしかどゆゑありておもほしとゞまらせ給ひ、たゞ年老いたる者どもにこがねをたまひ、又はみ國の爲いさをある人々の後をめぐませ給ひなどやうの事を、あがた〳〵に仰せて殘るくまなくせさせ給ひけりとぞ。其日は巳の時より拜賀をうけさせ給ふとて、大禮服をめし勳章を

奉りて、常より殊にけだかうも尊くもみえさせたまへり。宮は白き御服の御裾ながきに、志ろかねもて花鳥をすらせたるをめし、玉のかうぶりをいたゞかせ給へる、かやうの式などおこなはせ給ふべき御よはひとも見えさせ給はず、いと〱若う匂ひやかにおはします。拜賀の人々いと多くて、未のとき近うなりぬれば、御祝のおものも奉りあへず、一つ御車にめさせ給ひて、青山なる觀兵式にのぞませ給へり。御道のほども、とり〱に心を盡して、松の上に朝日を出し、又はいはほに龜のゐるかた、色々の花をつみたる車など、めづらかなる物ども作り出でゝ、祝ひ奉れる心をあらはしきこゆ。暮過ぐる頃より御そ奉りかへて、豐明殿にいでさせ給へり。限なきともし火の光にはえていとゞまばゆく見えさせ給ふ。みこ達おとゞたちを始め、司人のこりなくめし出たるは、やゝ千人に近しと聞ゆ。舞樂は萬歲樂延喜樂など、めでたきかぎりを奏したり。み垣の外にてもかず〱の花火をあげて祝ひ奉るに打あはせて、人々の萬歲をとなふる聲いと賑はゝし。誠や御歌所よりは鶯花契萬春と云へる題にて、人々に歌を奉らしめたるは、何よりも大御心にかなはせ給ふらんと思ゆ。そが中にも。

色もかもかはらぬ花に萬代の
かぎりなき春をちぎりて鶯は
みそのゝ花のかげになくなり

など、ことにめでたう覺ゆ。この御祝ひにつきて、人々のさゝげたる物ども、うるはしき御調度はさらなり、たくみにをかしう作りなしたるも多かる中に、舞鶴のかたを縫ひたる御つい立に、

久方のくもゐの鶴もこゑたかく
千代をことほぐ今日ぞ樂しき

また住吉の濱をゑかきたる御几帳のひもに、

住の江に生ひそふ松の枝ごとに
きみが千年のかずぞこもれる

と志ろかねの糸もてぬはせたる、なつかしうみやびたり。御祝日すぎにし後も、なほこゝかしこより奉れるも

の丶かぎりなきにつけても、大御代(おほみよ)の榮(さか)えたまへる、民(たみ)草(くさ)なびきまつれるほど、はかり志られて いと〳〵めでたうなむ。

春の歌の中

小幡八重子

そゝろにも昔のかけの見ゆるかな
　さしふるささの門のあをやき

うくひすもゆめの枕やもたくらむ
　かすみをもろゝ有あけのつき

野のれのあろしをさへは梅のはな
　にほふかきれに春かせそふく

うらやまし姉よ妹さかたらひて
　をかへのわらひをりはやす聲

うらまちの垣根の梅はちりはてゝ
　ちり塚のうへに花そたまれる

またきより飴かろおぢは出ゆきぬ
　大家ののきのはなを見あけて

折にふれて

松平岳子

くれ竹をかきれにゆひし孃か屋の
　あるしゆがしきうくひすの聲

人志れす嬉しかりしもうかりしも
　おてひうかへる月の夜半かな

君をいはひ父母いはひさゝせを
　かされし身をも祝ふけふかな

南天のあかき實あさるひえどりの
　こゑもみにしむ窓のそとかな

折にふれて

池田愛子

いつこさもさしてゆくへき方はあらす
　一人ふみゆくおほろよのつき

若水にすみすりながしまつかきぬ
　きみにさゝくろほきこさの文

ひさたひの怒にまかせさきし文も
　いまはなつかしなき人の形見

なき人の好めるはなよこれをたに
　せめてたむけむ一えたのうめ

學藝

櫻と柳

女子高等師範學校教諭　藤堂忠次郎

雪の衣も霜の褥も、今日此頃の好時節となつては、段々と脱ぎ去られて、今まで蹐縮まつて居つた山は、のんどりとした顔を出し、凍えて居つた水は暖かそうな姿を現はし始めて、何となく心地の好い春景色となつた。見渡せば山の邊にポーッとして淡化粧したのがうら耻かしいそうな色を燃して居るは、いはずも知れた櫻花であらふ。

水の涯には、萠黄の黄勝で一層引き立つたのが、烟のようにもや〳〵と靉靆いて見えるは柳の出花であらふ。此頃の此の景色、誰れが一室の中に氣を腐らして居らふか、况して自然を友とし樂める人は、如何で手に摘みて吟味しないでは措かうか。いでこれから兄弟や子供を連れて野山に出かけよう。彼處に山櫻、此處に糸櫻、或は普賢櫻、或は彼岸櫻など、銘々が妍しさを鬪はして居る。されど櫻花の爛熳たるところには、柳の糸を共に見ることが殆ど無い。現に

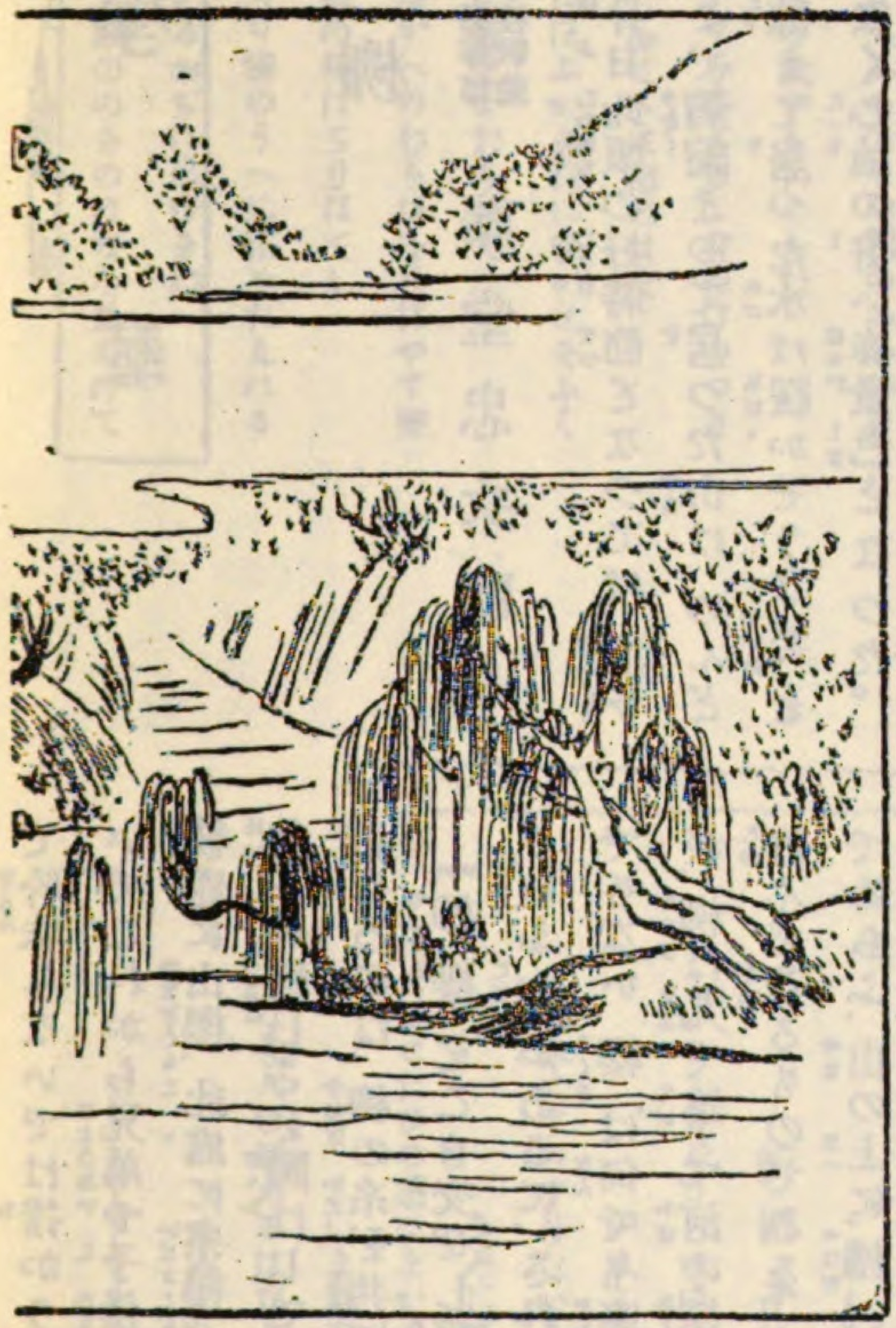
『柳櫻をこき交ぜし都ぞ春の錦なる』

といふ詞があるに、さればとて奇妙ではないか。奇妙でもない、櫻は何でも高みの燥きの好い地に盛であるが、柳は丸で違ふ、河の岸、池の邊などの濕つぽい所に好んで茂るものである。チヨツト思ひ出しても分かるであらふ、山の上に柳の垂枝が風にナヨ〳〵として居つたことがあるか、恐らくはそんなことはあるまい。櫻でも元來山にあるものが本種であつて、それからそれと色々な變種が出來たのである。

『これはこれはとばかり花の吉野山』

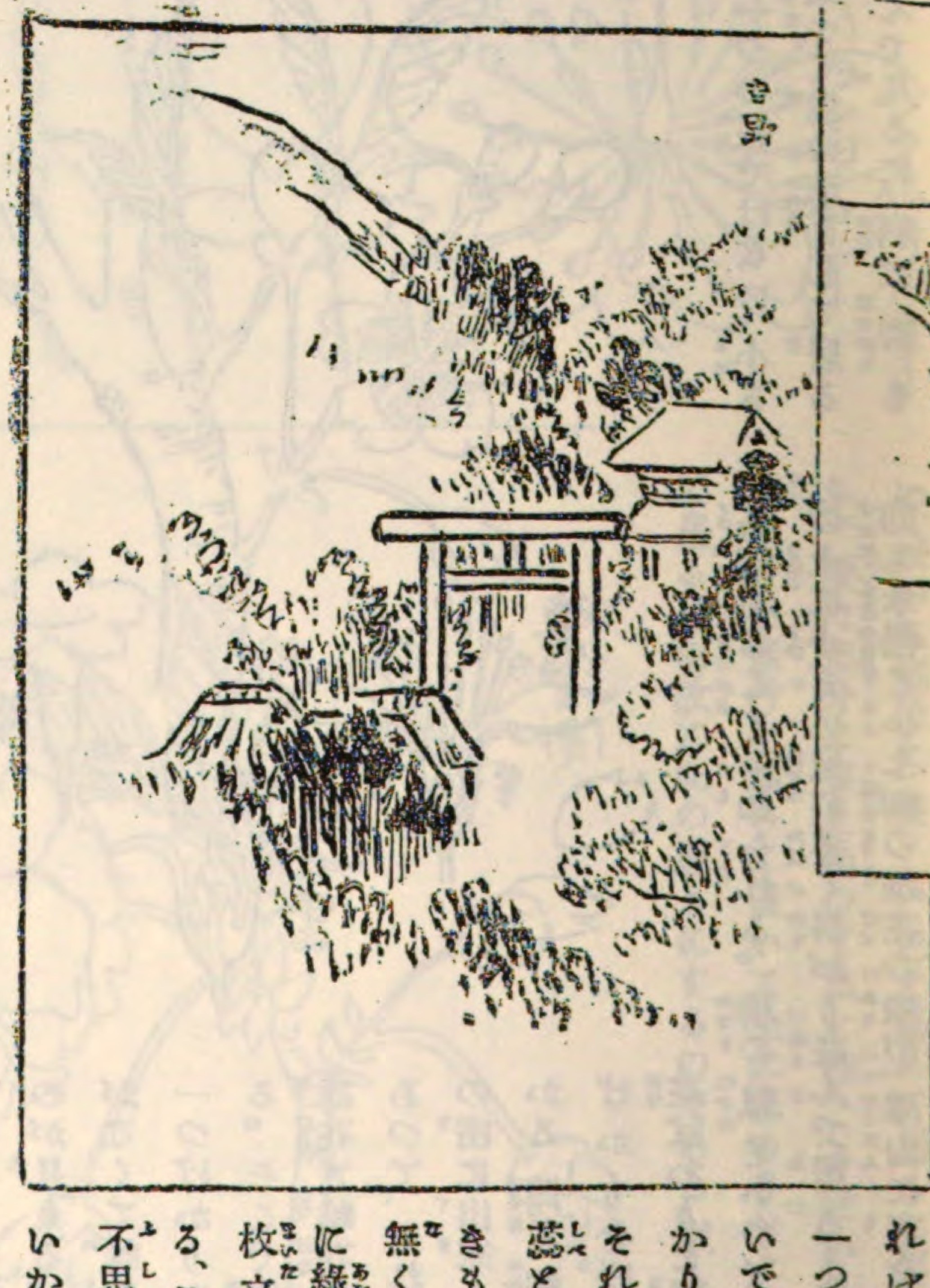
も詮ずるところ、山櫻が山に滿ちて人目を驚かしたまでに過ぎない。勿論柳の種類は悉く水際にばかり茂るとはいはない、隨分山の上にも成長するものがある

しかし尋常の種類ではないこれは又後に話さう。
そこで爰にチョイト櫻の花を一輪摘み採つて、篤と吟味して御覽。麗しい瓣が五枚あつて、皆同じ形をして同じ大きさである。その形が短い匙のようで、頭に小さい鈌刻が一つ宛入つて居る、それが他の植物の花にはチョット見當らないところで、草の中に此のよーながあるが、それをさくらさうといふほどである。何でも樹の下で一盃傾けて居るところへ、ヒラリ〳〵と此のよーな瓣が落ちて這入るなんかは亦一つの風流ではある。第一に其の色合が實に好い其の白い中にホンノリと紅色を含んで居る處が擬られない、それが枝の上に滿々として燃えんばかりにある。



貫之の歌に
『櫻よりまさる花なき花なれば　あだし草木は物ならなくに』
とあるは味ふべきことである。さりながら此のよーな瓣が忽ちに散り易いのは惜いことである。何物でも美しいと思はれて居るものは早く消え失せ易いので、どれだけ人の恨を殘すかも知れない、しかしそれが即ち花に眞價のある所かも知らぬ。
きて、其の瓣の散り易いのは、チョットばかり萼に附着いて居るからである。その萼は丁度喇叭のよーな形をして、その緣が五つに裂けて居る、それは瓣が全く五に離れて居るのとは違つて居る。その五に裂けて居る內側に瓣が附

着いて、更に多くの雄蕊が立つて居る。雄蕊の數は二十本二十五本三十本四十本などあつて、何れも瓣の數の倍數である。數が多いからといつて、そーは無暗なものではない、一〻規則立つて居る。それには理由がある、試に八重、千重の花を採て御覽、雄蕊の中には、ま〻風變りのものがあつて、その細い絲のところが扁い瓣のよーになつて居る、隨分まるで瓣の形をなして居るものがある。これで以て大抵、雄蕊の成立が分かるであらふ、即ち雄蕊は本瓣から段〻と變化して出來たものといふことが分かるであらふ。それだから、雄蕊の數が瓣の倍數になるのである。普賢像といふ櫻花を見



れは、雄蕊は一つも見えないで皆瓣ばかりである。それのみか雌蕊ともあるべきものまでも無くて、代りに綠葉が三五枚立つて居る、これは又不思議ではないか。抑〻花といふものは何種でも、すべて葉の集りから成り立つたもので、それには蕚が一番よく葉に遠ざかつては居らぬ、即ち色が葉のよーで形も少し扁い。次に瓣が蕚よりは一段變つて居る、それから雄蕊が瓣よりも變つて、更に雌蕊

が變つて居る。雄蕊の尖の嚢は之れを葯といつて、葉片から出來、その絲の部は葉柄から出來たのである。雌蕊の花柱は葉の尖が變り、子房は葉片が包むよーになつて、丁度雄蕊の葯が嚢になつたよーである。普賢像では其の雌蕊がズット前の葉に立ち歸つて居るのである。

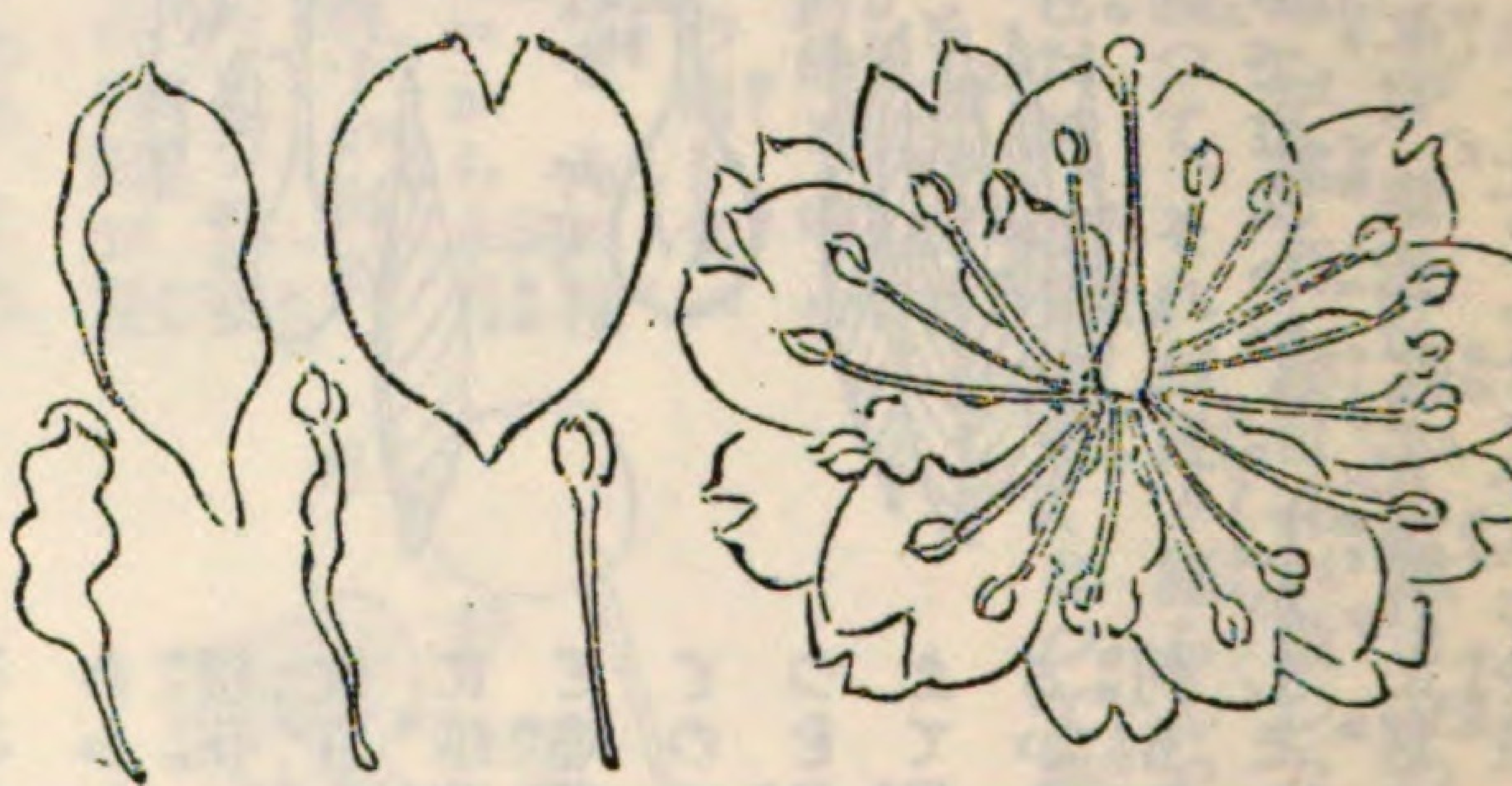
段々と櫻花のことばかりを話して居つたが、柳はどーであるか一ついはふが、しかし其花は櫻のよーではない、花としては實に變な形をして居る。

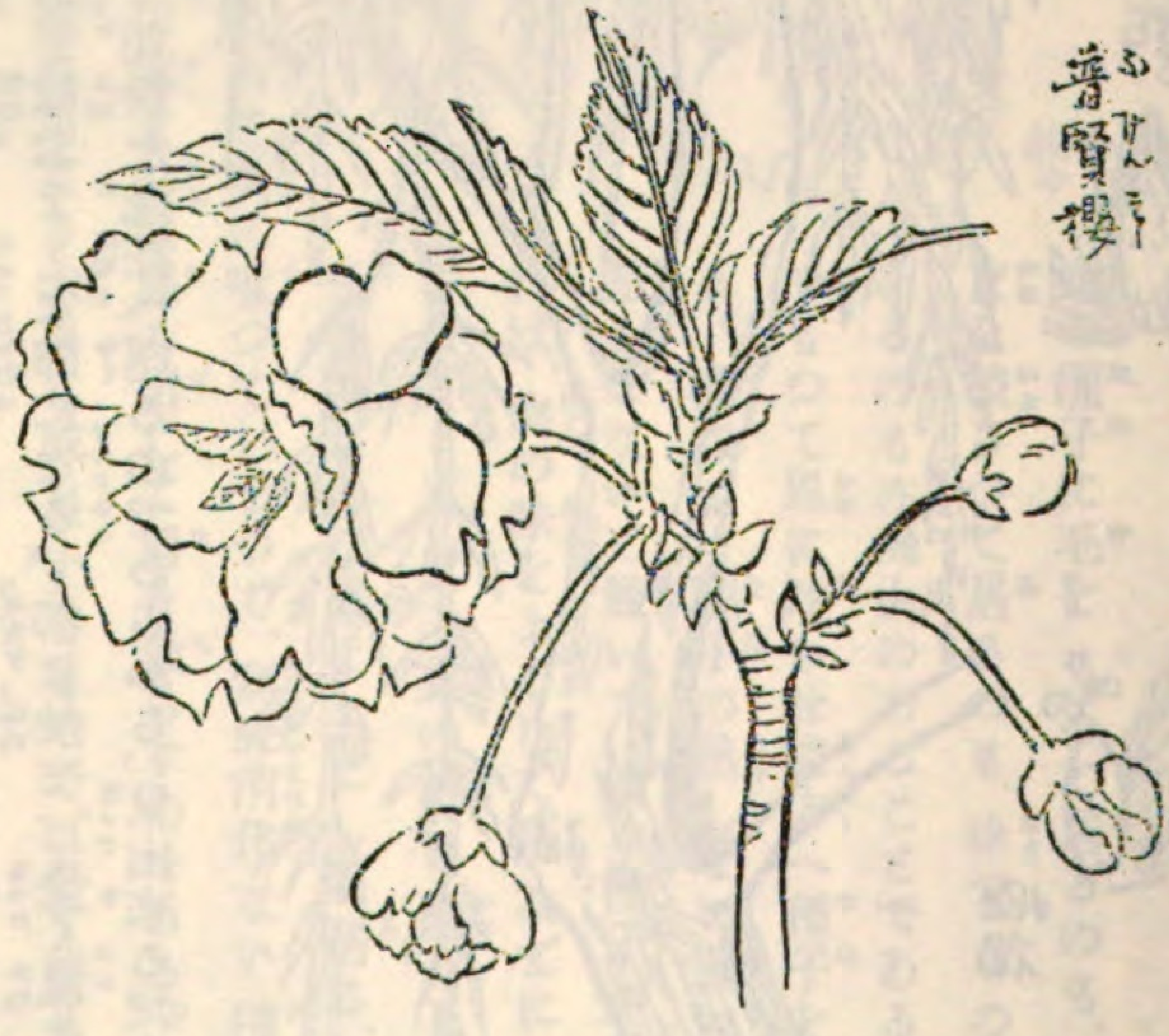
先づしだれやなぎの花を見るに若葉の腋から黄勝の緑い花が垂れて居る、これは一つの花ではない、小さい花が幾何となく一本の柄に集つて穗の形をして居るので、今其の小さい花一つを摘んで見るに、別に瓣もなければ萼もない、只一枚の殼のよーなものがあるばかりで、それに柔かな短い毛が生へて居る、その内側に二本の雄蕊が立つて、外には雌蕊も見ない、どの枝のを探つても皆其の通りである。若しも他の株から採るならば、少々趣の變つたのが見える、即ち雄蕊がなくて雌蕊のみが只一つばかりあるのがある。そこで柳の花には雄花と雌花との區別があつて、それが別の株の樹に出來ることが分かる、即ち柳には雄花ばかりを咲く樹と、雌花ばかりを咲く樹との區別あることが知られる。柳の鼠といつて、成る程枝の上に小さい鼠が多く群がり並んで居るよーなのは、即ち水楊といふ柳の雄花の殼が、澤山に毛をもつて、そ



れが集まつて穗をなして居るからである。柳の花が、そのよーに鼠のよーになつて居るのは幾分か人に賞愛せられるが、大體に於て櫻花の傍へも寄り付かれない花としては殆ど觀がない。

此よーに花に美しい花と美しくないとの相違があるは獨り櫻のみが幸福で、柳が不幸のよーに思はれるが、實は櫻も柳も皆自分では滿足して居る。花に此のよーな相違のあるのは、其れぞれ目的のあることで、櫻は蜂、蝶、金龜子などの虫類の意を迎へて、一向それに注意されよーといふことを考へて居る。ところが柳は虫類のよーな動物を相手にしないで、風を待ち受けて居るのである。風には眼はない、だから別段に美しい色を染めて居る必要もなからふ。櫻は充分に姿を飾つて虫を迎へるばかりか、萼の底に甘い蜜汁を溜めて置いて虫に舐めさせよーと務めて居る。何故に此の通りにするのであるか、それは自





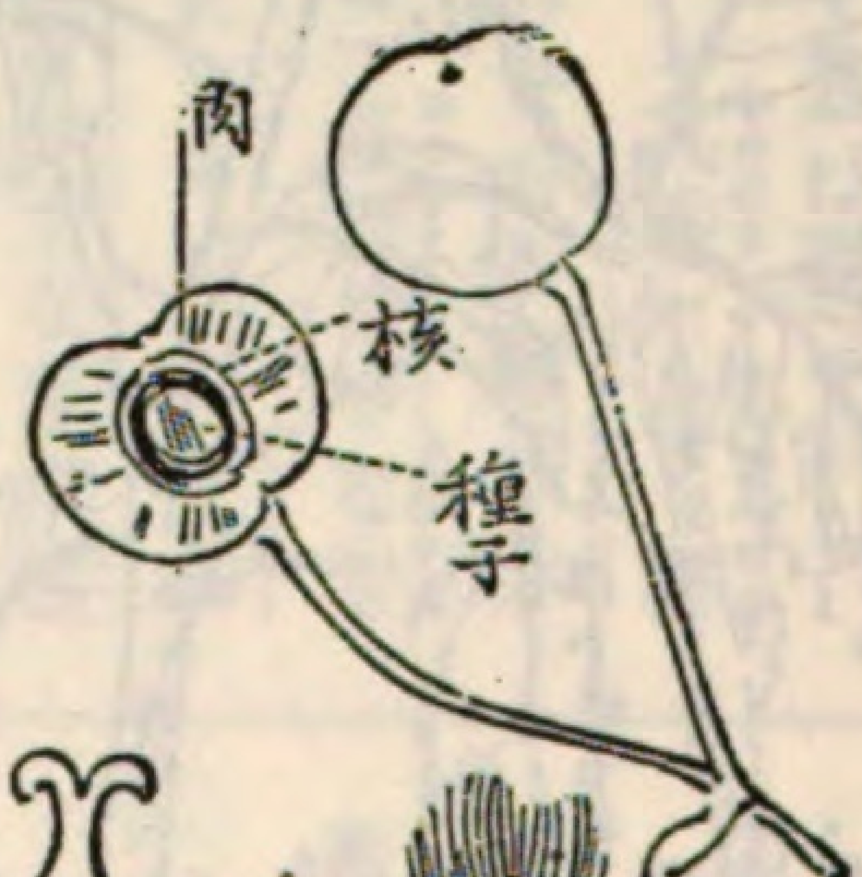
分の雄蕊の葯に出來る花粉といつて、黄色である粉を他の櫻花の雌蕊へ止まらせよーとするためである。そこで疑問が起こるであらふ櫻花には自分に雄蕊と雌蕊その二つを具えて居るから何もこのよーにするには及ばないではないかと。しかしそこが、一花の雄蕊の熟する頃には、雌蕊はまだ遲れて居るから仕方がない。そこで虫を止まらせて、其の身體へ



花粉を着けさせれば、それが他の花に止まつて自然とこれを輸ぶよーな譯になる。柳に於ては全く風に散らせて花粉を雌花へ送るのであるから、只出來るだけ、多くの花を咲かせて、どれかに送られるよーにするのである、だから穂を成して精々多く花を集めて居る。一口にいへば、櫻の雄と雌との間は虫が媒をするが、柳



では風が媒をするのである。
花を比べは以上の通りであるが、その花から成り立つ果を比べるに大變、亦趣が違ふ。櫻は花が散つた後で、雌蕊の子房ばかりが殘つて、それが段々膨らんで肉となつて來る、始は緑い色だが、次第に紅くなつて終には紫色となる。そーなると之れが食べられる、甘い中に酸味と苦味との少が含んで居る。それからその肉を食べて終へば、中から種子が現れる、その種子を壞さうとしても皮が堅いから小刀で切つて見ると、中から又種子が出る、これが眞の種子で、その上にあつた皮は、種子の皮ではなくて、肉の内面が堅くなつて種子を包んだのである、これを核といふ。梅でも桃でも皆此の通りである。柳は雄花が用を濟ませば、其の穗が皆落ちて終ふ、雌花は後に殘つて、子房は別に肉にもならない、熟してもカラ〳〵に乾いて居る皮である、それが終には上から二つに引き裂て、中から白い綿のよーな毛を露す、全く皮が裂け開けば種子が溢れて落ちる、そこで其の毛が種子に生へて居ることが分かる。水楊では其の毛が甚だ多くて白く能く目に立つ。柳の絮といつて、眞正の綿の代用をする。





此の種子に毛をもつて居るのも、核の皮を被さつて居るのも、味つきの肉のあるのも亦理由のあることとである。毛でもつて風に散らせ遠方へ種子を擴げる。櫻などは種子の熟しない間は肉も熟させないで置いて、段々種子が熟すれば、肉の味をよくして鳥などに食べさせよーとして、其の核を堅くして種子を壞されないよーにして居る、鳥はこれを肉と共に喰つてしまつて、到底消化ない種子を諸所で糞と共に屁り出して播き散らすのである。
櫻の樹は可なり大きく成長するもので、五十年も經てば、幹の圍が三尺程、高さが三丈五尺にもなる、老木に

なると圍が八尺に高さが六丈餘にも達する。其の種類には色々ある山櫻一名吉野櫻又一重櫻ともいふ花は新葉と共に生ず。又桐谷といふものがある、一名八重一重と〻車返ともいつて、八重と一重とが雜つて咲き出し香が芳しい。江戸櫻といふものは八重のみで、その中にぼたんざくら有明櫻、普賢像、楊貴妃など實に多くある。それから彼岸櫻、糸櫻、即したれ櫻がある。隨分物好きに櫻の種類を調べた人もあるが、殆ど百種ほどあるといふことである。

櫻の葉には、どれにも、その本に一對の疣のよーなものがある、それは甘い香のある液を出すもので、蟻に舐めさせるものである。何故にかといふに、毛虫が其の葉を喰ひに來る所を蟻で以て妨させるものである、その代り蟻に好なものを舐めさせるのである。葉の形は精圓で緣に鋸の齒をもつて、香が好いから餅を包む、世にさくら餅といふのは即ちこれである。花も亦之れを鹽漬として、湯に浸して飲めば頗る風味いよろしいものである。材は其の木理が緻密であるから版木、印材、定木、盃、椀、木匙、盤臺など樣々の細工物に宜しい。其の皮は薄くて強靭くあるから曲物の縫合や又封筒などに用ふ。



柳に〻種類がある、通常楊柳と書くが、楊はかはやなぎに、柳はしだれやなぎに用ふる。しだれやなぎは古歌に色々の名を表して、はるすゝきかせなぐさかはぐひぐさなど妙な名が用ひてある。之れに宮柳と垂柳とあつて、宮柳は一にめやなぎとか、ほそばやなぎとかいつて、優しい名があるだけに、總體に小造である。垂柳は葉の濶さ一寸餘長さ七八寸もあつて大木になれば其の枝の垂れる者が彼是二三丈もある。

水楊は又ゑのころやなぎころころやなぎさるやなぎねこやなぎふでやなぎかはねこなど種々の名がある。水邊に最も多く生じて高さ二三尺から一丈までで、葉は丁度桃の葉のよーである。此の種子の絮は甚だ多くてそれを採つて硯の下へ敷いて置けば、冬になつて硯水の凍ることは無いといふことである。

白楊といふ柳がある、これは山に生じて葉は潤いから、チヨツト柳のよーには見えない。しかし其花は全く柳である。材は桐のように白くて質が緻かであるから、赤箱筥類を造る、これによつて此の柳を一名はこやなぎともはこやはこやそともいふ、又地方によりてはまるばやなぎをかやなぎいぬぎりいぬやなぎいやなぎなどといふ。何れも樹の高さ二三丈に達す。此の一種にでろでろやなぎ又どろやなぎといふのがある、其の葉最も潤く大きくて、此の樹を擢挿して三年經てば高さ一丈餘に及ぶもので、其の絮は最も多いから、盛んに之れを培養して、其の絮を採つて蒲綿の代用とする。

外に杞楊といふのがある、高くはならずして、根本から多くの枝が立つて、それが甚だ細長くあるから、之れを晒して行李を編む、柳行李とは即ち之れで、但馬の豊岡では名産である。だからこりやなぎといふ。

一般に柳の材は其の用の廣いもので碁盤、俎板、茶室の天井板に用ひ、白楊の如きは歯刷、牙杖、印版などにも造る、隨分簞笥にも造るが、桐に比べて虫が付き易いから餘り上等の品ではない。でろやなぎの材は其の質が柔で弱いから、只燐寸の材とする位である。

櫻と柳との話は其の所在の比較、花の比較、果の比較、それから種類、効用を擧げれば澤山であらうと思ふ。

火の話

女子高等師範學校教諭　岡田光子

◎此度は何か面白いものをと思うて、しきりに考へて見ましたが、さて改まつては、之ぞといふものも出てこないので、見るともなしに、傍のランプの火を見つめてゐました。その内、不圖思ひついたのは、この火といふ

ことで、之は多少面白味があるだらうと思うて、此度は之について、書くことにしました。

◎火が燃えるということは、誰でも知つてゐる事です。我々は御飯を焚くというては、直ぐ火を燃やし、暗いというては、忽ち火を點す、という工合に、朝に夕に爲てゐる事であります。かやうに珍しくはないが、もし下のやうな問を設けて、考へて見たらば、如何でありませう。たとへば、

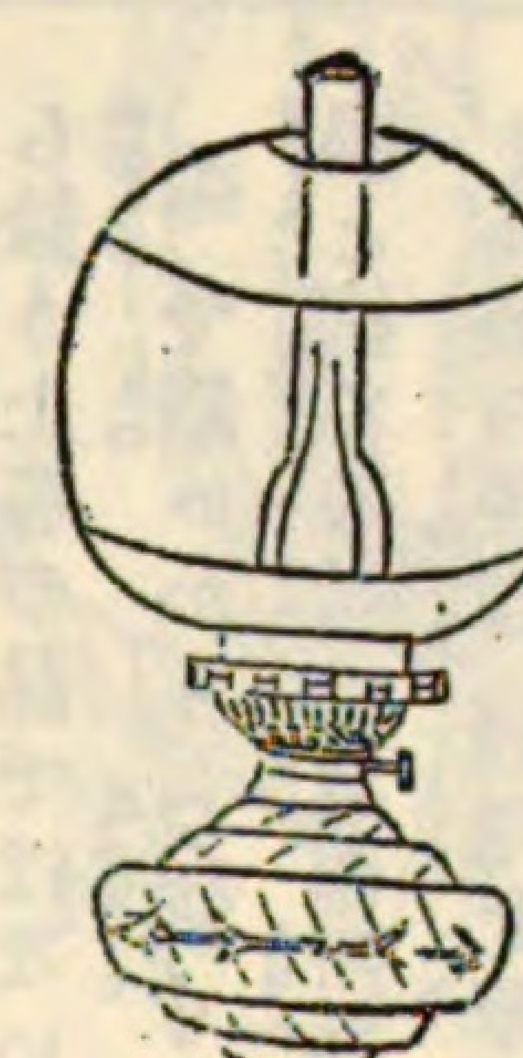
火が燃ゆるといふのは、一體如何なる現象であるか。
火が燃える時に、何故に炎が出るか。
火が燃えるのに、必要な條件は何であるか。
燃えてしまつたものは、消滅したのであるか。

というやうな事です。是等については、多少疑が起るでありませう。いざ次々、これらの事を、研究して見ませう。

◎火の觀察　皆様はランプに點火すると、如何いふ事があるか、御覽なすつた事がありますか。火を點けてホヤをかける、とホヤは暫時の間一面に曇ります。それからホヤをかけずに置くと、非常に油煙が立ちます。

あの曇は何であるか。あの油煙は何であるか、と申すと、あの曇は水である。火から水が出るとは、餘程奇妙な事のやうですか、實際火が燃える時には、必ず水蒸氣が出來ます。それが冷たいホヤに觸れて、一時水になつたのであります。

あの油煙は、石油の中にある炭素といふもので、それが燃えずにそのまゝ出ると、あのやうな黒煙になつて、上るのであります。



右によつて見ると、ランプの火が燃えて出來るものは、水と油煙とでありますが、果してそれだけであらうか。否々、さうではない。今一つ、炭酸といふものが出來ます。之は目に見えない氣體であるから、油煙や水のやうには、分りませんが、試驗をして見れば、それが出來

るといふ事はぢきに分ります。その試驗は後にして、炭酸とは如何なものかを話しませう。それは炭素と酸素と結び付いて、出來るものであります。その炭素は、前に申して通り、石油から出ますが、酸素は、何處から來るでせう。試みは、ランプの口金の孔のあいてゐる處と、ホヤの上とを塞いで、空氣の通はないやうにして御覽なさい。火は忽ち暗くなつて、暫くすると消えてしまひます。これ火が燃えるに、空氣が入用だといふ事ではありませんか。處が空氣は、酸炭と窒素との混合物で、酸素は物の燃えるのを助ける性のある事は、前號で、述べた如くであるから、火が燃えるには、空氣そのものでなくて、その中の酸素が、必要なのであります。即ち炭酸を作るために、炭素と結び付く酸素は、空氣から來るのであります。

この酸素と炭素と結び付いて、炭酸を作る時の有様が、通例いふ火の燃えるといふ事なので、酸素がなければ、石油ばかりあつても、火は決してできません。先に申した水とても、やはり空氣中の酸素と、石油の中の水素といふものと、結び付いて、出來るものだから、空氣は徹頭徹尾火の燃えるに、必要なものだと、いはねばなりません。

◎燃燒の成績物　石油が燃えた結果、水が出來、炭酸が出來、又煙が出たといふ事は、以上述べた如くでありますが、石油には限らない。薪が燃えても、蠟燭がともつても、出來るものは何れも同じく、水、炭酸、煙、及び灰であります。（炭火が起こる時は、炭酸と灰は出來ますが、水は出來ません。）磨いた鍋釜を、火にかけると、尻に水がたまり、又、蠟燭の火に小皿をかざすと、油煙がたつなど、皆樣のよく知つて居らるゝ事でありませう。

さて、果して炭酸が出來るか、といふ事を試すには、蠟燭でするのが便利です。蠟燭をガラスの德利の中でもすと、暫時にして消えます。そこで、蠟燭を出してしまつて、德利の中へ石灰水の上ずみを入れて、振ると、白い濁が出來ます。この濁は炭酸と、石灰と結び付いてできる、炭酸カルシュムといふものなので、蠟燭を燃さない德利の中へ、石灰水を入れても、決してそんなもの

は、出來ません。之で、火が燃えると、炭酸が出來る事が分りませう。

◎炎　薪や蠟燭が燃える場合に、必ず伴ふてゐるものは、炎の出る事であります。然らば、炎は水や炭酸が生ずる場合に、伴ふものであらうか。炭の場合には如何です。非常によく起こつた時でも、たゞ眞紅にこそなれ、炎を上げるといふ事はありません。して見ると、炎のできる原因に、他になければなりません。

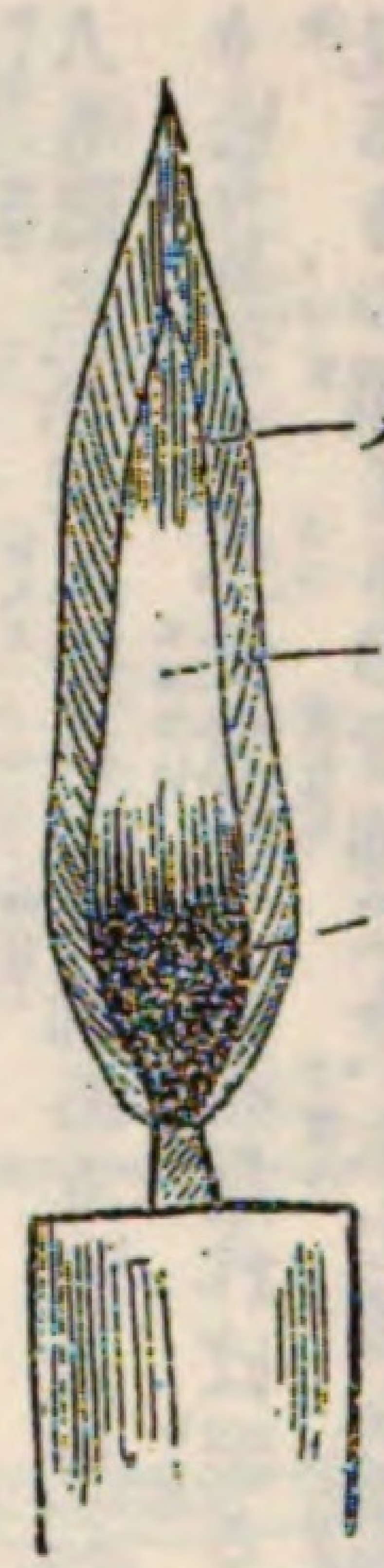
蠟燭の火を急に消すと、白い煙が心から立ち昇つて、一種の臭がします。その白煙に、點火すると、また直ぐに火がつきます。これは、今まで燃えて居たものが、氣體であるといふ證據です。氣體が燃える場合には、實に炎をあげるのであつて、ランプの火炎も、薪の火炎も、皆氣體がもえるからであります。油は液體であり、薪は固體であるけれども、燃える時分には、强熱の爲に、一部分が氣體に化せられるのであります。之に反して、炭は氣體になる事がなく、そのまゝで燃燒するから炎を上げないのです。



◎炎の光輝　次に、炎について考の浮ぶことは、その光輝あるは何故かといふ事です。炎は、必ず、光を放つものとも限りません。アルコールランプの火炎や、水素といふ瓦斯の火炎は、至て光が微弱であります。しかるに、此等の火炎の中に、炭の粉を散布したり、白金といふ金屬の細い線を入れたりすると、其光明の度が頓に增します。之でもつて、炎が光を放つには、その中に固體の存在するといふ事が、必要である事は疑ひありますまい。それならば、ランプや、蠟燭の火炎には、どんな、固體がありますか。あの中には、前に申した炭素といふ固體が、一杯浮游してゐるので、それが熾灼せられて、光輝を放つのであります。

◎火の燃ゆる順序　を始からいふて、見ませう。今迄申した事が、一層、明瞭になりますから。ランプで申し

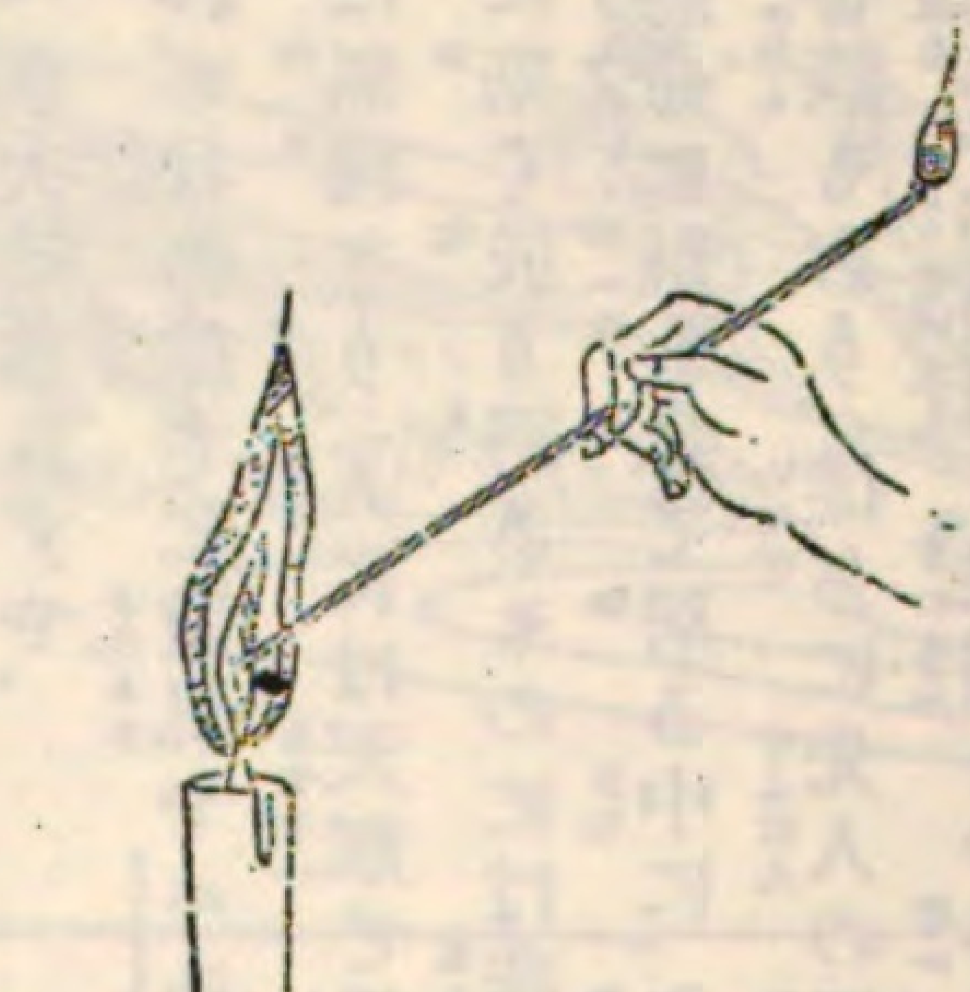
て見れば、まづ心に點火します。一躰ランプの心は、油を下から吸ひ上げる作用を、するものですから、油は吸はれて、心の上部まで來て居ります。それが、點火せられた爲に、强熱をうけて、氣躰に化せられます。之が炎の丁度中央になるので、こゝではまだ火が燃えずたゞ、燃ゆべきものが、集まつてゐるだけですから、光がなくて、暗くあります（圖のイ）。こゝを未燃部と申します。



こんど氣躰が、未燃部から出て、（ロ）の部へゆきますと、そこで空氣と出合うて、燃え始めます。しかし、未だ水を作り、炭酸を作るには、空氣が十分でないために、水素だけが、まづ酸素と結びついて、水を作り、炭素は後に殘つて、熾灼せられます。それ故。こゝが一番光に富んでゐるのです。この部分を、内焔と申します。それから、氣躰が（ハ）の部へ行きますと、こゝは酸素が十分ありますから、炭素も悉く炭酸となつてしまひます。ですから、こゝは光は薄う御座いますが、そのかはり熱度は一番高くあります。この部分を、外焔と申します。

これらの働は、油と空氣の供給のあるかぎりは、右の順序で、たえず續いて起こるのであります。

◎炎の搆造についての試驗　炎が、中央に未燃部があり、其の外によく燃ゆる部分があるといふ事は、次の試驗で分ります。



白い紙で、一二秒時間ほど蠟燭の火炎の上を壓しつけるやうにして、それから紙を去つて見ると、紙は環を畫いて、黒くなつてゐます。環の中央部は多少汚れはするが、周圍ほど黒くはありません。又炎の中心に、ガラスの小管を挿し入れて、氣躰を導くと、氣躰は管の上端に上りますから、こゝで點火すれば燃え

ます。（未完）

修學旅行の心得

文學士　喜田貞吉

修學旅行と云へばとて、あながち學校に居る時に教師に連れられて、其所らあたりを經めぐり、見るもの聞くものに就て其說明を聞く許りを云ふにはあらず、昔の人も已に、「三人寄れば我師あり」とも、「社會は學校なり」とも云へり、注意してさへ居れば至る所學校あり、見るもの聞くもの皆師なり、本を讀み講釋を聞き、諸藝のお稽古するのみを、學問なり修業なりと思ふべからす、むかし小野道風は、庭園の柳の枝に蛙が飛び付くを見て、何度過つも倦まず弛まず勉强さへすれば、遂に成功すきべの道理を實地に曉り、はては彼の如き偉人ともなり、又ニユートンは、果園の林檎が常に地上に落つるを見て、地上には必ず物を引き着けるの力ある次第を考へ、遂には引力といふ一大原則を發見したとも傳へられたり、庭園と果園とは我か家の邊りにもあり、蛙の跳ると林檎の落つるとは、我も人も常に見る所なれども、我等に道風の決心も起らねば、ニユートンの發見も出來ぬは、道風とニユートンとの如き、注意の無きが爲なり、此注意なきが故に、眼の前に學校もあり、教師もあれども、之から何も學ぶ事を得ざるは、極めて惜しむべき次第ならずや、

されど我等總てに道風やニユートンの如くなれと責むるは無理なり、人には天賦と云ふ事もあれば、何人も容易に斯く成り得るものには非ず、道風ならんとして一生懸命に蛙を見て居る中に、泉水へ落つこちたと云ふ滑稽談もあり、徒らに先人の眞似を成すは愚なり、されば我等は、庭園と果園との外に學校を求め、蛙と林檎との外に教師を得て、何人にも出來る程度の有益なる學問修業の方法を講せんとす、

そは即ち我がこゝに云はんとする修學旅行なり、こゝに云はんとする修學旅行は、勿論學校に於ける修學旅行にはあらず、學校のには教師の之を指導するにあれ

ば、こゝに彼れ此れ説明するの必要もなし、我等は、學校ならぬ學校にありて、敎師ならぬ敎師に從ひ、平生に修學旅行をなして、以て其益を得んとはするなり、

旅行の利益に就ては、今こゝに詳しく之を説明する迄の事も無かるべし、たゞ其大要を言はゞ、種々雜多の事物に出遇ひ、新らしき見聞を得て知識を廣め、書物で讀んだ事の實地に現はるるによりて、百聞一見に如かぬ道無を目のあたり曉る事之れ一なり、自宅にのみ籠りて一向他所の事を知らぬものは之を井の中の蛙に譬ふ井の中の蛙は世間へ出して一向に間に合はぬものなり、次に筋肉の運動をよくし、新鮮なる空氣を吸ひ、精神を爽快にし、身躰を健康にする之れ其二なり、世の中に幽鬱にして病身なる程不幸なるものは無かるべし、旅行が此不幸を救ひ、彼の利益を與ふるものなるを知らば、此上數限りもなき直接間接の利益を並べ立つるの要もなし、



されぱとて婦女子に向つて、當世の學生の如く、又は昔時の閑人の如く、山河を跋渉し、景勝に朝吟せよと

勸るにはあらず、どうで婦女子は内を治るもの、深窓に生れ深窓に長じ、遂に深窓に老ゆるといふ昔風は當世流行らねども、男女自ら別あり、到底男子の如く旅行の機會は多からず、されば常によく注意して外出の機會を利用し、見る事聞く事を忽にせず、豫て書物で見た所談話で聞いた所、よく之を實地に合して考へなば、たとへ近所に用足しに出づるにも、之れ直に修學旅行なり、滊車にて近縣へ出づる場合にてもあらば最もよし、神社佛閣の參詣、名所舊蹟の遊覽さては、避暑の爲め海水浴、避寒の爲め温泉行きなどの機會を得ば、之れ極めて妙なり、此等は盡く利用して、以て修學旅行となすべきなり、

如何に之を利用すべきか、言ふ迄もなくよく之を注意するにあり、旅行の面白味と利益とは、一に注意の如何によりて起る、旅行を面白からずと言ふ人、旅行によりて利益を取り得ぬ人、別して滊車の長途に甚しく退屈する人の如きは、此注意惡しきが爲めなり、

されば如何に之を注意すべきか、

試に東京の人が、神田柳原町より隅田川邊に出で、兩國橋を渡りて回向院まで用足しに出づる事ありと假定せんに、其道筋に於て古着屋の多きをのみ見、砂埃の多きに惱みてのみ過ぎんには、さしたる面白味も利益も無かるべけれど、注意の仕方によりては、たゞ此道筋を素通りしたのみにても少からぬ學問を成し得べし、

先づ之を歷史的沿革の方面より觀察せんに、今は商家軒を連ねて極めて雜沓なるに、而も之を柳原町といふは如何にと注意すれば、こゝが以前には柳原であつた事を知るを得べし、此に於て歸宅の後、東京市街圖を擴げて見れば、淺草は並木町といふもあり、本郷や赤坂には田町といふがあるをも知る、かゝれば今は繁華な市街も、以前には並木や柳原があつたり、田地なども存在した事が明になりて、東京の昔の有様がおのづと眼の前に現はれ、太田道灌がこゝに城を築いて居た頃に、其住居の樣を詠じて、

我宿は松原つゝき海近く、
軒端に富士の高嶺をぞ見る

とある事なども思ひ出だされて、言ひ知らず愉快をも感ずべく、得易からぬ知識をも得らるゝなり、

之より隅田川に至れば、之は嘗て伊勢物語の講義で聞いた事のある川なれば、歸つて其書を繙くに、

なほ行き〳〵て武藏の國と下總の國との中にいと大なる川あり、それを隅田川といふ、其河の邊に群れ居て思ひやれば、限なく遠くも來にけるかなと詫びあへるに、渡守、はや船に乘れ日も暮れなんと云ふに、乘りて渡らんとするに人皆物わびしく、京に思ふ人なきにしもあらず、さる折しも白き鳥の嘴と足と赤き、鴫の大さなる、水の上に遊びつゝ魚を食ふ、京には見えぬ鳥なれば、皆人見知らず、渡守に問ひければ、これなん都鳥と云ふを聞きて、

名にし負はゞいざ言問はん都鳥
　我が思ふ人はありやなしやと

詠めりければ、船こぞりて泣にけり、

とあるを見る、さては業平旅行の比には、此川の東は直ちに下總國で、川には今の如く橋もなく、渡し船で僅に通行して居た事も知られ、今日此大橋を兩國橋と云ふ事は、武藏と下總との兩國を連ねたからの名である事も理解し得らるゝなり、尚これより少し許上流に上れば、所謂隅田堤に「言問團子」と云ふ名物があつて、其家の徽章に都鳥を書いてある事も、業平の歌に「いざ言問はん都鳥」とあるからの思ひ付きであると云ふ道理も知られて、殺風景な團子も爲に極めて風雅なるものと思はるゝ樣に成るべし、

尚又今日は此川東の地が一帶の武藏の中なる事を考へ見るに、東京市を離るれば、東は南葛飾郡で、其北に此葛飾郡があり、尚地圖を擴げて見れば、之より東、江戶川を夾んで下總國の部に、東葛飾郡のある事をも知る然るに豫て學んだ萬葉集の歌の中に、

葛飾の眞間の入江に打なびく、
　玉藻苅りけん手兒奈しぞ思ふ
葛飾の眞間の井見れば立ならし、
　水を汲みけん手兒奈しぞ思ふ

など云ふ歌が數多あつて、之は下總國葛飾の眞間と云

ふ所に手兒奈といふ有名な佳人があつて、多くの男子の己れを爭ふに詫び、遂に自ら眞間の入江に身を投げて死んだと云ふ、極めて憐れにも優しき噺の傳はれる葛飾の地なるべければ、此南葛飾も北葛飾も、もとは東葛飾と一つで、すべて隅田川以東一帶に下總の葛飾郡であつた事も知られ、それが利根川の流の變遷で、遂に今日の如く成つた事も知らるゝなり、

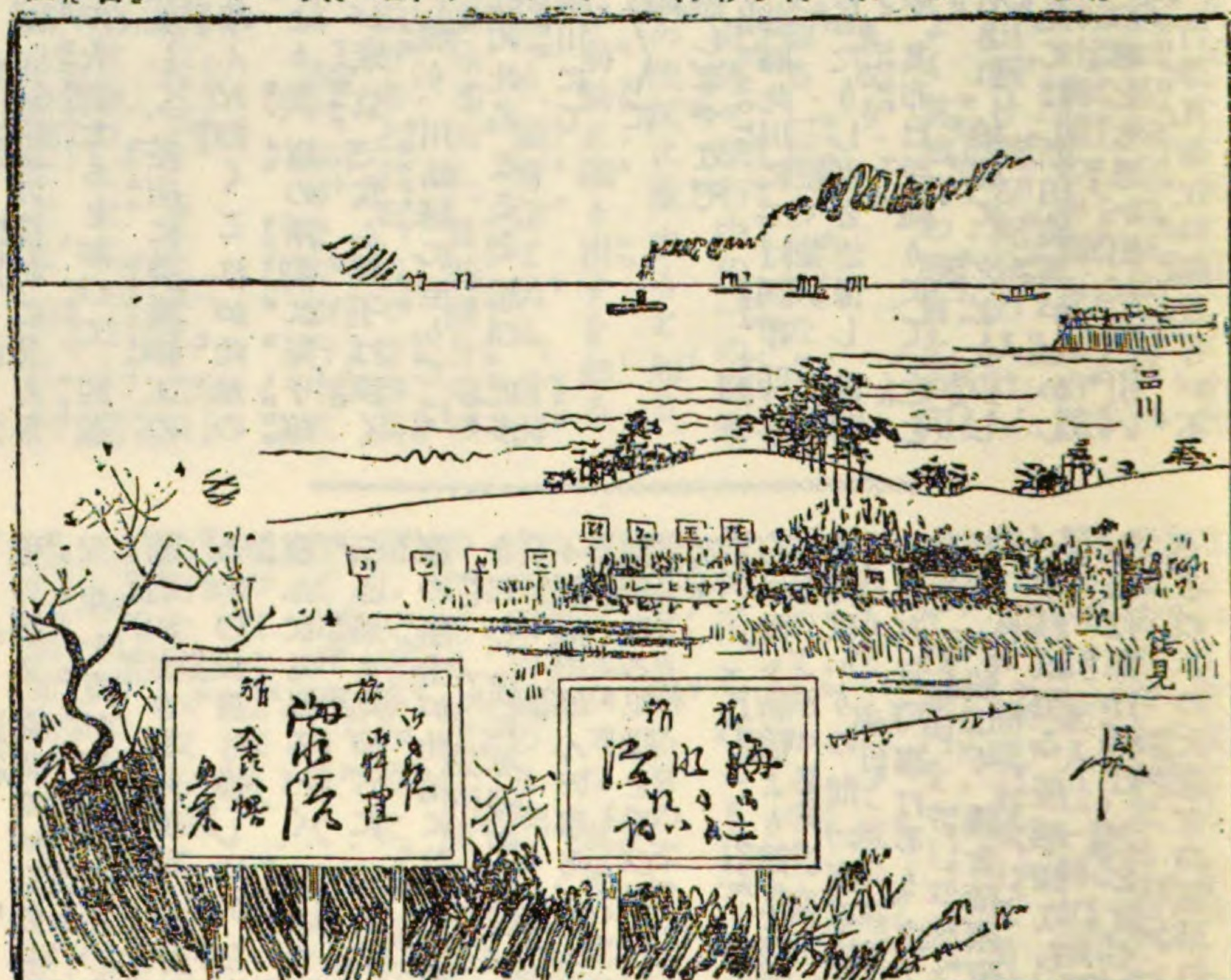
尚最後に回向院に至れば、門の正面に大きな濡佛のあるを見る、此佛は何の爲に造つたか、一躰此寺の名は何の回向の爲に建てた事を示して居るかと考ふるに、此等は明曆三年の江戸大火の時に、十萬八千人の燒死人があつて、其追善回向の爲に建立したものなる事は、一寸書物を見ても、人に聞いても知らるゝなり、依て思ふに、明曆は今より二百四十餘年の前なるに、其頃已に此東京、即ち昔の江戸は、其繁昌であつて、大火があつたら忽ち十萬八千人といふ澤山の燒死人を出すと云ふ程に、數多の人口のあつた事も知られ、又其節には消防の準備も行き屆かず、勿論ポンプもなく、家根なども凡そ板で出來て居た有樣なども想像し得らるゝなり、

右はたゞ一寸北町筋を通つたゞけに就いて、其沿革に注意したのみの事なれども、これだけにても頗る趣味ある觀察を成し得べし、されば斯の如き注意を、あらゆる點に向つて拂ひなば、たゞ柳原町より回向院に至る、一回の用足しの道筋のみにても立派なる修學旅行になるべきなり、

若し東海道鐵道を汽車にて過ぐるが如き場合あらんか若し急かぬ道にて、よき道連にてもあらば、品川驛で降りて高輪の泉岳寺に赤穗の四十七義士の墳墓を弔らふも妙、秋の頃ならば、東海寺の庭に紅葉を賞し、澤庵和尚の昔を忍ぶも亦妙ならん、斯の如き名蹟は、注意さへすれば、其道筋至る所にありて、何れの驛にも下車して面白き觀察を成すを得べし、然れども、普通の場合には斯く悠長なる眞似も出來ず、乘車驛より旅行の目的の下車驛に至る迄、たゞ靜かに列車の中に座りて、沿路の景色も何も目に入らぬが常なり、斯かる場合には、多くは汽車の進行の單調なるに倦んじ、甚しく退屈し、は

ては列車中にあるを苦勞とするに至るものなり、かゝる時、豫てよく注意して、參謀本部編製の二十萬分一の地圖位にてもよし、其沿路にわたる所の圖を携帶し居らば、之を廣げて其過ぎ行く所に照らし合せて、學校で學んだ所、本で讀んだ所、人に聞いた所などを實地に合して思ひ出しなば、たゞ雲煙過眼に見て過ぐるのみにても、よく其記憶を精確にし、言ふべからざる愉快を得て、退屈といふ事夢にも無かるべし、

先づ高輪の邊りに至り、右に泉岳寺ありと見ば、櫻田



門外に井伊掃部頭を切りて血染の雪を現出したる當時の事も思ひ出だされ、當時外國の軍艦の渡來に、國內の人心が如何に洶々たりしかを想像すべく、かくて左の海面を見ば、今は用もなき砲臺の、尙昔時のまゝに水上に浮べるありて、其比の海防の有樣を實地に曉るを得べく、又品川の邊りにて、澤山に淺草海苔を製するを見ば、淺草とは云へど實は此地の產たるを知るべく、尙又此海苔が、昔時は東京の淺草の地に產し、其ころ淺草の邊まで海であつた事も推測し得らるゝなり、

更に進んで大森の邊に行けば、八景園の梅林の樣も思はれ、池上の本門寺は日蓮宗の大刹なるを知つて、開祖日蓮上人の盛なる敎風も慕はしく、茶店に麥藁細工の並べてあるを見ては、地理で學んだ如くこれが此地の名産である事を思ひ出し、之より先、道の兩側に梨子畑の多きを見ては、成る程我等が東京で食ふ梨子は多く此地より送らるゝものなりと曉り、川崎驛に至りては、こゝが多摩川の川崎なるが故に此名なるを思ひ、此多摩川は古歌で名高い調布の玉川にて、

玉川に曝らすたつくりさら〳〵に、
むかしの人の戀しきやなぞ

と云ふ歌など思ひ出しては、昔時此川にては調布即ち「たつくり」を常に曝らして居たりし事を想像し、當時朝廷へ調として布を出した事、其布は手織りにて、之を手作と云ふた事なども思ひ合され、地圖に、之より少し上流に矢口と云ふ所あるを見ては、新田義興がむかし欺かれて殺れたる矢口の渡の事をも思い出だし、引いては當時の戰場の驅け引き、竹澤良衡江戸高重等が不義の事も、朧氣ながら知らるゝなり、

又東を見れば大師河原の平間寺も見え、穴守稲荷の參詣者の多きを見ては、東京の市民に如何に迷信の盛なるかの程度も推しはかられて、社會の狀態の一斑を窺ふにも足るべく、進んで鶴見驛に至れば、南に生麥と云ふ所も見ゆるに、維新前尙排外思想の盛なりし時、薩摩の藩士が此地に英人を斬りて意外なる國際問題を引き起し、遂に英國の軍艦が鹿兒島を砲擊した事まで、一々歷史で學んだ事も、此生麥の地を見て過ぐるだけに、精確なる記臆を呼び起こし、他所事ならずも思はるゝなり、

右はたゞ新橋より鶴見に至る迄、時間で云へば僅か三十分ばかりの間の滊車旅行なれども、注意さへすればこれだけの事はあり、之より先、神奈川、横濱、程ケ谷、戸塚、大船より、鎌倉橫須賀の脇道に至るまで、注意さへすれば至る所學校ならぬはなく、出合ふもの敎師ならぬは無ければ、之を旨く利用すれば、窓より眺めて過ぐるのみの大急ぎの滊車の旅でも、立派な修學旅行た

るべく、之より得る面白味と利益とは、家に籠つて小說などいぢくつて居る人達の、夢にも知らぬ所なるべし、

若し夫れ十分の閑暇ありて、神社佛閣の參詣、名所古蹟の遊覽、さては入湯、水浴等に出懸け得る身分の人は、最も幸福なる人なれば、殊によく其旅行の機會を利用して、有益なる觀察を遂ぐべきなり、

桑多きを見れば養蠶地なるを知る、三椏の植ゑたる所は製紙の業の盛なるを見る、此等も旅行中の一の觀察法なり、秩父絹といへば、武藏の秩父に產するを知る、伊勢崎銘仙と云へば、上野の伊勢崎に織り出すを知る、斯の如きも地理的觀察の一法なり、國府津と云ふ、昔時國府のありし地なるを見る、國分と云ふ。昔時國分寺のありし地なるを知る、國府と國分寺とある、以て昔時其國の政治の中心なりしを知る、斯の如きまた旅行中に注意すべき一の個條なり、

旅行中には名所と名物とに特に注意するを要す、名所と名物とを知らんとせば、茶店に憩ひてにてもよし、道行く人にてもよし。滊車中の乘り合客にても妨なし、なるべく質撲なる、閑暇の多かりさうなる老人に就て、此地方には如何なる名所ありて、何か名物なりやと問ふべし、老人は一體に談話好きにて、殊に其地方の名譽の爲に、閑暇を潰しても精しく說明して呉れ、時誼によりては案内をもして呉るゝものなり、斯の如き場合にありて、決して氣の毒なりとて遠慮すべからず、老人は却つて斯かる事を喜び、言はゞ双方の滿足を得るものにて、これよりして、又意外の事を聞き出し、思はぬ利益をも得るものなればなり、

名所に臨みては、其地の寫眞、繪圖など求め置くべし、名所案內樣のものあらば最もよし、名物はつまらぬものにても、邪魔に成らぬ限り、一品はまた求め置くべし而して此等の品には、旅行の日附、目的、同行者の名前など必ず認め置くべし、之れ後日の紀念には最もよきものなればなり、

旅行を終へたる後には、必ず精しく日誌に認め置くべし、其日誌には、旅中にて心付きたる事何くれとなく記るし、失策噺なども忌む事なく記るし置くべし、必しも

人に見せんとにはあらで、たゞ己が後日の思出草までにても、よし、柳原町より兩國へ行きたる程のものにても、面白き觀察あらば、必ず洩らすべからず、滊車の素通りにても、歌の三ツや四つは詠めぬ事なかるべし、まづいと思うても其詠み捨てを日誌に記入し置くなど最も妙なり。

斯の如き注意を成し、斯の如き習慣を作らば、常に蟄居の譏りを受くる我國の婦女子も、知らず〳〵地理的趣味を解するを得て、一向六かしく無く有益なる修學旅行を成し、最早井の蛙でも無ければ、色の青白い深窓の幽欝なる佳人でも無くなるに至るべしと云爾

（了）

法律談

法學士　桐生政次

法律上の婦主　一

人間としての婦人の事業は、濱の眞砂の數ふるも盡きされば、其學ぶべきところのものにも亦限はあらじ、然はあれども良妻となりて內助の實を擧げ、賢母となりて兒育の功を奏すること、其最貴き事業の一なることは、毫も疑を容れず、さて良妻としての婦人の心得は、道德に、交際に、經濟に、又裁縫に、料理に、若くは禮義、容貌に各學ぶべきところあらざるべからざるは、是亦何人も首肯するところなるべし、然はあれど此等のことに付ては、人の之を論ずるもの極めて多く、隨て就て學ぶべき書も亦極めて少なからず、余が今此に述べんとするは、法律上良妻の心得奈何にあり、蓋し先哲が人は法律によつて生れ、法律によりて住み、法律によりて死すといへりし如く、人が社會又は國家の一構成員として存在する以上は、實に法律を知らでは一日も生棲し難かるべし、特に近時立憲制の國家生活に於ては、一般法律思想は深く日常の私人生活に浸染して、婦人亦之を知るにあらざれば絕えて內助の實を擧ぐること能はざるに至れるをや、然り夫は常に外にありて家事を顧みるの遑なし、此際良妻として家を經理し、夫をして外に向つて大に其力を伸ばさしめずんば、婦人たるも

の何ぞ此社會に存在するの權利あらんや、唯夫れ良妻は家を經理せざるべからず、彼れ公法を知るの要少なしと雖も、私法の研究は、直に之を以て婦人必須の智識と爲すも、未だ遽に非なりとすることを得ざらむ、實業の範圍益々擴張せんとする今日に際して、實業家の妻たるものに於て特に然りとす、

人文の進歩につれて、婦人の公權を認むる範圍も亦隨つて大ならむと雖も、余は今婦人の公權を云々するの勇なし、唯聊か私法、而かも私法中民法の總則に散見せる妻の規定を摘出せるのみ、是一般妻たるものゝ知らざるべからざるものなればなり、其他親族關係、相續關係に於て、良妻として又賢母として、婦人の知らざるべからざるもの數多しと雖も、こは別に筆を改めて論するところあらむ。

我が民法には無能力者として法律上特に之を保護せるもの四あり、(一)未成年者(二十歳に滿たざる者)(二)禁治産者(心神喪失の常況に在る者)(三)準禁治産者(心神耗弱者、聾者、啞者、浪費者)(四)妻是なり、かくいはゞ婦人諸媛は定めて一種不快の感に打たるゝなるべし、何となれば民法上妻は、小供、瘋癲白痴、耄碌、盲啞、道樂子息等と同一に看做さるればなり、然れども妻は此等のものと法律上一の保護の下に立つ限定能力者たることを決して忘るべからず、唯其保護せらるべき源因が、一は自己の無能力によると、一は即ち他の關係に基くとにあるのみ、前三者は自己の能力に欠くるところあり、直に之をして自由に法律行爲を爲さしむるときは、自己に不利益なる結果を生ずることあらむ、此を以て法律は之に法定代理人、保佐人若くは後見を附して、一面其不完全なる能力を補ひて無能力者の爲に不利益なる結果を避くると共に、一面第三者たる世人をして誤るところなからしむ、之に反して妻を無能力者とする所以は、婦人自己の無能力に基くにあらずして、專ら夫權を保護するにあり、されば婦人と雖も未だ嫁せざる者にして成年者たる以上は、法律上獨立の男子と同一の能力を有し、隨て奈何なる行爲を爲すも盡く有効にして決して取消さるゝことなく、又決して取消す

こと能はざるなり、唯其行爲が善良なる風俗に反し公の秩序に反せざることを要するのみ、

各人は自由平等なり、老となく幼となく、男となく女となく、其享有する權利の量に於て差等あるべからず、是萬古不易の法理なり、然はあれど、社會の人盡く平等に其權利を行使するときは、平和の社會は忽ち一變して修羅の巷とならむ、欲するところを枉げざるは人の通性なり、利益を得んとして他を顧ざるは、動物に類すと雖も亦人の通性なり、若し之を制限せず、之を自由に放任せんか、其結果や想ふべきのみ、此に於てか社會に權力者あり、法律を制定して各其權利義務の範圍を守らしむ、國家といひ平和といひ、皆此權力の統一に基きて生ず、權力は之を惡しく用ふれば社會を紊亂し、良く用ふれば社會の秩序を維持す、家に於ても亦然り、原則としては夫婦同權なり、同一の權利を有す、然れども其行使に付ては即ち差等あり、否差等あらざるべからず、然らざれば一家の平和、秩序、夫れ如何して維持すべき法律に於て夫權を認むるは即ち之が爲めのみ、

夫權は家內平和の源泉なり、家內秩序の法規なり、此夫權を保護する法の規定は、亦神聖として之を嚴守せざるべからず、之れ民法は妻が行爲の自由を制限して、先づ其行爲をなすには須らく夫の許可を受けざるべからずとなす所以なり、是等の行爲はそも如何なるものぞ、

(一)元本を領收し、又は之を利用すること、例令ば夫の債權より生する利息は、之を受取り、又之を使用することを得れども、其元本たる金錢などは然すること能はず、

(二)借財又は保證をなすこと、

(三)不動產又は重要なる動產に關する權利の得喪を目的とする行爲を爲すこと、

(四)訴訟行爲を爲すこと、

(五)贈與、和解又は仲裁契約を爲すこと、

(六)相續を承認し又は之を拋棄すること、

(七)贈與若くは遺贈を受諾し又は之を拒絕すること

贈與をなすは妻にも夫にも不利益なる行爲なれば、或は妻に之を許すべからずとするも、之を受諾する敢て

妨げなきが如しと雖も、かくては一家の主裁たる夫の威嚴を害ふことあればなり、

(八)身躰に覊絆を受くべき契約を爲すこと、此條項は法律上夫權を保護せる最適例なり、妻は夫と同居する義務を負ふことは、法律の明言するところにしあれば、身躰に覊絆を受くべき契約を爲すこと能はざるは、自明の理なり、

夫の許可なくして妻が以上の行爲をなすときは、夫又は妻に於て之を取消すことを得、而して取消されたる行爲は始より無効なりしものと看做さるなり、

然はあれども、妻は凡ての場合に於て必ず夫の許可を受けざるべからさるものにあらず、此等の場合は事實許可を得るの不能なるときは、許可を得るも利益あらざるときか、或は夫婦の利益相反するときなり、此等の場合は左の如し、

(一)夫の生死分明ならざるとき、

(二)夫が妻を遺棄したるとき、

(三)夫か禁治産者又は準禁治産者なるとき、

(四)夫か瘋癲の爲め病院又は私宅に監置せらるゝとき、

(五)夫が禁錮一年以上の刑に處せられ、其刑の執行中に在るとき、

(六)夫婦の利益相反するとき、

之に由りて觀れば夫の許可を得ずして妻が自由に行爲を爲し得るときは夫婦にとりて最も不幸なる時なり、されば賢明なる諸媛は常に夫の許可を得るを以て無上の愉快となさゝるべからず、然れども玆に一の例外あり、何ぞや、曰く、既に一種又は數種の營業を許されたる妻は、其營業に對しては獨立人と同一の能力を有し、又一々夫の許可を得るを要せざること是なり、一度營業を許したる以上は、自由に法律行爲を爲すの能力を與へずんば、先に營業を許したる趣旨に反すると同時に屢〻夫か妻の行爲を取消すときは第三者即ち妻と取引する數多の人を害する虞あり、之れ此規定ある所以なり、然はあれど、此場合に於ても妻は又濫に無謀の行爲を爲すべからず、夫は何時にても其與へたる許可を

取消し又之を制限することを得ればなり、

割烹原理

女子職業學校割烹科講師　高橋章臣述

(一) 穀菽類

(米) 稻には水田に作るものと、陸田に作るものとあり、陸田に作るものを陸稻と申します。

粳米は白米として飯、酒、麹、飴等となし又澱粉を製します、白米の上品と云ふのは粒揃へ、肥へて白色の光澤あるものであります。

糯米は餅、菓子、飴等を作るに用ひます。

(麥) 皆陸田に作るもので大麥小麥、裸麥等の種類があります。

大麥は「ヒキワリ」として麥飯を製します(麥七分米三分)是れは脚氣病人に宜しくあります。「ビール」、麥湯、コガシ、アメノモト等にも爲す。

小麥はウドン、パン、ソウメン、味噌、醬油、マンヂウ、煎餅、麩、シヤウフを製します。

裸麥は下等のパンを製し、麥ラクガン、味噌、麹と爲します。

(蕎麥) 畑に作るもので之を粉にしてソバキリ、菓子等を製します。

(粟) 畑に作るもので飴、菓子、餅、酒、飯と爲ります。

(黍) 畑に作るもので粉にして餅、團子として食するのです。

(稗) 畑に作るもので酒、飴となります。

(玉蜀黍) 畑に作るもので焼き又は煮て食します。

(薏苡) 畑に作るもので煎餅を製します。

(大豆) 蛋白質に富むもので、味噌、醬油、豆腐、ユバ、煮豆、納豆、キナコ等に製します。

(赤小豆) 煮て食し又アン、赤飯に致します。

(豌豆) 莢を煮て食するものと、種子(豆)のみを煮又はイリテ食するものとあります。

(豇豆) 莢を煮て食し種子をアンと致します。

(ソラマメ、菜豆) 皆な野菜とするのです。

(二) 蔬菜類

一般に水多くして蛋白質は少ないので、魚鳥獸等と共に食します。又た消化器を亢奮せしめて消化を助けます。

(大根) 子リマ大根、煮て食したり又た砂糖漬とします。

龜井戸大根 味宜しく生食、煮食、醃藏とします。

ホソ子大根 四時ありまして生食、煑食、醃藏とします。

三月大根 春の末に出來るもので辛料とします。

サンゴジユ大根 圓くして赤く歲始の盆栽と爲す味ひは甘美です。

サクラ島大根 最も大なるものは二三貫のものあり味は甘美であります。

ミヤシゲ大根 尾張大根とも申します、尾張宮重村の名產で、味は甘美にして又辛味があります。

ハダノ大根 最長なるもので三四尺に至ります、その儘に乾したるものを美濃乾と云ひ之を切て煑又は酢醬油に浸して食するのです。

(蕪菁) コカブラは圓く冬日煮食、又は醃藏します。

近江カブラ 最大なり軟にして美味、煮食、醃藏、糟藏と致します。

天王寺カブラ 薄片として醃藏し又酢醬油に浸して生食します。

(ニンジン) 冬春の交煮食す、味噌漬、酒糟漬、秋には嫩葉を食します。キントンニンジンと云ふのは太く短くして殊に甘美なり大阪附近の名產とす。

(牛蒡) 煮食、醃藏、嫩葉を食ふのです。

(甘藷) 形色一樣でなく蒸食、煮食、煨煠、生食するので又之れを粉にして團子を製し、又澱粉、飴、酒を作るのです。

(馬鈴薯) 白と淡赤とあり蒸食、煮食、味噌、醬油、酒、澱粉等を製します。

(ツク子イモ) 固くして粘り氣多く美味なり、蒸食、煮食、トロ、汁等と致します。

（ジネンジヤウ）山野に自然に生ずるもので、ツクネイモに似て更に良品なり、ナガイモと云ふは之を栽培したるものです。

（サトイモ）蒸食、煮食致します、葉柄を乾して煮食す、トウノイモと云ふあり、葉柄四五尺あり之を煮食します、親芋も美味なり、チイモと云ふはエグイモの芽バイのことです。

（ヤツガシラ）親芋は扁濶にして數面集り居るので八頭の名あり、之を蒸食、煮食します、美味です。

（コンニヤクイモ）圓くして最もエグシ、生根をユガキてコンニヤクを製します。併し今は多く乾して粉となし之を製するのです。

（クワ井）水田に作るもので冬月煮食します、オモダカは煮食す、味クワ井に似たり、クロクワ井は生食煮食す、味甘美にして栗に似て居ります。

（オニユリ）煮食します、ヤマユリ、ヒメユリも煮食す、味最も美なり。

（ツケナ）三河島菜とも云ひます、秋冬の際に葉を醃藏す花蕾も食することが出來ます。

（コマツナ）冬春の際に煮食し、又は醃藏す、ウグヒスナと云ふは其晩種なり、其カヒワリをツマミナと申すのです。

（キヤウナ）冬春の際に醃藏、煮食するのです。

（カラシナ）冬春の際に醃藏す、種子に黒白の二種ありまして香辛料とするのです。

（ハウレンサウ）春末幷に秋末に煮食するもの。

（フダンサウ）トウチサとも云ひ四時共にあり、葉を煮食す又根より砂糖を取るものです。

（セリ）野生のものあり又水田に栽培するものあり。

（ミツバセリ）春新葉を生ずるもの、煮食又は根を油煠として食するもの。

（ウド）野生もあれども多くは栽培するのです、モヤシウドは白き莖の長さ一尺餘のもあります。

（シユンギク）冬春の際に苗を煮食し又は生食するもの。

（フキ）春夏の際に葉柄を瀹きて煮食す、又醃藏す花

蕾をフキノトウと云ひます。

(葱) オホチギは最も肥大にして甘美なものです。

イハツキチギ 小なれども味佳良なり。

ワケギ 細長なり臭氣少く味佳なり。

カリギ 小なるものにして夏繁る。

(アサツキ) 細長なり春食するもの。

(ゼンマイ) 瀹きて煮食す、又は乾して煮食するもあり、莖の纖維を紡ぎて織物とすることもあり。

(ワラビ) 瀹きて煮食し又は乾して煮食し、將た醃藏す、ワラビ粉を製し莖の纖維を以て索を製するのです。

(三) 蓏菜類

是れは菓實を食するもので、夏秋の菜です。

(タウナス) 煮食す、大小ありまして扁圓形で、カボチヤは形ちヘウタンの如きものです。

(シロウリ) アサウリとも云ふ淡緑なり、生食、醃藏、粕漬、煮食す、トウグワは又トウグワンとも云ひ、白粉帶び煮食又は醃藏するものです。

(キウリ) 生食、醃藏、糠漬、

るのです。

(マルツケ) ツケウリとも云ひ緑色にして堅し醃藏す生瓜を螺旋狀に切りて乾したるものをカミナリボシと云ひます。

(ユフガホ) 大なるは二三尺、煮食す薄片として乾したるをカンペウと云ふ、又容器ともなす、マルユフカボと云ふは扁圓にして大なり、カンペウを作り又容器ともなすのです。

(ヘチマ) 嫩きを煮食す、油煠又は醃藏するのです。

(茄子) 煮食、炙食、油煠、醃藏、鹽漬となす、最も煮食に宜しいのです。

(四) 菌蕈類

山野に自生し、朽木抔に生す、種類多けれども食ふべきものは少いので、有毒なるものは人を斃すことあり、有毒なるものは次の徵候あるものです。

有毒植物中に生したるもの、美麗に過くるもの、惡臭

あるもの、夜光るもの破壊し易きもの、銀と共に煮て銀を黒くするもの。

(シヒタケ) 春夏秋にシヒノキ、ナラノキ、クヌキの朽木に生ず、人工を以て作るを常とします。新鮮なるは煮食すれども多くは乾して貯ふ、生乾し、焼乾しの別あります。

(マツタケ) 秋の末に生ずるもの、味香共に美なり、新鮮なるを煮食、蒸焼、鹽漬、カンズメと爲しまする。

(シメヂ) 白灰色なり、新鮮なるを煮食す、乾して貯へ又は醃藏す。

(ハツタケ) 夏秋の際に生ず、青、赤等あり、炙食、又は煮食す。

(キクラゲ) 恰も人の耳の如し朽木に生ず、殊にニハトコに生ずるを良とす、晒乾して食するのです。

(シヨウロ) 春夏の際に海邊松間の砂中に生ず、球の如し、少しく松香あり、煮食、醃藏、糖藏となすもの。

(カウタケ) 乾して貯ふ黒色にして香氣あるもの。

(五) 藻類

(アサクサノリ) 冬春の際に採りて紙状に製す、アヲノリも同季節に採るのです。

(ワカメ) 春末嫩葉を乾して貯へ酢に浸し又は炙り若くは煮て食するもの。

(コンブ) 北海道の名産で、夏採りて乾し貯ふ、厚昆布は花折昆布、元揃昆布等に作る、又サザミ昆布と云ふものあり、昆布は總て煮食、炙食、油煠、醃藏、糖藏、粗粉として飯に混し又は汁の料ともなし煎茶に代用することが出來るのです。

(アラメ) 新しきは暗灰色なれども乾せば黒色となる、皺多し春末に取りて乾し貯ふ煮食するもの。

(ヒジキ) 乾して黒色となる、春嫩きものを取りて沸湯を注ぎ乾し、羹食するもの。

(テングサ) 新しきは暗紫色、曝乾せば黄白色となる、煮てトコロテンを製す、凍乾せばカンテンとなるもの。

(オゴ) 細長なり、石灰水にて煮れば緑色粗剛となる、之を刺身に付けるものです。

造花科

女子職業學校
造花教員　伏見藤三郎

藤の花

藤の花の造り方を申上げます、藤の花には藤紫色又は白色などが御座りますが、先藤紫色に、就て御話致します。第一圖に御座ります五種の形は、藤の花の瓣を解剖致しましたもので、それを厚き紙に張り付け、形をとり置きまして、其形通りに寒冷沙を切ります、夫れから「ビテレット」「チウラミン」を別々の器に餘り、濃くありませぬやうに熱い湯で解し置き、又た他の器に清い水を盛り、「ピンセット」で前に切りました花瓣の下の方を狹み、凡三四枚位重ねて初め水の中で能く浸し、眞までしみ込みました所で引き上け、指先で輕くしぼり、彩色筆の先に以前の「ビチレット」を含ませ、彩色の一面になりませぬやう即第一圖のやうに、其中心と兩端を少し殘してぼかし染にします、又別の彩色筆で下の方を「チウラミン」の液で黄色に染めます。又絹で造るのも宜しう御座ります、絹で造ります時には、先、それにしんしを張り、晒し膠を熱い湯で解しましたのを刷毛で布き、乾かします、乾きましたなら、以前のやうな形に切り、彩色を致しますにも前と同じやうに染めますが、一枚つゝ別々に致さなければなりませぬ。

第一圖



イ　ロ　ホ　ニ　ハ

　蕚を作りますには青紙で前に申しました、桃其他の蕚の時に御話いたしました樣にきりまして（大きさは實物にならつて造らなければなりませぬ）初め水に一寸浸し次ぎに極先の一分程の所を前に花の時に用ひました繪具即ち「ビヲレット」の液で、きわつかない樣にぼかします、又た蕚の柄の軟らかで御座りますのは、後に纒めの節大層仕上げ惡う御座りますゆゑ、よく堅くねばり氣の強い糊を使はなければなりませぬ、造り上げました上眞鍮の極細い針金をのばし蕚の軸としまして、上から、一二

分の巾に切りました青紙で、たいらに捲きます、そして開きと半開のは大抵長さ二寸程、蕾には一寸二三分の長さに致して置きます。次に

花瓣に鏝のあて方を御話し申します、先「中の瓣」「小の瓣」と筋鏝との三種を温め、前の圖に御座ります(イ)瓣の眞中即筋のある處へ、初め筋鏝で上から下へ筋を引き、裏返しに致しまして、今度は「中の瓣鏝」で中央の筋の消えませぬやう、さして兩側と上の方とを少し殘し、只中程にあて、又返して表を出し、「小の瓣鏝」を白くなつて居ります處、即兩端へあてるので御座ります、第一圖に筋の御座りませぬ瓣は「筋鏝」と「小の瓣鏝」とは用ひませんで、只「中の瓣鏝」で上の端から下の方まで、へりに皺のよりませるやうにあてます。

かやうに致しましたものを(イ)の瓣一枚、(ハ)の瓣二枚合せ、其合せました間に(ロ)の瓣を二ッに折り、蓮花草の花を造りました時と同じやうに組み合せまして、萼の中に入れます、そこで開きが一ッ出來上ります

半開の造り方も開きと同じやうに致しますが、只開きの時には「中の瓣鏝」を裏からあてましたのを、半開のには之れと反對に表からあて「筋鏝」で二ッに折りますそして大の半開には大な瓣小の半開には小い瓣を遣つて作ります。(第一圖の(ホ)(ニ)(ロ)は小き瓣で御座ります)

蕾は雁皮紙、又は絹を三四分四方に切りまして、中に少し綿を入れ、三角の形に四ッ折に致し、ピンセットで實物のやうな形になほし、針金で結び、花と同じ色に染めまして萼の中に入れるので御座ります、凡てどんな蕾に致しましても其大さの揃ひませぬ樣、大も小もなければなりませぬ。

葉は前にも度々申上ました通りに染めます、只餘り黒すみませぬやう薄色に染め、他の葉のやうに上染を致しませぬ、そして實物の形のやうに切り、極々薄く「ヨーシン」を解しました液でぼかします、乾きました上は、青紙を捲きました針金を付けて葉柄をこしらへ「筋鏝」と「中の瓣鏝」で葉の筋を付け、臘をしきます。(臘のしき方は前に度々申上た通りで御座ります)

葉のまとめ方は、前に申しました蓮花草のまとめ方と同しに致します。花をまとめますには、蕾を先に致し、初めは萼の長さを短かく、段々に長くして付け、具合よく互ひ違ひに實物にならつてまとめます、そして又花の數により、長き房短い房などをこしらへ、房の元の所へ葉を付け、又針金に青紙を巻いて蔓をこしらへ、葉と花の間から出します、此等は皆實物を手本と致して適宜にまとめるので御座ります。又白の藤を造りますには、其染方凡て蓮花草の白を造りますのと同じで御座ります。次は

菫の造り方

を申上ます、菫の花瓣には絹又は寒冷紗をつかひます、絹を用ひます時には、先、竹シンシを張り、晒し膠を湯て解し、刷毛て両面から布きます、又寒冷紗で御座りま



第二図



第四図



第三図



第五図

すれば其儘で實物通りに形を切ります、(實物花瓣の形をとりますには前に庚申むらの時に申ました通りで御座ります)即ち第二圖のやうな形で御座ります、夫れから小さき器に「ビチレット」を湯でよく解し置き、先づ「ピンセット」で以前の瓣をはさみ、水に一寸浸し輕く指先で水をきり、新聞紙のやうなもの丶上に載せ、第二圖のやうに、眞中を薄白く殘し、以前の「ビチレット」でぼかしに染めて乾かします。香の造り方は眞論の針金をのばし三寸位に切り、青紙と細く切まして、第三圖の(ア)のやうな形、丁度粟粒の少し大き位に針金の尖に糊で捲つけ置き、又別に三寸位の針金の先二分位の長さの所を、矢張青紙で二三度捲きます、即ち(イ)のやうに致します、そして此(ア)と(イ)との兩方を圖のやうに一所に合せまして、青紙をまきつけます、又丸き方へは糊で「レモンエルロー」を付けて置きます

花瓣に鏝をあてますには、前に乾かして御座りました、花瓣の面に、細い筆で第二圖のやう極細い線を書き入れまし(其筆にい「ビヲレツト」を少しばかり濃く解かしそれに薄糊を少々まぜましたものを含ませます)て、後に先つ表から「その瓣鏝」で先の眞中と一瓣つゝ一寸をさへ、裏返しにして、何れも兩端からあて下の細い所は筋鏝で丸くよりまして、前に造りおきました香ひを入れ、元の所のきれへ一寸糊をつけ、(イ)をまき、開きませぬやう、即第四圖の通りに造るので御座ります。

蕾は雁皮紙を五分四方位に切り、綿を少々入れ、「ピンセツト」で細長く致しまして、細い針金を結ひ付け、よじりまして眞直に致します、そして、又蕾の元の所を一分五厘ばかり殘り置きまして、餘をきりすて、青紙で其下をまき、實物をならひまして、工合よく上の方を丸く曲げるので御座ります。第五圖の通り)

葉は寒冷沙を「クリーン」「チウラミン」「マセンダ」の三通りを合せまして染め、糊を布き、乾きましたら、片面へ「レモンエルロー」と「セルリン」とを合せて布きます夫れから、實物の形を大、中、小三通り程とりまして、其形に切り、青紙をまきました針金を二寸五六分に切り、糊で裏から付けて葉柄をこしらへ、又表から「ピンセツト」で細く筋をとり、尚筋鏝を表からあて次に裏から「中の瓣鏝」で筋のきえませぬ樣あて、臘をしくので御座ります。

蕚は矢張實物をならひまして、小さく切り、一の花に付き二枚つけので御座ります。

右のやうに出來上りましたら、實物を手本と致しまして、青紙に適宜にまとめるので御座ります。

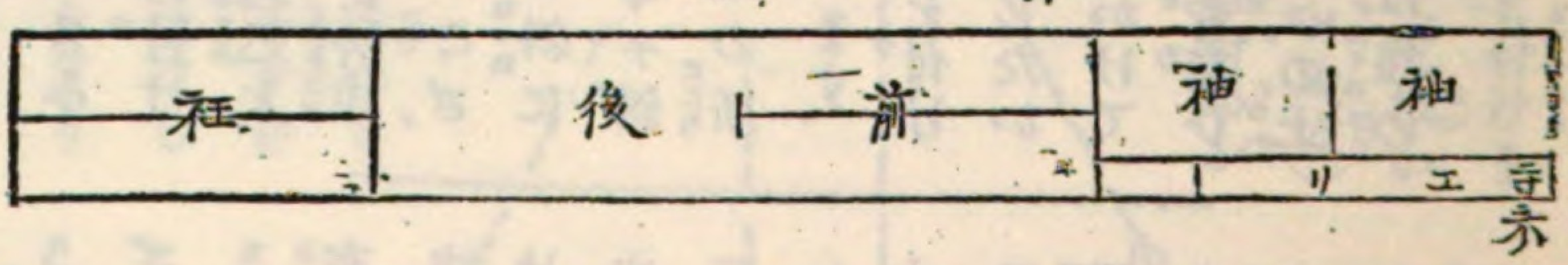
裁縫科

女子職業學校裁縫教員 金子銅子

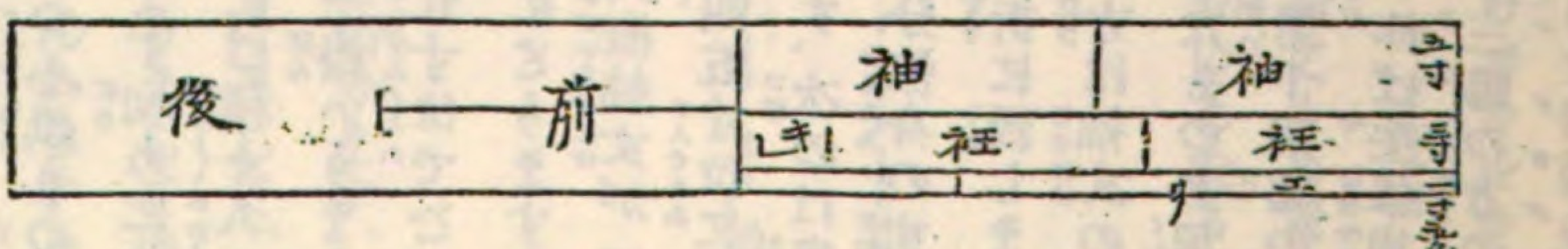
前號に男單物のシルシの付方まで申上ましたから此度は縫方から申上ませう、先づ縫はしめは袖をとりまして表を出して袖巾の縫込になる所と袂の先の丸みになる所を殘しまして縫ひまして引かへして此度は袖下

より袖口まで殘らず縫ひまして、袖口の所は針留をよくいたしまして縫通しまして、それより袖口を絎け丸ミを拵へまして兩袖ともかやうにして縫上りましたら巾を當りまして人形にするのなれば人形の所を縫ひます、次に衽をとりまして二枚とも立褄を絎けます、それより身頃をとりまして背縫ひを二分五厘位の縫代に致しまして衿肩の方より縫ひまして、また再び衿肩の方より此縫込の縁を縫ひまして衿肩を右にもちまして手前の方に縫込をかへします、もし肩當を付けますのでございますのなら肩當の切のカキメの所を後になる方は殘らず端を折りて縫ひまして、前の方は前の縫込だけ殘して矢張端を一寸かへして縫ひまして、二枚をよく合せ背縫のときに身頃の向ひにつけまして四枚ともに背縫を致します、背縫

第十三図



第十四図

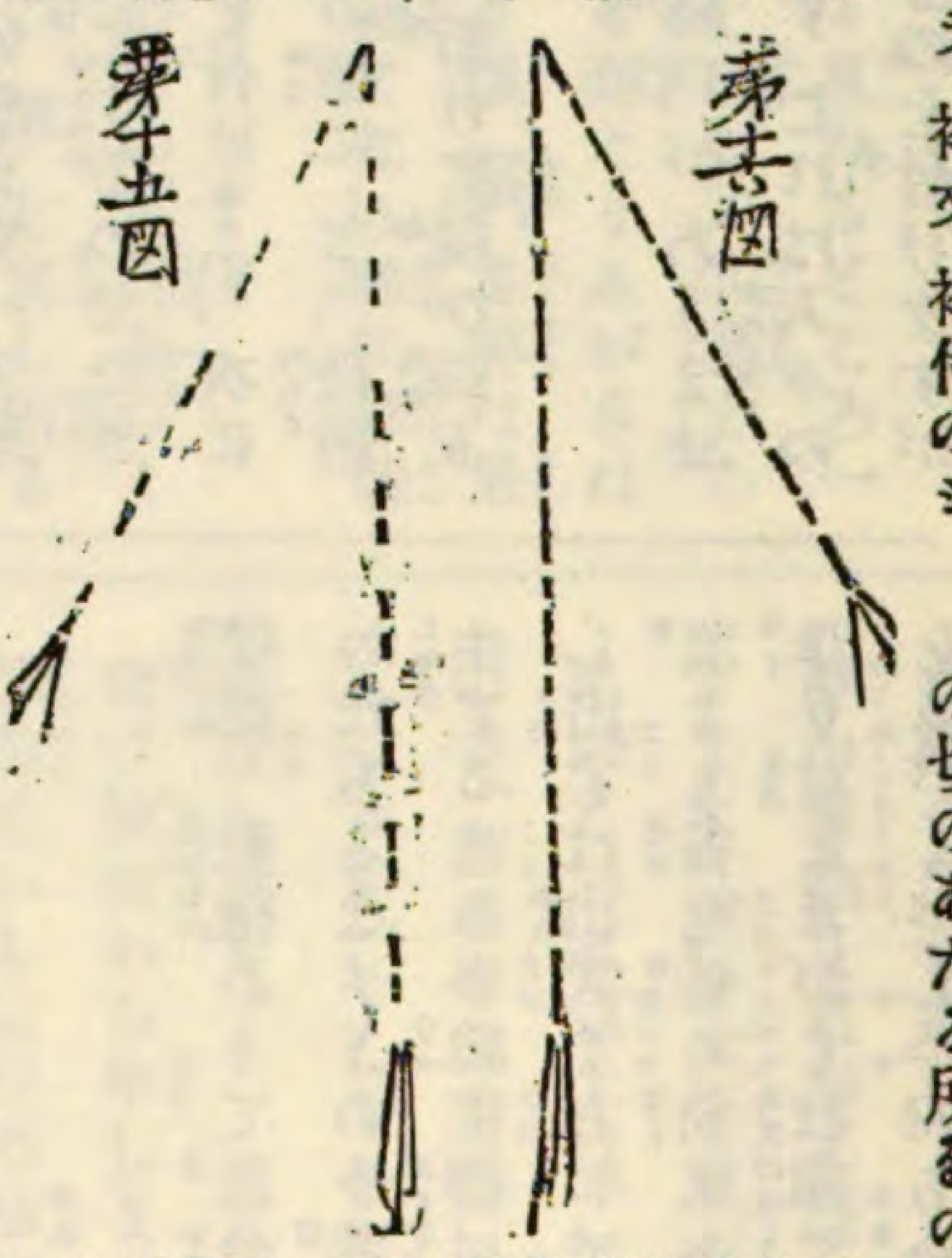


がすみましたら後巾をはかります、此シルシは五六寸位間を置まして袖付の所より裾までつけまして後肩巾を當りまして脇縫のはしめの所にて尺度か定木をあて、二三ヶ所シルシを付けましてアゲを致します、アゲは前號に揭げました第十二圖の(ロ)を山にして後身頃の方は縫込を殘して縫ひ前は殘らず縫ひますのでございます、次に後身頃を見まして兩脇を縫ひまして縫込を前にかへします、丁度うしろのアゲの縫ひ殘りの切が三角形になりましてそれより上の袖の付く方が兩方に開き下が前にかへるのでございます、次に縫込を綴ぢまして前巾とダキ(袖付の縫ひ終りの所)とをあたりまして、其の間にもシルシを付けまして後ち衽を付けまして縫込みを衽の方にかへし

まして縫込をどち据ガケをいたしまして衿をつけます、衿は表衿を表の方に裏衿を裏の方に身頃をはさみてつけまして、衿先を衿の付け終りの所より(衿の付けはしめの所も)一分五厘程はなして縫ひまして、縫込を裏の方にかへしまして細かに縫ひつけます、次に衿巾をあたります、此寸法は絎け上りの衿巾の二倍でございます、それより巾の縫込だけを衿先きの所一寸斜に折りまして綴ぢ、次に衿巾を二つ折にしましてマチ斜をして置きまして、衿先より五分若くは八分位上の所より初に裏表ともに小針に一寸出して絎け上げます、衿の絎け終りも初めの通りに致します、次に袖を付け縫込を袖の方にかへします、これで縫ひ終りましたから木綿なればよくたゝみつけ絹物なれば熨斗をかけて仕上げます、もしイシキアテを用ゐますときは背縫ひを致しますときに共にぬひつけましてイシキアテの上がアゲの下に絎けこむ様にいたしまして、周圍は袋のいらぬ様にとぢます。

これより女物にうつるのでございますが其前に一寸小供物の單衣の裁方積りかた縫ひ方のお話しを致しませう、先づ小供ものと申せば一ッ身、三ッ身、四ッ身でございます初めに一ッ身かから申上ませう一ッ身を裁ちますには種々人々の好みによりましてちがひますが用布の一番いりますのが一丈三尺位で先づなみの所は九尺五寸位でございます、多く布のいりますのは衽だけ別にとりますので袖丈、身の丈ともに充分にとります、大概袖丈が一尺四寸五分位より五寸位、身の丈けが二尺四五寸位にいたします、即ち第十三圖の様でございます、次のは第十四圖の様に裁つので袖丈が一尺三寸五分位身の丈は總尺より袖の總丈を減じたのこりを二ッ折に致しました長さでございます、其積り方は十三圖の方は袖丈の四倍に身の丈の三倍より衽下りを減じましたものを加へますれば用布の總丈を得られます、次の第十四圖の方は袖丈の四倍に身の丈の二倍を加へますれば矢張用布の丈を得られます、猶申そへますが第十三圖の方の衽丈が二尺三寸衿丈けが四尺六七寸程で、第十四圖の方の衽丈けが一尺九寸以外衿丈三尺七

寸以外でございます、今申上た様の工合にして、裁ち終りましたらば之も縫ひます前に所々にシルシを付けます、其しかたは先袖をとりまして表を中にして二枚かさねまして二ッに折り袖口になる方(切のカキメの方)を向にして下に半に置きまして山ヘラ、袖丈、袖付のシルシを付けます、次に身頃をとりましてたてに二ッに折りまして又肩より横に二ッに折り衿肩を左に背を前にして下に置きまして丈をばかりて裾の方をよくそろへ、山、衿、肩、袖付、身ハヤツ、のシルシを付けます、次に衽をとりまして表を中にして二枚合せ身に付く方を向ふにし立褄を右にして下に置きまして、丈をあたります、次に付の方のシルシを付けまして巾をはかります次に褄下のシルシを付けアイヅマをはかり衽の付の剱先から一分位はなしてアイヅマまで斜にシルシをつけます、次に衿をとりまして表を中にして二ッに折りまして衿先を右にして下に置きまして山と衿丈とのシルシを付けます これだけでシルシの付方は終りましたから縫方にうつります、先づ最初に袖をとりまして袖口をかけまして縫込を折てとめ置きます、次に袖下の所を表を出して袖口の切のあたる所をのこしまして縫ひまして引かへし裏を出しまして袖口の切を袖の切の方にかへして重ねまして四枚共に端より端まで縫ひまして(此袖口切をかへしますには、一つは手前にし一つは、向ふにかへして縫はなければ同じ袖が出來ますから御注意なさい)袖口の切を少々フカセて躾をかけまして、後袖口切の奥を絎けます、次に袖巾を當りて置きます、それから衽をとりまして、立褄をくけます、(二枚ともに)次に身頃をとりまして後巾を當ります、(一つ身は背縫がございませんからすぐに後巾をあたるのでございます、此後巾のシルシは前に所々にシルシをつけましたときにそ



第十四図

第十五図

のまゝに付けてもよろしうございます）次に脇をぬひまして縫込は前にかへして（襦袢の脇を縫てかへしました様に、後身の縫込一枚だけを一寸後にかへしてとめます、いつも脇縫は男物でないときは此通りに致しますのでございます）後ち前巾を當りまして衽を付けます、（此衽は袋縫にするのでございますすべて單衣を仕立ますには布のカキメは皆袋縫にするのでございます）次に裾ガクを致しまして、衿を付けます、次に巾をあたりまして、衿先を襦袢の衿先の様にして、後衽け上けまして、後ち袖を付けヤツロチ絎けて縫ひ終ります、

總て一つ身は着物、胴着、襦袢、等は背縫ひがありませんから、守り縫ひといふものを致します、これは人々の好みによりまして柿猿玉章等種々のものを付けますが先づきまりを申せは、紅白の絹糸にて背筋に眞直に七針斜に五針縫ひますので都合十二針十二ヶ月にかたどりますのでございます、それゆへもし其生れる年が閏年でありましたら一針を加へて十三針といたします、針目は男女によりてちがひます、即ち男子なれは第十五圖の如くいたし、女子なれは第十六圖の様にするのでございます。

畫法指南

野口小蘋

櫻花　數種ありて葉色或は青く或はあかく花葉ともにかたちさま〴〵あり葉の出ぬ前に花咲き花過て後葉を生ずるもあり總て櫻は花と葉と出る處別なりこゝに寫し出すは山ざくらにてその畫きかたはまへにある葉は葉より畫き始め前にある花は花よりゑがきのちに葉を作り枝をゑがく枝端に生じたる葉及綻びそめし花と蕾をゑがくべしかたち全く成りて後葉筋花蕊をつくるなり葉をゑがくには濃淡をわかちて黒色同じからぬやう注意あるべし

海棠は櫻花とことなりて春の半を過れは嫩葉を生じ葉と同じところより蕾を生じて晩春に至りて花咲くも

のなればそのこゝろにてゑがくべきなりその書かきかたは花まへにあるは花よりはじめ後葉を作る半葉かくれし花などは葉をさきにゑがき花をのちにす枝はさきにゑがくところもあり又のちに作るもあり一概には言がたし海棠の裊娜たる態を失わざるやう作るべきなりこゝに寫し出したる蛺蝶は一は背より見たるところ一ははらより見たる所にして書きかたを分ちて表裏をあらわし香を尋ね飛狂ふ態なりいづれも翅よりゑがきはじめ双翅成りてのち頭と體を作るなり眼、鬚、足等は最終に作るもし書きかたあしければ死物となる殊に活物はむづかしきものなり

藤花　は葉より書きはじめ幹條をゑがきのち花をつくべし藤は他の樹木とことなりて纒綿の趣を寫し出さゝれば藤條にならずこゝろしてゑがくべし葉はまへにあるは墨色を濃くしうしろにある葉及嫩葉は墨色を薄くすべし

書法指南

多田親愛翁口述
齋木寛直筆記

春來疾病を得て怏々として樂まず、爲めに暫時御話が途斷へて仕舞ひました、一體此の書法の事は、古昔から澤山書物も出來て居て、之れに就て種々と申述べてあります、隨分六ヶ敷面倒な様な感じが起りませうが、既に法といふ以上は、一通りは心得て居らねば成らぬもので、書を學ぶ者は、順序として之を知る事が肝要であるのです、そこで今日は腕法と、筆勢との事を述べる事に致します。

先づ腕法から申しませうなれば、腕法には、枕腕、提腕、懸腕といふ三つの法があつて、之を三腕法といひます。枕腕といふは、左の手を右の筆を持つ手の下にして、筆持つ右の手の枕にするので、之れは小字を書くの法である、此枕腕は至つて六ヶ敷ことであるが、どうも初學の者は、細字であるからといつて、兎角油斷をする傾がある、謬れるの甚しきもので、細字の上の動作は、殊に筆

勢をはげしくせざれば、能く書き得るものでない、此の手を枕にするといふ事も、手を枕に着けて仕舞ふのではなく、右の手と、枕にした左の手との間に、紙一枚ほどの極僅小なる間隙を置かなければならぬ、ヒタリと着けては、腕からの動作が自由でない、書法三昧歌にも、運筆の法は意筆先にありとある通で、滿腹の精神を腕より筆端にこめて書かねば成らぬものであるのに、腕の動作を中途の枕の爲に阻めては、筆勢を現はす事も出來ず、從つて精神ある微妙なる文字を書く事は望まれない。

提腕といふは、提はひつさぐと訓むで、肘（手首より中の節までの間）を机案に寄せて、手首をあげて、筆を提ぐる心持ちに成る、これは中文字を書く法である、此の方は前の枕腕に比べて見ると、稍々運筆が容易であるが、併し其の精神を筆端にこむるといふ事は、枕腕と同一であります。

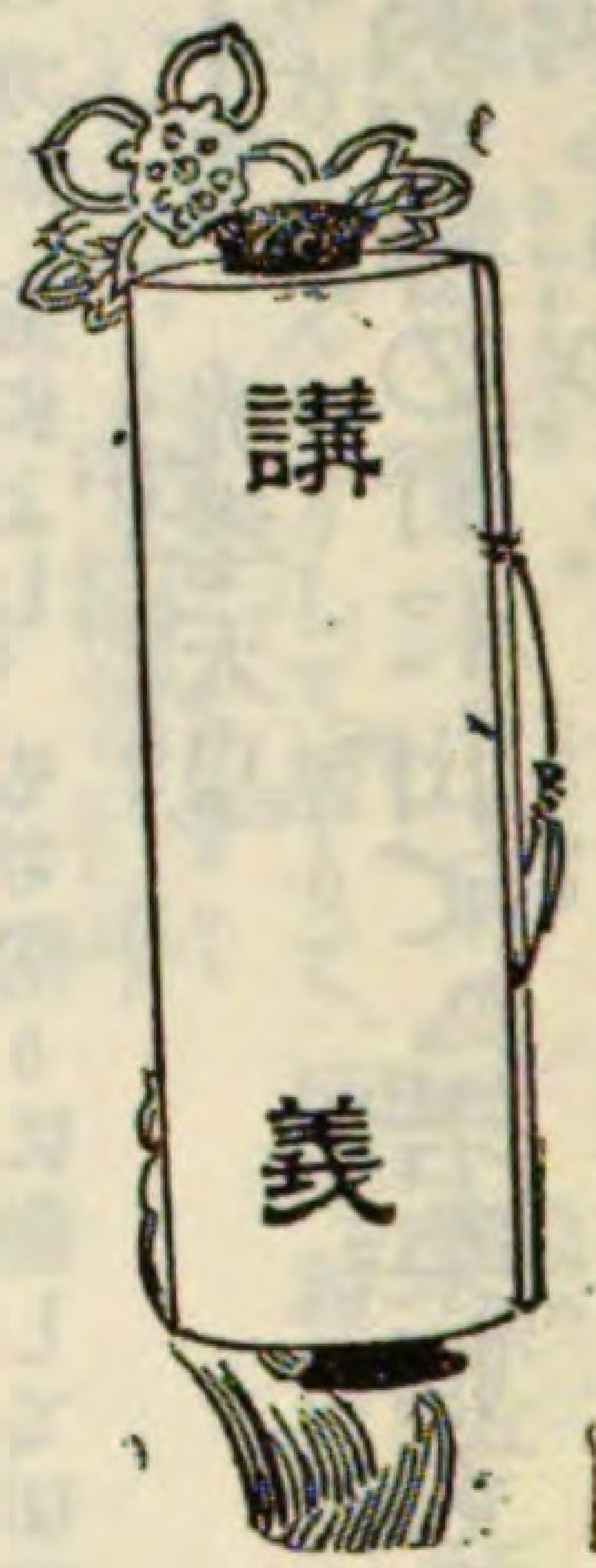
懸腕といふは、腕を物にかけたる如く、中になして書く故に、懸腕といふので、之れは大字を書く法である、若し此の懸腕の形のみを摸倣て、精神を筆端にこむると云ふ事をしなかつたならば、其れこそ何の役にも立てない事になる、故にこの懸腕は、特に精神を筆鋒に現はす事をつとめなければ成らない、大字のみならず、中字小字とも、この腕法を以て書き得たなれば、また一段と稱すべき事である。

次に筆勢といふ事がある、まづ書道の三賢と呼ばる〻道風佐理行成の書風に就て、書物にも、

道風の書は、極めて俗に近くして、文字の體惡くげに筆ふとく和かにして強くか〻れたり、例令へば鎧着たる武者の心にして、何に當りても退かざるが如し、打立ての處裏筆をつかふ、草字には龍形の如し、愛敬とて行には眞、を草には行を書きまぜたり。佐理の筆跡は極めてやさしき姿にして筆勢はまことに美事なるものなり。行成は打付けに愛敬有りて、筆にまかせて書きたまふ。道風の愛敬、佐理の筆勢を兼ねて、何をも書かせ玉ふ。

とある、筆勢は即ち筆の動作きで、文字の如く筆の勢といふ事であるから、少しも暇なき運筆を成さなければ

ならぬ、假令へば行人に驚いて蛇の草叢に走り入るの様、又飛鳥林に出づるが如く、又恰も帛を裂くが如くすべきものである。



百人一首講義（四）

文學士　大町桂月

十四、河原左大臣

陸奥の信夫もぢ摺り誰れゆゑに亂れそめにし我ならなくに。

○「みちのく」は「路の奥」のつゞまりたる也。むかしは、下野國の彼方より以北を總稱して、陸奥と云へり。即ち路の奥、日本のはての義也。今は岩代、磐城、陸前、陸中、陸奥等數國に分れたり。信夫は地名にて、今の岩代國にあり。

○「もぢ摺り」は「亂し摺り」也。むかしは、着物を染むるに、今日の如き染色なく、草木の葉を摺りつけて、衣服の色をつくりし也。其摺方にも色々ありて、信夫地方にては、わざと亂雜に、不規則に、亂し散らして摺り付けしゆゑ、「もぢ摺り」といふ名稱を得たる也。「陸奥の信夫もぢずり」は下句の「亂れそめし」を言はむ爲めの序詞也。

○「亂れそめにし」は「亂れ染めにし」を「亂れ初めにし」に言ひかけたり。「亂れ初めにし」は「亂れ始めし」也。「なく」は「ぬ」の延言也。「我ならなくに」は「我ならぬに」也、「我でないに」也。「誰れ故に亂れそめにし我ならなくに」は、「外の人故に亂れそめたる我れでないに」也。即ち「お前故に亂れそめたる我なり」の意也。

○陸奥の信夫もぢ摺りといふ摺り方は、非常に亂れて染めてあるが、我心の亂れ初め、狂ひ初めたのは、誰れ故ではない、即ち外の人故ではない、即ちいとしなつかしの貴女故也。誰れ故に心が亂れ初めたる我

身ならず、御身のいとしさに、我はかくまでに亂れそめたり。神ぞ、われは御身を愛慕す、天にあらば比翼の鳥とならむ、地にあらば連理の枝とならむ。御身は我身の命也。我心は御身故に亂れ〳〵て狂はむばかり也。かばかり切なる我心にめんじても我をいとしと思ひ給へ。これ一篇の意也。女の方にては、かばかりやんごとなき貴公子が憂身やつして苦しまるゝもみな我身故と、戀愛の情一層切ならざるを得ざるべし。

○戀の痴情を歌ひ得て、いと切也。古今集には、「亂れそめにし」が「亂れむと思ふ」とあれど、「亂れそめにし」の方が、遙によし。もち摺りに對して切實也。

十五、光孝天皇

君が爲め春の野に出でゝ若菜摘む我衣手
に雪はふりつゝ。

○衣手は、衣の手也、即ち袖也。「若菜つむ我衣手」は、「若菜を摘む我身の袖」也。若菜つむは、我れにかゝりて、袖にかゝらず。散文にては少し無理なれど、歌には許すべき言ひ方也。

○これは天皇が皇子、而かも世に時めき給はざりし時に、若菜を人に贈らるゝに添へて、よみ給ひし御製也。君とは、向ふの人をさす。あなたに若菜をあげやうと思つて、雪がちら〳〵降つて、寒いのも厭はず、野に出でゝ摘みとりたるもの也、賞美し給へとの意をこめたる歌也。

○通常の歌なれど、若菜を贈るにも、歌を添へ給ひたるは、風流のわざなるべし。すべて、物を贈るに、今日は「粗末なものですが、差しあげます」と謙遜する風習なれど、むかしの人は正直にて、惡いものは贈らぬといふ習俗故、わざとらしく謙遜せず、「よい物故、差し上げます」と云ひしもの也。これ自慢するに非ず、飾らず、詐らざる上古自然の人情也。この歌も、敢て我骨折を自慢し給へるに非ず、あなたにうまい若菜を上げんと思ひて、骨折つて摘んだもの故、わが心づくしを汲んで、めしあがつて下されよと、志深き歌

也。この歌、一讀すれば、贈るときの歌にあらずして、摘む時の歌のやうなれど、「君が爲め春の野にいでゝ降りつもる雪をふみつゝ摘みし若菜ぞ」と言ひなせば、餘り散文的にて、口上めきて、趣味なし。この歌の言ひ方、ほんやりして居りて、反て詩的也。

十六、中納言行平

立ち別れいなばの山のみねに生ふるまつとし聞かば今かへり來む。

○「いなば」は「往なば」を因幡に言ひかけたり。「まつ」は松を待つに言ひかけたり。

○因幡の國守となりて、いで立つ時に作れる歌にて、今こゝで君と別れて往んで因幡の國に下ることとなるが、その因幡國の稲葉山に松が澤山生へて居る、そのまつが木の名にとゝまらで、貴方が眞實わたくしを待つて居て下さるなら、邊地へ行く我身も心強い。やがてすぐに歸つて參りませう。どうぞ、お見棄てなく待つて居て下さいとの意也。上は「往なば」にかゝり、下は「待つ」にかゝる「因幡の山の峰に生ふる松」は、有心の序にて、調子よく歌の中によみ込みたるもの也。

○名吟にはあらざれども、離別咄嗟の間の作としては、多少の趣なしとせず。「因幡の山の峯に生ふる松」を調子よく詠みこみたる、作者の手腕を見るべくや。

十七、在原業平

ちはやぶる神世もきかず、立田川からくれなゐに水くゝるとは。

○「ちはやぶる」は、神にかゝる枕詞。「くゝる」は、絞染にすると也。「からくれなゐ」は、韓呉の藍也。「のあゐ」がつゞまりて「な」となり、「からくなゐ」となる也。呉(支那の南部)の國の藍を韓より我國にもち來りし故、韓呉藍と云へり。最も鮮明ある紅色のよ也。

○「立田川からくれなゐに水くゝるとは、ちはやぶる神世もきかず」と、下より上へかへす言ひ現はし方なり。立田川は、紅葉の名所、紅葉が立田川の水面に散

て浮んで居るさまを、「韓呉藍に水が絞り染にせる」と見立たる也。神世には、いろ／＼めづらしきこと多かりしかど、龍田川を紅色の絞染にするといふとは、神世にも聞いたるとなし。實にめづらしいと哉。これ一篇の意也。

○水に紅葉の散りうかべる樣を、紅色のくゝり染めた見立てたるのみ。神世も聞かずその言ひ方一寸面白けれど、要するに平易なる歌也。業平には名歌多し。この歌の如きは、業平の歌屑と云ふべし。

十八、藤原敏行

住の江のきしによる浪よるさへやゆめのかよひぢ人めよぐらむ。

○「よぐ」は、「避ける」ことなり。「住の江の岸による浪」は、住の江といふ處の岸へ寄つて來る浪との意にて、次の句のよる(夜)を云はむ爲めの詞にて、「寄る浪よる(夜)」と、調子の上より、「よる」の語をつゝけたる也。全體の歌の上には、何も意味なし。「夜さへや」は、「夜までも」の意也。

○なぜ斯う夜までも、夢に戀人の許に通ふのに、人目をはゞかりよけるであらうか。夜であるなり、殊に夢に通ふのであるから、人目をよけなくても、よさゝうであるのに、我は平生あの戀人と晴れて逢ふことが出來ぬ。逢はねば、戀しさがいやまさる。逢はむとすれば、人目が繁い。もしあらはれては大變なり。命から／＼、千辛萬苦して漸く稀に相逢ふことを得る。げに忍ぶ戀路の果敢なさよ。平生この通りに苦しんで居るから、人目の繁くない夜、その夜の夢にまでも、打解けて逢ふことは見ずして、矢張りこそ／＼と人目を忍んで、憂身やつして、戀人に逢ふことばかり見ると也。夢にまでも忍ぶ戀の苦しさを見る故、平生忍ぶ戀に苦しんで居るは猶更の事也。

○忍ぶ戀路の苦しさよなど、うちつけに咏みたらむには、極めて平易なる歌となるべし。この歌、夢の中に夜通ふのに、なぜ斯う人目をよけるであらうとのみ云ひて、平生忍ぶ戀路に苦しんで居るから、夢にま

でも見るといふことを言外にあらはす。不生忍ぶ戀路に苦しんで居る故、つひ夢にまでもそのやうな苦しき夢を見る也。本當の意味は夢にあらず、夢はたゞ假に用ゐたるまで也。言ひあらはし方、切にして且つ面白き歌と云ふべし。

○ついでに云ふ。百人一首の中には、戀歌多し。精しく之を説けば、誨淫の嫌なしとせず、されど、歌の上より見れば、戀歌に面白きもの多し。戀歌必ずしも人に淫を誨ふるものにあらず、毒を以て毒を消すとかや。和歌を味ふものは、高尚なる戀歌を以て いやしき肉欲を抑ふべき也。自から戀歌中の人となるが如きは、これ未だ和歌の感化を受け得ざるもの也。人として情なきはあらず。而してその情、獨居無聊の際、邪路に迷ひ易きものなれども、巧なる詩歌によりて慰藉せられ、鎭撫せらる。これ詩歌の一の徳也。文學を味ふものは、この徳を享受し得るまでに達せざるべからず。

十九、伊勢

難波潟みじかき蘆の節の間も逢はで此世を過してよとや。

○「難波潟みじかき蘆の節の間」、難波潟は、今の大阪の地也。そこには蘆が多かりし故、蘆を云はむ爲めに難波潟をもち出したる也。而して蘆は節と節との間の極めて短き故、短き間と云はむ爲に、蘆をもち出したる也。つまり難波潟も、蘆も、かりに用ゐたる也。難波潟に生へて居る蘆の節と節との間のやうな極短き時の間との意也。

○「過してよ」は、「過し給へ」の意也。「とや」は、「とにやあらむ」を略したる也。「よ」は、節と節との間をいふ。人が生れてより死ぬるまでの間をも云ふ。蘆の緣故也。

○一寸の短き間でも相逢ひ、相見ることが出來ずに、この一生を別々に過せよとおッしやるのであるか。われは一分間でも御側をはなれともなく、一日逢は

ざれば、恰も千秋の思をなして慕ひこがれ居るに、もう一寸でも相逢ふことが出來ぬ。一生別れて居よと御意あそばさるゝ乎。さりとは胴慾なる殿御の心、この思ひこがれて居る妾が身を何となさるゝ。これ一篇の意也。

○男の薄情を恨めども、言葉は温にして意悲しく、優婉哀切、極めて可憐なる歌也。一讀人の腸を斷たしむ。

二十、元良親王

わびぬれば今はた同じ。難波なるみをつくしても逢はむとぞ思ふ。

○「わびぬれば」は、「浮名を立てられて困つたから」の意也。「今はた」は「今は又」の意也。「はた」は「はまた」を略して「はた」と云ふ。「同じ」とは、どちらにしても同じとなりとの意也。もはや浮名を立てられた以上は、關係を斷つたからと云つて、浮名が消ゆるわけのものでもなし。關係を斷つても、斷たなくても、どちらにしても同じことなりと也。「難波なる」は、「難波潟に在る也。「みをつくし」は「水脈つ串」也。澪標と書く。海中に立てらるゝ棒ぐひにて、水の流るゝ瀬を示し、船の進行に便にするもの也。この澪標は難波潟に多かりしかば、わざ〳〵「難波なる」とは云へる也。而して澪標は、「身を盡し」に云ひかけたり。身を盡しとは、死んで仕舞ふと也。

○圖らずも浮名をたてられて、この通り困つて居るが、さて今關係をたちたればとて、浮名が消えて仕舞ふものでなし。濡れぬ前こそ露をもいとへ、どうせ浮名を流したる身也。關係を絕たうが、たつまいが、どちらにしても、人に尤めらるゝは同じと也。されば今みをつくし、身をつくしても、即ち命をかけても添ひ遂げやう。御身の爲めには、命も惜しからず。死んでも何とも思はぬ。死んでもいゝから、御身と添ひ遂げむ、添ひ遂げずには居られぬ。これ一首の意也。

○浮名を立てられ、人からは責められて、やけになり

たる戀の切情を歌へるもの也。戀の歌としては、いと面白し。冷かなる道德の眼から見れば、馬鹿げて居ることは、云ふまでもなし。道德眼を以て戀歌を看るは、沒分曉漢も亦甚しと云ふべし。

漢文評釋

文學士 久保天隨

節婦（其一）

大槻磐溪

寧靜子曰、大石等復讐有レ事、先儒往往有下議二其非一者上、殊不レ近二人情一、余嘗作二義士論一、以辯レ之、今附二記于此一、

寧靜子は磐溪の別號なり。はじめ大石良雄等復讐の事ありし折。當時の儒者どもの中、之を駁擊して其非を攻むる者あり、太宰春臺、佐藤直方等は即ち是れ。然れども要するに、冷酷なる學者先生の言、たゞ理を以て之を論し、法を以て之を定めむとする者にして、絕えて情狀を酌量せず、依て頗る人情に近からざる者あるを免れず。是に於てか、余かつて義士論を作り、之を辯析せしことあり、今便を以てこゝに附記せむとなり。磐溪の此文はやゝ長くして殊に本傳と相涉らず、こゝに解釋するは如何と思ひしかど、其論ずるところ、千古の斷案とすべき者あるを以て、元のまゝに之を存し、多少の評語を着くるを得む。

曰、赤穗遺臣大石良雄等四十七人、謂二之義士一耶、深夜潛レ形破二朝貴門戶一、掩擊以奪二其首一矣、謂二之亂賊一耶、一片精忠、百折不レ挫、一擧以殪二故君之讎一矣、二者之目、將何所レ定、曰深夜掩擊、奪二朝貴之首一者、其跡也、一片精忠、殪二故君之讎一者、其心也、心苟純二乎忠一、跡雖二或涉一レ暴亂一、君子必有レ取焉、良雄等四十七人義士也、忠臣也、果非二亂賊一也、

本論は三問三答より成る、以上第一段、全篇の提綱として、先づ主意を揭げし者なり。問ふ者曰く四十七人、之を義士と謂はむに、其行爲のふさはしからぬ

のあり、夜深き折、怪しげなる姿をなし、高家の私第に闖入し、四面より圍みて、其首を奪へり。されど之を世の常の亂賊となさむには、其本心聊か過ぎたる者あり、四十七人皆精忠の士、困難辛苦に遇ふも屈せず、終にその素志を達せり。義士亂賊、その孰れに居るべきか、と。かく疑ひ來りて問ふもの、必ずしも無理ならず。今一刀兩斷の處置に出で、之を決せむに、深夜掩擊は其跡にして、一片精忠は其心なり、之を一般にいふとき、心だに忠に純なれば、其跡の或は暴亂に涉るとあるべきも、君子は甚だ之を斥けざるのみならず、之を取る良雄等は義士といふべく、忠臣といふべく、決して亂賊に非ず、跡の暴亂を指して或はいふ、語に分寸あり、必ずしも暴亂を推奬したる者に非ざるを知るべし。凡そ世人の道德を論ずるもの、或は動機よりし、或は結果よりす、かの淺薄なる功利論者に非ざる限は、誰か重を動機の上に置かざらむ、磐溪の言、頗る理ありと爲すべし。

曰、然則朝議之不待以忠臣義士、而擬之群不逞之徒、以賜死者何耶、曰、亦以其事涉暴亂耳、事涉暴亂而不正刑典威、何以制天下、徵後世不軌之徒乎、雖然良雄等之爲忠臣爲義士、朝議終不得而沒也、有僧焉、收其屍以封之墓、置而不問也、有儒子目以義人、錄其事以傳不朽、置而不問也、天下寧有封亂賊之墓、又目之以義人、而不敢之禁者乎、由是觀之、朝議之所以處良雄等、可謂恩威並行而不悖矣、而在良雄等、則一成故君之志、慰幽魂於地下、臣事畢矣、一死固其所甘受、其又何怨、

客更に問を起し、當時幕府判決の結果、徒黨を結びて狼藉を働きし者と見做したるは如何なる故にやといふ。是も前者に次いて起るべき一應尤なる疑問なり。

按ずるに、此に用ひし朝議の字は穩當ならず、宜しく幕議など攻むべきが如し。これより客の問に答へて、

そは前にいひし如く、其行爲の暴亂に渉りしが爲にして、懼るゝ所、之を赦せば、後世似て非なる叛逆人を懲戒する能はざるに在り。幕議の理由は、かくの如く、良雄等の本心、忠臣義士たるに足るは固より承知せられしことなり。必ずしも其精神を顧みざるに非ず、唯だ忍んで法を正せしのみ。僧は泉岳寺の僧をいふ、彼寺の僧、其屍を葬り、わざ〳〵石碑まで建てしも絶えて之を構はず。儒士は室鳩巣、三宅觀瀾を指す鳩巣に義人錄あり、觀瀾に報讐錄あり、其事を書き立て、印行して世に傳へしも、敢て治安妨害の出版物ともなさず。幕府の意思は、固より明白にして、處置宜しきを得、恩威並び行はれて、決して矛盾する所なき者と謂ふも不可なし。而して良雄の身になりて考ふるに、すでに吉良氏の首を獲、亡君の心を立て通し、草葉の蔭に迷へる魂を慰めたるなれば、人臣たるの職分は盡せしものにして、死は固より期せしところ、怨むべき筈なし。之を要するに、官は唯だ其跡を罪せしのみ、其忠を棄てず、良雄等はまた善く之を解し、解して無法とは思はず、されば一の間然すべき無く、雙方ともに、其致すべき所を致せしなり。以上の問答、之を第二段となす。

曰、義士之目、則既得聞命矣、抑復讐之名、先儒猶有異議焉、有人弑其君父矣、臣子以爲讐而復之、古今之通義也、今也不然、赤穗侯以私憤刄人於朝座大不敬賜死、非吉良氏之所敢殺也、良雄等安得而讐之哉、曰、以常理論之、亦有似焉者、獨不有所謂君辱臣死乎、夫吉良氏挾權驕傲、貪而無厭、銜赤穗侯之不賂於己、屢挫於朝、至以鄙野之士不知禮節罵之、其辱之亦甚矣、赤穗侯於是乎不堪積忿、欲逞之一擊之下而不達、幽憤呑恨以死、則爲之臣者、何心能忍與吉良氏共戴天乎、是良雄等所以爲讐、出於萬不得已、則天理之

至人情之盡、尙何暇問義例有無乎、

論者更に一步を進め、議論の根本に溯りて曰く、君の言ふ所の如くなれば、義士たる稱號頗る理に協ひ、誠に言はるゝ通りなり。然れども、之を復讎と爲すことに就いて、先輩の諸儒、異論を挾む者あり。今人あり、或者の君父を弑するとき、臣子たる者、讎となして之に報ゆるは、古今普通の事なれども、赤穗藩士の如きは全く然らず。淺野長矩、區々たる私憤を以て、人を傷け、不屆至極を以て死を賜へり。固より其相手たりし吉良義英が手を下して殺せしといふにもあらぬに、之を讎とすることと、果して理に協へりや、と。之に對ふる辭は、次の如くなるべし。普通一般の道理は、仰の如くなれども、こゝに又君が辱めらるゝ時には、臣たる者身を捨てゝ之に報ゆべしといへることあり。御身は、之を知られざるにや。そも吉良氏はその權を恃み、好で他を凌辱し、財貨を貪りて、決して足るを知らぬしれ者なり。かの朝使を饗せし折など、赤穗侯が己に賂を持ち來らざるを深く怨み、列侯滿坐の中に於て、田舍者作法を知らずといひて、之を罵り辱しむるに至りては、誠に言語道斷の事なり。さしもの長矩、こゝに積り〱し忿怒の念を抑ふる能はず、一擊して思ふ存分に爲さむとせしも、人の爲に障へられて意を達せず、恨に堪へかねて、やがて死を賜はりし者なり。然らば吉良氏は全く長矩を凌辱し、終に之を死に致さしめし張本にして、その家來たる者之と共に天を戴くに堪へられざるべし。この故に良雄等は之を仇として、かくは深夜掩擊の擧に出でし所以、固より他にせむすべなかりしことにして、要するに天理を極め、また人情を盡せしところ、區々としてかゝる例の有りや無しやを問ふべきに非ず。良雄等の爲せしところ、飽くまで正當にして、決して誹議すべき者に非ず。此段一問一答、著者の言、將に終らむとして、忽ち感慨に入り、次の小段を提起し來る。

嗚呼吾既借春秋誅心之法、反賞良雄等忠義之心、又據君辱臣死之義、斷然決吉良氏之可以爲讎、則良雄等四十七人之爲忠臣

爲義士、昭然明白、可以暴天下萬世矣、彼拘儒紛紜之論、又何暇置諸齒牙之間哉、

誅心の誅は、穿鑿の義なり。吾はすでに孔子が春秋に於て人心を探り事實を判斷する法を借り來り、良雄等が忠義の心を賞賛し、また上述の如き君辱しめらるれば臣死すといふ大義によりて、吉良氏が以て讎となすべき理由を決定したりき。されば彼の四十七人が忠臣たり義士たることは、明白にして、天下萬世の後までも、さらけ出して、構はぬ程、確實なることなり。かの働きの無くして空理に拘泥する儒者の、くよ〳〵として譯の分らぬ事を喋べる如きは、決して取出でゝ言ふにも足らぬ事なり。以上は前段を總束して結語を爲したる者、反覆の中に於て自己の所信の愈よ難きを見るべし。以上第三段となす。次號に於て、余は節婦二、即ち大野九郎兵衛の女に就いて、述ぶる所あるを得む。

土佐日記講義（四）

文學士　塩井雨江

五日。風波やまねば、猶おなじ所にあり。人々絶えずとぶらひにく。

○風も吹きやまず、波もしづまらぬ故に、五日の日も、やはり大湊に居るとなり。○人々絶えずとぶらひにく。多くの人が、引き續き〳〵絶え間なく、船中の人を訪問しに來たるとなり。とぶらひは訪問なり。

六日。昨日の如し。

○六日の日も、五日の日とかはらぬ有様なりきとなり。即ち、風吹き波立つ故に、大湊に泊まり居り、人々が絶えず訪問し來たれりとなり。

七日になりぬ。おなじ湊にあり。今日は青馬を思へど、いとかひなし。たゞ波の白きのみぞ見ゆる。

○今日は青馬を思へど、正月の七日には、内裏に於て

青馬の節會といふ式あり。左右の馬寮より青馬二十一疋を出だして庭中を引き渡すを、天皇樣の御覽ぜられて、さて群臣に饌を賜はる式なり。陽氣を助くとて行はるゝなり。青馬といふは、白き毛色の馬なり。故に白馬の節會とも書けり。白き毛色の馬の、ほのかに青みあるより、かくあを馬といふなりともいふ。また常に青馬といふは、毛の黑くして青みある馬をいふなるが、古には、その黑くして青みある馬を用ひたる故に、青馬の節會といひたるを、其の後、さる毛色の馬の乏しき故に、白馬を用ふる事となりたれど、その名は、昔のまゝをいひ來たりて、あを馬の節會と稱するなりともいふ。いづれにせよ、禁中にて正月七日に行はるゝ儀式なり。今日は青馬を思へどとは、今は正月七日なれば、內裏にて行はるゝ青馬の事を、心に忍びて、見たき心地もすれどといふ事なり。○いとかひなし。誠に詮方なしといふ意なり。いかに今日の內裏の青馬の節會の事を、ゆかしく思へども、かゝる船路にて、詮方なしといふ事なり。○たゞ波の白き云々。今日の內裏の白馬は、いかに思へども、見る事あたはず。たゞ立つ波の白きを見るのみなり誠に悲しいといふ心なり。

かゝる間に、人の野の池と名ある所より、鯉は無くて、鮒よりはじめて、川のも、海のも、こともの も、長櫃に擔ひ續けておこせたり。

○かゝる間に。かく都の方の事など思ひ慕ふ間にといふ事なり。○人の。ある人がといふ意なり。○野の池と名ある所より。野べにて、さて池といふ名稱ある土地よりといふ事なり。○川のも海のも。川の魚も海の魚もといふ事なり。○こと物も。別物にて、魚の外の物をいふ。○長櫃。今の長持の類なり。通例の櫃の長きをいふ。櫃とは箱の大きくして上に蓋あるものをいふ。長櫃に擔ひ續けてとは、かゝるいろいろの物をいくつかの長櫃に入れて、それを擔ひつゞけて贈り來たれりとなり。池といふ所に住めるある

人の許より、鯉はなけれど、川の魚、海の魚、その他の物を、澤山と長櫃にて擔ひつゞけさせて、貫之の許に贈り來たれりとなり。

若菜、こに入れて、雉など、花につけたり。若菜ぞ今日を知らせたる。歌あり。その歌。

淺茅生の野べにしあれば水もなき
池に摘みつる若菜なりけり。

いとをかしかし。此の池といふは、所の名なり。よき人の男につきて、下りて住みけるなりけり。

○若菜。新しく萌えいでたるばかりの菜をいふ。菜とは、すべて人の食し得る草をいふ。昔は正月の七日には芹、薺、御行、蘩蔞、佛坐、菘、蘿蔔などいふ七種の菜を羹にして食ひたり。萬病を除くといひたり。今も、正月の七日をなゝくさの節句といひ、また薺をたゝきて粥に炊ぎて食ふ所謂七種粥といふも、その餘風なり。○こに入れて。籠に入れてなり。○雉など云々。花の枝に、雉をつけたるなり。木の枝に鳥をつけて贈物などにするは、此の頃の例式なり。その鳥のつけ方など、むづかしき作法ある事なれど、さまでは用なき故に云はず。○若菜ぞ今日を知らせたる。今日は正月の七日なれど、かゝる海邊の舟泊りにて、彼のめでたき内裏の白馬をも見る事能はず、正月の七日なりといふしるしにすべきものは無けれど、今、此のある人より贈りくれたる若菜が、僅に今日は正月の七日なりといふ事を知らせたりとなり。七日には若菜を羹にして食ふ例あればなり。○歌あり。其の贈物に添へておくり來たれる歌がありたりとなり。○此の淺茅生の歌の意は、もと〳〵茅草の生ひたる野邊に住んで居る身に侍る故に、今、お贈り申す品も、めでたき物には侍らず、野べの事ゆゑに、水も無き池にて摘みたる若菜で御座ります。誠に恥かしく粗末なる物にて侍ると、謙遜して贈りたる意なり。○淺茅生とは茅草の淺く生ひたる所をいふ。水もなき池といへるは、池といふ土地の名より洒落れて粗末な

る品なる意をきかせたるなり。いと巧みに面白くいひ得たり。○いとをかしかし。甚面白しといふ事にて末のかしは、詞を強くいひとゞむるまでの詞にて別に意なし。○よき人。身分の貴き人といふ事にて此處にては貴き女子なり。○男につきて。我が嫁ぎたる夫に伴ひてといふ事なり。○下りて。此の田舍に來たりてといふ事なり。都より地方へ行くを下るといひ、地方より都へ行くを上るといふ。今、此の若菜を贈りたる人は、もと都の身分貴き女子が、その嫁ぎし夫にしたがひて、此の田舍に下りて住みたるものにて、さる由緒ある人の贈りたるものなれば、自から斯くの如く、その贈物がやさしくみやびやかなるを得たりと賞讃めたるなり。賞めたる意は、それと文章にはあからさまには云はされども、かくよき人の云々といひたる詞の中に、自から其の意をきかせたるなり。文章の趣味は、かゝる所にあり。よく味ひて學ぶべし。

此の長櫃の物は、皆人童までにくれたれば、飽きみちて、舟子どもは、腹鼓をうちて、海をさへ驚かして、波をもたてつべし。かくて、此の間に、事多かり。

○此の段の意は池といふ所に住める人の許より長櫃に入れて貫之に贈り來たれる食物は、船中の人々童に至るまでに分ち與へたる故に、人々は皆充分に食ひて、船のせんどうなどは、思ふほど食ひも飲みもしたるに、大に機嫌よく、歌ひつ踊りつ悅び騷ぐさまのにぎやかさは、海をも驚かせて、その爲めに波をも立てむばかりなりといふ事なり。つまり、非常に悅びて、にぎやかなる騷ぎするさまなり。船子とは、俗にいふセンドウにて、飽きみちてとは滿足するまで充分に飲食したるなり。腹鼓をうつとは、腹を鼓の代りにたゝくといふ事にて、飲食に滿足してよろこぶこゝろもちなり。○皆人。すべての人といふ意なり。○かくて此の間に云々。斯く充分に飲み食ひして面白く騷ぐ間に、また訪ひ來る人もありなどして、いろ〳〵

の事多く世話しといふ事なり。

今日、破籠もたせて來たる人、其の名などぞや、今思ひ出でむ。此の人、歌よまむと思ふ心ありてなりけり。とかくいひ〳〵て、波のたつなること憂へいひて詠める歌。

往くさきにたつ白波の聲よりも
　おくれて泣かむ我れやまさらむ

とぞよめる。いと大聲なるべし。持てくる物よりは、歌はいかがあらむ。

○破籠もたせて來たる人。貫之等に贈らむ爲めに、飯や肴や御馳走を器につめたるを携へて來たれる人といふ事なり。破籠は破子、樏子とも書く。内にしきりありて、食物を區別して入れ置くやうになれる器なり。外出する時などには、多く持ち行くなり。故に後世は外出する時に、もちゆくベントウなどを、皆わりごとのみいふ。此處にては、粗末なるベントウの類にあらず。今ならば重箱にいろ〳〵御馳走を入れて贈るやうにして、破子に御馳走を入れて貫之の所に持ち來たれるなり。○其の名などぞや。其の破子を持ち來れる人の名は、何にといひたるぞや、今、ふと忘れたりといふ事なり。○今思ひ出でむ。今ぢきに考へ出さむといふ事なり。○此の人云々。此の人のわざ〳〵と貫之の所に來たれるは、歌をよみたしと思ふて來たれるなりといふ事なり。下手ながら歌など好みたる人なりけむ。○とかくいひ〳〵て。いろ〳〵と別れの惜しき事など頻りに此の人の語りなどしてといふ事なり。○波のたつなること云々。君はこれよりはるかに海をわたりて行き給はむとするに、誠に氣づかはしや、波のいたくたつことよなど此の人のいひなげきて、さて歌をよみけりとなり。○歌の意は。君が行く方に白波がどんどと高くたつよ。されど、其の波濤の音よりは、此處に君の後に殘りて別れの惜しさに泣く我が泣聲の方が餘計に高からむといふ事にて、さて、其の詞の中に、別れて行きたまふ君よ

りは、あとにのこりて別れを惜む我が、方が餘計に悲しうムいますといへる心をふくめたるなり。唯、波の聲よりも我が泣き聲の方が高しとのみいへるにあらず。此の心は、ゆくさきに立つといへる詞と、おくれてといへる詞とによりて知らるゝなり。おくれてとは、人の去る後にのこるをいふなり。○いと大聲なるべし。波の音よりは我が泣く聲の方が高しといへる歌の考への可笑しく、上手にもあらざる故に、貫之が、これを笑ひて、波より高き泣き聲とは定めて甚だ大聲なるべしと、この歌をひやかしたるなり。面白くひやかしたりといふべし。○持てくる物よりは云々。此の人の持ち來たれる御馳走よりは、この歌はどうだらう、御馳走よりは歌はまづいといへるにて、これも、貫之が戯れて此の人の持ち來たれる御馳走に比べて、歌の下手な事をひやかしたるなり。○此の段の話しの大畧を述ぶれば、「今ふと名は忘れて記す能はぬも、今日破籠に御馳走を入れて持ち來たれる人ありたり。此の人は歌を好む人にて、歌などを詠みあはむ爲めに來たれるなり。此の人、いろ〳〵と別れの惜しき事などいひて、さて白波の高くたつことなどをいひ憂ひ、さて一首の歌をよみたり。波よりも泣聲の方が高いといふ歌なり。さては、定めて甚だ大聲なるべし。あまりにうまい歌にはあらず、持て來たれる御馳走の方が餘程うまい」といふ事なり。○此の段の文の面白き所は、其の歌のまづきをひやかしたる二句なり。單にまづいといはずして、その歌の詞によりて、大聲なるべしとひやかし。その人の贈物よりはいかゞあらむと戯れたる、面白し。また、此の人の名を忘れたりといへるは、さほど貫之の心に深く思はざる人なる意を見せたり。



小説

菜摘川

學海居士

下

吉野の行宮は吉水院の大伽藍なりしかば。然すがに都の内裏の片端にだに及ばねど。高く築地を繞らし。樓閣回廊は谷に亘り。山に聳へ。碧瓦は龍の鱗を疊み。欄檻は虹の橋を懸け。房舍簷を連ね。亭臺棟を並ぶ深山ながら。實に帝王のおはしますところは。紫雲棚引き。瑞氣浮ぶとかや。されば。此御寺も日頃はさしも思はざりしかど。行宮となりては自ら尊きならんかし。

この院の南の端なる。廊を隔たる。いとおもしろき前栽には。秋の末なれども。なほ殘りの菊は處〻にその香を薫らせ。楓葉の紅は。岡の邊に散り敷けり。こゝは局町とて女官あまた侍ゐたり。むかしも今も女房原は。いと口さがなきものなれば。いつこにてや。聞しりけん。さま〲の事をさへづるに。播磨内侍といへるは。播磨守時勝の女なるが。よく物いふ女なり。中務内侍といふに向ひ聲をひそめ。きのふ夕女嬬のかたりしをきゝ侍るに。去る日仰を蒙りて。伊賀の國におもむきたる。洞院の中將殿は貢税を多くの唐櫃に納れて。かの國より。還り給ひしに。宇陀山の麓にて。敵にゆきあひ。事の難儀に及びしに。油小路中將ぬし。はしなうこれを救ひ。その奪はれし唐櫃の半をとりかへし給ひしとぞ。されど油小路どのは。この事を深く秘めて。その功に誇り給はず。洞院の中將殿は。立かへりて。ありし事ども奏聞し給ひしに。唐櫃の半は兇徒に奪はれしをもて。その科あるべきなりしを。關白殿の御子中納言師常卿いろ〲に申なし。關白ど

のをこしらへ申て。内々卿の御財を出して。償ひ申給ひしかば。洞院殿は御科の沙汰に及ばずときゝにきと呼きぬ。深くも。つゝまれしを。いかにしてかきゝしりぬ。

洞院の姫君は大納言の典侍とて。さきに音せし女ますらをとも。申へき人にておはしけるが。風とこのさがなもの丶。物語を障子越にきゝて。心のうちに。大に驚き。さてもさる事ありけるにや。さるにて。兄の中將殿か敵を追散らし唐櫃の貢税を半はとり戻し給ひしとのみの給ひしか。實はさる事にてありけるよ。關白殿の御子中納言殿は。さる頃より。御文を賜はり。さま〳〵仰られつる事ありしを。つれなくのみ。申まゐらせしに。こたひ。兄君の事を。父君にとりなし給ひしは。なさけを見せて。なほ逼りて仰られむとにや。油小路の中將殿は雄々しく。又友にも。厚き御心かな。まして。文武の才かしこく。忠義の志は楠木父子にも。おそらすと。人々のいふも詐ならし。兄君の危難を救ひ給ひしに。その事をみづからは洩し給はず。すへて讓り聞え給ひし御心のやさしさよ。かゝる人にこそ。行末を賴みなば。同し心に君に事へまゐらせ。樂も悲も諸ともにせは。さこそは。うれしからめなと。樣々に。思ひ亂れ給ひしか。唯ひたすらに。心にのみこめて。物いはされは。それも爲んなしと。文を細々としたゝめて。兄君の事をうへにはしるしき。その厚き恵みを謝し。後には己か思ふ事を草木につけて。ほのめかし。文の末にかくなん。

數ならぬ身にも恨はあるものを。いはてやひとの思ひしるまて

と麗しくかゝせ給へり。

宰相中將實勝は宇陀山の麓にて。敵勢を追散し貢税の長唐櫃を奪返しゝかと。その半を敵の爲にとられしかば。無念とは思ひながら。已を得す。實隆に功を讓りて。立かへりしかと。實隆かこれか爲に。罪科に處せられやすらんと。危みしに。思ひもよらす。關白の嫡男中納言師常かいかなる心にやありけん。いろ〳〵に中なためて。罪科に及はさりしときゝ。心落居たり

しに。測らすも。大納言典侍よりの御文とて。一人の童か忍ひやかに。もて來るを。心ともなく開きみるに。筆の迹もうるはしく。その兄か爲に盡せし誠をねもころに。悦ひたるさまの。細やかにして。末に及ひて。ほのめかせし深き念もこめたる詠歌に。いといぶかしく思ふものから。かねて。殿上の御歌合の時ほの見し人の面影。いつしか。心にとまりしを。思もがけず。彼方より言ひおこされしをみて。岩木ならぬ身の。心動き。宮のうちに多かる女官に。その名高く文才のすぐれしのみならず。雄々しき心ももたれしといふなる人の。かくまて。思はれしに。かへしをえせすもあらず。情無きものといはれん。されど。男女みそかに。文をおくり。物なんといひたらんには。宮のうちのおきてに。背かむも心へるし。さりとて。答ざらんも。いかゞと。大方の花紅葉の事をおほだかにいひなし。深き心のましまさは。遠からず。父君に聞えあげて。緣を結び侍らん。心長くまたせ給へかしと。ありて。返歌ありしとを。きゝ漏らしたれはしるさず。大方は

同じ心なるべし。この頃男女の際は文書きかはして。その誠心をこゝろみ。またしてのちに。漸くその心に從ふ習はしならば。男女かたみに歌詠み返へしするはめづらしからず。これも。さる類にやあるべき。典侍はこの返しをみて。實勝朝臣かまさしき心を酌分けられしを悦び。又文のおもてには。鮮明にはいはざれど。深き心を含めたる趣をさとりて。かゝる人にこそ。一生をたのみ聞えてましと。父君にも折もあらば打出して見ばやと。思はれしかど。然するに恥ておもはす日を過しぬ。

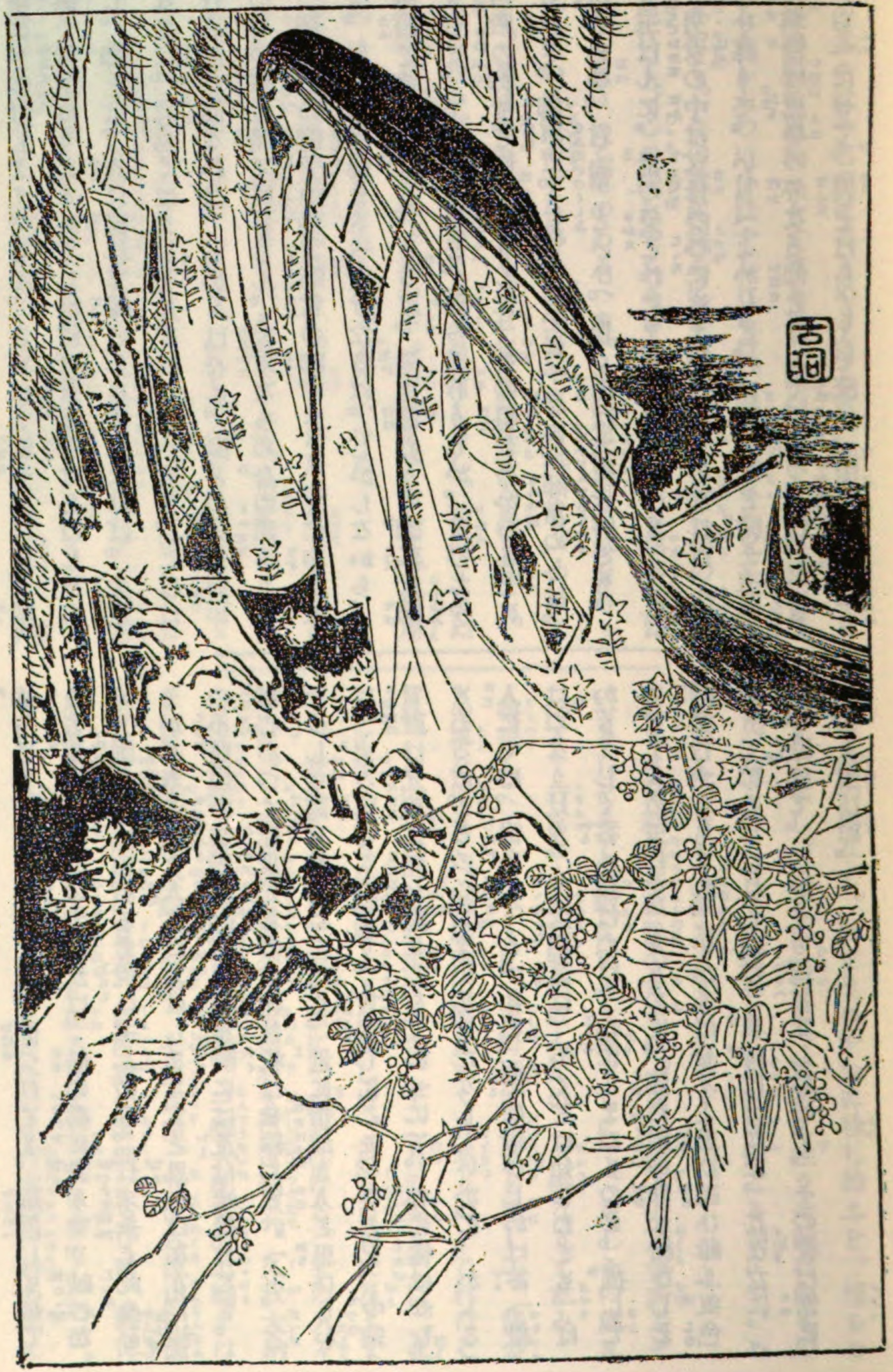
中納言師常卿は父大臣の御蔭によりて。年なほ若けれども。司位。思のまゝに。滯ると無ければ。思ひ人も數多あり。されど心にかなふ人もなし。唯大納言の典侍こそ。昔名高き紫式部の才ありて。小野小町のうるはしきを兼ねたるものとぞ思はる。いかにしてか。我北の方にものせんと。よゝ物言ふおもとして。さまさまに申させ給ひ。又文などをもおくりて。深き心をいひしらせしかと典侍は。たゞつれなくのみ。物言かく

れど。答もせず。もとより常の輕々しく。心淺き性ならねば。さも有らん。人に異なる程の情をみせずもあらば。いかで我念を志らすべき。いかなさん折もがなと。待ちゐたりしに。中將實隆が伊賀の貢税の事につきて。大方ならぬ越度ありて。心を苦しむるよしをきゝ。斯るをりにこそ。我誠心をみする時なれと。父關白大臣をなだめて。その科をゆるめ。さらに。又多く貨をもて。かの貢税の巻絹。染布砂金宋錢などまて。貢税の帳目にのせられたる數を。もとの如く。償はしめ給ひしかば。中將は科なきのみならず。行在物乏しきおりなるに。恙なく多く絹布砂金錢さへ數を盡してたてまつりしは。その功勞少からずとありて。恩賞の沙汰に及ばれけり。こは中納言が窃に大殿に申し給ひし事のあればなりとぞ。

冬にもなりぬ。山の木ともは。常盤なる松檜などのみ霜にも。雪にもわせず。その色はかはらねど。風の音はでう／＼と響わたりて。物すさまじ。溪間の水は凍りけん。音もなく。名ある櫻は多けれども。いづこに春を待にやあらむ影だになし。

洞院大納言實世卿は公事ども終りて。宿所にかへり給ひしが。御使をもて。典侍の局に志ばし御暇を乞申て召させ給ひぬ。典侍は如何なる事のありて。呼はせ給ふやらんと。胸うちさわぐものから。掌侍の御もとにまゐりて。かくと申して御暇を賜はりて曹司に下り給ひ。手輿に乘りて。遠もあらぬ。父君の御やとりを訪はせ給ひぬ。實世卿は衣冠を脱ぎき。直垂に烏帽子して。火桶によりて。おはせしが。典侍のまゐりしときゝ。こなたへと。招きよせ。中宮のいつにかはらせ給はざるをきゝて。打喜び。行在所は都にかはりて。物寂しくおはしませば。いかに明しくらし給はんやと。心落居さりしが。御との言をきゝて。胸やすく思ひぬ。いふうちつけにまねきしは。餘の事にはあらず。御とを迎へ給はむといふ人のあるを。いかにゆるしてんやと。いと忍びやかに仰せらる。

さては油小路の中將殿より。かねて仰ありしとく。父君にうち明かさせ玉ひしにやと。まづ面赤ふなりて。



菜摘川

何事にかおはしますやらん。さらにえ辨へ玉はす。唯隈無く仰玉はりねとありしかは。實世卿はしはしうち案し。御とは。人に勝れて雄としきものなれば。夫定めなとは。容易くはえすましとは。思へとも。これは已むと無き筋なれは。いかゝはせん。御との兄中將か先つ日の事は聞てはあらん。大方ならぬ身の過ありしを。關白殿の御子中納言師常の卿。さま〲に申しなして。思はぬ恩賜をさへ受けたるは。しかしなから。中納言との丶情なり。さるは。深き旨ありて御事を靡かせむと。下心なりしと。知らてありしか。きのふ夕關白殿の御もとに。参りしに。その事をあからさまに仰られき。御事は。これをいかにや思ふ。師常ぬしは。官位といひ。君寵といひ。ゆく末は大臣大將とも。なり玉はんに。世の榮これにますとやあるへき。されと。男女の中は父母の心にもまかせぬものなれは。よく思ひ謀りて。いらへよかしと。つぶ〲と聞え玉へり。典侍は思ひの外なる仰をきゝて。胸つぶれ。一言のいらへはせて。涙をはら〲と流し。中納言殿は。去るとしよりさま〲に。仰つれとも。御返しもせてうち過きしはかの方さたは。時の勢に誇りて。誠心なく。唯表にいろあるを悦ひ玉ふのみ。行末永く此身をまかせ奉るへき人にはおはしますと思へはなり。油の小路の中將殿は御姿は師常卿には及はせ給ねとも。誠心あつく此度兄君の危難を救はせ給ふといへと。之を少しも誇らせ給ふとなく。世に情深き人と思ひしかは。去る頃こなたより。言寄しにこそ。さるを。中納言殿は兄君に誠を盡せしを。かせにて。心に從はせむとあるは。その心さまいときたなし。いかに。かゝる人にやは。從ひ奉るへきと。思ひ給ひしかは答へ給はぬなりけり。父大納言は。かくとは知らねとも。はか〲しく答へ給はねは。心にしまぬものを。推しても。すゝめ玉はす。さりとて。關白殿か仰せ給ひしを辭まむやうもなし。いかゝはせんと思ひ惑ひ給ふ氣色おもてにあらはれしかは。典侍はかなた。こなたに。思ひ亂れて。とかくも返答なし給はす。その夜は宮にかへり玉ひぬ。

この冬もはや名殘になりぬるほとに。洞院家には俄に典侍の局の里かへりとなりて。關白家の中納言殿にまゐるよし人のいひはやしけるは。誠にか父と兄との爲に心折て。この君に從ふにやあるは若き心に後の榮花を思ひて。心の操をやふりしにや。人知れぬ秘事を誰かおし量りいふものあるへき。中將實勝はこれをきゝて。いかに憤やすらんと思ふに。さは無くて。つねよりも。なほ心地晴々しく。日毎に郎從等と馬を馳て。太刀を合せ。弓箭を携て山々を狩くらし。宿直ならぬ日は深き山に入りて。木の下。岩陰とやとして。宿所にかへらざるときもありと。人はいひぬ。

典侍は中納言師常卿の御もと。娶くべきに定りて。このとしの末に。婚儀あるべきなりしに。山風のさはりにや。又いかなるゆへにや。いとあつしき。病にかゝりて。枕あからぬよし聞えたり。父大納言は申もさらなり。母北の方兄君中將なとの。驚大方ならず。師常卿もこれをきゝて。日毎に洞院殿の宿所に來まして。典藥頭に仰せて。御藥をすゝめ。又吉水院の僧正に仰せて禱の事なと。いとまめやかに物し給ふを。情らせ給ふとなし。いまた一日も。ともに住ませ給はぬものを。斯くまてせさせ給ふと。宿世如何なる契にや。おはすと。きく人涙おとするもありとか。

さても足利尊氏義詮の父子は。その家人一族等多くそむきしをもて。戰にいとま無りしにて。もしその虚に乘りて行宮より攻寄せ給はんには。大事なりと危み。義詮して。さま〳〵に。吉野殿に怠狀を申して。降參の事を申なし。御歸洛の事をすゝめ奉りぬ。これはこれ。この年十一月の末たりき。十二月に至りては。北朝に事へける公卿殿上人をはしめ。百官百司に及ふまて。我おとらしと。吉野殿にぞ參られける。その人々には。二條關白良基公。近衞右大臣道嗣公。久我大納言道相卿。鷹司大納言冬通卿。三條大納言公忠卿をはしめ。先官の公卿非參議。七辨八座。五位六位山門園城の僧綱三門跡の貫首。諸院家の僧綱たらひに。禪律の長老寺社の別當神主に至るまで。我先に參りしかは。さしも今まて冬枯ていともさひしき行宮唯一時の間に

花の都とはなりてけり。榮花盛衰かはりゆく世の中とはいひなから。いと目醒しきとにてありける。ざれど今まて。北朝につかへし人々は一階一級をそ。おとされけるとぞ聞えし。

行宮伺候の關白殿をはしめ。洞院大納言なんとも。さま〳〵の公事とも繁かるに。典侍の病も輕ろからねば師常卿との婚儀の事もそのまゝに過きゆきぬ。斯くてこの年もはやくれて。春になりぬ。義詮降參を請申せるも。頓に御歸洛の鳳輿をめくらさるべくもあらねは。皇居はなほもとのまゝ吉野にまします。されば。白馬踏歌の節會も行はれず。寅の時の四方拜三日の月奏ばかりありき。いよ〳〵來月は山中を彼立ありて。住吉に行幸なるべしと仰出されたり。山中の御留守には。洞院の大納言實世卿をはしめにて。油小路中將實勝朝臣もとゝめらるべきうちにありしに。實勝は關白殿の御館にまゐりて。實勝この頃。しばらく行在にのみ伺候し候ひしかは。久しく戰場にのそまず。此度の還幸は兇徒が降服のやうに申せども。その實は。まとの歸順とは思はれず。恐くは歸洛に及はせ給はずして。合戰始るべう存して候。かゝる際に空しく御留守を守りて候いんは。腰脱けたりなんど。武士どもに嘲けられむも口惜し。いかて供奉の數に入らむとを望み申すよし言を盡して申しければ。このよし奏聞しけるに。主上もかねて。實勝が武勇をしろしめして。さらば。召し連れよとありて供奉のうちにぞ加えられける。

典侍は去年の冬より。いたづきに臥して。父君はさらにもいはず。母北の方兄君。さては。中納言師常の卿も。日毎に詣來給ひて。看とり給ひしかど。はか〳〵しくも。おはしまさず。さるに。此頃主上住吉に行幸の事など聞えて。萬おはたゞしく。物騷しかるに。典侍は病の床につく〴〵と。身の越し方行末を思ひつゝ。涙にくれて。おはしけるに。いとめづらかに。油小路の中將實勝ぬし。まゐ來玉ひぬと。御もと人の申つぐに。典侍は胸つとふたがりて。我にもあらで。ゐ給ひしが。北方はそれとも知らねば。兄君の御爲に危きを救はせ玉ふ事もあり。又典侍の病の臥しゝはしめより

打ふし問はせ玉ひし事もありしかば。みつから立出て。實勝をしるべして。翠簾の外に請し給へり。

實勝は。これより先。折ふし訪來りしかど。典侍には。親くものいひし事なかりしに。いふは。思はず。母北方のみつから。導きせられしかば。翠簾の外に座して。そのありさまをみ給ふに。はつか一月餘にして。病にやつれ。花の如く。月の如き。かたちも。頬瘦せ。眉うちひそみ。無量の愁をこめて。簾のうちに。垂れこめたる姿は雨になやめる海棠は物かは。髪はみたれ。眼は濕み。さしも美人と宮の中に。めてくつがへられ給ひし人とは思はれず。實勝は愀然として。これを見て。懷紙を出して落る涙を押し拭ひけるが。詞少にその病を訪ひ慰め。かねて誓ひし事なんどは思ひも出さゝるが如し。こはこれ。典侍が中納言師常がもとに。ゆかむ事をゆるせしは。その心より出しに非ずと。知りたればなり。さて此度主上足利義詮が申請　奉るを受け納れさせ給ひて。住吉まて還御なるにより。己も供奉の命かふむりしとのよしを告げたりけるに。典侍はこれをきゝて。實勝か心をくみもしりたるにや。頭を垂れて。しばらく物いはざりしが。母北方のあたりに居らざるをみて。いと忍やかに。此身は。恩義の爲に。父母兄との心に從へとも。我魂のみはと。跡いひさして。俯し沈み給ひぬ。實勝これをきゝ死したる人の如く。身動きもなさゞりしと。半時ばかり。やゝありて涙をはらひ立むとせられしかは典侍すこし。身じろきて。

何となく。心にかゝる白露のおきわかれゆく袖の氣色は

實勝も涙をおさへて。

別路の露にはあらぬ嬉しさをやがて袂につゝみこそせめ

斯くて。實勝は郎從備後助忠幹を從へて。供奉に從ひしに。かねて生死を共にすべしと。誓ひし宇陀郡の野武士住民二百餘人馳參しければ。これをもともなひて。龍駕の御あとにつき。正平七年二月廿六日南山を發し。此日は東條に御滯留なり。つぐの日住吉にぞつかせ給

ひける。楠木左馬頭正儀一族を率ゐて參着し。窃に義詮の降服は全く僞の謀なれば。唯此虛に乘じて。京都を攻たるへきよし。奏問したれば。はじめより。さもやと。思召したれば。すでに武藏相模等の國々に。去年より勅使を下されて。故新田左中將等か子息等を催促せしめたれ。東西一時に起りて。京都を攻らるべきよしを仰出さる。閏二月十九日住吉より八幡山に鳳輦を進め給ふ。關白師季公を始め。百司百官これに供奉し。實勝もこれに從ふ。同しき廿日中院右衛門督顯能卿は三千餘騎を率ゐて。鳥羽より押寄せ給ひしかは。實勝は先陣をうけ玉はりて。眞先に進み。京都に攻入りしが。足利義詮は。細川讃岐守賴春に命し防戰せしめしかと。一戰に敗北し。賴春は討死す。楠木和田一族の兵も桂川より討入て攻戰ければ。義詮こらへずして。近江を指してそ落行ける。實勝は八幡に引かへし。このよし奏しければ。主上叡感斜めならず。實勝の位一級をすゝめられ。從三位に叙せられけり。實勝は又京都にかへりぬ。

かゝりしほどに。關東にて。官軍利あらず。兇徒勝に入りしにて。義詮これに氣を得て。再び大軍を率ゐて近江より討ち出て。三月廿四日京都にて攻よせける。中院顯能卿は。その勢におそれて。八幡に引退かんとせらるゝを。實勝これを諫めしかと。聽入れざれば。已ことを得ず。殿して敵を斬り拂ひ。八幡にぞかへりける。敵勢これにのりて。雲霞の如く。八幡山に攻めよせて。日夜を分たず攻戰ふ。實勝は。宇陀郡の野武士等と必死となりて防戰し。楠木一族も同じく命を惜まず防ぎしほどに。五月の初まで。屈する色なく持こらへしは。實勝等が力なりと人はいひけり。此月の十日に至り。城の兵糧盡きしかば。城中に籠りし伊勢熊野の兵ども心替りして。敵に降參す。實勝は御前にまゐりて。今ははや。かうと覺えて候。實勝御迹に殘りて防戰仕るべしと申て。半夜ばかりに。主上をば寮の御馬に乘せまゐらせ。百官これに御供奉して。吉野を指して落ゆかせ給ふ。敵遮りとゞめしかば。實勝はかねて誓ひし。勇士等と命かぎりて戰ひしかば。敵は悵

れて一方の血路を開く。この隙は主上は山本判官がまゐらせたる。黄絲の鎧を召されて。落させ給ふ。實勝は踏とゞまりて。血戰しけるに。主上は。はや遙に見えさせ給はず。敵もこれを追奉るに及ばざりしかは備後助忠幹主に向ひ。味方は死するもの多かれども。敵も戰つかれたりと覺えたり。はや。この間に落させ給へといひしかど。實勝頭を掉りて從がはず。我は思ふ心ありて。この塲に於て討死するぞかし。汝はこゝをきり拔けて。吉野にかへり。これを紀念として。大納言の典侍にまゐらせよと。兜を脱ぎて髻を引出し。腰刀拔てふつゝと推切りて。わたしおき。馬に一鞭して。とつて返し。敵中に入り花々しき討死をぞ。とげにける。

備後助忠幹は。主の遺言に已とを得ず。八幡を落ちて主上の御あとに從ひ吉野にかへり。さて洞院殿の宿所に至り取次の女房をもて。實勝が遺言のおもむきを告げて。件の髻をぞ出しけり。典侍は實勝とわかれしより。病ます〳〵おもりしが。これをきゝて。悲みに堪へず。守る人のすこし怠たりける隙に。こかれ出さゝせ給へは。夕暮の程なりければ。然らでも。道のおほつかなきに。河音の幽なるかたを。志るべにて。菜摘の川のほとりにたどりつかせ給へれども。月さへうとき。山陰の螢をかすかに。たのみ給ひて。岩の面にさたかならねど。一首を歌を志るして。御身をみ沈め給ひける。典侍の迷出させ給ひしを。あとよりしりて。松どもともして。尋ねしめくりしに。この岩のほとりに。來て件ののこし給へる歌をみるに。

山陰のくらき暗路にまよひなん。なつみの川に身を沈めなは

（終）

この小説は吉野拾遺太平記諸書によりて。事實をもとゝして。聊か演義の趣を加えたり。世の架空の事さのみ見なす可らず。よく正史を讀み。しかるのちこれを讀むときは。作者苦心のほとを志らんか。文章もまた拙しと雖も。當時の躰に摸せり。よく古書をよむ人は我用意苟もせさるを解せらるへし。

學海居士志るす

お伽噺

黄金の孔雀

嵯峨の屋主人

昔々の其昔陸奥の國に倶怒部猛といふ、恐ろしい荒々しい酋長が有ました、此人阿部貞任宗任なんぞよりももつと強い酋長なのです、大變な戰爭好で、年中どんちやん〳〵と戰爭斗して、四方八方の敵を攻立て、大變領分を擴めました、然し如何樣强い人でも齡を取ては仕方が有りません、此人も六十の坂を越てからと いふものは、大變躰も弱つて仕舞つて、今では自分の領分內へ閉籠り、絕えて戰爭を仕懸なくなりました、すると四隣の酋長は此樣子を見て、「占た、今迄予達を散々意地目たから、是からは一ッ意趣返しをしてやらう、」と追〳〵其仕度を始ました、此爲め四隣何となく騷しく、今にも敵が押寄せて來さうな噂です、

倶怒部は大に驚きました、「斯西も東も南も北も、一時に騷ぎが始まりさうでは、迚も是は防ぎきれないぞ、如何したら宜らう」と心配の餘り頭痛がするので、鉢卷をしながら考へて居ましたが、ふと自分の領分內に、蓬仙人の弟で鳥仙人といふ、袋から鳥を出すといふ仙人の居る事に氣が着きました、「うむ、是は巧い、あの仙人を賴んで、一つ彼奴に防で貰はふ」使を仙人の處へやつて之を呼び寄せ、如何歟敵を防でくれと賴みました、其時仙人は袋から一個の黄金の孔雀を取出して、「然らば大領主、此孔雀を貴君に御貸し申しますから、是を長竿の先へ突さして、城の土壘の上へ立て置き遊ばせ、世間が靜なる間は、此の孔雀も靜にして居りまする、若戰爭でも始まりまする、と此孔雀忽ち羽搏をして、ぐるりと戰のある方に向て鳴出しまする、左樣したら其處へ兵を出してお靜めなさいまし、何の御心配に及びませう」と事も無げに申しました、倶怒部は之を聽て大層喜び「其は誠に有難い、若お前のいふ通り、此孔雀其樣な奇功を奏したなら、禮は望に任ずるで有らう」言葉をつがへて仙人を歸しました。

少年諸君よ、今孔雀は長竿の先へ突さゝれて、お城の土壘の上へ立られて有ます、好番人では有ません歟、黄金の孔雀、勿論黄金ですから食物などは喫もしません、是程手數のかゝらない番人はないでせう、扨戰爭か何かゝ始まると、此孔雀忽夢からでも覺た如く、ぐるりと騷ぎの有る方へふり向て、「あゝら大變、罪の戰に血潮が湧くよ、血潮湧すな、戰をするな」と鳴出すのです、すると起りかけた戰も忽ち靜るので、倶怒部は大層喜んで、是は好番人を置當たと思ッて居ました、然し孔雀は何時も此樣な力を現はします歟如何です歟。

扨其後は殆んど一年程といふものは、絕えて戰沙汰の騷ぎもなく、世間は全く靜でした故孔雀も全く靜り返ッて、長竿の先へ突されたまゝ、空しく雨風に曝されて居ましたが、或朝の事、倶怒部かまだ寢所をも出ざる處へ、家來の者三四人周章しく飛込んで來まして、大領主未だ御目覺めあらせられませぬ歟、寐て居る處ではございません、敵軍境を侵しまする由、只今國境より忠信ありました、早疾く御出馬の御用意御用意、と叫びました。大領主倶怒部はおくびまじくり起上り、ねぼれ目をこすりながら、何ぢやかしましい、如何致した、何？、敵軍境を侵すとな、うむ、孔雀は如何致した、倶怒部は窓の下へ立寄つて、長竿の先の孔雀を見る、と孔雀は羽搏をしながら東の方に向て、「あゝら大變、血腥き風は野を吹拂ふ、」と聲高く鳴て居ます、何ぢや血腥き風が野を吹き拂ふ、其は大變、一大事、者共急げ、馬に鞍置け、早疾く出陣の用意を致せ〳〵と倶怒部は自分の總領息子を大將にして、一隊の兵を遣しました、其處で孔雀は鳴止んで、靜り返つて居ますから、是で安心と倶怒部は安心しましたが、然し其安心が僅の間、息子が出陣してより八日の日は經つが、戰先よりの通りが有りません、戰が有たのだかまだ無いのだ歟、敵は逃去て仕舞ッたのだ歟、其とも味方が敗られたのだ歟、梨の礫の音沙汰も無です、其中に孔雀は叉棒の先で、「あゝら大變、血腥き風は野を吹拂ふ、と再び元の如く鳴始ました、是はまあ何といふ事ぢやらう、若や味方が敗軍したのでは有るまい歟、と倶怒部も今は氣が氣ではなく、再び一隊の

兵を集めて、弟息子を大將として、兄の援兵として使はしました、すると孔雀は又鳴止ました、今度こそは大丈夫、兄弟必ず力を併せ、敵を破つて歸るであらう、と倶怒部も聊か頼母しく、心待に待て居ました、

其中に八日の日は空しく過去つたが、然し二人の通りは絶えて有ません、是はまあ何といふ事ぢやらう、若や味方が敗られたのではない歟、倶怒部は全く氣が氣では有りません、孔雀は再び鳴始ました「ああら大變、血腥き風は野を吹拂ふ、」倶怒部今は堪がたくなつて、自ら大軍を引卒し、二人の息子の安否如何、戰爭の有樣は今如何に、と案じわづらひながら、茫々として際限もなき奥の平野の野草を蹈んで、東に向て進みました、然し行ども／＼先に進んだ軍勢の影も形もなく、陣屋の跡も見えません、是はまあ何といふ不思議だらう、倶怒部が城を出てより、恰度八日目といふ日の夕方、彼は兵を進めて領分境の山路へかゝりましたが、此時倶怒部は遙なる山の頂に、白地に黑く家の定紋を染出したる陣幕の張て有るのを見出しました、扨はあの中にこそ兄弟陣取て居るので有らうと思ひ、嬉し喜んで來て見れば、陣屋の中は寂として人一人も居りません、不思議に心得て山上より遙の谷間を見ると、其處に又一隊の勢が居ると見え、一連の陣幕が張て有ります、彼處にこそと嬉し喜んで來て見れば、此は如何に、四方には討死の武士枕を並べて倒れて居ます、血は野草を染て、鴉が屍に群居る恐ろしい光景、一目見て倶怒部はあつと斗驚きました、彼が最愛の二人の息子も、甲も着ず、鎧も着ず、互に刺違へて死んで居ます、此時の倶怒部の心は如何樣で有ましたらう、兄弟二人の亡骸を抱て、天にあこがれ地に俯して、呼べど叫べど魂の緒は、天に歸りて地には來らず、彼は空しく慟哭するのみ、家來の武士も主の歎きに涙にくれ、鎧の袖を絞りましたが、又如何する事も出來ません、此時傍の陣幕風の爲に動いて、倶怒部の眼の前につと斗り一人の美人が輝く如く現はれました、倶怒部は日の目を見た夜の鳥の如く、茫然として其美貌に打れ、忽ち胸の歎きをも忘れ、恍惚と其顔に見とれて居ました、美人は莞爾として倶怒部の手を

探り、誘ふて陣幕の中へ引入れ、山海の珍味を出して之を饗し、其夜は衾の中へ入りて共に伏せりました、倶怒部は美人の待遇に魂を有頂天外に飛し、殆んど夢中になッて、二人の子の死だ事も忘れて仕舞ひ、現を拔して酒宴の間に日を送つて居ました。」

然し左様何時迄も陣屋の中に住ッては居られません、終に倶怒部は美人を伴ふて兵と共に居城をさして歸ッて來ました、然るに倶怒部の留主中、城内にはもう是等の事が風の便りに聞えて居ます、人々も有る事無い事種々の噂を立て、針を棒程に言ふらして居ます、愈倶怒部が城門近く美人と共に駒を並べて來ッた時、城中の民は美人を見やうと、我か／＼と城門の方をさして立出ました、此時群集の中に一人の白衣を着た老人が居ましたが、今城門を入らんとする倶怒部を見るや否や、恭しく其馬前に進みまして「大領主よ、君が美人を伴ふて歸りたまふのを賀します、某君と昔お約束をした事がございます、何卒今日其お約束の御褒美が頂きたいと、斯申しました、此老人は誰あらう、即ち鳥仙人なのです、倶怒部は鳥仙人を見て、おゝ鳥仙人なる歟、ようこそ出迎に出た、大儀に存ずる、約束の褒美取らするで有らう、何なりと望め、然らばお言葉に從ひて望みまする、如何歟君の御傍に居る美人を下さりませ、鳥仙人は憶する色もなく申しました、之を聽て倶怒部は如何に驚きましたらう、自分が現在現を拔して居る美人をくれといふのです、是は驚かずには居られますまい、否とよ仙人、余は其方に褒賞をやる約束はしたが、此美人丈は許せ、其は餘り法外で有らう、美人を除て何なりと望め、否、他の者は欲くはございません、唯美人を頂戴願ひたうござる、是非に／＼と申しました、何ぢや、たつてくれいと申すの歟、あの此處のうつけ者め、汝亂心致した歟、天魔にでも魅入られし歟、美人はやる事はならぬ、否美人でなければ某も要りませぬ、是非美人を下さりませ、君既に何なりと望のものを遣ると被仰れ、今日になりてならぬとは、君には虚言を仰せらるゝ歟、えゝいふな老耄、領主に向て無禮過言、余は腰刀は達には挿さぬぞ、諸人の見る前余を辱しめて、容捨はならぬ

覺悟に及べ、と腰刀を拔や電、咄嗟仙人に斬付ました、何條以てたまりませう、仙人は頭面を破れた竅所の痛手ばつたり後に倒れました、群る所の人民は之を見て顫へおのゝきました、然し傍に立た美人は之を見ても少しも驚きません、却て冷やかに、ひ〳〵〳〵は〳〵〳〵と笑ひました、其笑ふ聲は恰も惡魔の樣な笑ひでした、罪なき人を殺すといふ、是は恐ろしい大罪です此の如き無慘な罪惡を見て、其で少しも恐れぬとは、此美人は如何に恐ろしい鬼心の者でせう、然し倶怒部は魂をとらかされて居るから少しも怪しみません、美人と顔を見合せて莞爾とし、駒を並べて城内へ這入りました、諸君よ此樣な罪惡が罰せられずに居ませう歟、此時長竿の先に立てられた在た孔雀は、忽ち羽搏をして竿を飛離れ、倶怒部の方を望んで飛んで來ましたが、つと其頭へ捷りました、人々あれよといふ間に、孔雀は其鋭き嘴をふるつて激しく倶怒部の額を突ました、倶怒部はあつと言て鞍を返して落馬しましたが、其まゝ息は絶えて仕舞ひました、之を見ると美人の姿は、忽ち掻消す樣に消て仕舞ひました、

少年諸君よ、諸君が生長して世間へ出たまふ時は、到る處で此樣な美人に出遇ふのです、倶怒部の二人の子が刺違つて死んで居たのも、兄弟此美人を爭つたからです、御用心々々々!

雜錄

うつゝの夢

トルストイ作
丹下時子譯

昔ある市にマーチユーン、アデッチと呼ぶ靴師住みけり。彼が家は市街に向ひて、窓一つ有ちたる小さき住居なりき。彼は常に此窓より、往來の人をながむるを常とせり。窓は低ければ道ゆく人の姿は見えねど、其足のみは見るを得き。彼は其穿てる靴を見て直に何人

なるかを悟りぬ。彼は年久しく、同じ所に住みたれば、多くの花客を持ち、或は靴の上部を切りかへ、或は底を入れかへ、廻りをかゞり、或は新しきを調ふるなど、何によらずうけがひぬ。されば、此市人にして彼の手にならざる靴を穿つはいと稀なりき。彼は性質正直にして、約へし言は決して違へず、出來べしと云へば必ず作り、出來ざるものは出來ずとてうけがはず、品も良きを撰び、仕事はいと丁寧に、さりとて無法の賃錢を貪らねば、仕事は常に絶ゆる事なく日々をせはしく送りぬ。

彼は若きより性質善良の者なりき。年老いゆくに隨ひて、精神の事、神の事に切に心を入るゝに至りぬ。彼はなほ主人の家にありしほど、妻もありき、子も三人ありけれど、皆世を早うして末の子の三つなる一人殘りけるが、妻もまた逝きぬ。

男の手一つに幼兒を殘されて、如何ともなすよしなく、己が妹の許に預けばやと、一度は思ひたりしかど、他手にかくる事のいたはしく、よし如何なる事のあらばあれ、我手にはぐくみてんとて主家を辭し、近傍の家に其子諸共、起臥する身となりぬ。

かくまで愛しみしかど、彼は子に、幸うすくやありけん、やゝ長じて父の助けをなすべき程となりし頃、一週間ばかりの病に、父を殘して世を去りぬ。

さしもに善良なりしアデッチも、重ね〳〵の幸なきに心を落すこと一方ならず、神もなきか天道もあらぬか、いかでかゝる憂目を見せ給ふ、若きを殘して老の身をとり給はぬことの心なさよと、いひ〳〵て果は神まうでも何かせんとて、教會へも行かずなりぬ。

七年ばかりも他鄉にありし村人の、或夜歸り來りて彼を訪ひけるに、アデッチは語るやう、いかで我は斯く幸なきにや、三人の子供も失せ妻も失せたるに、又も末の子まで先立てし事の口惜しきかな。はや此世に何の樂しみなし、死なん方まさらん、日頃の賴みは只此事のみ、一日も早く死なまほしきかなとかこてば、客はさへぎりて、さりとては心あさき事をいふものかな、人は神の御所業に喙入るゝ事かは、世界は絶えず動くもの、されど汝が力にてはなし、只神の御力によりてのみ、汝の子

息は死すべきにて、汝は今暫しながらふべきものとて、かくはなし給ひし事、とまれ何事も惡しき事はあらじ、汝の世をうしとはかなむも、つまりは己が事のみ思ひて。おのは一人樂しからんと思へばこそかくはあるなれと聞きて、アデッチハ、さらば何の爲め此世に住むべきは、もし己の爲め住まずとせんには、何の爲なりぞと問へば、只神の爲のみ、神は汝に命を與へ給ふ、されば汝は神の爲に世を渡るべきのみ、神の爲め世の爲を思ひて世を渡らば、何事も安らけくなり、憂もなく悲も消え失すべしといひさとす。アデッチはしばし言葉もなく、さしうらむきてありけるが、やがて、とはいへいかにして神の爲に世を渡るべきかといふ。かれは、客は答へて、汝は字は讀むらん、聖書一冊求めて勤めて讀まれよ、何事も其内に記しあれば、それにて神に事ふる手段も知り得べしと。

客の言葉のいかばかり彼の心にしみわたりけれ、客の去ると其儘書店に走り行き、活字いと大きなるを求め來りて讀み初めぬ。初の程は休日にのみと定めしかど、讀み行くまゝに興味やましけん、後には日々讀む程になりて、はては夜更くるまでも讀み入りつゝ、燈の油つくるも猶止めん心なきばかりになりぬ。これより彼は讀みゆく每に、文の意もとり易くなり、心も胸もいと安らけくなりぬ。先にはさむるもいぬるも、愛子の上のみ心に浮びて、悲しさ堪へられざりしに、今はいと安らけくねふりにつくに至りぬ。

アデッチは望とてもなき身の、これまでは休日の折には、一人我家に閉ぢこもり、茶など入れて樂しみ、又友どちよび集へて、いさゝかの酒くみかはすを、此上なき樂みと爲し、時には酒きげんの心地よきまゝに、家を立ち出でゝ大聲に雑言などいふ事も度々なりしが、是れよりはひたすら變りに變りて、酒も飲ます心もをだやかに、いと靜けく安らけく暮すに至りぬ。

彼の晝の間は家業を勵み、夜に入ればつるせし小ランプ取下して机の上におき、彼の最愛の書取り出して讀むを日々の樂しみとせり。

或夜常の如く讀み居しに、路加傳第六章に至りて、『凡て汝に求めは之に與へ、汝の物を奪はゞ、其をまた求むる勿れ、おのれ人にせられんと思はゞ、又人にも其如くせよ』とあるにあたり猶よみ行きて『凡て我に就き我言を聞きて行ふ者を譬へて汝等に示さん、其人は家を建つるに土を深く堀りて、其礎を磐上に置けるが如し、洪水のとき横流其家をうつとも動かすこと能はず、これ其基礎を磐上に置けばなり。聽きて行はざる者は其礎なく家を土の上に建てたる人の如し、横流これをうつときは其家直に傾き其頽壞また甚し』と、此所に至りて喜ぶ事限なく、眼鏡を脱して書物の上に置き、机上に頬杖つきてしばし夢想に沈みつゝも思ふやう、さても我身は此等の言葉に叶ふべきや、我心に立てし家は岩の上かはた砂の上なるか、岩の上ならばよきも……嗚呼我身、獨の時は主の御言を守るも守り易けれど、傍に人ある時または神我が身を忘るゝ時には、罪おかす事も多き哉。されど何所までも此むつかしさに打勝たん爲め勤めはげむべしと、種々の思想にかられつゝも、彼は臥床に入らんとして、猶書をすて得で七章を讀み初め、百人の長の事、寡婦が息の事等、讀み去り讀み來り、はては四十四節に至り、幾度か〳〵その意義を思ひ廻らし、やがて眼鏡も取りはづし猶も思に沈む樣、思ふに彼のパリサイ人は我と同じ心もちたる人なりけん、嗚呼我も此年月他人の事とては思はで、何事も己の事のみ思ひ暮しけるよパリサイの人は常に己が身の事のみ心をつけて、客の事なとには少しも心を入れざりき、我もまた我茶は飲頃なるや、味よきやいかにと心を入るれど、かつて客の茶はいかにとは思はざりき。さるにても彼のパリサイ人の客とはそも何人!、キリスト自身にありけるを、もし今キリスト我許に來り給ふ事あらば、我も彼のパリサイ人の如く彼になすべきか、



さても〳〵とうなづきつゝ、いつとはなしに眠りけり。

アデッチーと何人ともしらず呼ぶ聲に目さまして、戶口の方をながむれば人もなし、夢なりしかとまぶたを閉ぢまどろめば、又もアデッチよ我は明日の日汝を訪はんと聲も明かに語りぬ。夢か誠かといぶかりつゝも、燈消して明くるをまちぬ。

東雲を呼ぶ鳥の聲に起き出で、まづ朝の祈をさゝげ、召使ふ者もあらぬ身は、かまどの下も自らたき、食事の仕度もなし、やがて炊げる間とてむね當をかけ窓の下に座をしめて、早くも家業につきぬ。

さては夢なりしか、實に人の訪ひたりしか、怪しき哉と仕事しつゝも、昨夜の事心にかゝり、よし夢ならば夢にてもよし、實なりせばいかにせんと、針もつ手も休み勝にて、常にはなく窓の外のみ眺めぬ。

彼が手にならざる靴うがてる人の過ぐる時は、直に立ちて戶口に立ち、足のみにては心に足らず、如何なる人と顏までもながめぬ。

新らしき靴はきし門番も過ぎぬ、水汲む男も往きぬ、さるにニコラス帝の御代に用ひたりし服裝したる老兵士、雪かきを手にして、アデッチが窓の下に立ちぬ。彼が穿てる古靴を見て、彼は人の情に宿を得て、隣村に住めるステパニッチなるを知りぬ。彼は雪かきに雇はれしなり、やがて彼はアデッチが門邊の雪をかき排ひ初めぬ。アデッチは一目彼をながめしが、其儘靴作りにかゝりぬ。

我も老いたり。〔ステパニッチは我門の雪排はんとて來りしなるを、そとも思はで、キリストと思ひけることのおそましさよ、さても〳〵心ばし狂ひけるか、また〳〵心をとられけりと獨笑つぼに入りぬ。一針しては門をながめ、一針しては手を休め、窓の方のみ守りぬ。ステパニッチは雪かきつき立て、しばし寒さをよけんとにや窓の下に佇めば、アデッチは心の內に思ふやう、あはれや彼も老いたり、老の身に雪かくわざは堪へられじ、暖かき茶なりと與へん、げに〳〵忘れけり、汁も暖まりたらんにと、やにはに立ちて土瓶片手に持ち來り、かゝる雪中にいかばかり寒からん、內に入りて暖まられよ

とさしまねきぬ。

神は報い給ふべし、我骨々いたみて堪へ難しと云ひつゝ、内に入り、肩にかゝりし雪を拂ひ、土にまみれし足を拭はんとしければ、彼はとゞめて、かゝる事せずともよし、常より馴れたる我身なれば、心置かずとも、まづ〳〵腰かけられよ、茶も入りたり飲まれよとて、二つの茶腕にあふるゝばかりつぎて、彼にも與へ、已も飲みぬ。

彼が呑み終るや猶一つとすゝめ、又なみ〳〵と汲みぬ。かくする内も人まつものゝ如く、絶えず門邊を見守りぬ。

何人をか待たるゝと客の問へば、何人をまつとか、待つとにもあらず、またぬとにもあらず、答ふるも面ふせなけれど、昨夜夢ともあらず現ともなく、聞きし聲の耳に殘りて猶忘られず。そは昨夜ふしどに入る前に、キリストに付きての福音をよみけるが、いましも知りたるへし、キリストはいかばかり淋しき、いかばかりはかなき生活をなし給ひしかを、と聞きてステパニッチは、誠や我もきゝし事あり。されど悲しい哉、文盲なれば、詳しくはしらず。

さればとよ、其所讀みをりしは、彼のキリスト、パリサイの人の許に來給ひし所を讀みしが、パリサイ人は懇にもてなさゞりしが、もし我身なりせばいかにもてなすべきや、其仕方だにしらず、いかにすべきやなと思ひつゝ、ねふりにつきしが、何人ともしらず、我明日汝が家を訪はん、心して待てよと、語る聲の二度までも聞えけるに、夢ならん、愚かしき心かなと、我と我心をいましめつれど、猶心にかゝりて、まつともなしに待ち居るなり。

ステパニッチは子細ありげに、頭をふり、一言も云はず、茶を飲み干して側に置けば、アデッチは取りて茶を汲み、猶も語るやう、思はれよ主此世に在ませし時、人を見下け給はず、尊き許にゆき給はで、殊更に賤しき者の内を行き廻り給ひしならすや。また主が弟子は多くは我等の如き賤しき勞働者、また罪多き者の内よりえらひ給ひし人ならずや。

しかして主の御言葉に、「高ふる者は低くせられ謙遜者は高くせられん」「汝等我を主と呼ひ我は汝等の足を洗はん」「汝等の内頭たらんと思ふものは、多くの者の下僕と爲るべし。そは貧しきもの親切なるもの謙遜者は幸福なりと」ステバニッチハ老の身の涙よわくも、汲みてありし茶を飲むと忘れ、一向きゝ入りて、涙はしなく頰に傳はりぬ。

茶のさめなん、飲まれよとアデッチは勸むれど、我は今身にも心にも暖かきもてなしを受けて、いとも嬉しきかなと、暇を告げてそこ／＼に歸りゆくを、又來られよ、友に逢ふは嬉しきものをと聲かげぬ。ステバニッチは去りぬ。後に彼は殘りたる茶汲みて飲みほし、あたり取りかたづけ、又もや窓の下に坐りて、仕事を爲しつゝも、人や來ると門の方打守りぬ。彼はキリストを待つなり。彼の頭はキリストの言葉行にのみ充されて、それにのみ思ひをかられぬ。

二人連れなる兵士も行けり。一人は官衙より給せれたる價低き靴を穿ち、一人はアデッチが手になりしをはきて。隣家の主人も通りぬ。パン燒く若者も。されど待つ人は來らず。

多くの人は通り行きぬ。毛糸の靴下に木履うかちし婦も來りぬ。しばしとて彼が窓下に立ちとまりぬ。アデッチは何者と見あぐれば、此市の者とも見えぬ婦の、見るもいぶせき衣に身を包み、幼子背負ひて彼が窓に脊なすりよせ、まとへる衣に幼兒つゝまんとすれど、包まるへくもなき樣なり。幼兒は脊にありてむつかり出せは、母親はしきりと慰めすかせど、泣きやむへくも見えざりき。

此樣に、アデッチは戸口の許に走り出でゝ、婦人よ何とてかゝる寒空に、子供をつれて、しかもそこには立たるゝぞ。いざ入りぬかし。家の内は暖かなれは、とく／＼此方へと聲かくれは、婦はふりむき、胸當あて眼鏡かけたる翁の、しきりと己れを呼ひゐるに驚きぬ。驚きながらもいふがまゝに彼に從ひゆけは、翁は部屋に誘ひゆき、己か臥床をさし示し、いざゐろりの近くに寄りぬ。暖まりて背の幼兒も介抱せよかしと云へは、婦は今朝

より何物も口にせざれば、乳も出てずといひながら、背の子を下して膝にのせぬ。アデッチは己が食卓の許にいそぎゆき、パンと一皿の食物とを取り出し、猶かまどにかけありし汁の蓋とり見れば、中のものまだにえざるに、汁のみかけて食卓の上におき、側の壁にかけたる手拭はつして卓にかけ、やがて食事の用意をとゝのへ、「此なりと食せよ、小さき者は己れ守りしやらん、おのれも一度は子を持ちし事あれば、子供の世話も知りをれは、」といひつゝ抱き取りぬ。婦は翁がそなへくれたる食卓につきて、食事にかゝりぬ。アデッチは幼兒ねかせし臥床の側に座を占めて、舌つゝみ打ちてあやせど、老人の悲しさ歯とてもなければ、音も出てず。幼兒は猶泣きやむべくもあらぬに、此度は顔の前に太やかなる手さし出し、指をのへつかゝめつ口の許にさしつけて、幼兒の口に入れんとすれは、急ぎてひきのけ、頻りと機嫌を取りぬ。幼兒の翁が指を口に入れんとすれば、急き引きのけしも、彼が指は靴の手に蠟のまみれ居ればなり。



子供は彼れが指の動くを見て、泣きやみ、果はにこ〳〵笑ひ出すに、アデッチも共に喜び、餘念もなく幼兒に心奪はれぬ。婦は此有様に心うれしとや思ひけん、食しながらも語るやう、我はもと一兵士の妻なりしが、七月前我良人は何所へ往きけん、便もなく、我は人に雇はれて水下女の業にからくも其日を送りしが、幼きもの生れては誰も雇ふ人なく、三ヶ月の長の間働きもなく困しみて、僅ばかりの持物さへ皆賣り盡し、乳母にもと人に乞へば、身體細しとて雇ふ家なく、困しはてたる折から、我ばゝの主人の妻

あはれびて、幼兒もろとも雇ひくれんといひおこせたるに、喜び行かんとなしつれど、先方の都合とて次の週ならでは行く事ならず、道の程も遠ければ、いかゞはせんと思ふ折から、今の宿の主人のなさけ深き心に、二人をあはれみ、宿りを與へ給ひたれば、嬉しとも嬉しく、さなくば親も子もいかで日々を過し得らるべきかと、語るを聞きて、アデッチは太息をもらしつゝ、暖かき衣とては持たぬにやと尋ぬれば、さればなり今は暖かき衣着へき時なれど、皆賣り盡して何もなく、只一つの肩掛もちたれど、それすら昨日うり拂ひて、今はなしと語りつゝも、彼が側に歩みより、幼兒を抱きとりぬ。

翁は廣くもあらぬ家の內、彼方此方を探し廻りて、古上衣一つ尋ね出し、好きものこそ見當りたれ。これとてなきには勝らんとて、女の許に持ち來り、見ぐるしき品なれど、用にも立たば取りおきね、女は其上衣と彼か顏とを見比へつゝ、己が手に取りつゝ、うれし涙に胸つまりぬ。

翁は顏をそむけて寢床の下にかゝまり、やがて下にありたる箱とり出し、女が彼方に腰うちかけぬ。主は惠み給はん。嗚呼主は御身か窓の下へこそ我身を送り給ひしなれ。御身の惠なかりせば、幼きものも凍え死ぬべかりしを、今朝家を出てし時は、かくまではけしき寒さにならんとは思はざりしに、思へば〱主は殊更に御身に窓の外をなかめさせられしか、……アデッチはほゝゑみつゝ誠に〱主はしかせさせ給ひしなり。婦人よ我此窓なかめしも譯ありての事、とて彼が昨夜の夢に主は今日彼が家を訪はんと約し給ひし事を婦に語りぬ。婦は先に貰ひし古上衣に、幼き者まとひつゝ、彼があつき情をひたすら謝し、暇をつげて立ち上れば、アデッチは、是を持ちゆきぬ、其預けしてふ肩掛とりもとしぬとて、そこばくの金子を渡せば、婦は物もえいはて只胸に十字を記し出で行けば、アデッチも同しく十字しるしつゝ門口まで送り出しぬ。

婦は去りぬ。翁は取り散らしたる食卓の上取り片寄せ、また仕事にかゝりしが、窓の外なかむることは變らざりき。

針もつ手、靴かゝる窓の戸に人かげさせば、何人とふりかへり見るに、知る人も知らぬ人も往き通ひて、常とかはりし事もなし。やがて一人の林檎賣の媼、近所の請負場より集め來りけん、いと大きやかなる木片包肩にかけ、片手にははや賣盡して六つ七つばかりを殘したる籠もちて、家路を急ぐ道すがら、アデッチの門邊に立ちとまりぬ。そは誰が目にも重からんと見ゆる肩の包みに、媼は肩を代へんとてなりき。

媼は片手の籠を側に置き、肩の包み取り下し、ゆすりつおさへつ、包を小さくなさんとしつる折しも、破れ帽子に頭を覆みし一人の童走りより、側の林檎を一つつかみ取るやがて、走り去らんとしければ、媼はすかさずふりかへり、彼か袖をつと捕へぬ。



童はあわてゝ如何にもして逃れんと、力の限り爭へど、媼はいつかな許さず。兩手に彼を抱きしめ、帽子かなぐり捨つ、頭の髮をつかみて動かさず。童はわめき媼はのゝしりぬ。此物音にアデッチは手に持ちし槌もなげすて、鼻にかけし眼鏡を何所へかふりおとし、戸口の階段横さまに走り下りて、二人の中に走り入りぬ。媼は童が髮の毛つかみて、引きずり〳〵、巡査が許に連れ行かんといきまけば、童は我は林檎を盜まず。などかく我をさいなむや、疾く放ちてかへせかし、と身をもがきて罪に服さず。

アデッチは媼を引きのけ、童を己が腕の下にかひこみ、媼よゆるしてやりね、歸してやりね、キリストの御名の爲にと云へば、媼はチ、新しい帚が生へるまでも、此奴が忘れぬならば許しもせん、さ

れど今巡査が許へ引きゆくなり、アデッチは猶も、許してやりぬ、童は再び惡しきわざはせじ、許してやりね、キリストの御名の爲にと、ひたすら乞ふに、媼はつかみし手少しゆるむるに、童はこゝぞと走せ去らんとするに、アデッチしつかと抑へて放たず。童にいふやう、そちが林檎盜むを見たり。とく媼に罪を詫びよ。この後は夢かゝることすまじきぞと、いと優しくいひ聞かすれば、童は涙ふくめる目もて媼を見つゝ、ひたすら許しを乞ひぬ。アデッチかくてこそよけれ、いざ此林檎はそちにとらせんとて、籠より林檎一つ取り出して、童に與へ、更に媼に向ひ、媼よ此林檎の代は己つくのはん、媼はいふやう、益なき事して猶も子供を深みにおとし入るゝ事よ、かゝる子供は相應に罰に合せ、一週間はかりも忘れぬやうくるしみさせでは叶はずと、聞いて翁は、媼よ媼よ、其あつかひ御身の目にはよくもあらん、正しくも見えん、されど神の目にはさならず、此童林檎一つ盜みしとて打たるべくは、我等は己が罪には何にせらるべきには。媼は口つぐみて言葉なし。アデッチ猶もいふやう、聞かすや我家の主人、其僕の金あまた借りて返すべくもなく苦しみけるをあはれみ、許しやりしに、僕は出でゝ、己が貸したる者の許に行き、心強くも其負債を强ひて返さしめきと、語るを、媼も聞き童も聞きぬ。アデッチ猶も神は我等に人の罪をゆるせ、さらすは我等の罪も許さるべからず、人は皆罪あるもの、ゆるしを乞ふべきもの、殊に心なくなしつる罪などは、我等許さでは、と聞いて媼は頭をふり、太息つきつゝ、さることもあらんか、とは云へ斯くまで心曲りたるをいかにかすべき、もはやせんなし、さればなり媼よ、我等は斯く年老けたるもの、若きものを導かではならじ。

さればこそこの事、今の今我がいひしは、我には七人の子ありしが、皆死果てゝ只一人の娘のあるのみとて、媼は何所に住みていかなる暮しをなし、孫幾人あるなと、問はず語にいひ出つるやう、我も老いて働くべき力なけれど、若きものゝ可愛さにかくは日々商ひにも出つるなり、あゝ孫等愛しや、我商より歸りゆけば、喜び迎へくるゝさま、とても〳〵他人のしらぬこと、末の

孫などは、我われば誰が手にて行かで、ばゝ〳〵とて我手にのみまかる愛らしさ、得もいはれずと、探の事語り出で、いと喜ばしげなりしかど、ふと思ひに打沈みけるが、やがてア、何も子供の悪さ、神彼と共に居り給へばとて、先の童指ししつゝ側の包かたにかけ、やをら立たんとすれば、童は走りより、媼よ同じ道なれば、負ひ行かんと云ふに、媼はうなづき其儘童が肩に包み背負はせ林檎の代金乞ふ事も忘れ、童と共に仲よげに歩み去りぬ。

アデッチは身動きもせず、暫時彼等が後をながめ、二人が樂しげに語りゆく聲を聞き、姿見えずなりければ、やがて我家へ入らんとせしに、入口の階下の下に眼鏡のこはれもせで落ち居たるを知り、鼻にかけ、投出せし槌ひろひ取りて、またも仕事にとりかゝりぬ。

黄昏の色やう〳〵深く、外面に三つ二つ燈の光見え初め、針もつ手元も見えずなりければ、小ランプ取出し火を點し、又も仕事にかゝりつゝ、作りかけたる靴やうやうつくりあげて、彼方に向け此所にかへし、ためつすかめつさてもよく出來けりと、一人ほゝゑみ道具とり片つけ、傍を拂ひランプ下して卓上に置き、最愛の書取出し、今宵の場所とてしるしのため皮の切はさみおきしに、如何にしけん場所見失ひ、彼所か此所かと探すうち昨日の夢の場所はしなく開きて、彼の夢を思ひ出しぬ。思ひ出つるや彼はまた誰ともなく、彼が後を歩み來る氣合しければ、ふりかへり見るに、彼方の隅に人一人佇みぬ。誰ならんと暫し案ずるうちに、彼は耳元に口を寄せ、マーテン、マーテン、見忘れしか、誰?何人?とアデッチの問ふに、我れ、我なり。アデッチは彼が許にゐさりいつれば、彼はやさしげに笑をもらし、靜に消え失せぬ。

此れぞ我なるとて、此度は先の婦幼子を共に片隅より聲をかけ、笑ましげに彼を見、幼兒も笑ひぬ。

此れを我なるとて、媼も林檎もちたる童も走り來り、共にいと樂しげに彼を見つゝ、皆諸共に消え失せぬ。アデッチ心何となく樂しくなりて、胸に十字を記し、眼鏡をかけ、開くともなく開きし書よみ初めぬ。

「そは汝等、わが飢ゑし時我に食はせ、渇せし時我に飲ませ、旅せし時我を宿らせ、裸なりし時我に着せ、痛みし時我を見まひ、獄にありし時我に就ればなり。こゝに於て義者彼に答へていはん。主よ何時なんぢの飢たるを見て食はせ、又渇きたるに飲ましゝや。何時主の旅したるを見て宿らせ、又裸なるに衣せしや。何時主の病また獄にあるを見て汝に至りしや。主答へて彼等に曰はん。我誠に汝等に告けん。既に汝等わが此兄弟の最微者の一人に行へるは、即ち我に行ひしなり。」

アデッチは見し夢の いつはりならざりしを悟り、實に其日主は彼を訪ひ給ひしを知りぬ。　（終）

夜半の埋火

三宅花圃

四　荒ぶ山小田（上）

世の有樣の複雜なると共に、予の物語もまたくだ〳〵しく成まさりけり、思ひ出るまゝを順序もなく說出るしづの苧環、くりかへし過しむかしをしのぶはじめ終りを聞つゝ、よきに解ほごして見よかし。さても其後向山外國奉行となりフランス國の公使に任ぜられしより予を推薦して原の組頭とし、隨行を命ぜられつ、今の書記官のごとき役なり、其頃、將軍の令弟德川民部大輔（明武）清水家と相續あり、ことし開かるべき巴里の博覽會に大奥の名代として參會し引つゞき留學もあるべきよしにてとも〳〵に出立す。

八重の潮路をはる〳〵とこぎ出る船のうちも前に池田筑波守鎖港談判の使節として隨行せし時とは事かはり開國の國是漸く定りて、是より我國も文明各國に立まじり、宇內に並立すべき門出なりとおもへば、心もゆたかに氣もはりありて、彼地に着しぬるにあやにくにも彼國の人の中に腹くろきがありて、おもはぬことにまたよしなき罪をおふ事と成り呼戻さるゝ事と成ぬ、向山は予の親友なるに眼のあたり其事情の是非なきをも見知れば、力めて庇護辯疏を盡さしゝかど甲斐もなくしてこれまた交迭し栗本安藝守（鯤、鋤雲）と代ること

ゝ成りにける。
さすがに力なくして立歸る道すがらセイロンへ着きけるに、將軍大政返上ありつといふこと新聞紙に見えたるも、あくまでもいまださる事あるべからず、薩摩の策略に出しならんなど心におもひき、香港上海と、日本近くなる程に漸々と事實をたしかめ得た、いよ〳〵足もすゝまぬ心地はしながら、船路ととなく横濱につき、江戸へ立かへりて、差控伺を出し罪を待たるは慶應三年の十二月廿九日なり、歳暮年始の際なれば、この罪もなほさりになりて年もあけぬれば、四年の正月五日には伏見の戰破れ、前將軍東歸あらせられ、關東の人心はさながら鼎の沸がごとくなりぬ、かゝる折なれば外國の

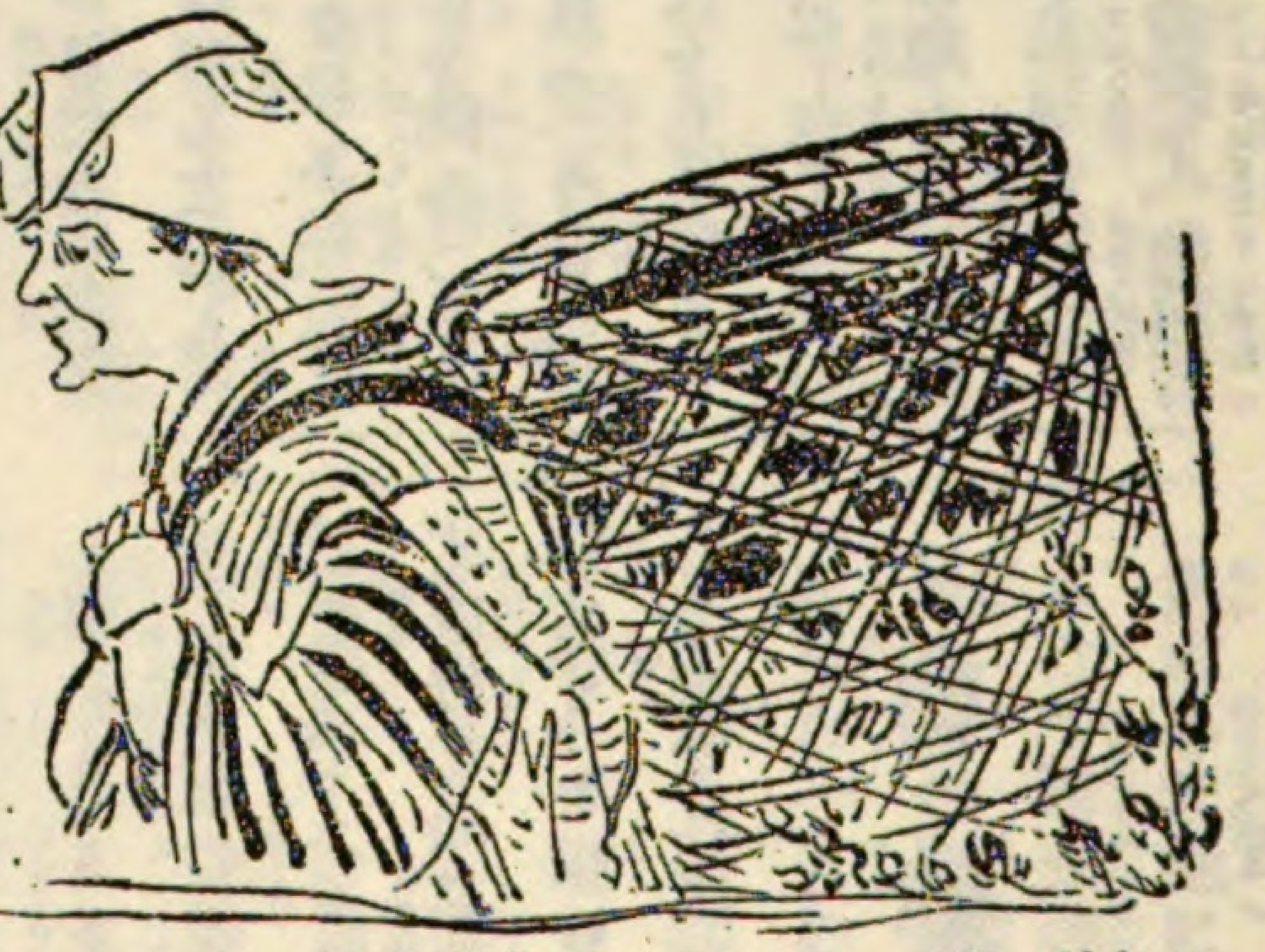


向背を察せんこと目下の急務なりとて、予は罪を問はるゝにもおよばず、福地源一郎とも〳〵に横濱に遣はされつたと又程もなく召かへされて目付の役を命ぜられぬ、天下の事早目前に定まりぬべきに予々の力を致すべき地もあらず今は致仕して大小を捨て、算盤にても事にわん事素志なりと固辭しけるを、大久保一翁は、否、いまだ事定りたりといふ場合にもあらじ、是非に一度は職に就て、さて後に、何とも勘考あるべしと切にすゝめられつるに、再度おもひかへすふしもありて、一ト先御受申上べしとてことうけしぬ、目付の役向といへば、先今の世の式部のごとく、幕府營中の儀式取締を司るなり、今の青年輩の間でも腹をよる計り可笑しき杓子定

規も多きぞかし、其一二をいはゞ當番の日には大手門の前を他の人々の出仕するごとく、捷路にはよらで、砂利敷しみみ、あゆみがたきにもかゝはらず、四角に歩行みて門の番衆の喝道の聲に送られ御玄關へ大小さしたるまゝに上るなど人の心ゆく業とせしなり又宿直の夜は御夜詰引けとて將軍の大奥に入玉ふときは、側衆より奥坊主して報知あるを相圖に、目付は上下を脱ぎ、着流しとなり下僚(徒目付)に雪洞を持たせ、番衆の詰所々々を見廻る、これを相圖に、番衆も上下をぬくさためなり、さて番衆の詰所をまわりて後、御玄關に出で、中仕切衛門(二重橋内)なる百人組與力同心の番したるに對して、大聲に番の衆何事も御座らぬかと問ふ、番衆亦大聲にて何事も御座らぬと答ふるをきゝて、徒目付は何事も御座らぬ趣なりと目付に取次ぐことをきくや、御玄關の式臺をトンと踏とゞろかす、此音にて營中にある人々は、皆安堵して寢に就くことゝなり居たり、いかにも茶番めきたる仕事なれど此頓沛の際にありて、猶この式は行はれ、予が職に就て後も一夜はその芝居を演ぜし事ありきされど亂れ行なる世の末にかく心のどけき例習のいつまでか守らるべき、例習はさて置き、尋常の禮式さへも廢れ／＼た予と同日に目付を命ぜられたる津田眞一郎(眞道)鵜殿團次郎(長岡藩士にて海軍方に召出され居たるもの)其外書生上りの人々多ければ詰所にては酒のむもあり、肴を取り寄するもありつれども、予に少しく後れた同僚たりし加藤弘藏(弘三)一人は、それに染まず、いと謹務なるが太平の時の目付のごとくなりしかば、同じく酒などくみかはしながらも、人々心おもひたしくあへり。

かゝる程に前將軍は上野大慈院にありて、謹愼待罪の折から、徳川家本宗の相續紀州家に讓らるべしと朝廷へも奏上あり、天下にも布告さるべきよし聞ゆるに、予の思ふやうには清水の昭武公子こそ現在前將軍の令弟なり、殊に田安一橋清水の三家は幕府儲嗣なき時の準備として立おかれたるさへあれば、此御方をすゑまゐらせむには、佛蘭西留學の折、彼三世那破崙もいたく優待たりし公なれば、我邦現在の有樣を必ず坐視せんこ

とあるべからず、さる外援あるを聞かむは、諸藩もなびきて一致やせむ、さてのちには大勢一變すべき望もあるべしとて、私に會計總裁たる成島大隅守(柳北)に語りしに、いたく贊成して、これを大久保一翁に建言せしに、一翁も強ちにこれを拒みはあへず、兎に角、自から前將軍に謁し思召を伺ふべしとありしかば、直ちに上野へ赴きぬ、みちすがらの人の足どりも、今日は何となくさだまつて、さだまりがたき世のさまをあゆみわづらふさまなるに、日影かげろふやよひのはじめ、今は世を忍が岡の奥深き大慈院に謹愼せさ給ふ御上を、いと恐れ多くおもひやりたてまつり、散しく一ト重、盛りの八重、山の櫻もよそならぬ、目の前の榮枯盛衰をあはれと見つゝも、春の山颪に露けき袖を吹かけつゝ、彼に寺に伺候すれば直にこれへと近侍して導かしめ給ひぬ、先は物みなこと省ぎ給へるさまに胸つぶれながら、八疊斗敷きたるに居間と覺しきに還ひ入れば、前將軍はひたすらにつゝしみ深く、口髭、月代も、そのまゝに、床の上にけうそくによらせられ、病者の躰にましませり、予は下賤の出身にして、これまで謁見せしことなき程なれば、あふぎ奉る面もむけがたき心地をはげまし彼儲君の事申すゝめ奉り、之かして上には局外に在りて、世の形勢を傍觀あらせられんには、勢の趨く所、佛蘭西にてもあだならず盡力すべしと、申述かけつるに、將軍は俄に色を正させ給ひ、予が祖宗百年の基業を捨て、大政を返上し、今また一時の行違ひより、不白の冤を蒙るも、ひたすら垢を含みて謹んで罪を待つに、譜代のものども、歯かゆきおもひあるに理なりとはおもはぬにあらね共、いかにせん、邦內に干戈を動かすことありて、ひまをうかゞはれ大やしまの外なる國々より嘴をいるゝがごときことあらんか萬世そゝぐべからざる國辱たらん、深く遠くおも



ひはかりての末に、かく愼しめる身の、我よりさるべき端をひらかむなど思ひもよらず、今の場合は德川一家の敗亡にかゝはるのみなるを、日本國未來の患を貽すがごときこそ然るべからね、さる不心得の徒あらんには、わがおもふ所をもつたへよかし、恭順の外はなき時世ぞとすこしくやつれ給へる御顏をそむけがちながら兼て辯舌よき君の事なれば、こと爽に諭させ給ふに、かさねては、いかで申述ぶべき言葉もなく、たゞ御心の中おしはかられ、おのが淺ましき考へも悔られつ、うち向ひ奉らんも面ぶせに、鼻しろみつゝ、あわたゞしく罷り出ぬ、まことよ、前將軍は、いとも賢明におはしつれば、世を見給ふことの敏くして、とくにかく、恭順を守らせ給ひつれども、下々の輩は、かくまでにはいかで思ひいたるべき、やゝ世を常闇の心地して、德川の天下、德川の社稷とのみ思ひつめ、その危急を救ひ、その勢力を復せんと、脫走四散して、事を擧るもの多かる中に、作州藩主松平三河守の隱居確堂は、文恭公の一子にして、愼德公の弟たり、德川にありてはいと近しき親族なれば、これを擁し、恢復の策を圖らむとて、其舊臣にて、今は幕府の士籍に列りたる箕作秋坪をもてこれに說かしめ事を擧ぐべしと、古賀筑後守（增、謹堂）西吉十郎（成度）等の陰に謀る所ありて、予の同意を得んと、相談を受けし事あり、人々の見る所、一わたりは尤もとおもひながらも、前將軍の親しく諭しきけ給ひしはこゝにこそと、其旨をもて人々にもさとしぬるに、時過ぎて、これも成立ず成はてぬ其他さま〳〵の團体より、誘勸めもうけつれども、いつも面諭の趣をおもひ出で、これに應ぜず親しき中なればいひさとしもしたりき。

朝鮮婦人　　木村睡虎

（五）婦人の生活

凡そ東洋に於て婦人の生活程窮屈不自由なるはなかる可く、支那と云ひ、印度と云ひ、土耳其と云ひ、何れも狹隘なる一室内を天地となし、曾て社交の何ものたるを

知らず。獨り我が日本に於ては、婦人が社交に於ける未だ歐米諸國に及ばずと雖ども其外出交際の自由なること、東洋列國に曾て之れなき所。日本は恰も其國の性格が東洋列國に傑出せると同時に婦人社會の境遇亦た別天地に在るの感なくんばあらず、朝鮮婦人の境涯亦た東洋流の憂きには漏れぬ一つにて其生活の窮屈不自由なること敢て他の各國に讓らざるなり、元來此國は早婚の行はるゝこと最も甚だしきが故に、婦人の娘時代とも云ふべきは僅かに十一二歲位までの間なりとす。既に十一二歲となれば大槪夫を定めて云名付と爲すが故に、最早自由に外出する能はず、偶ま外出するも深く面部を蔽ひて他人に顏を見せず、男子と言語を交へず、十五六歲に至り春期既に熟して結婚するや復た一歩室外に出でず、彼の極めて狹隘なる、廣くも四疊半敷に過ぎざる、白紙にて壁を張詰めたるの外何等の裝飾なき、溫突室內に起居して夫と戲るゝの外何等の快樂あることなし、彼等素より眼に一丁字なし、故に小說新聞紙等を讀みて心意を樂ましむるの術を知らず、此國素より活花茶の湯音曲等苟も美術に關する事物なし、故に何等の復た高尙なる娛樂あることなし、既に智德の敎育なく又高尙の娛樂なし焉ぞ其れ優美なる婦人の品位を高め德性を發達し得べけんや、彼等は一室內の小天地に跼蹐して他の娛樂を有せず、只だ之れあるは所謂動物的娛樂あるのみ、彼等は只だ一人の夫の外は一の朋友なく寢ても起ても相手とすべきは天地間に只だ一人の夫あるのみ、此故に年若き婦人社會に於ては動もすれば夫の外出を嫌ひ嫉妬の心最も深くなり知らず識らずの間に漸く猜疑陰險の性を成し、遂に其夫をして淫樂に耽り遊惰に陷らしむるに至る、妻の境遇斯くの如く不自由且つ窮屈なるに反し、其夫は幾人にても妾を蓄ゆるの權利を有し、其妾の數の多きを以て名譽となし公然他人に誇り、甚しきは四五名の多きを有するものあり、夫が斯くの如き特權あるに反し妻は他出する能はざるのみか、他の男子と互ひに顏を見合はすれば既に姦通と見做され慘酷なる制裁を受けざるべからず、其常に室內に閉居し偶ま出るも必らず

面部を蔽ふは即ち是等の制裁を恐るればなり、左れど年齡四十以上に至れば敢て面部を蔽はず自由に外出するを得るなり、又下等社會に至りては生計に逼はれ又下人等を使役する能はざるが故に買物にも自から出でざる可らず、所用も自から足さゞる可らず、或は行商をも爲さゞる可らず、水汲みにも自から出でざる可らず、殊に衣服の洗濯は彼等が重もなる任務なり、朝鮮人の衣服は總て白色なるが故に垢の付くこと速かにして少くとも一週間乃至十日目には是非洗濯せざる可らず此故に彼等が年中の仕事は洗濯に在りと謂ふも不可なかるべく、讀者若し晴れたる日に於て大同江畔に逍遙せんか忽ち耳に爆聲雷の如きを聞かん、而して又忽ち數百の朝鮮婦人が白衣を連ねて水邊に長蛇の群を爲し布を晒らして打つを見ん、是れ下等社會の婦人等が老若を問はず出でゝ衣服の洗濯を爲せるなり、又夜更け人聲靜まるころ萬里の羈客をして悲哀の情を起さしむるものは所謂萬戸砧を擣つの聲なりとす、我國にては方今贅澤となりて絹布を纏ふもの多く、糊にて張上げたる手織木綿の洗濯物を着る人寡ければ、砧を擣つの聲抔は容易に聞くことなきも、朝鮮に於ては例の白金巾にして其糊したるを擣ちて絹の如くならしむるが故に、婦人等は夜々深更までも夜業を爲し、朝亦た未明より擣衣の聲を聞く、吾人は此擣衣の聲を聞きて一種悲哀の情を催ふすと同時に、朝鮮婦人が衣服の爲めに如何に苦勞するかを察せずむばあらざるなり、中流以上の婦人等が日夜徒然無事に苦めるに反し、下等社會の婦人は一家族の衣服の洗濯に斯くの如く多くの苦勞を爲すが上に、臺所の仕事、子供の始末、家計の手助け、亦た自から之を爲し、且つ水汲の如き貧人に於ては全く妻の仕事にして、幼き子女を腰に結び付け(此國にては日本の如く背に負ひ又は懷ろにせず、腰の所に結び付くるなり)一斗入位の水瓶を頭上に戴き、數十丁の遠きより水を汲みて家に運ぶなり、而して其夫たる者は、稼業のあるときは朝より家業に出ると雖ども稼業のなき時や雨風の日には家を其妻に任せ置きて自分は例の三尺ばかりなる長煙管を口にくわへ、呑氣に朋友の宅を

遊び歩るき、家に在りても横のものを縦にせんともせず、煙草に飽きれば温き温突室に寢轉ろび、妻の小言を空吹風と聞流がして午睡を貪る下等社會の婦人は外出自由にして窮窟を感ぜざる代りに苦勞の多きこと夫れ斯の如きなり。吾人試みに朝鮮人の市街を散歩せんか往來織るが如き雜沓の間に男子は其七歩を占め婦人は其三歩に居れり、而かも其婦人は干大根の如き老婆にあらざれば垢衣醜



平壤婦人の髮風並上衣

貌の下等婦人にあらざるはなし、故に久しく朝鮮内地に住みて偶ま日本に歸るもの日本に美人の多きに驚かざるはなし、是れ他なし美人を見る目の濁し居ればなり、朝鮮敢て美人なきにあらず、美人は上流社會の妻となりて一室に閉居せるが故に吾人之を見ること能はざるなり。

（六）婦人の正月

朝鮮婦人の正月とも云ふべきは陰曆五月端午の節三日間なりとす。此三日間こそは一年中一室内に籠居せる細君連が天下晴れて郊外に出で青天白日の下に遊山娯樂を爲し得るの時なりとす、人も知る如く朝鮮は我が國に比すれば非常に寒氣の強く嚴しき所にて、春暖の來ること甚だ遲く秋は早く九月頃より霜下り山野に草木の緑葉を見るは僅か五六ヶ月の間のみ。陰曆五月節句の頃は恰も我國にて目に青葉山ほとゝぎす切松魚の時節にて、野山も漸く緑して此國にて梅櫻とも見るべき杏梨の花半ば散らんとし、遊山には最好時節たり、此時に乘じ中流以上の細君等は老若を問はず競ふて美麗

なる新衣を調製し、天人の如き姿して千百隊を爲し、市外景色よき芝生の松原に陣を取りて割籠を開くもあり年若き婦人等は日頃の欝屈を伸ばさんとてにや、數丈の高き松が枝に綱を垂れて鞦韆の戯れに餘念なし、其運動の活潑なるは年中室内に蟄居せる婦人の態にあらず、日本婦人にして之を見ば殆んど驚嘆するものあらん、牛ヶ淵の體育場も恐らく三舍を避けんなり、否な日本婦人が日本服にて斯る遊戯を爲さんには忽ち醜躰を露出せんなり、而かも朝鮮の婦人服は斯る活潑なる運動に適せるが故に、啻に醜躰を露出せざるのみならず宛ながら胡蝶が花門に戯るゝにも似たらんか、此時に當りては婦人等惜しげなく其顔を露出せるが故に吾人は始めて其美しき容顔を拜することを得べきなり、左れど其遊散場は一定の區域ありて其四方は巡檢（日本にて巡査）が嚴しく警固を爲し、男子は一切其附近に近づかしめず、昨年の五月余は物好にも其細君隊の遊散を瞥見せんと欲し、双眼鏡を携へて平壤城北關帝廟後の松林のとある小高き樹陰に腰打掛けて望見せる内一人の總角年頃十五六歳なるが子供を背負ひ乍ら誤て其婦人遊散區域内を通過せんとせるや警固の巡檢は飛鳥の如く奔り來り突然其總角を引捕へて推倒をし、半死半生の目に逢はせて追退けたり、余は男女の區別嚴重なること夫れ斯くの如し、此頃まで行はれたりし我が國の温泉場の男女混浴を朝鮮婦人に見せたらんには、恐らく驚顛せん、兎に角此三日間は朝鮮婦人の一大娯樂時にして其衣服の美麗なること目を驚かすばかり、一襲の價恐らく數百圓のものあらんか、彼等は此日を以て一世の晴れとなすものなれば一方より云へば又衣服の競進會たるなり、此競進會の出品には有繋呑氣の朝鮮男にも妻が衣服の新調に聊か頭痛を病むもの多しとなり。

（七）婦人の服裝

我が國の人々は朝鮮人を以て貧弱未開の民と爲し一概に輕侮して何事も憫笑の眼を以て冷觀すると雖ども、諺に云ふ田舍山にぞ花は咲く、砂礫の中にも豈に珠玉のなからんや、其婦人の服裝の如き、我が婦人服制の奇

怪にしてしだらなきに比較して吾人、慚汗を催ほす而已ならず余を以て之を見るときは、世界各國何れの服裝に比較するも、美術上、衛生上、運動上、外觀上、朝鮮婦人服の右に出るものなきを信ぜんと欲す、余は妻を早く日本化せしめんと欲し、百方之に日本服せしめんことを勸めたるも彼れは頑として之れに應せず、日本に行きたる後は兎に角、此國に在る間は死すとも日本服を身に着けじとて固く拒みたりき成程退て考ふれば、只ださへ婦人は習慣を改むるに憚るものなるに、彼の完全なる服を捨てゝ奇怪且つ不取締りなる日本服に代ゆるは、恰ぬ珠玉を以て瓦礫に代ゆるなり、文明的の衣服を變じて野蠻服とするものなり、彼れに日本服を強る無理難題是より甚だしきはなしと、是に於てか再び日本服を云はざりき、抑も我が國は東洋の美術國を以て自から任ずるものにあらずや、將た清韓同文の民を率ゐて我れに同化せしめんと志すものにあらずや、然るに美術の看板たる、文明の慈母たる婦人其人の服裝にして其制の奇々怪々宛も南洋野蠻の俗を脱する遠からざること斯くの如きを思はゞ誰れか流汗背に徹せざるものあらん、彼の歐米人等の讒言を妄信し、奇裝怪服したる賤妓を世界の都とも云ふべき巴里の博覽會にまでも出品して其醜を萬國に暴らすに至ては是れ將た何等の厚顏ぞや、余が日本服して步行し足を運ぶ每に脚部の露出するを見て余が妻は其野卑なるを笑へり、是に於て余は袴を着けたり、妻は之を熟視して抱腹絶倒せり、何故に可笑しきぞと問へば彼れは口を掩て答て云ふ、是れ吾等の褌なればなり、男子にして婦人の褌を纒ふとは何等の滑稽ぞやと、益々笑て止まず、是に於て余は再び袴を着けず又日本服を身に着けざりき如何にも朝鮮婦人の褌は我が袴と異ならざるなり、只だ其白色なると。腰板なきと、紐の着け方が少しく異なるのみ、其抱腹絶倒する亦た故なきにあらず、彼等は最下に斯の如き褌を着し、其上に我國奥羽邊に行はるゝモンペーの今少し品よき袴をはき、其上に幾多のひだを取りたる女袴と稱するものを纒ふ、夏と雖ども腰部は必らず三重の異なりたる衣類を着く、此故は彼等は

如何なる活激し運動を爲すも決して醜態を露出せざるなり、尙ほ服裝の大略を云はんか、下部は前記するが如くにして上部は袖長き筒袖にて背丈極めて短く、以て乳房を蔽ふに足らず、其地質は上流社會に於ては、重もに絹布即ち朝鮮產の紬及び支那產の綾織又は紋織を用ゆ、總て朝鮮婦人の上等絹布は悉く之れを支那に仰ぐと云ふも不可なく是等は支那より朝鮮に向て輸出する重要の物品なりとす、中等社會に於ては上衣及び女袴丈けを絹布とし其他は多くは金巾及び朝鮮木綿を用ゆ下等社會に於ては金巾及び木綿なり、故に金巾の需用は最も廣くして其供給を日本に仰ぐ、是れ日本より輸入品の要地を占むるものなり、又夏期の服裝は概ね布及び薄絹の極めて輕き品を用ゆ、布は多く此國に產出するものなり、頭髮は未婚女は中央より左右に分け後部に組みて垂下せること男兒に異ならず、既に婚するや額を四角に拔上げ、京城婦人及び妓生は後ろに束ね簪にて止め、平壤婦人は分けたる儘二條に組みて輪となし頭上に乘せ、橫になれば直ちに解ける樣にせり、彼等も亦た日本婦人と同じく頭髮を大切がり、髮の寡きを以て女の恥辱となし、結ふに髢を添ゆ、其髢は非常に長くして身の長に餘るものあり、價亦た隨て不廉にして拾圓乃至貳拾圓を要す、既婚婦人の外出するには常に腰輿又は被衣を用ゆ、平壤に於ては一般に巨大にしき深に黍売編の笠を用ゆ、彼等の衣裝は前記するが如く上下ともに運動に便利の制なるが故に、其步行するや日本婦人の割み足にて鞠躬如たると同じからず、大手を打振り外ガマの大股にて濶步すること男子に異ならず、要するに朝鮮婦人の服裝は優美にして輕便に且つ取締りよく出來たるものにて只だ其缺點を云へば、多く白色を用ゆるが故に汚れ易きと、上衣の餘り短きに過ぎ、動もすれば下衣の帶際との間に隙を生じて肉體の一部を露出することなり、尤も上衣は年若き婦人ほど短くして、年老ゆるに隨て、漸次其長けを長むるなり。

社交

交際の心得（承前）

水原翠香

されど金ほど重寶なる物はなく何よけんとの心配もなく携行には便利なり遠方へは爲替又郵券代用の便法あり失敬と思はれぬ爲には何と成とも包紙に名をかき付べし其金高に應じて反物或は御眞那小額ならば菓子煙草扇子等いくらも有べし詰り此方にて求めて差上る筈なれどいかなるが御意に適ふべきか計り難ければそちらにて自由に御撰み下されたしと文通にて申贈れば足るべし同地といへども十の七八迄は此法得策なるべし二は反物もなるべくは此法によるにしかず縞柄色等の好み各々同じからざればなり第三の紙は手輕き贈物として之にしく物なし食物の菓子肴と違ひいつ迄も貯へらるゝが上に半紙巻紙罫紙封筒等いづれの家いかなる身分にても紙のいらざる人はなし只一枚にても間に合は紙なり故に第三は紙といへる成べし菓子と肴は呉ぬよりましとは餘りに酷なる言なれども時によりては然思はるゝ事なきに非ず暑氣の頃などは殊に即刻用ゐざれば腐敗するの恐あり小勢の家内に多量の肴菓子など到來して食盡す能はず肴の方は味噌漬鹽にもあて置事あれど蒸菓子などは如何とも爲術なし心易き方へ分與しなどいらざる手數に困る事ありされど又物ほしき折柄何もなしと思ひ居る所へ不意に好物の肴菓子等を貰へは嬉しき物なりされは肴と菓子はくれぬよりましとはいへるなるべし

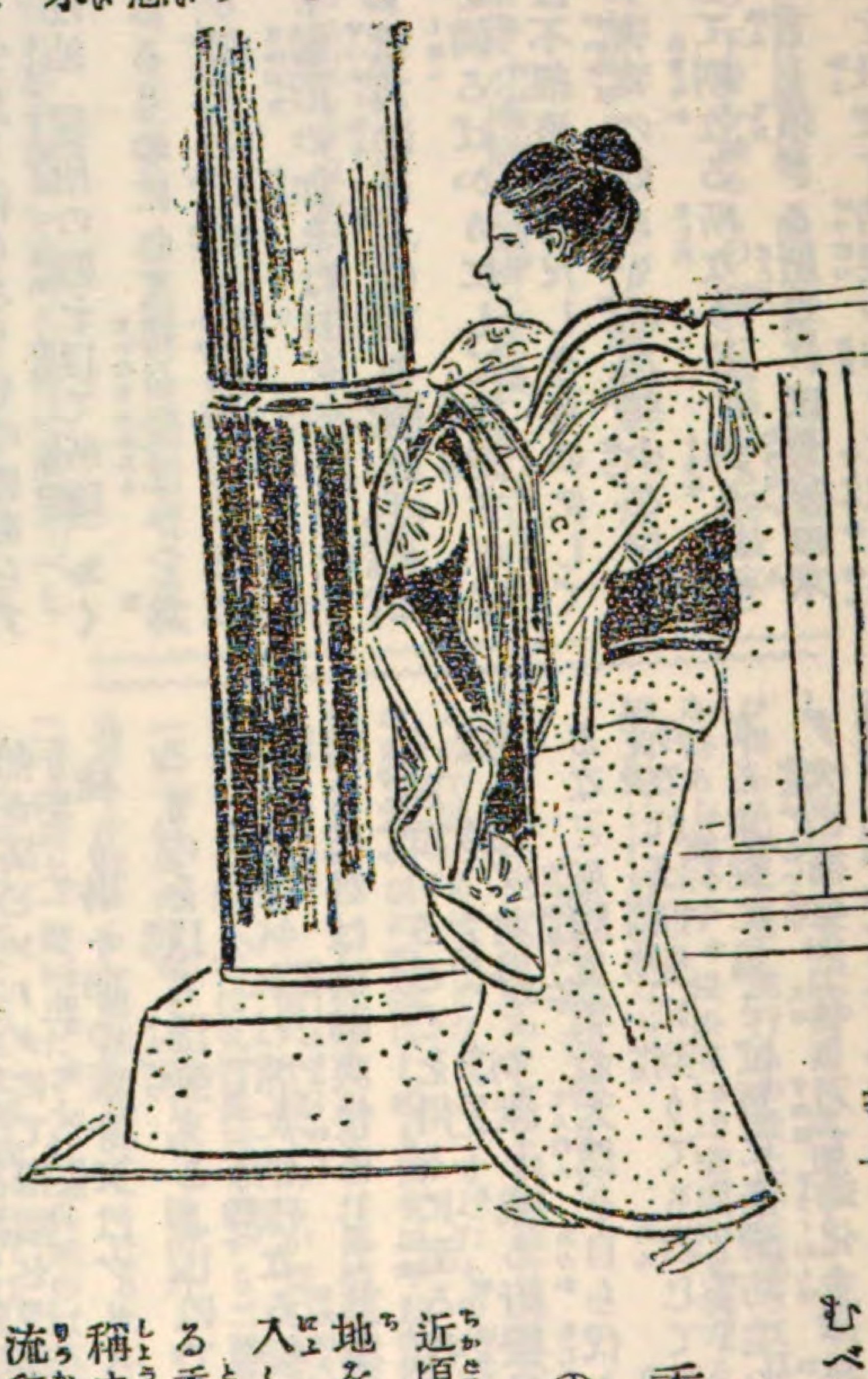
何藝に拘はらず敎授する先生家はたとへ專門家ならずとも既にそれを業として月謝を取る人なれば何の憚る事あらむや二季暑寒其他の附届すべて金にて贈るをよしとす

◎交際廣き家にては諸方よりの到來物も又多し然るに此方よりは一々金を贈り又新たに買求めては其入費容

易ならざれば大かたは到來物を利用する常の事なれど是に付て大に心得あり美麗なる菓子などは是を無差と食はむは惜と思ふも人情なるが故に宅にて手を附むよりはと他へ贈れば其處にても又同し考に他へ進物としかく轉々して計らずも始の家へ逆戻りしたりとの奇談あり又ゐなたこなたする中に多くの日數を經過して中の損したるを猶知らずして轉々し來り我ふと訪問せし家にて此到來菓子を出さむとて封を切蓋を開たるに蛆の這出たるは目前に見たる事ぞかしよし然までの甚敷に至らずとも到來物を中を見もせずして折ふし到來に任せ中の程いかゞや存申さず候へどなどいひて人に贈るは其心なき事也貰方に對しては其好意を無視し遣方へは中はいかなりやわからぬ品を贈るとは失敬千萬といはざるを得ずされば到來物は何にても先封を切中を一見して少しにても色變り黴などの生かゝりたるは決して他へ贈るべからず羊羹の如きは濡布巾にて拭へば黴は克とれるなれど既に一度黴生じたるは蓋しおけば翌日又生ずる物なれば宅にて拭ひて用ゐるは苦しからねど他へ贈物とは爲べからず一見して別條なき品ならは進物とするに元の如く封を附せずわざと其儘にして中を改めみたれは至極よろしきに付贈り參らすと樣にいひて贈るか本意なり封せずとて決して失禮にあらずなか〳〵に帶封の切たる跡の見え水引の折目白く惡癖の付たるを知らす顏に直して掛たる見苦敷もの也水引なしにてあしと思はゝ新しきを輪にして添て贈るべし鑵物詰の如きは其何なる事外に掲げてあれば改るに及はざる上に封さへ切らねはいつ迄も保存し得へく口を開てはたゝちに盡さゝれは味の變する物なれは此限にあらざるなり

◎返禮は先方より貰たる物品の相場直段を知る事肝要なり常に新聞の相場附を注意し居れは大體は知らるゝ物なりもし知り難き品は夫を扱ふ商店にて聞合すがよし扨返禮をするに各自の身分に依て大に差あり我より位置高く又富豪の人より惠まれたるはたとへ何を頂戴したりとも返禮とて爲には及ばず唯參上して懇に御禮を申述るのみにて可也されど其事柄に依又我も相應に

今日不自由なき程の身ならば聊寸志を表する迄に先方の好まる丶品或は地方ならば其國產物もし歌誹諧等の嗜ある人は添るも可なり同辈と云うちにも其位置其生活我より上ならばたとへば壹圓の品に對して七八十錢の物の割なるべし是に反して我方が上ならば過る方は宜きも決して到來品より劣れる物を贈るべからず我身上流に在てめ下より物を貰たるは其品の如何に拘はらずして我身分相應の物を惠與し決して惜む事勿れ來訪者には茶菓を始酒飯を饗し愛相世辭を振まくべし上流の婦人に吝嗇の心あれば其家隆盛を來さず斯すれは必狡猾の輩群來りて歡心を買はむと諂ひより時にうるさき事多けれとも一得一失は世の定則是非なしと觀念して敢て憎ます嫉はす平等に應接して依估ヒイキなければ其家益々盛に人望を得ると疑なし是等のかけ引主人公よりも主婦たる人の預つて力あり尤勤むべき事共也



禿頭病と婦人の結髮

近頃大阪地方より駿遠兩地を掠めて東京市中に襲入し來りたる一種奇異なる禿頭病俗に臺灣坊主と稱する甚だ恐るべき病症流行し之に感染するときは一部若くは全部の頭髮禿落ち甚しきは全身の毛髮悉く抜け落つるといふ之が傳染の媒介は主として理髮店にあれば目下男子理髮店に對し充分の消毒法を勵行せ

しめつゝありと云へど婦人の理髪に至りては比較的男子よりも注意せざるべからず又た之に對する消毒法は最も至難の事にして不完備なる女髪結の理髪器具に就ては決して容易に消毒を實施し得らるゝものにあらず殊に我國婦人の結髪には油、髮附の類を以て所謂「おくれ毛」なき様に塗り固むるものにして毎日髪洗ひを爲すが如きは殆んど稀なり假りに日毎に髪を洗ひて結髪を爲すものありとするも髷形の如きは日に新しきを用ゆる能はざるのみならず折角洗ひ上げたる髪には水油の類を充分に塗附け油を滴るばかりにして調髪するは古來よりの習慣といへば不經濟の甚だしきものにして之れがため身躰に及ぼす害毒の如きも亦た些少ならざることは識者を竢たずして明なる所なりとす抑も眞美なるものゝ自然に在るや言を須ざる所なれば舊來の不便不潔にして身躰に害毒を及ぼす結髪の如きは速に全廢して清潔無垢に且つ頭腦に少しも害毒なき西洋風の束髪となすは最も得策たるものにして斯の如きは結髪にしろ束髪にしろ極めて單純なるものなるが如くに考ふる者あれども大に注意を要すべきものにして人躰に及ぼす關係は決して淺小にあらず外國の婦人は頗る頭髪に注意し現に英國倫敦の婦人は日毎に若くは隔日に熱き湯とソーダにて櫛類を洗滌し夫れにて朝夕頭髪を梳り時々卵の黄身又はグリスリンと灰汁を混和したるものを以て洗髪するよしにて頭髪を光澤ある麗きものと爲さんには常に清潔なる髪刷毛(櫛)を得て朝夕頭髪を梳れば精神爽快にして其業務に勵み又以て心地よく睡眠することを得るに至る我々は或る國民の如く器械を以て身躰を制緊し或る野蠻民の樣に身躰を瘢付けるなど所謂眞美の天然を自ら伐ふことは深く忌避する所なれば頭髪に到りても斷じて舊慣に泥まず有益無毒なる束髪に爲さば單に臺灣坊主の傳染豫防のみに止らず大に衞生に益し乃ち造化主が我々に賦與せし天然の眞美を保全するに至るべきなり

流行の栞

櫻花爛熳美服翩々

今や櫻花の好時節なり、都下百萬の人衆は日々花を尋ね蝶を追ふて消光す、其樂其興窮る所を知らず。

彼處の公園此方の各所花ならざるはなく亦人ならざるはなし、老を扶け行く若者あり、小供を携ふる妻婦あり、旦那は男兒の手を牽き、娘は母親に伴はる、彼等の花見の衣裳は如何、左に流行の衣服さも思はる重なるもの丶二三を擧げん。

稍年齡の長けたる婦人には微塵縞又は崩し縞、變り萬筋、又は木賊縞のお召縮緬を着て古代形更紗縮緬の下着を被るもの重に高等なる扮裝なり。

次に小紋織のお召二枚揃に着たるものか又は下着一枚を珍色にしたるものも比々見受けたり。

其次は縮緬の小紋二枚揃或は薩摩筋（小持筋）の縮緬二枚揃に着なしたるものも多かりし。

以上の裏地は珍色の縮緬か甲斐絹か絹かなり、色は藍鼠、梅鼠、櫻鼠等。

羽織を着たるものは重に黑縮緬の三紋七分五枚に見受け小紋紋織も屢々見受けたり。

妙齡の婦人は立椏形或は波繋ぎの小紋お召を着たるは高等の扮裝なり。

其次は鼠地、藍鐵地の飛絣、矢絣、井桁飛白、濁立縞のお召にして、其次は山繭織か八丈織にてありき。

十歲前後の娘兒は幽禪縮緬の衣服に同ド被布を重ぬる風情可憐掬すべし裏は珍色の縮緬か甲斐絹多く、色は淡紫、藤色、紅懸鼠、櫻鼠等誠に美々しかりし。

右は述べたる婦人の衣服は薄綿入八分袷を二枚重にしたるもの二分なるべし。

◉流行の瑪瑙

目下瑪瑙は頗る流行の勢力を有し、緒〆は申すに及はず簪玉、根掛、玉の如き髮具は重に瑪瑙の趣味を帶びざるはなし、眞の瑪瑙にあらざれば擬ひ物を用ゆるに至れり、眞の瑪瑙は若狹産第一にして贋物には吹物（玻璃）ありて眞物に紛ふこさ甚たしく一見彼我の差別なきに至れる、扨其流行は、從來血の走りたるが如く透明なるものなれども、現今の趣好は不透明（曇のかゝりたる）なるものに移り、價も決して低廉なるものならし、透明なる瑪瑙は價甚だ低廉にして煙草入の緒〆一個二三十錢にて買ひ得らる併し目下流行品の最上等に至りては十金も投ぜざれば滿足の品を得るさ能はず、根掛等には珊瑚の意氣なるには及ばざるも澁味を好む婦人達には好適品なり。

◉羽織紐帶どめ

折角立派に支度が揃つた處で羽織紐は先祖から讓られた物帶留は祖母さんので間に合せるさなると一寸したものだが一般の調和を破る東京の人の勝てない程の扮裝はしても田舍は下駄足袋で知れると或人が言たが畢竟調和を破るからの事であるのだ男羽織の紐は籠打長九十錢から四圓同丸籠七十錢から一圓六十錢であるが籠打でなければ羽織の紐でないやうに流行して居る次は丸打長三十錢から二圓八十錢同平打長で四十錢から一圓十錢同丸打短十七錢より一圓內外といふ處女の帶留さなるさ普通金具付で十錢から一圓迄金物なしさなるさ二十錢から二圓三十錢迄羽織紐二十錢以上一圓が止だそうだ子供衆のは五錢以上四十錢などゝいふのださうだ少しは高くさも上等物が之ればかりはどれ程德用かしれぬのだ色合は男物黑織女物で赤茶牡丹利久等である

◉高等玩具

ぶりぶり毬杖は跡を絕ち弓鋼ふり鼓も古くなれり左れば世の進むさ共に玩具に對する子供の嗜好も亦自づから變るものなれば之を製造する人々

も其時々の子供の心を考へ新奇〳〵と工夫を凝す事なるが其中にて教育的高等玩具といふは製作頗る念入にて其器械の運轉する樣もいと巧に拵らへあり今其二三を記せば玩弄電氣鐵道は電車及び電柱等凡て米國市街電氣鐵道に模して製造し小形電池四個を原動力として運轉せしむる仕掛にて長さ一尺二分巾三寸五分高さ四寸八分あり車體軌道電池等を合して代價廿圓以上なりといふ又大形玩弄滊船は形狀を外海航行の汽船に摸したるものにて甲板、欄干、椅子等を備へあり酒精洋燈によりて運轉せしむる時は凡そ四十分間に六千尺以上を駛るを得べし長さ一尺九寸四分巾三寸八分代價六圓五十錢位なりといへば池又は河水に浮べて遊ぶ兒等もあるべし又風力喞筒は塔上徑一尺、羽十二枚の風車を有し外に眞鍮製梯子三個と水槽一個とを備へあり風力を借りて風車を回轉し其回轉力によりて水槽より水を引く仕掛にて之を庭前に据置く時は自づから清涼の氣を覺ゆべしとなり代價は四圓以上と聞けり

時論一斑

女子服裝改良意見

醫學博士　高木兼寛

抑も我國從來の衣服裁縫方は、何うしても改良せねばならぬといふ事は既に世間に其必要を認められて居る、其は陸海軍人の如き、將、警察官吏の如き、其他内外人と、廣く交際して、活潑に事業を營みつゝある人々は、各窄袖洋袴即ち洋服を着用して居るに徴して見ても解かりきつて居る、此は無論、從來の衣服の、不便且つ不利なるからの事で、文部省でも矢張り改良の必要を認めて、今や全國に於ける學校の男生徒には成るべく窄袖を着用するやうにといふ事になつて居るものと信ずる、

◎**動作上の不便**　我國男子の服裝改良は今や既に、之が端緒を開いて居る然るに女子の方は何うかといふに、依然として毫も改良の緒に就いて居らぬ、尤も、今袴だけは用ゐられては居るけれど、是とても全體の上から見ると、極めて少數であつて、一般に行き渡つて居るとは言へぬ。いはゞ唯の一小部分にのみ限られて居る、假令又之が一般に行はれて居るものとするも、袴だけは決して滿足は出來ぬ、で男子が窄袖洋袴を着用してゐるのに、一方の女子が、依然として從來の儘の服裝で行く時は、双方の間に、動作上、便不便の不權衡を生ずる處からして、尙一層の不利を來すのみならず、長き袖は少女にあつては非常に身體の發育を害し、且つ經濟上から見て少からぬ不利益である。故に吾人は第一生存競爭の點からしても、我國女子の服裝改良を刻下の急務と信ずる、今日の少女は他日人の母たるべき者であるから、今よりして、身體を健全にし、而して、生存競爭に、打勝つべき覺悟をしなければならぬといふ事は、自分が故らに辯ずる事でもあらうと思ふ、

今の女生徒が從來の角袖や幅廣の帶を廢して、窄袖、袴を着用し、而て此改良服の利益ある事を知る曉には、自然と女子一般の服裝に改良を來し、強いて男子全體にも及ぼし、竝に我國民全體の衣服を改良する事となるであらうとは自分の所信で、從つて是非、文部大臣より訓令を發せられて、全國の學校女生徒に窄袖、袴を用ゐるやうに、爲たいと云ふのが自分の希望で、松田文相に向つて述べたのも此趣意による次第である。

◎**體力競爭**　の世である、然るに日本人の體格は如何かといふに矮少

である、孱弱である、且つ短命である、夫に引替へ列强國男女の身躰は偉大である强壯である、そして長命を保つてゐる、處で今や此の弱少なる躰格で彼等と競爭せねばならぬ場合に際して我等日本は何うしたら之に打勝つ事が出來やうか、迚も此の躰格では彼等外人と滿足な競爭は出來ないのである。故に彼等と競爭するには是非躰格を大强壯にして長命者となるべき方法を講ぜねばならぬ、さもなければ到底生存競爭の場裏には立てないのである、そこで小兒の發育に害ある我國從來の衣服は今後必ず此の裁縫方

◎裁縫方を改良して無害有益なものとなさればならない、それと共に又一般の衣服を改良して經濟上に作業上に便益ある物を用ゐるやうにせねばならぬ、今玆に從來の日本服と窄袖との利害得失を擧げて見れば日本服には第一動作上直接に間接に妨害を與へるものが附屬してゐるのである。偖其の

◎妨害物 とは何であるかといふに、即ち袖である、乃で此の袖が動作上直接に與ふる害といのは外でもない腕を活潑に働かす事が出來ぬのである、腕其者は吾人々類が生在上必要なので之を動かすに就ては成るべく其の運動を妨害せざるものを着ねばならぬ、然るに角袖はそれを活潑に働かす事が出來ぬのである、故に何か仕事をするに際しては從來

◎襷 と稱する物が用ゐられてゐる、どうも活潑な働きを要する仕事には襷で角袖を絞つて窄袖にするの必要がある、若し之を用ゐぬ時は袖の爲めに作業を妨げられて圖らざる不都合を釀す場合が多いのである、さうして又別に襷を用ゐるまでの事でない場合にも袂が邪間になる處からして其端を口に咬へる等の事は吾々が常に目擊する處である斯くの如く從來の日本服には動作上に大いなる妨害を與ふるものが附屬して居るが外人の着用して居る處の窄袖には斯る妨害がない、で是だけでも衣服改良必要があるといはねばならぬ其他の此の襷を掛けるといふ事、就ての間接の損害、即ち時間や、襷其物を作くるに要する費用即ち經濟上の損害は日本全國を通算したらば中々夥からぬ高である。斯の如く日本人は外國人よりも餘計な

◎金錢や時間 や勞力を襷の爲めに費やして爲るのである。そこで此の勞力を勞費するといふ事に就て世間では頓と氣に留めずに居るやうであるが抑も吾人々類が平素口を利き、手を動かし、歩を移さんとするには必らず或る動力を要する、然して其の動力の原因は何であるかといふと食物である、乃で今これを一の蒸滊々罐に譬へて見ると一千貫目の物を引揚ぐるに十斤の石炭を要すると二千貫目の重量ある物を引揚げるには石炭も隨て其の倍を用する勘定である、即ち人も其通りで餘計な勞力を使ふ時は食物も亦夫だけ餘分に取られねばならぬ、斯ふして見ると日本人は食物をも無益に消費しつゝあるのである、之等の不利益から見ると角袖の衣服は今後全廢して勞力に時間に、金錢に物品に利益ある筒袖にせねばならぬ。

◎帶 それから着物及帶に就ての話であるが、着物にせよ帶にせよ其の物質が絹物ならば左まで強く身體に當らないけれども、木綿物と來ては、彈力がないからして、之れを纒ふ時は、恰も鐵箍を箝めたやうなもので、身體の發育を害する度が、非常である、この實例は何時でも容易に擧げて見る事が出來得るので、それは誰でも裸體にして、身體を檢すれば、小兒の時に胸部を強く締められた者は必らず胸隔が狭く且つ長くして、畸形をなして居る、即ち俗にいふ鳩胸である、夫から又、人々の胸膈構造の發育如何に依つて、其人の小兒の時の生活の如何をも知り得らるゝのである。

◎幅廣帶 それから進んで從來日本女子の服に要する處の幅廣帶に就

て、其の有害且つ不經濟なる點を擧げて見やう、即ち一言以て之を掩へば幅廣の帶は身體に甚しき害を與ふるものであると言ふのであるが、其譯は女子が之れを締めるには強く胸部に掛けて卷附けて置く處からして自然湯茶を飮むにも苦しみを覺える程である、單にこれだけで見ても、幅廣の帶が如何に身體に害を與ふるものであるかゞ解る。

◎**コーセット**　處で世間には外國人のコールセットの害をいふ者もあるが、コールセツドでは別に苦しみを感ずるやうな事もなく、隨つて其害も、日本服が身體の發育を妨げる程には到らぬである。夫から

◎**幅廣帶の不經濟**　といふものは實に非常である、自分が過日から段々と聞合せて見た處では、極々廉價な品でも五圓位は要るさうだ、尤も十歲以下の女子の帶は幅も狹く、品も亦左したるものでない、十歲以上十四五歲にもなると、必らず幅廣の帶を用ゐる、然うして見ると十歲以上の女子の現在數一千九百萬人が、假りに彼と最も廉價なる處の、五圓の帶一本づゝを纏つて居るものとするも都合九千五百萬といふ巨額の金額を外國の女よりも夫れ丈け多く費消して居る勘定である。

實に此幅廣帶は、日本の女子の服裝中でも、最も贅澤なものであつて、上等の品を求むるには、餘程の大金を擲たればならぬ、然るに女子の多數が帶一本きりでは却々承知せぬ、中には幾本も持つて居る者がある、扨然う幾本も持つて居て、如何するかといふに、只空しく簞笥か何かに入れて置く、之れを譬へていふならば、金を壺に入れて、地中に埋めて置くやうなものである、今爰に百圓の金を十年間他へ預けるとして、其元利を積ると二百何十圓となる、斯うして見ると、一本百圓の帶を求めて、十年間空しく仕舞つて置く時は、恰も一年に二十何圓の帶を一本づゝ買ふのと同樣の割合である。

◎**其他の損失**　偖又從來の日本服は裾が長く出來て居る處からして、自然歩行の自由を妨げる、それゆゑ道を急ぐ場合には、是非尻を端折らればならぬ、左すれば夫だけ餘計な時間と勞力とを費す譯である、然うして又上等の衣服には裾はがりにでも隨分と少からぬ金錢を要する、然るに外國の衣服には斯る無駄な費がない。

斯くの如く日本服は、衞生上に、經濟上に、有害無益の裁縫方である、故にこれが改良を圖らればならぬ、處で、男子の方は前にも擧げた通り既に改良の端緒を開いて居るからして、今は女子に向つて從來の服裝に代ふるに、筒袖袴の有益なる服裝を以てするやうに、ヒシ／＼と促がさればならぬ、さうして之を促すには、先づ全國に於ける學校の女生徒をして、一般に此服裝を用ゐる事とするのが、第一の良策と信ずる。

乃で、愈よ一般の女生徒に、筒袖袴を着用せしむる事となつた曉に、是等女生徒の父兄が反對說を唱へるか如何かといふに、自分は決して苦情を鳴らすやうな者はあるまいかと信ずる、如何なれば筒袖の着物は從前の着物よりも大に儉約になる上、袴を着けるからして幅廣の帶も要らぬ袴といつた處で、彼の一方で節約した處のものを以てすれば優に作り得られる、然して又袴を穿かせると着物も汚れず、旁々以て都合が良い兎に角筒袖、袴は何彼に附けて利益である、故に父兄たる者が苦情を鳴らすべき譯がない、否寧ろ喜んで之れに應ずるであらう。

處で、女子の方で、只の筒袖や袴では體裁がよろしくないとの考を持つならば、自然と洋服を用ゐるやうになるであらう、で自分の期する處も亦結局洋服なのである。

日本の家屋

（曾根工學博士の談）

◎我邦民家の缺點　我民家が建築學上の必要條件を缺くの甚だしき實に意外のものあり寒暑を防ぐ方法、風に堪ふること、防火の事、堪震のこと、避盜のこと、將た慰安の樂、操業の便等殆ど皆之を具備せずと云ふも誣言に非ず、試みに之を言はんか

◎寒暑を防ぐこと　壁、障子等の隙より凜然として北風の入るが如き暖室の方法として設けられたる火鉢又は爐の僅かに手と顏を温むるに止まるが如き、寒を防ぎ暖を保つ能はざるの狀之を極言すれば寒氣に就ては街路に在ると殆ど異るなし、暑に對しても屋根の低きと壁の薄きが故に炎熱は遠慮なく威を室内に人を及ぼし日中之に襲はるゝもの、苦悶は言ふに餘りあり、而かも人多く之を改むるに注意せざるは因襲の久しき全く身に慣るるが故なりとは言へ寧ろ不思議の感なくんばあらざるなり

◎風火と盜　少しく强暴の風到れば直に倒壞することを各地に實見するは人の知る所、木と竹又は紙類にて成れる家なれば火の最も災を爲し易きは申すに及ばず殊に盜兒の入るに最も容易なる構造とす

◎堪震　震災豫防調査委員の設置ありて各種の方面より委員を選出し予の如き亦其一人なるが曩に堪震の理論によりて造りたる家屋は果して完全のものなるや否やは判斷し難きも兎に角に地震の最も多き我邦に在りては等閑に附すべからざる問題なりとす此點に就ても現下の民家は如何の程度迄安心し得べきか、思へは寒心の至りなり

◎慰安の事　人は家庭に在りて一日の勞を慰むるの方法なかる可らざるに心を緩め氣を伸ぶるに於て我民家果して妨ぐる所のものあらざるが戸締りの設備不完全なるため稍人數の多き家にありては個人の秘密さへ保ち得ざるなり我常居する一室は其城郭として他の窺ふを許さゞるの工夫なかる可らず

◎操業の不便　人の業務百般に分ると雖も其多くは起ちて動作するものなるに我民家の制、坐するに適當せるが故に動止の間或は起ち或は坐するの不便言ふ可らず況んや日を逐ひ洋風の動作を爲すもの多く随て洋裝するもの加はるの今日に於てをや

◎改良の要　以上列擧したるが如き不便と不利あるの我民家は到底改良の事なくして止む可きに非ら尤ず衣服との關係もあり殊に坐居を廢せんとするに至りては永年の習慣一朝克く之を改むることを得るや否や大に考ふる所なかるべからず又動作の改まりて後ち民家の改良を促すと、動作改まりて後民家に及ぼすとは孰れを先きにすべきか是亦研究すべき要問題なりとす、近來中流以上の人往々客室に和洋二樣の設備を爲すを見るが過渡の時代是等の現象は實に止むを得ざる次第なりと雖も經濟上の關係最も顧慮を要するものなれば予輩は深く注意して上中下一般に通ずるの意見を立てざる可らず而して我邦の學者尚之に關して意見未だ一定せず否此改良に就ての意見を發表したる亦甚だ多からざるは遺憾なりとす予の如きも多少の愚考無きに非ず若し公表せば或は人の嗤笑する所とならんも物の改良を希圖する場合一部の攻擊は甘ぜざる可らず而して予は我邦の經濟を基礎とし一種和洋折衷の民家を建てんと欲す

◎近代風の建築　三菱神戸支店は近代風とも稱すべき式にして洋風家屋としては最も我邦に適當すべきを信ず夫の病院教會等に於て往々見る所の家根を鋭尖にし窓を狹小にするは到底我に用ふ可きに非ずと信ず近代風の特所は家根の平らかにして窓の廣きに在り石造家屋にして我邦内既に工の成れるは日本銀行本店と我支店のみ

◎用品と職工　二百七十坪に三十餘萬圓を費せる建築にして用品も勘からざるが其多くは内地品を用ひ外品は二階三階の床下に用ゐる鋼鐵、或る床板、重なる金具等に過ぎず石材は周防德山のものを用ひたり價廉にして自由に形の大なるを得るの便あるを以てなり職工は神戸の地既に

居留地に多くの洋館を建てたると近來正金支店、縣廳等の建築ありて稍洋風の仕事に慣れたるものありて大に便さする所あるも其木工の或高等の仕事の如きは之に任じ難く特に東京より呼びたるあり又京阪に東京職工の在るを招きたるもあり、建築幹部の者十餘人皆東京より來れり

◎借家人の意向　東京丸の内に三菱の設けたる家は其一室又は一部を貸すの仕組として建築せしが初め何人も借入るゝものなく予等聊か不安の念を懐きしが其後一室塞がり二室滿ち今は全く空室なきに至れり其建築は洋風に倣ひ各室皆鍵を以て秘密を保ち得るとさしたるに由り留守番も要せず近所の煩累もなく漸く其便を知れるが如し今後家を建てんさする參考さして可ならん

娯樂



春の野遊（小天地）

温柔なる春の神は遲々たる春日に駕して又もや下界に降りたまへり、彼れが輕やかなる羽風の落つる所、山は淡紅の袂を懸けて霞の色匂ひ.野は淺綠の裾を曳き殘して若草の香萠ゆ。

梓弓春の彌生はうら〳〵として日影長閑けく吹く風も袂にぬるむめり。

色淺き柳の絲の貫きとめにし曉露の玉は手を觸れなば溢れんとするなり、夕風のさゝやきに驚きたちにし花の二片三片の軟草甦れるは、採らんとすれば飛ばんと欲するなり。

かの籬近き一叢竹に臥しなれて朝ごとに啼く鶯はひとこと止むれども塒離るゝ小鴉は聲々にいざあと誘ふ。

あゝ紅の日のさし出でゝ花影簾に上るや、香をもとめて飛び繞る栩々たる夢魂の罪なさよ、あゝ打群れて別れつ會ひつむつるゝと見るや、櫻花の枝打たゝきて風吹き又散々に飛び分るゝ蝴蝶のいたいけなさよ況んやこの自然の妙畫に點綴して小天使の踏舞するあるをや、可愛の子等は去り去つて野邊の蕨を折るなり。可憐の乙女等は行き行きて野邊の菫を摘むなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

春の野は、道ぞ行かれぬ。
右ひだり、菫はなさき。
初わらび、生いまじりけり。

すみれ草、つまんとすれば。
行先きに、雲雀鳴きたち。
　初わらび、折らんとすれば。
來しあとに、鶯なきて。
　おもしろみ。聞きすてがたみ。
道ぞゆかれぬ。

汐干狩

江戸歳事記にいへり。汐干は三月より四月に至る（陰曆）その內三月三日を節とす、南風烈しければ汐干きかぬるなり、凡そ潮夕の來去は國所によりて大に違へり、又四季にて遲速あり。月の大小によりても一定しがたし、或人曰く今世に朔日を六時四分の滿と心得たるは大汐の汐なり、朔日正六時と定て可なりといへり。

江戸にては芝浦、高輪、品川沖、佃島沖、深川洲崎、中川の沖、早旦より船に乘じてはるかの沖に至る、卯の刻すぎよりひきはじめて午の刻には海底陸地と變ず、こゝにおりたちて蠣蛤を拾ひ、砂中のひらめをふみ、ひき殘りたり淺汐に小魚を烹て宴を催ふせり。闇指が句に

　品川に富士のかげなき汐干哉

又其角が句に

　親にらむひらめをふまん汐干かな

といへり、こは昔の汐干狩なり。今は潮風ぬるく吹く品海、芝浦のわたり。白鷗飛んで妙齡婦女子の紅裾に對す、知らず翩々たる双袖、又いづれの貝をか拾ふ。

扨て大汐は四月二十一日（即ち舊曆三月三日）及び五月三日（三月十五日）にして此日は午前三時頃より干始めて午前九時過に至れば十數丁の海底變じて陸地となり小麟珠貝點々潑剌として女子兒童の拾ふに任す、亦三春の興樂の一助たるべし。



才媛詞藻

第三回懸賞文披露

和歌

撰評者　坂正臣先生

（天）　雲雀

里の子がすみれつむ野の夕ひばり
　床しめかねて空に鳴くなり　呉軍港警固屋村　市川富美子

（地）　仝

空にのみ高くあがりて夕ひばり
　すみれの床は思はざるらん　北相馬郡北文間村　篠原志づ子

（人）　仝

とひ來れは庵のあるしの見えぬかな
　空に雲雀の聲はかりして　名古屋　音羽子

（天）　汽車

時のまに千里の道を行通ふ
　汽車こそ人の翼なりけん　靜岡縣加茂郡　伊藤倭文子

（地）　仝

須磨明石舞子の濱の景色にも
　心うみけり汽車の長旅　肥前國東彼杵郡　寺井竹子

（人）　仝

白川とよはる驛夫の聲にこそ
　都の夢をさましつるかな　横濱　長谷川さく子

◎雲雀　長門　梅田染子

春の色はすみれの床にあるものか空に求めて鳴く雲雀かな

◎仝　岩手　鈴木すみ子

春なかき野べのかすみにつゝまれてこゑのみおつる夕ひばり哉

◎仝　牛込　田村鈴子

久かたの天つ少女の琴の音はそらにさへつるひばりなりけり

◎仝　山梨　渡邊とみ子

朝雲雀あさぢの床ははなれても子を思ひつゝそらになくらん

◎仝　伊勢　川日よれ

かれの音に急きてかへれ夕ひばり巣にあるひなの待やはふらん

◎仝　攝津　島井はる子

のどけさを四もにつげむとあさまだきみそらに高くひばりなくらむ

◎仝　佐世保　黒川節子

あけまきがるゝ松ゝしろき麥笛にまらべあはせてなく雲雀かな

◎仝　岡山　西崎ふゆ

大空の入にまられぬのごけさをひさりまめてもひばりなくなり
◎仝　名古屋　淺井雪子
山畑の麥吹く風にさそはれてあがる雲雀の聲ぞかすめる
◎仝　淺草　大西里子
なく雲雀姿は雲の入相の鐘よりのちに聲ぞ落ちくる
◎仝　東京　青山きん子
夕ひばり日は山の端に落ちんさす松ちに匂へる乙女子の袖に
◎仝　長崎　久世田久子
いさけなき時にきゝたる麥畑の雲雀のはなし今子に敎ふ
◎仝　尾張　大島禎子
麥笛をふきつゝゆけば大空に聲をあはせて雲雀なく也
◎仝　松本　島田泛代
小女子にすみれの床をまかせおきて心も空に啼くひばり哉
◎仝　京都　菊盛咲子
あが家かさ見れば雲もかけ消えて聲のみ高き夕ひばり哉
◎仝　磐城　内山ふさ子
我が家の在りしあたりに野さなりて菫花さき雲雀なくなり
◎仝　本郷　柴田久子
朝雲はれゆく野邊の遠方に麥田もみえて雲雀鳴くりり
◎仝　石川　永山豐子
ゆふまくれ雲のうへになくひばりすみれのさこはあれにけらしな
◎仝　尾張　淺井あや子
うら〳〵さ野邊の限りにわかれさも雲雀の聲はかすまさりけり
◎仝　北海　今井美の子
なつかしき薦の床よそにして雲井に高く鳴く雲雀哉

◎滊車
見送りてあけたる我をよそにしてあはれくるまの走りゆくかな　新潟　吉田梅子
◎仝　東京　淺井雅子
のる人の千々のおもひのうちもえてはしる車や煙たつらん
◎仝　長崎　久世田久子
出入口今鎖されし滊車の外におくれて走る人ふたりみたり
◎仝　内山ふさ子
走り行く滊車を始めて見し時はあな恐ろしさ父にすがりき
◎仝　相摸　尾崎嘉子
大井川あやふく越えしそのかみをしのぶまもなく過る滊車かな
◎仝　但馬　櫻井薫子
時の間に千里を走る車すらいそけは遲く思ほゆるかな
◎仝　下野　田村家壽子
あすか山花の木の間にひさむらのけふりのこしてゆく車かな
◎仝　甲斐　外河花子
のりかはる滊車にはからすふるささの親しき友にあへる嬉しさ
◎仝　三重　龜井しま子
なりわたる滊笛さ共にふる里の山ははるかにはやなりにけり
◎仝　芝區　佐藤秀子
國元の母のいまはにまみえしておもへは滊車のめくみなりけり
◎仝　甲斐　神奈なみ子
乙女等かかよわき足も滊車あれは千里のたびのがたしさもなし
◎仝　備前　小山季子
足引の山のおくにもくろがれの道ある御代さなりてけるかな
◎仝　土佐　寺村きみよ

けふりたて走る車に大御代はちさとの外もとなりなりけり
◉仝　金澤　熊谷文子

湯煙に千里のみちを往來してさほきさかひもなきよなりけり
◉仝　鳥取　尾崎なみ子

春野行く滊車の窓より眺むれは畑打つ人の飛ふごとくちする
◉仝　武州　石川れん子

まがれぢを走る車のゆきあひにはかなくかはすやあの一言
◉仝　京都　河合かつ

かはりゆく景色見つゝもさくはしる車の旅のおもしろさかな
◉仝　尾張　村瀬胤子

千里をも一日にはしるくるまさへあるれはおそき心地こそすれ
◉滊車　美濃　福井すゞ子

時のまに千里をめぐりゆく滊さはせばくなしけり人の此の世を
◉仝　群馬　田宮せん子

箱根路の昔談りはなかはにて滊車は小山の驛につきけり
◉仝　淡路　横野美好子

山つきて海にや入らんとおもへはめくりて開く滊車の路かな
◉仝　相摸　山本はな子

うらかすむそらにはへつゐこゑはしもありかも見えぬ夕雲雀かな
◉仝　伊賀　服部かつみ子

進み行く世のさきかけぞ夢のまに千里二千里はしるくるまは
◉仝　北海　今井みき子

箱根路もうすひの坂も車にてたやまく過ぐる君が御代哉
◉春月　鳥取女學校　服部陞子

夕　ちに秋ふかせてなりたては庭のさかにもかすむ月かな

春雨はあさなくはれてあしかきのしたり柳に月そかすめる
◉仝　仝　鳥海順子

大空に花のよこ雲たなひきて今宵もかすむ春の夜の月
◉仝　仝　丸山しけ子

これやこのかすみに曇る春の夜の月をたれかは愛てさらめやも
◉仝　仝　尾高つれ子

朝ほらけほの〴〵しらむ山の端になほ春寒き月そのこれる

新體詩

（天）夕富士

東京　志づの女

やがて落ちゆく春の日の
なからおほひし雲の袖
むらさき濃染(こぞめ)あでやかに、
ゆふべの空に舞へるかな。
その振(ふり)袖のかいま見に、
清き笑がほの富士の峰
はぢを帯びたるさらび色、
うつる日かげににほひつゝ。

あゝ罪もなくけがれなく、
あなあどけなの富士の峰。

日は、いま名殘むらさきの
袖もあかねにひた燃えて、
ころもを更へし舞姿、
ふりの限りを盡すかな。

星のさゝやき日を追ひて、
いま舞ひやめぬ雲の袖。
畫工(たくみ)の筆か墨淡く、
のどかに眠る富士の峰。

あゝ罪もなくけがれなく、
あなあどけなの富士の峰。

評　入り日に映りて色かはりゆく雲の振袖をかりて、けがれなき富士の女神の姿をうづし出しゝ筆の力、つよくして雅致あり　（蝶二）

（地）　みどり子　在秋田市　渡部花子

母に抱かれてみどり子の、
今何事か夢むらん、
ほゝゑむ口の愛らしや。
罪なき夢のさめしとき、
乳房をさぐる心こそ、
思ひなき身の思ひなれ。
神より受けし眞心も、
知惠づくまゝにうすらぎて、
けがれこそゆけさまぐに。

（人）　星　松木町東之丁　小岩井愛子

おばしま近く立出でゝ、
暮れ行く空を望みつゝ、
幸なき身をば嘆くとき、
み空に星はきらめきぬ。

下界をのぞく黄昏の、
やさしき星を仰ぎては、
ありし昔のしのばれて、
深き愁ひに堪へぬなり。

吁世は夢かまぼろしか、
人の命のはかなさよ、
きのふ此世に見し人の、
あゝ彼の星と即つかな。

されども今の世の海の、
日に濁り行くさま見ては、
清げき星となりにけん、
人のうへこそ慕はるれ。

天つみ園にさきにほひ、清き光にかゞやきて、
浮世の闇を照らしては、殘る思ひもなからんに。
評　陳腐平凡の作、今すこし想をこらし、辭句を錬ろべし、（蝶二）

國文

久々にて里なる父上母上を訪ひまゐらす

すゞしろ

都も鄙も千代のためしの松竹を戸毎に立てゝ祝ふなる、正月三日のあした、今日こそは里にまでゆる／＼父上母上の御機嫌を伺ひまゐらせよ、と姑君の仰せられければ、いと／＼嬉しくて夫の君にもしか告げまゐらするに同じく快く許し玉ひぬ。朝餉のすみぬればいそ／＼身の支度して、姑君より土産物あまた賜はり、舅姑の君にも夫の君にも暇申して下婢の竹に送られ、此の家に嫁きて半としあまりにて、里なる父上母上を訪ひまゐらす。空よう晴れ渡りてそよとの風もなく尊き日の御影はまばゆく白雪に照り反り、打ち見やるをちこちの村々には豊けき御代のかまどの烟、霞の如く棚引きて高根にかゝる横雲に續き渡りぬ。雀は庭の梢高く囀りて君が代の八千代をことほぐ。暫し家なき野の中の雪の道を過ぎ稍家ごみなる町に入れば、女の子は晴衣を着かざりて節面白く羽根をつき、男の子は凧を揚げんとてかけ廻る。年禮に行く人、來る人、男も女も衣裳を飾りて、西に東に行きかふ樣目もあやなる眺めにこそ。一里に足らぬ道のりを急ぎたれども、女の身の甲斐なさ一時あまりを費して、午前十時といふに漸く里なる家に着きぬ。物持たぬ我が身にすら汗ばむを覺えたれば多く携へたる竹や如何なりけんと不憫に思ひやられぬ。』

父上母上の喜ばせ玉ふこと限りなく、取りわけ今年十一になる妹かよは珍しがりて、姉樣／＼と附きまとひ、禮言ふ程もなく何故しげ／＼來給はざりしとて恨みぬ。常のおとなしさにも似ずせはせはしき事よ、珍しく來給ひし姉樣に笑はれなんと母にたしなめられ、顔さと赤らめたゝみの塵手まさぐり居る樣のいぢらしさ。老い給へる父上には其よ之よと事問はせ給ひてかに角と答へまゐらする程に御側をえはなれず。母上の竹を手傳せつゝひるげの用意し玉ふを、見まゐらするからに心苦しく、後程ゆる／＼お話し申し侍らん、久々にて御料理の御手傳仕らんとて立たんとすれば、否々竹が手傳呉るればそれにて充分なり、こゝにて語れよと許し玉はず。かくて料理も調ひ父上母上と妾と妹と五つ

の膳は運ばれたり。母上には浩も歸りなばと申されしが、兄上には遠きに遊學し玉へば、此の年末年始の休みにも歸り玉はざりしなり。心いれての母上の御もてなし勿體なさに頓には箸もえつけざりしが、何とて辭儀するぞと仰せらるゝまゝ押しいたゞきてたうべぬ。父上は久々にて清と共々喰ふとの旨きことよと、心地よげに御酒も御飯も常よりはいたう過ごされて、御顔赤うならせられ御機嫌殊にうるはしう、皆々いとも樂しうひるげを了はんぬ。あと取り片附くる間に父上は、心地よさに醉ひすぎぬ、ねむし〳〵とて横になり給ひしを御枕奉れば、やがて鼾の音高らかに寐入り玉ひぬ。家には妾留守なれば母樣には何程か御忙しかるべし、休みたらば竹は靜に歸り呉れよ。妾はあす午後よりかへるべきよし母樣に申してよ、太儀ながら明日も迎へに來てよとて竹をかへさんとすれど、母上はいみじういたはり玉ひ、今宵はそちをも泊めてやりたきなれど、泊めなば清も居らぬを何程か御不自由なるべし。明日は早くかへすべければ來て呉るゝにも及ぶまじ、女の身の此の雪の道をいかにつらかりつらん、さらば靜に歸り呉れよとて物など與へ玉ふ樣なり。竹は打ち喜び御新造樣御ゆるりといひのこして歸りぬ。

午後は皆と炬燵にて物語るべしと母上の仰せらるゝまゝ、快う眠りておはせども寒ければ連れ申さんとて、父上をも起しまゐらするに、ふと起き反り玉ひて清は歸るかとあわてゝ仰せらる。妹は傍にありて崩るゝほど笑ひぬ。父上も笑ひ玉ひぬ。水をとかよに命じ玉へばかひ〳〵しく、紅葉手にコップ捧げ來りてまゐらす。父上は旨し〳〵と褒め玉ひぬ。妾手を取りて二階なる炬燵に連れまゐらすれば、かよは枕の底輕く叩きつゝ從ひ上りぬ。父上はまだ醉のさめ玉はねばにや、清かへるなよ。かよ姉樣をかへすなよ。と念に念を押し玉ひて、晩にはゆる〳〵語らん程にとて、又も寐入り玉ふ。妾の來しを喜び玉ひて御酒をすごされる故なるべしと思はれぬ。

しばし見えたまはざりし母上はいと大きなる袋携へて入來玉へり。四五軒へだたる菓子屋より、妾の好めばとて松風といふ駄菓子をば買ひ來たりとて、炬燵の上にのせ玉ひぬ。妹は父上の眠りておはする向に、妾と母上とは又さし向になりて炬燵の四方は塞がりぬ。妹は雛よ編物よと多くとり出で、これは己のあみたるものよ、これは母上の縫うてたびしものよ。とこと〳〵しく數へて一面に取り散らしぬ。更に清書圖畫などしたゝ

かに納めある箱を取り出で、これは甲よと嬉しげに高く掲げて示し、この鳥居は立派に出來ぬれど乙なりきなど喞ちつゝ、果ては清書と圖書とを座敷の片隅より並べて、見よ〳〵と頻りに袖を引きぬ。されど妾は母上と夫家の事ども物語りつる折とて夫とも氣づかぬを、姉様を恨めしげにぐいと袖を引きぬ。振り反ればかよは如何に口惜しかりけん、目には已に涙を湛へる。アゝわるかりき許してよと、一々見てやりしに子供なりけり、又けろりと氣色なほりて姉様このお繪の中にて何が一番よきと、莞爾かにとふ様のあどけなさ。姉様一番出來ばえのよき者より順にならべてたべと乞ふまゝ、一々場所を繰りかへ優等と覺しものより、右へ右へならべやりしに、先に示し鳥居は甲のもの二枚をのして、乙ながら甲のうちに入るべくなりぬ。かれはほりがに己も初よりよしと思ひつるを、先生には大方御間違へ遊ばしなるべしと、遂にあらぬことを言ひ出でたれば、先生の點をおつけ遊ばすは級のもの全躰を較べ、これを甲これを乙とは定め遊すことの、己より能きもの多からんときは、常のと較べては優れたりとも、乙となることもあるべきにと細しく訓へしに、ようわかりぬとなづきぬ。さても悟りの早きことよ妹と思へば我ながらいとうれし。次にお清書も順より並べやりしに喜ぶこと限りなく、母上にも座を立たせられいたう褒められぬ。かよの心や如何に嬉かりけん、喜色滿面に溢れ、優等のを上にし下く〳〵と一枚づゝ重ね、二つに折りて丁寧に納め、雛も玩具も悉く取り片附けぬ。かよもお座り御褒美をと、母上の菓子を賜へば、姉様にもと又袋より出して與へぬ。こたびはかよが學校のお話をと母上の仰せらるれば、母上と妾をの問ふまく細々と、受持の先生の深切に遊ばすよ。新に赴任せられし女先生のしとやかに渡せらるゝよ。誰様〳〵とはこよなう親しう交ること。唱歌と圖書とのいみじう面白うて算術のいやなること。折々動物植物などの採集、散歩などだして野山に連れらるゝこの樂しさ。扨は六づかしき遊戯を習ひたること。校長のお髯の恐ろしきことなど、よどみもなう滔々と語りきかす。子供のことて考へ及ばぬふしのありて、あらぬ思ひたがへなどもあれば、其の折々懇に諭しつるを、我には似すいと〳〵悟り早なこそ末々賴母しけれ。母上との御物語。書書の撰拔。香代との問答とに三時も過ぎぬれば、母上は夕餉支度にかゝらんと立たせ給ひ、かよは八百屋の通を持ちて何をか買ひに行くやうすなり。されど父上

は未だ軒高く寐入り玉へり。母上を二人して夕げの支度にかゝれば、かよは歸り來りてかまどの下火を焚く役目をつとめぬ。やがて風呂も沸き夕げの料理も調ひぬれば、かよして父上を起してまゐらするに、隨分寐たの、なぜかかよの騷かしかりし夢なりしにやと、足なほよろめきて風呂に入らせ玉ふもをかし。やがて父上は湯あみを終はり玉へば打ち揃ひて夕げの膳につきぬ。父上は久々にて淸の料理の旨きことよと何もかも褒めてたうべられぬ。されど御酒はひるのやうには用ゐ玉はず。年波よりつれば酒はよわくなりつ、まして又も過しなぞ今宵の淸の話はきゝえじなど仰せらるゝもかたじけなし。四人していと樂しく夕げををはり、妹と風呂に入りぬ。かれが背を洗うて遣れば姉樣のもと小さき手もて覺束なけに手拭握り洗うて呉るゝやさしさよ。彼が小さき胸など洗ひやる折大きいことよと妾が乳房を押へ居るを、釜の湯を汲み玉ふ母上は笑玉ひぬ。妹には何事もなけん、妾にはいと〳〵耻かしく堪へがたき思ひなりき。妹は早くいねたれば、此の夜は父上母上と妾と炬燵にて、兄上の御事。近所の幼友達の身の上。さては嫁きし村の模樣など何よかよと盡きせぬ物語りにいつしか十一時にもなれば其の夜は寐ねたり。

明くる日は思の外に寐過し、母上の井戸より水汲み玉ふに驚きさむれば六時をこえたり。添寐せしかよも起きたり。父上も珍しう早う起き玉ひければ、朝げをば樂しく過し、今日は近きわたりの親しき友かり訪ふべく話し置きつれば、かよをも連れんといひしに喜ぶこと限りなく、晴衣に改め、己が赤き緒の下駄を、妾のそと程よく揃へ、幾度も行きつ戻りつ妾が支度の了へぬをもどかしかりぬ。妾土産物包める袱紗を抱へ出つれば、妹は象牙の柄の傘もて先に立ち、花簪の總をはふさ〳〵させて小足に急ぐ樣の愛らしさ。

まづ近きわたりの三人の友どちを訪ひまゐらするに、いづれも、我がさまのかはりしに驚き、よう來ませりとては喜ばれぬ。ひるは山川樣にて餠を振舞はれ、午後は稍遠き加藤樣をおとづれぬ。加藤樣とは殊に親しき中なりければ、去にし年頃のことども何くれと語り出で玉ひ、別れては又何時かあひまゐらせんとて。はなし玉はず妾も歸る心ならうて語らふ程に、お迎にまゐりぬとて竹來りぬ。加藤樣はまだ三時なれば遲くは侍らずと止め給へど、後日を約してかへりぬ。竹は定めて此のお屋敷なるべしと母殿より承りしよし物語りぬ。家

に歸れば四時に近し　いと〳〵名殘りの惜しまるれどせんすべもなし。母上より父上より戀しがるは妹なり。頃には別れがてに母上ともど〳〵、程隔たる辻に送り來り、此の次にはかよと私が參るべしと母のなだめ玉ふに、やう〳〵思ひ諦らめて西と南とに別れぬ。

妾と竹とは急げどもきのふのやうにもはかどらず。雪にきらめく夕日の影をまともに受け、飽かぬ思ひを辿る〳〵家に着けば日は已に入りぬ。姑君は妾が歸るを待ちわび玉ひぬ。

評　嫁子が里歸りのさまあはれこまやかにもしるしいでられしものかな親子姉妹のあつき愛情には雪國の雪も融けしなるべし

（乙）　幸枝子　　はな枝子

世にいでゝ未だ一とせと二三月ばかりの幸枝子は最も年若きわが姉上の初ての子なりき如何なればか此小さき伯母をしたひて朝な夕なひざをはなれずまつはれば殊に愛らしうて今は母上よりも仲よき友とはなりつ折々はわがなす業さへ怠りがちに遊ばせくらす日も少なからざりき。

秋もいまだあけやらぬ曉の空に星のかゞやく頃目さめては床をいでむとてきかずすべなくて着物きかへさせおのれもきかへむと立ては紐帶など一つ一つとりて何かオーオーとかたりつゝ手傳ひ顔なるをかしや。

さる折なりき密柑のありしを程遠くにおはする姉上の許に一つ〳〵もちてははひよりつ三度ばかり同じ事をくりかへしが勞れやしふむ後は二つみつれらひ定めてうちつくろ其顔今に忘られず、人形犬猫なににても玩具をとりては姉上に乳をこひてやまずせんかたなく其まれし給へばこたびは自ら懐にいれて口おさとさせつゝすまし居る顔つきいとをかし赤子をみれば背をうちえならしなどしてあやす心にやあら果ては乳飲めとて　むねひろげ　姉ゝのほするもたとへむかたなくをかし、

夜は床にねむるものと思ひてやいだけども何かむづかり床をゆびさして はゴーノヽといびきの聲をまねつゝたのしき夕飯のまとゐより姉上をうながすが常なりき此頃また桃太郎やかち〳〵山の話はあきて日清戰爭が大すきになりぬと姉上かたらせ給ふまことと話のつかればや遊びもやめて永き間それをきゝつゝ遂には眠ることしば〳〵ありき、いまだ歩むこともかなはず片言さへいわぬをさな子もかはかり智愚ばあるものよとそゞろになかしうて

評　乳兒のありさま描き盡さんとつとめられたるいたづき想ふべし

（丙）　親ごゝろ　　藤浪むら子

人の親となりたらんにははか〳〵しき外出も叶はさるへく好める文よまんこともかたかるへしあはれいかに樂しからぬならんましてて生み出てん折の苦しみなと思ひやりてはいとはしき心地こそしたりしか案ずるよりもとかいへる諺のごとくいと輕う安らかにかれて願ひし男の子にてさへありし時は身も心もすか〳〵しうなりていと〳〵嬉しかりきされと思ひしよりもはけしきは其後の事繁さにて乳ふくめむつき洗ふ業厨のつとめかれこれとしはしの暇たになく夜さへ打とけてまさろむ闇もなきにあたる時は夜中はかりいみしう啼きいてゝゆりつすかしつすれとさみにて止まずうまゐせる人々の夢驚かさじとさま〳〵にいたはれとわきま

へなきもの丶其心つくしをもしらすなほひたすらに打なくにはては清少納言か兒さもこそさしろされし言葉さゝろ事に覺えすてもやりつへく思ふともあれさ扨また愛らしき貌に笑をたゝへて我面打まもろ樣神の如きれかほ等みては鬼ミしかりつろ心なりなく白金も黃金も玉もさそ考ゆろ早う學ひやに入ろへくなりたらんにはいかに樂しからましつき〳〵に築卒へて世になり出たらん時はさもせんかくもあらんさくはへかしさく立てかし獨して打ありくやうになりなは詳服調してきせむ水兵形こそよからめかの絲織の二枚袷の十枚はさきて兒の衣ものさせん其かみ母君にこひて作り得し時はけにさまても嬉しきかさ兄君の慾ひのたましものも今はさら〳〵をしからし女の子ならましかはかの友染の長襦袢をも被布に直してきせんさのをささま〳〵思ひめくらすにつてゝ我をもかくしておほし立玉ひけんたらちれの深きいつくしみ今更思ひしられて世にかたしけなうこそ

評　母さなれる心だにかくもあらんさあはこれそに

普通文

平安朝の女子文學

在國學院　それがし

（甲賞）

平安朝は和歌の時代なりし、奈良朝の次紀にして散文の時代なり、樂翁の所謂櫻の如き源氏山吹の如き狹衣の現れたる時代なり、苟も其著者に至ては、全く女子の手に成れる者多なり、而して斯る大文學の著はれたるは當時藤原氏隆盛の極に達し、大宮人又櫻かざして日を送り、滿庭の紳縉家袖を連ねて花月に眠り、佛説に耽り、大に文弱の弊に陷れり、文弱の風は男子よりは寧ろ女子に適す、是に於てか斯る大文學は女子の手に成れり、然りと雖も四納言の如き男流學者無きにしもあらざれども、是等亦前紀及鎌倉紀の如き觀あらざるなり、當代の文學として現れたるは假名の製作、物語、日記類草紙、雜史、和歌等なるべし、然れど當代の文學否女子文學としては物語を以て第一に推さゞるを得ず、次に日記草紙なるべし、即ち第一者には女子の手に成れるものならざるも伊勢、大和等あり、これ等は些細の事實を敷衍したるものにして、竹取、源氏等は作者の想像によりて趣向を搆へたるもの、榮華の類の如きは物語といはんよりは寧ろ雜史なるべけれど、何れも事實を驪艶なる文字に寫したるものにして、當代の初の製作せられたる假名文字を利用して、或は世の盛衰を叙述し、或は人情の微細を寫し、以て佳人才子の消閑の具となしたるものなり、故に是等文學上の製作物は全く玩弄的娛樂的のものにして、今日所謂小說的文學即ちローマンズ(Romance)若くはノーベル(Novel)の版圖は脫せざるなり、然れども又中には今昔の如きテール(Tale)なきにあらざるなり、

當代閨秀文學者の第一流としては、源氏物語の著者紫式部を推ざるべからず、式部は幼にして總明、一條天皇の中宮彰子(上東門院)に奉仕し、貞操自ら持して、能く當時の淫奔浮薄言ふに忍びざる中に立ち、毅然として婦德を全ふせるもの和漢の書史に通じ、古今の典故に詳しく、兼ねて亦佛説をも修め、歌文に妙なる處より、村上天皇の皇女選子内親王の命を承け、遂に千載の後猶學者の尊崇する源氏物語を綴るに至れるなり其の文や思想結構の巧なるに一致し、行文艶麗、意匠緻密の筆能くあらゆる外物を描き、讀者をして身其座にあらしむるの感あり、其書の今日猶幾何文學界を賑はしむるかは玆に喋々せざるべし、其女大貳三位また能く文を草す、山吹の如して評せられたる狹衣は即ち其著なり、母の物語に似せたるも、明斷詳細の處他人の及ぶべくもあらず、此外竹取、宇都保、住吉、伊勢等の物語あり此等も全く女筆か又は多少女子の手を交へたるなるべし、次に女子の日記としては紫式部日記あり、源氏物語よりは劣れりと雖も、筆を下せば即ち妙、聊も難澁を覺えず記事以て式部が人となりを知るに足るべし、之に次て和泉式部日記あり、古人の日記を評して文躰よりは寧ろ歌を賞せよといはれたれども、文躰とても棄つべきにあらず、蜻蛉日記は右大將道綱の母即ち藤原兼家ががが夫人の記錄なり、他の日記とは少しく其躰を異にせり、更科日記は菅原孝標の女の日記なり、叙事風雅にして能く其家學を察するに足る、讚岐典侍日記は堀河天皇の崩御の事後鳥羽天皇即位の事などより歴史法制を記せり、土佐日記は貫之のものせるものなれども、又女子の爲せる事とせしは以て女子文學中に位すべきなり、或は紀行文としての製作物とすべきか、源順のものせし名高き和名鈔の如きも、勤子内親王(一書慶子)の意に出でたるものなりといふ、草紙に至りては有名なる彼の枕草紙にして淸少納言の著なり、當時盛名紫式部に下らず、活潑にして氣慨あり、一條天皇の皇后定子に奉仕せるもの、其文に至つては源語よりは氣韻高尚なるは其性質にもよるべきか、文中また輕快豪放所謂寸鐵人を殺すの力ある處多く、一氣呵成の筆鋒の鋭きこと草紙にして之に及ぶものなかるべし、事實叉典故を記し、當時の人情風俗等の歴史的事實も窺ふことを得べし、當時草紙として啻此れあるのみにして、後世漫筆隨事などいふものゝ祖なり、榮華は叉物語なれども雜史としての價高かあるべし、扨雜史には即ちこの榮花物語なり、されど著者に就ては諸説あり、今は女流學者赤染

衞門として擧ぐ、安藤爲章、加茂眞淵等の說によれば、赤染衞門の書きし日記を本として、後人の書きつらねたるものならんといふ或は然らん、記事村上天皇の時代より御堂關白道長の薨去堀河院の事等もあり、記事を專らとして飾辭の上に力を用ゐずと雖も、文躰周密にして頗る記事に適しまた優美たるを失はず、大江匡衡の妻にして有名なる歌人なり、而して此他大鏡、今昔物、語宇治拾遺物語等あれども此男子の手になれるものなれば今は省きつ、終りに臨んで女流歌人として有名なるものを擧れば、前記諸書の作者は勿論歌人としても數ふべきなり、尤も文藻に富み尤も和歌に巧なりしものは、藤原公任の三十六歌仙には、伊勢、小野小町、齋宮女御、小大君、中務を入れられ、範兼の後六々仙には、泉和、式部、相模、赤染、伊勢大輔、馬內侍、紫式部、道綱卿母、上東門院中將、清少納言等を撰ばれたり、以て當時の女子斯道に堪能にして、苟も男子を凌駕せしことを見るに足るべし、殊に小野小町の色見えでの歌の如き、思想深妙天外より落ち來るの觀あり、清少言の夜をこめての歌の如き、詩趣妙絕人を驚かすの慨あり、共に千古の秀逸萬世の傑作といふべし、されば小町を以て衣通姬に比し、清少納言を以て彼の國の荀子に比せるも敢へて諛言にあらざるべし、此の他小式部內侍の大江山の歌伊勢大輔の古への歌、その外百人一首上に載せらたる當時の女流歌人の歌を見ても、女子文學の隆盛を極めたるを見るべし、

嗚呼我々はかゝる大文學否榮えたる女子文學を有する國民なり、經を漢にとり、緯を泰西にとり、以て益々大和錦の國粹を保存し、發達せしめざるべからざるなり、

評　題して「平安朝の女子文學」といふ、同時代文學の長所短所を評論せるものと思ひの外、內容を窺へば、唯是れ作物の陳列に過ぎず作者と作物の紹介に過ぎず、評論の如きは、ありふれたる平凡の見地に外ならざるのみ、思想と見識は不健全なれど、文章は頗る輕妙なり、只憾むらくは、這種好個の文題を捉らへて、その思想の足らざるものあるを、されど投稿堆堤佳作少きため、第一賞を與へたるなり　（記者妄言）

（乙賞）

筆を吊ふの辭

鳥取市立川町　三浦とし子

ぬばたまの闇をもさえぎり、淸き玉の緖をも地に消えしむる劍こそいともあやしきものなれ、其の身は細く其身は小くして、くしき光を放つ筆こそ又なくあやしきものなれかし、美はしき花は七日の雨にはかなくも消え、淸淨なる月はあやなくも群雲におほはるゝに非すや、されども一度筆に取れば千世かけて萬世かけて消えざるなり、うた人の之れを取れ

ば鬼神をも泣かしめ、天地をも動かすべきか、忠臣の之れを取れば亂臣賊子跡をひそむるにや、かくもあやしくくしびなるは短き和毛の力なれかし。

汝れはかく迄も不思議なる靈を持ちながら、はかなき我れに嫁ぎしにや、同じ年月をながらへて、同じよはひを主に仕へて、かくも幸なくはかなくも消えぬるか、汝れが命こそは、如何に御神にかこつとも、いかに天地にうつとほるとも、我れは語を知らざるなり、我れはかく迄も此の貴き生毛を空しく果てさしむるとは、知らざるなり、此の和毛心あらば此の悔みをば許せかし、此の怨をば許せかし、靈あれば殘る思ひを殘りなく語りてぞされ。

汝れが思ひをさりげなく打ち捨てるは、我が細指の餘りに力なきにか、嗚呼我れは知れり、我れは悟れり、汝は再び來れよ、今は云はずもがな、語らずもがな、此のかよはき筆よ、只汝れが身のほのかに殘る紫、紅は我れが血汐のほとばしる、心の影とこそ思ひれ、云ふ勿れ、語る勿れ、汝れは早くも此の炎の中に身を入れよ。我れは其のかよはき煙をにぎりて、汝れが靈を得るならん。』

評　物書かんとする人に、いと愛でらるゝは筆なり、一枝の水莖、これを揮へば、まことに鬼神をも泣かしめ、天地をも感動せしむ、されば、筆は文人の利器なるに、無二の伴侶なるに、一朝事情に迫られて、これを棄てさるべからざるに至らば、棄つべき人の胸中には、油々たる無限の感想なくんばあらず、この文は、這般の感想を描きたる好個の抒情文なり、行文流麗、些の苦みたる痕を見ず、また文に巧みなるものといふべきか、　（記者）

（丙賞）

社會と主婦

神田錦町三ノ一五　友近里子

そも〳〵社會てふものは如何なるものなるや、其種類いと多し、すべて人々の集まりて一の團躰をなせるを社會とはいふなり、世の人のいふ如く、上流社會中流社會なと皆各一個人の集合よりなりしものなり、少さき露のあつまりて河となり海をなすがごとく、此社會を作り出す源のなくてやは、此源を成すものは一家にして、此一家の集まりて社會をなし社會の集まりて一國を形成するなり。諺に上流濁する時は下流澄まず、と實にこの如く、一國の本たる一家よろしからざればめでたく一國を保持する事能はず、さて一家の起きは其主婦の心にあり、古人も一家の起亡は其本女にありといへり、目下我國の主婦にして、其心得ありて家政を取り子を育つる人いく人かある、いま迄我國の習慣として、女はたゞ男子にのみたより、己が姿をよそほいなすをつとめの如くなして、かりにも世の事などに心をとむる人の無きは、いとなげかはしき事にこそ、あはれ一家の主婦たる人、こゝにこゝろせば、大にしては國のためとも なりぬべし、おこがましくも己がのぞみをのぶるになん。

評　此文僅少の文に過ぎざれと、稍々見識の見るべきものあり、社會の基は家族にあり、一家の整美は社會に影響する大なれば、主婦たる者、此點に着眼してよく家庭を始め社會を改善せざるべからす、と警醒したるは好箇の見地なり、　（記　者）

（乙賞）

故郷のなる妹の許に

東京本郷區丸山新町
二番地 竹内せき方 木村貞子

今日御母上様に手紙差し上げ候まゝ一筆差しそへ候先々御障りもなくめでたく存じ候私事もやう／＼東京になじみ此節は近邊だけは町筋などもあら／＼わかり道さふ事なども稀になり候へば御安心下さるべく候扨御許にはさいつ頃小學校御卒業のよしいひつかはされさぞかし御悦びの事と察し入り候次の妹も三學年にすゝみ候よしはるかに嬉しく存じ候其のよろこびに贐の往かひてふ習字作文書上下東京名所の繪三帙及び我か日用筆斯花小夏毛各十對づゝ今日通運に出し候ゆゑ近日の内に相届き候はんさぞんじ候扨も御許には如何にさち多き御身には候はずやこその四月より大垣にも高等女學校の設けられし由なれば其れへ御入學なされ候はとたらちれの御膝もとにありて通學の出來得る譯にていさ／＼羨しう存じ上げ候すべて女子は女子らしく何事もひかへめに詞かず多からずさりさて世なれず人おめして引き入るやうにもあらず深切にてなつかしく物和らかにして隔てなく親しむべくして犯しがたき所あるやうなるをありたき事にいひもしれがひもいたし候事にて候又女子の小説讀むはよからぬ事のよしにて高等女學校にては禁ぜられ候事に候まゝ御許たちも小説には手をふれぬやうになされたく存じ候益は少しもなくして害はいさ多しさの事に候まゝおそれて遠ざくるものさ存じ候何も用事のみ其他の事は御母上様にくはしく申上げ候あら／＼かしこ

（丙賞）

小學校の卒業を祝ふ消息

但馬國城崎
郡三椒村 河野貞子

執る筆さへあやしう躍る計のよろこばしさまして心のうち嘘かしさおしはかられてなむこの年頃いそしみ給ひし功むなしからずまだ十五にも足らぬ御年にてはやも高等小學校の業ををへたまひしこといさと久方の月の桂もをる計さいへるむかし忍ばれて我か身耻しらなむこたびの試驗はことにすぐれし成蹟にておはしましゝさかやあはれさもすれば人は慢心さかいへる心のやまひにかゝり易しさいへばひさりを愼むといふことを朝に夕に忘れたまはずひたすら學びの道を勵み玉ひなば遠からず御身は明治の紫式部さも歌はれ玉はむあはれたのもしきは御身の行末にこそ御身の杖さも柱さもさては力帥さも頼み玉ふ御母上のうれしさそも如何ばかりぞやとりいそぎ雲井の贐のはしりがき亂れ亂れし筆のあさこは嬉しまぎれのすさびさも見たまへかしあなかしこ

（丙賞）

人の學校卒業をいはふ消息

但馬國城崎郡
西氣村字塚本 和多田文子

一筆のはしがきは嬉しさのあまりさゆゝさせ給へさても年月の御いそしみのなみならぬは今日の御式にまさしくて學の業卒へたまへるがの一の席占め給ひて優等の褒賞をさへえさせ玉ひまた總代の御祝詞も讀上げ給ひて
かしこきあたりの行啓さへありて親しく御式見そなはせられしなど承ることよめでたしさも目出度に御一族の御よろこびいかばかりかあらん折

過きず來りて御祝辭・聞取あげくはしう御ありさまうけ給らまほしけれさいさゝか事のまげくて先は一こさ取あへずきこえあぐるになむあなかしこ

賞外

◉亡き妹

山口縣 山名萩舟

降りつゞく昨日今日の雪は、暖かなる春日に逢はゞさけん時あるに、なぞ妾が胸の悲しく結ぼれし憂の、麗ゞなる日の光りに誑ふてさくるの時節なきや。あはれ、妾は行季永く此悲みの胸に刻まれて忘るゝ事は得ざるべし、

肌寒き風の吹き初めし頃なりき、妹は假初めにも病に臥せり。初めは風邪なりしが、次第に病の變り來て肺炎に轉ぜりさ醫師は言ひぬ。一族の驚きは如何ばかり、別して妾には一入の妹、昨日迄はお姉樣〳〵さ慕ひて手を取りつ某の校に通ひしさとき妹が、十六夜の未だうら幼き身にて、恐ろしさ病魔を抱て臥せりさ見ては一入に驚かれぬ。母樣さ妾さは付添として、妹は直ちは某病院の紅梅の枝さしのべたる第三號病室に入院せしめき。

薄寒き時候は日に增し募りて、荒涼たる病院の庭園はいさゞ寂莫を極めたり。さらでも笑語なき濕やかなる病院の中は、火の消へし如く靜かに折々通ふ看護婦の足音聞ゆのみ。妹は國手の治療により初めは左迄重症さもならざりき。風なき暖かる日は臥蓐な端居に移して、折から見舞はるし父上な膝を枕に寢ろの時もあり。或は學びの友の尋れ來て過ぎし日の事はぞ微笑みつゝ語りたる時もあり。妾は絕へず好ましき小說な讀み聞かせ幾分の慰みを與へ、或は梅花のいさ好めばさて。窓にのぞく紅梅の小さき蕾つけし一枝を折りて枕邊の小瓶に活けもしたりき。病勢依然さして臥蓐幾十日、身幹衰へて芳艷なりし色あせ、蒼白なる纖手、梳らざる黑髮、已にいたはしきに緋花なる繻絆に一入悲みの眺めをそへて、日毎に見舞ひ賜ふ父上兄上の眉をひそめしめぬ。氣强なる妹は此あはれなる樣になりつゝも猶母樣姉樣許してよ、小窓の紅梅の花咲く春の朝さもならば、必ず病も治して余りある加療の御恩に報ひんさ言へり。濕據なき此言の葉も親たり姉たる身には如何ばかり心强かりしよ。あはれ浮世は此やさしき言の葉をよそにせずんばよし。國手が盡力も、母樣と妾が終日終夜の看護も、其効なく、依然たりし病症は師走の下旬頃より漸く增進せんさせり。枕邊に活けし梅一枝、窓の暖氣に早綻び初めし蕾さへあるに。忙かしき師走も看護に暮れ、世は廻り來て新玉の一日さなり、二日三日さ過ぎて記臆すべき其月の十八日 妹の病は革まれり。只の今迄も妹が梅咲く頃さ言ひしを力に死をば他人の事とのみ思ひ居しに、今は妾等が上に廻り來て不幸なる妹を奪ひ去らんさす。母樣さ妾は氣狂せんさす。父上も兄上も弟も來賜へり。一族五人病蓐を圍んで等しく眼は淚に曇れり。妹は力なき眼眸を開ひて一族の顏を眺めて無言に淚溢らしつ。父上も、母上も、妾も泣ながらに安心さ立命さひて天の樂園を細かに告げぬれば、血色なき顏貌に少しく微笑みつゝ暖き春の朝も待で安らかに其儘午後八時、靑春十六、空蟬の屍を世の置片身さして魂魄は長へに去れり。

ありし妹の日々忍ばれて、雪ふる今日三十五日の忌日は、結ぼるゝ胸の思ひを雪さ共に增ばかり。あはれ亡き妹よ、今何れの處に逍遙ふか、佛の御前に供へし室咲の紅梅一枝、棚曳く香烟、讀經の聲、あれもこれも妾には淚なさそふ種ぞかし。

評　文章は生硬を免がれざ、その妹を失ひたるさきの悲想、さ亡き跡に忍ばるゝ哀情を描きて餘蘊なし、結末の文句妙にして全篇を生動す　（記　者）

◎卒業の告別

山梨　渡邊まち子

隙行く駒の足掻早くかがなふれば早四させ五年の永き月日をゆめの間に學びの庭に積み重れ今日はしも妾等が其定まれる業卒へてかくもおごそかなる此式場にやむごさなき方々のふりはへて臨ませ給ひ同じ教子鄕さもにそが證券給はり且はいさもれもごろなる御詞をさへたまはる事のうれしさよあはれ過來しかたを思ひめぐらせばいまだ物の理入の道は五月暗ものゝあやめもわきまへざりし程より朝な夕な手を取り教へ導き給ひし師の君方の御惠は富士の山よりも高くわたつみのそこよりも猶深かりぬあゝ此めくみ何をもてか報いまつるべき唯今よりはひたすらに其敎のまにまによくまもり心のくもりを磨きつゝ學の道を一しほにいそしみつさめて怠らず家の業に叉世のいさなみにこの身ほゆたれ豐榮のぼる朝日のかげに今日さきそむる櫻木の花にならひて匂ひゆかしき德をつみかきりしられぬ御惠の萬が一も報いまつり此光榮のながく空にうせざらんこさを誓にこそさはさりながら此うれしきいさも榮えある御式にあづかるにも今日をかきりにこのにはを別るゝこさゝ思へば今更に名殘りををしうぞありけるさるはかくながき年月を明暮れ父母さ賴みし師の君の御もさをはなれん事は更なり日頃追つ追はれつむつみ遊し姉妹袂を別つとさおもへば唯々悲しうてひさりなみだにくるゝのみいさいとをしきこのまさゐしばしなりさも長うあれいまやかかるなつかしき人々に別れ此足はぬ身もて世の海の波高き中にただん妾等こそ舵をたえたる蜑舟のよるべさためぬ心地ぞせらるる只願はくは是よりのちも變らせ給ふこさなく末長く陰ながら妾か杖さも叉柱さもなり給はりて常に足はぬふしを補ひ曲れるすぢをため給はへことを終りにのぞみて同窓姉妹たちに一言申さん妾等が此校に在りし程は朝夕にまこさのはらからも及ばぬ迄厚き情もてなぐさめ給うしことはげにうれしくいつの世までも心にしめて忘れざるべしのぞむらくは殘り姉妹たちはよきに身をもてよろづの業いそしみ給ひてやがてかへしきほやれを得給はんこさを今この際にのぞみ申述べたきここさ濵の眞砂の數多けれさ胸中千々の思にせまりつたなき言のはもてえつくすべきにあらねば唯々思ふ事の十が一をさこえまつりいささか答辭に代へ併て別れをつげまつるになん

◎春の日

牛込　櫻井伊豆子

肌もさけんばかりなりける冬の日も、やうやくに過ぎて、吹き來る風も、何さなく心地よく、庭の梅が枝咲きみだれて、はや二ひら三片は、散ち初めたる折りから、春日の光のうらゝけさは、ちりひぢいく尺さいふ、みやこよりは片田舍こそ、なみ〲にまさるものなれ。まいて山邊ちかきいほりなどは、住までばそのたのしみも、おもむきも知られざるべけれど庭の若草さもいでゝ、谷のふる巣よりなきいでし、鶯の初音など、えもいはぬ風情なり。

一日、あさまだき空には雲一片も見えず、かすめるそらにひばりなど、初々しく啼きしきりて、綠りにつゝむ麥畝に、二人三人のたがやす賤の男も見え、少女子の紅なる袂をつられて、摘草やすらん、五六人の姿もあり。あなたの堤に十人ばかりの男の子の、旗うちたゝて軍ごさするなど、何れとのさかにたのしげなるさき、我は近きあたりの姉がりおとづ

れぬ。美代子の君はいかにし給ひしかと尋ぬれば、姉は雨の絲にてうまいすさ、いふに行きて見れば、今年三つばかりなるをさな子の、毛布の上に横たはりて、何をか夢みる、片頬にゑくぼつくりてねむれる姿の、いぢらしさよ、そが傍には、神より外に守りし給ふものなきかさ思はれて、我は思はず手をかけしが、なほ目はさまさずして寢返りせり。姉なる人このをさな子の母なる人は、やがて我がかたへに來りて、美代子の手もさを見給へさいふ、見ればかはゆき指に、糸つけたる蝶をもてるなりけり。あはれこのすがたの美しさは、まことに西の國にてそのむかし、繪畵に名を得たるラフヘエルたりさも、筆を下すにためらふべく思はれぬ。我は再びゆり起さんさしたりしを、姉はうちとゞめぬ、さゞめ給ひながらもその手をさりて、あなかはゆき子よ、うつくしの子や、などいひながらおのが唇にうちあて給ひければ、美代子は目さましたりされど母なる人の傍におはせしをもて泣きいでんさもせず、愛らしき唇よりテフ〳〵なる詞は、二言三言もらされぬ、蝶は飛び出でんとせることこそ幾度かありたれど、つながれたる糸のために、え能はずして美代子の手の上にとまりぬ。

あはれ、かゝる子の母なる人の心いかならん。匍へば立て、立てば歩めさおやごゝろさはいへど、大人びたらんときには、又かゝる姿を見るを得べきか。あはれ春の日ののさけさよ、春の御神はいかに世の人々にたのしさをあたへ給ふ、ましてかゝるをさな子にめぐめるひかりは、一しほさ思はれぬ。

◉我が家の狗

群馬　遠坂　たき

わらはの家に年頃かい置ける一匹の犬ありしがあまり年をへぬればとてかはりの犬をもとめていづかたへかつかはさんとせしに幸ひもらひうけたしさ云ふ者あるにまかせ其家につかはしぬさるに犬はあはれなる聲をいだしてなきかなしみはていろいろの魚肉などあたへられしもひさつだにくちに入れず家の人にもなつかずただいさもあはれなる聲にてなきさけぶをもさめてかへりきたりやがてわらはの家のかどまできたりしによろこびいさみて內はせ入りぬそれ人の義をしらざるはかの足利尊氏の如きものにしてかしこくも　天皇陛下に臣民たる身をわすれ已がうけし恩をも報いず遂に兵をあげにしきのみはたに弓矢をむけたるぞ誠に憎みても餘りある事にてこの犬にたいして其面をあはすることさあたはざるべしあゝ萬のもののだい一に位する人にしてかのけものなるいぬにすらおさるさはさても情なききはみにして又哀れかぎりなりけり

◉親しき友の女學校に入るを祝ふ文

近江　藤田　れむ子

一筆申上げ參らせ候、此頃は日に增し暖かに相成り、野山の花も咲きそろひ候折柄、御館何れも樣いよ〳〵御榮えに渡らせられ候由、めでたく存し參らせ候、さて承り候へば、御許樣にはこの度御二方の御許しを得させられ、四の都なる高等女學校に御入り遊ばされ候趣き、まことに御悦ばしう祝ひ上げ參らせ候、御許樣の才學に秀でさせられ候由は、これ迄の試驗にさり〳〵めでたき御賞典を得させられしにても明かなる御事に候へば、この上學びの山文の林に分け入らせられ、ます〳〵御勵み遊はされ候はんには、此末の御上達もなか〳〵に深からめと察し上げ參らせ候、左は申し候ものゝ、稚き時より花に月に御伴ひ參られ、姉妹の交りも物かはさ語らひ參らせし御間柄の、遠く海山を隔てゝ都會の地に入らせられては、今より誰が便りに事問ひ參らすべきさ思へば、何さなう

心細く御名殘の惜まれ候、哀れ都の御友の數繁くおはすとも、深山がくれの拙き身を御見捨なう、御學びの暇には折々御玉章をも惠まれて、都のくさ／＼御聞かせに預り度、くれ／＼も願上け參らせ候、この御粗末なる懐中鏡、並びに見ぐるしき寫眞一葉、いさゝか御餞のしるしに差上け參らせ候、「身をわくる事のかたさにます鏡影ばかりをぞ君にそへつる」と、古き歌にも申し候如く、斯ばかりの御餞けも、つたなき眞心のかず／＼籠れる所と、幾重にも御くみ取り遊ばし、御納め下され候はゝ、何より嬉しう存じ上け參らせ候、かしこ、

◎野遊よりかへりて後友の許に

三重なにがし

昨日ふと某子の君に誘はれ近き野邊に遊びに參り候ひしにうら／＼とかすみになびく四方の景色はさらなり空たかく上がる雲雀の聲も何となくのどかにて土筆嫁菜など思ひの外いとさわにて人々の籠にあまる許りもおはし候ひきかれて御老人様にはかゝるもの好ませらるゝとの御事ゆへ御恥しくば存じ侍れども別ち上けまいらせ候まゝものはうす／＼とも志の程くみとり給はらはうれしう存じ候なほ近きうち今一度出掛けたくと思ひ侍るを御元様にも思召あらせられずや御左右御伺ひ申上候

◎受賞を祝ふ文

木村ひて子

きさらぎとかや、月の名もしろく、さえかへりはべるを、さきつとしうつしうゑつる梅なむ、ひとりなりしり顔に匂ひ出でぬるに、朝日のかげのうら／＼とさしそひたる、また、似るものなうて打ながむる折しも、はしたものゝもて來つる新聞紙よ。もゝよろこびの初音にもまして、ゆかしきふしをたへはぐるこそ、いと／＼うれしうおもひたまふれ。さても、御せうとの君には、御國のみいくさたがひたまひて、久しうかの國に渡りおはせしを、このほどつゝがなそうてかくりまぜるさへあるに、ならびなきみいさをたてさせたまひて、かぐはしき御名をあげさせたまへる、御せうとの君が御にもまさりて、金鵄勳章うけさせたまひぬとや。このはな心はさるのものにて、父母の君、さては御前さまの御よろこび、はた、いかならんと、思ひやりはべるに、こといみもしはてず、なみださへさしぐまれはべり。さるは、ひたすら、大君のみことをかしこみ、みいのちを鴻毛のかろきにたとへさせたまひしみこゝろおきてによるにこそはべるめれ。げに御ひとぞうのほまれはいふもさらにて、とこしくに、ますらをのかゞみとてこのさしのぼるひかりのごと、もろびとにあふがれさせ給ふべくなん。こはめつらかなるものならねど、さゝか、ほぎまつるしるしにとて、御らんぜさするを、納めたまうてよ。よろづはたいめにこそ。あなかしこや

◎芝居見物の利害を問はれたるに答ふる文

米澤志賀・貞子

さいつ頃の御文うれしく拜しまゐらせ候の給ふごとく高等女學校を始め小學校等に於ても芝居見物をかたくいましめられしはいと／＼深き理りのこれあることにて元より私の如き者の申すも及ばぬ事にしあれど今の世の人のあまりにうらめしう思はれ候まゝいつかは心あひぬる人々につげもやせんとおもふ折から御許様よりのわざ／＼御問ひ合せに相成りてこそはわが心の通ひげむとうれしく及ばずながらせあてはそが一はしをも御答へ申さばると思ふまゝをかきつけ申候間御見捨て給はずばこよなき事に御座候

さて我國の芝居は今はむかし德川の始つかたより起り其はじめは只操芝居となむ申すめるものを擧行せりとの由なりしも次第にをちこちにひろまりはては普く世に行はるゝことゝはなり侍りぬるとかさはいへやんごとなき教へぐさとなるべきものとは品かはりたゞ〳〵人情に訴ふるのみにてなか〳〵に今日の世になりては其害の著しきこと誠におそるべき極みに御座候そもかのいともいむべき芝居てふものは猥褻の媒となるのみかは人の心を動かし邪路にまよはしむるものにて御座候古のひじりのい大けらく人の心は水の如しとかやのことにてその感ずるところによりあはる善にあるは惡にあるは賢にあるは愚にもなりぬべきものにて意志のこりし年たけたる人はいざ知らず未明無方針にして理非の判斷力に乏しき學生の身にありながら淫褻極まる所の芝居などを見物なすときは忍ちいやしき風に浸み長の年月螢や雪をあつめてみがきあげにし心の玉も夢の間に石に化し瓦となりさて又之につれて怠惰なる心おこし如何にかたくちかひし志もいづこにい消え失せ春は花秋は月と浮れつゝ一刻千金の光陰金錢の貴きをも泥土の如く思ひ淫樂を事としはては其身をあやまり上は不忠の臣となり下は不孝の子となりいでゝは世人の笑をうけ入りては父母の歎きを買ふなどげに幸なき身となるものにて御座候あゝ實に歎息の外之れなく諸學校の芝居見物を禁ず意も之に外ならずさるを地方の方なき者どもいたづらにみめかたちの裝ひをなし意氣揚々としてかゝる境遇をなし居るものにあまたあり今や日に月に開けゆく大御代にあたりかゝる者のみ多からむには忽ちこと國の侮りを受け國のほまれをおとすやうになりもてゆくは今更あげつらふべうも候はずあゝ世の人々の芝居見物をなす餘裕あらば書を求め暇あらば久讀まむなどの志あらまほしきことになむあはれ御許樣よ御心あらず愚ながらも己が心をくみ給ひ御力のあらむかぎりさるべき人々に御さとし給はむことを伏して願ひ奉り候さ候へば御國の御爲と相成るべきは申すもおろかはた我身に取りてもこよなき面白あることならむと存候故何卒〳〵御ねがひ申上候先は拙き筆もて御返りごとまでかしこ

◉昔ばなし

和歌山　花　子

昔紀伊の國宮原と呼ふ地に貧しく生活す母子ありけり娘は歳の頃十ばかりなり性れつきいと孝心深く母に事へてまめやかなり母も亦其やさしき心ばへを愛でゝ掌中の珠といつくしめりさるに貧しき家の常として止むなく娘を里遠き山中の農家に奉公さする事となりぬ娘は母の膝下を離れては朝夕の事への爲し難きを今更に心かなしく母も此稚き者を他人の家に手ばなさんとの心元なく不憫にも覺ゆれどもかくてあるべきならねば愈々明日は出て立つ事と定まりぬ其時娘は母に對ひて云ふやう妾母樣に別れ行かんといとも悲しく侍れども詮なき事なればせめて母樣に似ませし面を一つ賜はらばうれしき極みなりと切に乞ひて止まざれば母は之を諾ひ市に出でゝ求め歸り之を與へけり娘はいたく打喜び大切に己が針箱に藏め是を持ちていそいそとして主人の家に趣きけり主人初めみな〳〵其幼きにも似で忠實なるを愛でゝ賢こき者よとたゞへられつゝ每に己れに給せられし食を先つ針箱の側に持ち行き何やらん獨言つしかる後ならでは已が食事を濟ます事無し斯くすると此に來りてより未だ一度も怠りしとなし他の召し使ひの者どもあやしみしば〳〵之を尋ぬれども只打笑みて答へず益々いふかしき事に思ひ或る日少女の田に出でしを幸ひ一人の下僕ひそかに彼針箱の中を窺ひ見しに思ひがけなき一個の女の面を入れありたりさては朝夕彼女の言ふは是面に對してならめいで是を他の者と取換へ置かば如何に驚くやらんそれも亦一興ならめといたづらにも、

れを取出し天狗の面をば入れをきける斯かるべしとは夢にも知らず乙女は田より歸り來りて與へられし夕飯の膳を常の如くいそ〳〵持ち行き針箱の側に捧げながら對して言云ふ如く禮を正してうや〳〵しく母樣今日も御きげんよくいざ夕飯を召し給へと針箱の蓋を除ればこはそもいかにありしには似もつかぬ天狗の面にて變りありければ少女の驚き云ふばかりなく忽ち心を失ひにける人々打寄り介抱し漸く元に復しけれども少女は身も消ゆるばかり是は必ず母上の身に常ならぬ事こそあれ是非に一度逢ひまゐらせればと思ひつめては一すぢに心も狂ふばかり家の人々止むるを强ひて暇を乞ひ夜を侵してて山を越ゆ山また山深く吹く木枯しは肌を貫くばかり夜はいたく更けゆきて梢を移る風の音ものすごきこと云はん方なしさすがに心淋みしく恐ろしけれど自ら心をはげまし震へる足を踏みしめふみしめ助けを神にいのりつゝ危ふき細路をおぼつかなくも歩み行く折しも幽かに人聲の聞ゆる樣なりいぶかしけれどうれしくも覺えて急ぎて其方にたどり行くに火の光りさへ暗を破りて洩れ來るにぞさては何所にか人の住家の在りと覺しあら賴もしやと近づくまゝ打見やれば思ひきやかつは見も慣れぬ鬼の樣なる荒くれ男の五六人圓居して鳥目あまたならべて何やらん言ひ罵りつゝ焚火あか〳〵燃やし居たり其が中の一人目敏くこなたを見つけ不思議のさまにしばし眺めありしがやがて呼び止めて汝は何用ありて此の夜更か斯かる所には來つるぞこは必ず狐狸の類の我等を誑らかさんとてなるべしあからさまに告げずは憂き目をや見せんと罵りけり少女はさてはかれてきく此あたりの山賊ならめと心をしつめて妾はさる怪しき者には候はず此山の彼方なる鄕に母を見舞はんとて來つるなり何卒ゆるし給へてとひたすら哀を乞ひければ山賊どもゝ安堵したる者の如く然らば汝れを助くべければ之なる米を彼所の谷川に淸めて飯を炊き呉れずやと言ふ少女は心ならねどもそむかば如何なる辛き目に遇はんも計られずと言ふがまに〳〵米を磨き石を拾ひてかまどゝなし飯を炊く然るに俄に集め來したきゞなればいぶりて燃えず餘りの烟たさに堪え兼ねてふと何心なく前の猿の面を被ぶりてたき居たり山賊どもも之れを見ていたく驚きさてこそ此山の天狗にてありつるかすはこそ大事なれと恐れまどひて是等のたからは殘らずさゝぐべければ何卒命は御救けひへと口々に云ひわめきつゝあわたゞしく逃げ失せけり少女は不審に思ひつゝ邊りを見れば數多の白金黄金夥しく撒き棄てあり折柄東の空もほの〳〵と曉近くなりければ是を拾ひ取りて急ぎ我家指して歸りけり母は時ならぬ音づれをあやしみさま〳〵尋ね詰る樣のいとも慈なかりければはりつめし心も此に至りて初めて安き思ひを成しけりさて昨日よりありし始終をつぶさに物語れば母は其志をよろこび且つは危難を逃れて無事なりしを互ひに祝ひつゝやがて拾ひし金は悉く村吏の許に屆け出でけるにしばしありて其金は其まゝ母子に與へられ外に少女が健げなる至孝を賞して金子若干を添へて賜はりたり母子の喜び一方ならず殊に世にも辱き事に思ひ益々母に孝養をつくせりと云ふさてその金を資として商業を營みしに四方の評判いと高く殊の外榮えければ面をそのまゝ性を天狗と稱へ家は益々いや榮えて遠き古へより代々おとろふる事なく今尙は素封家の聞え世に高しと言ふ」

櫻花を觀る記

神戸　水越秀子

夜一夜、ふきすさひし風もなぎぬ、[illegible]りしきりし雨もやみぬ、けふは日曜日なり、友とちさそひて、花見に物せんと思ふなり、二人三人とひ來にけり、いひ合せたらんやうなり、といと嬉しくて、やがてつれ立ち行く、中に年たけたる一人かけふは、上野の公園、すみだの堤などは、た

れも志すところなれば、なか〳〵に煩はしくやあらむ、我が舊藩主の別邸は、道も遠からず、常人はこず、心のどかに花見んは、かしこぞよからむ、案內せんを、いかにといふ、人々それよけんとて、さもなはれ行く、むかし國主大名と稱へしもしろく、外の構へ、內のありさま、なごそかなり、守人につきて、庭になりたちぬ、さて見あろくに、樹立しげく、芝生たひらかに、築山たかく、池ひろく、萬たらひてあり、こゝかしこに立てる櫻樹、八重は蕾や、赤みたるまでなれど、一重は七八分咲き匂ひて、いひ知らぬさまなり、見度しよきあたりに、毛氈打ちしきて、物がたりす、一人がこの庭のけしきを題にて、歌よまむは、いかにといへば、一人はなか〳〵に、いせ歌よまむよりは、抑にあひたる古歌ども、打ち誦したらむこそ、まさらめとて、「うら〳〵とのどけき春の心より匂ひいでたる山櫻かな」といへば一人が「鶯に身をあひかへば散るまでは我が物にして花は見てまし」といひもはてず、また一人が「世の中にたえて櫻のさかさらば春の心はのさけからまし」など、とり〳〵にいひ出づる折しも、鶯のとび來て、枝うつりして、鳴くほど、羽風やふれけん、二ひら三ひらちりて、袖の上にとまれるは、嬉しともうれしきや、花は年每にさき匂ふとも、かゝる樂しき圓ゐは、あらじと思ふに、春の空のならひとて、風ふきいでて、雨雲とほく山の端に見へそむるまゝに、をしきかぎりなければと、歸へさのみちにつきぬ、

◉春の野に遊ぶ

神戶　水越　秀子

のどかなる春の日かげに、學のわざもうみ易くて、靜に庭の面を打ち巡ぐれるゝ、空のけはひいとうらゝかに、きのふまで心づかざりし垣根の草も、いつしか萌え出で、今をさかりと咲き匂ふ梢に、鶯の囀づるなどいと興多きに催されて、野邊のけしきの如何あらんと、そゞろに心うきたちければ、日頃親しき友どちを語らひて、家を出でつ、四方山の談に餘念なき程に、はやくもこころざすかたに近づきぬ、しばし立ちやすらひて、四方をながむるゝ、海上は、いと靜にて、疊を敷きたらんやうなるに、そを濟ぎわたれる船の、空飛ぶ鳥かと疑はるゝもをかし、遠く南を望めば、山山重り合ひて、多くの松の、青々と生ひ茂れるに、麓の白らめるはまだ去年のふる雪消えやらで、かと思ひつゝ、やう〳〵近づけば、それにはあらで、數千の梅花の、今をさかりと咲き亂れて、恰も雪を散らせるが如きなりけり、又其の邊の畠には、一むれのこがれを敷きたらんが如き、菜花の笑へるあれは、席を展べ運れたらんが如き、麥田の目を洗ふべきあり、實に麥浪菜波とかいひけんは、此事なりけりと思はるなど、其の景色、得もいはれずよし、日頃の欝も、頓に消えはてぬ、嗚呼此の花此の木の今日の如き時に遇ひて、善く笑ひ善く匂ひて、人に賞め弄ばるゝは、霜雪の苦しきにも堪へて、其の節を守ればなりけり、人のもろ〳〵の業を企つるも、此れに同じ、其の堪へ難き種々の苦しみに堪へ、勤め勵みてこそ、終に其志を遂げて、此の花の如き芳しき名をも得るものなれなど、感して、賞で語れる中に、青柳のいと長き日も、いつしか其跡をかくし、入相告ぐる山寺の鐘の音に驚けば、はや、夕月のさし出でん樣なるに、口惜しけれど、家路にとぞ急ぎにける、

◉道すがらの記

信州　小岩井　愛子

霞たなびく春の日は人のこゝろの浮きたつもげにことわりや、今日は天氣うらゝかにしてそよ吹く風も心地よければ、かゝる日を徒らに學びの窓に打過ごさんも本意なければ、田舍の叔母が許たずれんとて妹をつれ

て家出でぬ。

やゝ行けばはや野べなり、眺むれば到るところ麥の波ならぬはなく、所々に菜の花のまじれるなど云はん方なし、胡蝶追ひつゝ行くほどに、路のべの菫の床を立ち出でゝ晴れわたれる大空に鳴き揚る雲雀のこゑに驚かされたるもいとをかし、心地よき春風に吹き送られてなほも野路をたどり行けば、とある里川のほとりに出でつ 川、水は清々として春の色をたゝえなり〳〵は魚の躍るも見ゆ、堤の上に彳みてあたりを眺めやりぬ、岸べにけぶる柳のかげに靜に漁翁の鈎を垂れたる、わか草あをき堤づたひ少女の若菜つみ歩ける、蒲公英の美しく咲けるを惜しげもなく牛のふみ行く、菜畑の中ゟ蝶々とまれの歌のどかに童の歌ひ行く、あはれいかなる趣ぞや、あはれ水彩畫の道具もたざりしを今更かこつも詮なしや、いつしか妹はあたりの菫摘み初めたり、あゝ樂しきは春の野べなるよ、長閑けき春光を浴びんと鹿の皮のごとき滑かなる苔のうへに横はりぬ、そこには馥郁として菫の香を放ちて咲きしがあたゝかき夢を破りけん、眠れる胡蝶はひら〳〵と舞ひあがりぬ。

雞犬の聲のどけき村又村を經て叔母が許たづね溫顏もて迎へられしは、なほこれより三十分程後のことなり。

◉せかるゝ水

信濃　清水ちくい子

せを早み岩にせかるゝ瀧川のわれてゝ末にあはんとぞ思ふ。」と古へ人歌ひましけんは、いとしき人と暫時は玆に別るゝとも、遂には逢ひ見ん折りのあらんと思ひ慰むなるべし。男女の情已にかゝり、友と友と相したひあふ心、はたしからざらむや。」

われに振分髪の昔よりして睦びかはせる一人友あり素より一ぞうのゆか

りあることには非れど、打見るからに懷かしう慕はしくて、迯に宿世床しく交ひ來しを、うたて世は戸分舟の障り多く、君には頓なる事よりして父母君に從ひ、遠く京都の街に移い住み玉ふことゝなりぬることそ、いと本意なき事なりけれ。げに思へば思はるゝものにや、けふ箱根越えて名古屋に着きぬ昨日神風の伊勢につきて五十鈴の宮に詣でつ、今京都につきぬ、圓山の花の盛りも見て侍り、明日は加茂川の春の景色もてはやさんなど、其折々をとつれこし玉ふは嬉しきものから、中々思ひ出の種なるぞかし。」

それにかの門出し玉はん前の一夜なりき、君には別れを告けんとて振りはへて我方にこし玉へぬ、我ば何とはなく悲しき思ひに、いひ出ん言葉も後や先やに亂れつ、いで何事もぐち〳〵しき事は言はじはたいふ共何の甲斐かあらむ只是よりは幾重の雲にかけ隔てられ、山川遠くさかるとも、夢々末の松山末かけて波こすやうの事させさせ玉ふな、折々につけてそよとの消息忘れ玉へそや、さるにも斯う膝つき合して睦びかはさん事いつの日にか又も見む、今宵は更へるともかくて語り明させ玉へ、と袂の障子明けものすれば、折しも月影み空にかすみてたぐえくる梅が香はたかんばし。いで〳〵後思ひ出に我は歌はんをとそゝのかされて、小琴の塵を打拂ひ、別れの曲を奏づるに何となく結ぼゝれて指の先さへ鈍りしは、いふ甲斐なき我心にも侍りけるかな。」明日になりぬ愈々出發せらるべき時になりぬ、我はつとめて起き出でゝ君か許にをとづれぬ、哀れ今日こそは篠つく斗り雨だに降れかしさらば出發し玉はん日も延びなんはと思ひしも仇にてうら〳〵と霞み渡りて長閑なる日影のいとうらめしくこそ、玉れは早用意調へぬとて門曳き出づ、村はづれ迄送り出でゝ別れを惜めば、さらば〳〵と答へ玉ふ聲も幽かなるに眼にははや露みちたり、急がすさても宜きものを、心なき車夫共は、小面憎くも掛聲高く馳せて行く

我は氣うせしたらん如く心も心ならず手を擧げて呼ばまくさへ思ふまに、車は彼方の山の出鼻にさ隱れはてき、辟け此山なさいはんも甲斐なくて。」

あゝ親しかりし彼君とは、箕山萬里にかけて隔たりぬ、先つ年迄は花影霞む春の旦、匂へ床しき香をしるべにもゆる若草踏みしだきて、胡蝶の夢を驚かしつゝ共に歌よみあへりしを、月影淸き秋の夜は雲井遙に鳴き渡る雁の涙と、盛り過ぎたる萩の上に置く露をよすがに、すだける虫の聲々哀みつゝ共に眺め更したりしを、其月其花、今は只昔を忍ぶ友たらんのみ。」

さはれ一つの枝に咲き出でし昔のあなれば、ひとしきり嵐に亂れて行方知らずとも、又本の根にかへるべき例しあり、同じ軒端の煙りもなのかトゝ久方の空に立登りてもまた雲と集るがごと、岩にせかるゝ瀧川の右に左に別るゝとも、再び落合ふ時のなからでやは。」

あかなくに雲がくれにし夜半の月、
さやけき影をいつか眺めむ。

◉一夜の夢

栃木　藤江美津子

人目も草も枯れにし冬のゆうへも、東の間にすきさりゆきけむ、年立ちかへつなりしあしたも、今はた、きさらき月のころとはなり侍へれと、姿らが家のみは、なとかさちなく、はらからなくに、春の暖かき、惠みいそしみの御光りの日さへ照らし侍へらぬ、あはれうたてしかも、世はかくまで、まゝならぬものとのみ思はゝ、血わき、泪あふれいてゝ、ゆく末のいそ〳〵心ほそく、おはすめり、まして杖とすがり、柱とたよりにおもひ侍へりつゝ母樣さへ、とこしへいたつきの御狀につきゐさせ給へて、身のほど〳〵いたつらになりぬへうそおほゆるを、あゝわらは母子は、宿せいかなる、罪業のおはしてや、淺路生のまゝならぬ、浮き世の貧しきこの家へは、生れこしものぞ、人はあたゝかなる、衣服を被り日に山海の珍味にあきはてゝ、けふは向島へ行見せん、あすは杉田へ梅見にと、娯樂三昧の榮耀榮華に、からた一つをさへ持て餘すものあるを、なとか、わらは母子の身の上にのみ、さちなきものかは、壁くづれ、軒かたむきにし、見るさへいぶせき、この伏屋にすみわびて、露の命をつなきつべき、食物ざへもあらなくに、藥のしろ、寒さをしのぐ衣服、なとかおよふべき、あゝもしもしも、

そも、妾が父樣にておはしまし侍りし人は、とほく、あづま都のあたり、いと淸らけき玉川の里となむ、呼へるところのお生れとやもうせし、人にて、今は昔、德川幕府のときめきしころほひ、旗本衆のひとりなりしとぞ、聞き侍りにしを、幕府瓦解、明治維新のこの大御代に、いとありかたき、何に不自由のさら〳〵なき、平民とはなりおこしものぞ、さはに、飛鳥川ふちせ常なき、世のならひとは、いひながら、うら壯きころほひ、ふと、みめかたちいと美くしき、遊女にまよひ給へて、いつしか背に腹はかへられぬ俚諺の、そら恐ろしく、はては、うみち流せし、御先祖樣より代々とこしへの遺産の地を、いだつらに、人手にわたしはへりて、かなしや、年頃、おきゐを、ともにし給へけむ、いと、なつかしのふる鄕をは、まよひいて給へ、こしかたは、いつ方と、はかもなく、をちこちを、さまよひ給へて、からくも、この地にをちつきゐさせ、心ならぬ月日をすこし給へけるうちにも、ねたしや、焚く線香のけふりと共に、あはれ、父上樣は、苔むす草葉の影の人とはなり侍り給へぬ、その頃わらは、なとか母樣には、かほとまでに、泪に咽ひ給へけむ、いかなることのいましてや、いと奇しく、たゝ何となう、母樣のなけき給ふ

まゝ、妾も〳〵せちに、うらかなしく思召すらむ、あはれをさな心のおろかしかりし、れたしさよ、さるうちにも、月日のみちに關守こそなけれ昨日さ去り今日さくらしつ、いつしかふりわけ髮の頃さはなり侍りしものを、父樣の、みまかりしのちは、月に村雲花に山風の、寸善尺魔のひかこさのみ、うちかさなりて、あはれいちらしく、心も心ならす、ここさわりせめて、悲しや、みよりたよりのあなくに、たゝ杖さなり柱さたのむ、慈悲ふかき母樣さへ、すつふり、み床に、まろひこし侍りて、三年あまりいた、きのうき苦しみに、肉をち、骨あらはに、お顏の色さへ蒼白く、髮の毛やゝぬけそめて、見るから此世の人さもおもはれぬ。口惜しさ、あゝ、かくなり侍り給へけむ、ものさはさ、幾度か、ふつゝかなる妾か、この身をやうりて、いさゝかなる、母樣にまへらせむ、藥のたつきにもさ、おもひ侍れさ、また、ひしさ思へかへせは、妾のふつゝかなるこの身をうるは、いさやすけれさ、やすからぬは母樣か身の上わらはひさりのみにても、心もさなきを、誰れかみさりし侍り給ふらむ、天をたつぬるもはらからなく、地をさくるもみよりのなき、あはれたよるに綱のすべもなく、此世にさちなきわらは母子のかなしさよ、あゝ天つみ神は、なさか、此世にいまさぬか、あな、わらは母子のさちなき、このあはれなる身をは、苦しみの海より、いさ優にやさしき御手をもて、エデンの園へは救ひさせ侍り給はぬ、あな心得れ、

あしたに、山にわけ入りて、はつ〳〵焚き木を樵りあつめ、これを市に鬻ぎて、わつかに粥をこしらへ侍るらむ、たつきを得てかへり、ゆうへには、いそしみふかき母樣の、枕邊ちかくかしつきて、みさりおさ〳〵をこたりなく、一日もはやくさちあれしさ、心に祈らぬさきそなきに、母樣には、心地もせちに、すか〳〵しさ、すや〳〵眠る寢顏さへ、うちさひしきを見るにつけ、又しても胸つふれて、身も世もあらぬうきかなしみ、あゝ、まゝにならぬか浮世の習ひ、まゝになるのは米はかりさは、あまり情げなの浮世なれさ、思案にくるゝ折しもあれ、涙子涙子わたしはもう苦しくつて、もかき問ひくるしむに、わらは、いそ〳〵驚きつゝ、お母樣お母樣さうがしてさ、いたき侍らんものをさすれは、あはれ今までのことさも、ふッさなくなりにしに、わらはあまりのことに、口惜しさおもひ、驚きさむれは、空しく夜具をかゝいつゝありにしさはあゝ、妾、如何なことのおはしてか、かはかり夢の爲に惱まされむさは、あはれ奇しきおもひ爲るに、しはしほんやりさして、あたり見わたせは、科戸の隙き間より洩らしこし、一痕下弦の月影、あはれ寂ひしう、さも心ありへらに、

◉十二の草木

南總　花蕾女史

(梅)谷の戸いてゝ、里になく鶯の、のさけき初音まちかほに薫りそめたる梅か香は、垣根に春やしむるならん。

(柳)遠山霞む春の夜の、月かけにおほろ〳〵さうちけふる、野末の柳あすは又、みとりの糸やなかくなるらん。

(櫻)心ありけに芳野山奥深く尋ぬる人はまれなれと春を忘れぬ櫻花御陵近く咲きみたるなり。

(卯之花)賤か伏屋は埋もれて、かくれつゝさきかさなれる卯之花を、月夜と見るや時鳥、軒端にちかく音信れてゆく。

(菖蒲)降りつゝきたる五月雨の、空はないつはるべしと見えれとも、紫深く菖蒲草、池のみきわにさきにける哉。

(蓮)轟き過ぎし夕立の晴れゆけは夕殘にのころ朝風にゆらきゆらきて咲きいつる池の蓮のうつしてきかな。

（萩）秋風ふけは陸奥の、宮城野の眞萩にまじる糸萩の錦ににしきおりそへて、都人にやほころなるらん。

（薄）一むら薄穂に出てて、夕されは鶉か宿も秋深し、招く友とてなけれども月にはかりやなひくなるらん。

（菊）かしこき御代にあふ宮の、九重の御垣のもとの白菊は、露もにほへとたきみちて千代の秋をや契るなるらん。

（楓）時雨をさそふ木枯の吹きくれは峯の紅葉ちり亂れ、水のまに〳〵なかれつゝ龍田の川に、にしきしくなり。

（寒蘆）こふるはかりの月影に難波潟霜枯はてしむらあしの風にそよけは水鳥のかりれの夢や覺むるなるらん。

（松）富士の峯おろしふきたえて、しつかにも雪ふりつめは羽衣の、常盤の松は眞白にそ鶴の衣を重れ着にける。

◉春のもの

鳥取　尾崎なみ子

○春雨

軒の玉水の間遠に落つる音のきこゆるにふと茶室の小窓打あけて眺むれば何處よりかもれ出でにけん淡き煙のゆるやかに軒端をつたひ行くにふるさしも見へぬ春雨の空かきくれてふり來りしなりけり井のあたりに下駄の齒の深く二の字にしるされたるはとくより降りしきりしものにや

○蕗の薹

雨露の痕溜めたる苔の深きに古りたる年の數もしらる可き石垣の中は崩れかゝりたる間より生ひ出でしばかりのものあるは開きすきたる蕗の薹の青々と美くしう生ひ出でたる里の乙女の小き籠につみ入れらるゝを待ち煩なるもをかしうなん

○柳

いと古びたる小舟一つ岸につなぎあるは渡舟にもやそか河べにそひて立てる二三本許のしだり柳のやゝ緑の色こくなりたるが先頃よりふりしきる春雨にうちけぶりて玉ぬきたらんけはひ云はん方なし折折里の子供にや片手に德利提げたるがまだ新らしき番傘さしてかの柳の下をすぎ行くが見えき

○菜の花

崩れかゝりし石垣または底あさき堀などに古をしのばすれども、そが城ありしあたりは皆畑となりて一面に菜の花の咲きいでゝえならぬ匂をこむるあたりげに春は古の春ながらなど歌ひつべしや

◉春の日遊山の記

秋田　小松崎はる子

見渡す限り廣々と、緑しきなす山々は、かすみたなびきて雪かとまがふふしもあり、櫻の花は今を盛りと咲きみだれて、春の空の一しほのどかに覺ゆるけふしも、天氣晴やかにあやしの雲はいづこにかひそむらん、かげさへ見えぬまゝひれもす深山の春を尋ねあかさばと、親しき友垣三四人打つれて宿を立ち出づるに、路のほとりの若草は往來の人を送るかの如く見ゆるも樂しく、心もうら〳〵としていつしか目指せる地にはたどりつきぬ、さはれみちのつかれもありければ、しばしやはらかき草のしとねに休らひしかど、程なく立ちておちこちの景色を眺むれは、今更にたとふるものもなしとは斯かるをや云ふならん、姿やさしき小蝶の或は天に舞ひ上り、或は千草の花に羽かひをのはし、露を吸ひ時を得顏の百千鳥、聲おもしろくさへづるなど、月世界もかくやと思ふ樂園にぞあるされば妾等も蝶の心してすみれつばなと摘み集め、かけめぐり、時の

たゝを覚えず、やがてねぐらに急ぐからすの聲に心づけば、日は早や西の[illegible]沈か[illegible]ぞ見へければ、驚きつゝ名殘惜しくも美くしき景色をあとに急ぎ山を下りぬ、げに妾等は樂しく一日の榮を取りて、むれのうちはさながら秋の夕べの月にも似たり、此山によもすがら宿らば海の面の日の出を見るを得べく草木には宵の露未だ消えやらで水玉は眞珠の如くかゞやかん、此風情まのあたり眺めんには浮世のにごりも忘れて、仙境に入りたらん心地せらるべし、いか程眺めつくすとて限りなきまゝ又の折をちぎりつゝ家路には向ひけれ。

◎花の命

和歌山　藤田進子

夕ぐれよりさは／＼と梢を渡るあらしにつれて降り出せる春雨の軒端に落つる雫の音ふけゆくまゝにいと哀れに聞くだに袖のしめる心地して讀みさしたる書もいつしか閉ぢられぬ、村はづれなる池の汀の一本ざくらはいと美しう咲きそろひたりと聞きしは昨日なれど今日ははやそよ／＼と池の面渡る春風に一ひら二ひら散りそめぬと聞くにまして今この嵐にふかれなばいかに此の雨にうたれなばいかに

嵐ふかずとも雨ふらずとも何れ長からぬ花の命のつきなば心やすけくしづかに、散りもし落ちもしするものを心せはしき春雨や花に何の罪かあゝ心みぢかき春雨や花に何のうらみかある、

靜かにそゝぎ靜かにふきて花ないためそ雨風よ明日までおけや散さずに我の至りて手折るまで、

去年汝がごとく限りもつきぬうらみをのみつ汝と共に散りたまひし亡き友のかたみとして我友とせん花よ、けう心もなき春風にまかしつ行方もしれず散り行くならば明日我れの亡き友思ふ暖き涙と共に落ちよ我机のほとりに、なつかしき友のうつしゑの上に、

◎あゝ月よ

在秋田市　渡部花子

月こそはいともいみじきものにあれ

霞みて暮れし春の夜の朧月には花も一しほの匂を増し夕立の洗ひたらんやうなる夏の月には晝の暑さも忘れはてゝいと涼しくまして秋の夜の月影清く荒れ果てたる庭の面を照らし葉末の露も玉かと疑はれ折り知り顔に鈴虫などの鳴き出でたるは身にしむやうにて得も云はれず哀れなるにやう／＼木枯の風身にしみて霜いと白く三日の月のほのかに枯柳にかゝりたるなどなかなかに興あるものなりさは云へ仝じ月ながら其の處によりてはなか／＼にものあはれに見ゆ、松風清き嵯峨野の月はその古しさも照らしゝかと思ひ忍ばれて戀しく、冬の吉野の月影は今もなほ醍御前を慕はしくあはれまして、いとゝ涙のもやうさるゝにまして其の影氷のやうに猿の聲々嵐に落ちる頃には何心なき山かつも斧を捨てゝ腸をたつ心地やしぬらん、又其の光り白銀のやうにて岸邊の葦の花さながら雪かと見まがふ程には情を知らぬいざり男も釣をとゞめて秋の哀れを催すらん、さればこそ古より月にむかひて思ひを述べ心をよする人多けれ、されどいざよひの月かげいと清うすみたるにいづくともなくむら雲のあらはれ來てさしもの光も村雨にいと暗うなりたるなどは又なか／＼に口惜しきものなり、雲も程なく過ぎ行きて再びさやけく照り出でたるはさきにもましてうるわしき心地ぞする、世なべて月にはむら雲の憂はあれど影はなか／＼萬世の昔とかはらずさるを世の人は少しく浮世の雲隔てらるれば心の光りもいと曇りて再びあらはれぬぞいともうたてき限りなれ、あゝ月よ月よ、汝こそは心とてはなけれども其の折り節につれて趣をかへ或は人を喜ばしぬあるはかなしましむるものなれ

懸賞文募集

本誌には初號以來『才媛詞藻』の欄を設け、毎月一回賞を懸けて海内才媛の詞章を募集す、是れ方今の才媛文學を奬勵せんと欲するの趣旨に出づ、其の選評者は何れも國文學界の泰山北斗とも稱すべき大家先生也。海内の名媛乞ふ其の美感佳想に成れる玉作を投寄して近來振はざる才媛詞壇を飾られんことを

◉國　文（一行廿四字詰五十行以下）　◉小　說（一行廿四字詰百五十行以下）

◉普通文（一行廿四字詰五十行以下）　◉新躰詩（七五調二十句位）

◉消息文（一行廿四字詰五十行以下）

右各種の投稿題はいづれも寄稿者の隨意たるべし但し政治的時事論に渉らざると、亦小說は可成優美なるを佳とす（〆切毎月十五日限）

優等者懸賞品（今回の分）

甲賞　圖書切符金壹圓
乙賞　圖書切符金七十錢
丙賞　圖書切符金五十錢
秀逸（三品）　薄賞を呈す

和歌兼題

五月分　月前郭公　展覽會（〆切四月十五日）
六月分　五月雨　琴（〆切五月十五日）
（天地人三名を選び懸賞文に揭げし賞品の乙以下を呈す）

投稿規程

一、本書は女子の手に成れる投稿を歡迎す
一、投書の種類は文章（文躰は國文及普通文に限る）詩歌（新躰詩及短歌今樣の類）小說は優美にして卑猥ならざるもの等とす
一、投書の期日は規定なきも懸賞文は所定に依る
一、投書の用紙は半紙二ツ折（和歌は端書に限る）半面十行一行二十四字詰にて文字は正楷に限る
一、投書は各種類を別紙に認め匿名を欲するものと雖とも必ず其姓名住所を記載するを要す
一、投書の送附は博文館編輯局宛にて封筒の表面に『女學世界原稿』と記載すること
一、投書は採否に拘らず一切返戻せざるものとす

（寄稿募集）本誌の材料として、家庭及び地方風俗、婦人社界の狀況、孝女節婦の美談佳話、各女學校の狀況、その他有益の資料を寄せられんことを希望す

學事

禮法講習會設立の主旨

近時我國の禮節の亂調蕪雜なる些の寛厚温籍の風を見ることなし、尊長に對するの禮、師父に對するの義、内は家庭より外は社交の上に至るまで殆んと云ふに忍ひさるものあり、如何そ之を禮容の美と進退の節とを以て異邦の帝王を驚嘆せしめし東方君子國民の子孫として世に誇ることを得ん

惟ふに之れ維新の更革に伴ふ士風の生硬落を尊ひし餘弊と歐洲の國狀を誤解して禮節を無用視せるの結果なるへし之れ我國の如き過渡の時代に在て常に免るへからさるの所なりと雖も今にして之を戒飾せされは外容の亂調は惹て純清眞美なる我國性を汚涜せむことを恐るこれ我輩已むなくも同志を糾合して禮法講習會を組織し彼の忌むへき汚風を未然に防き併せて聊か祖先に酬ひんと欲する所なり然れとも彼の區々の法式に拘り禮の末を趁ふの如きは素より發起人の主旨とする所にあらす要は只寛厚の心志を則として雅閑温籍の儀容に嫺れしむるにあるなり故に其敎習する所の如き伊勢といはす小笠原と云はす各其好む所によりて禮の粹を傳へ美を習ふの自由に任す大方の紳士淑女希くは發起人等の微意のある所を諒して本會の創立を協贊助力あらむことを

明治三十四年一月

(主事) 伊澤千代子、子爵夫人大河内みね子、森嬉美子

(顧問) 岩佐德子、伯爵夫人板垣絹子、男爵細川潤次郎、伯爵夫人大谷章子、山本たほ子、伯爵松浦詮、松田靜子、佐藤靜子、男爵三浦安、三井得右衛門

(評議員) 西村せつ子、原禮子、細川糸子、小野よし子、小室若子、河野闊子、赤城維羊、森清右衛門

(師範) 石井治兵衛、石井泰次郎、寶生九郎、小笠原清務、觀世清廉、田島秀子、松岡止波子、金春八郎、喜多六平太、秀島成蹟

(幹事) 服部澄代

禮法講習會規則

第一章 總則

第一條 本會は國民の品位を保持するか爲め家庭より始めて社交上に於ける儀式禮法を講習し閑雅温籍の儀容に嫺れしむるを以て目的とす

第二條 本會は禮法講習會と名稱し帝國婦人協會に附屬す

第三條 本會に來りて禮法を講習せんとする者は講習に要する實費を負擔し且つ豫め本會の會員たる事を要す但し帝國婦人協會附屬諸學校の生徒に限り別に會員となる事を要せす

第二章　經濟

第四條　本會の創立及維持に要する費用は有志の醵金幷に會員の會費を以て之に充つ

第三章　會員

第五條　本會の會員を左の三種に分つ

名譽會員　特に本會より推薦したる斯道の名家並に紳士淑女

特別會員　本會の創立並に維持の爲に金品を寄贈せられたる特志の紳士淑女

普通會員　毎月金一圓以上の會費を醵金する者

第六條　本會の會員は其家の吉凶時に當りて式場の儀式裝飾の指揮來賓の接遇を本會に依囑する事を得へし但し之に要する一切の費用は之を負擔するものとす

第四章　職員

第七條　本會に左の職員を置く

(會長)當分之を闕く帝國婦人協會々長の監督を乞ふ

(主事三名)會務を監督す但し主事の內一名を財務の主幹として金錢の出納を監督す

(顧問)碩德の紳士淑女を推して儀式禮法の顧問を囑托す

(師範)儀式禮法傳習の事を掌る

(評議員)會務を審議す

(幹事一名)主事の旨を受け書記以下を指揮して常務を所理す

(書記若干名)幹事の指揮を受けて常務に從事す

第八條　本會職員は幹事書記の外は凡て名譽職として手當を給せす

第五章　講習

第九條　禮法講習は一週三日とす

第十條　本會に於て講習する課目を左の如く定むと雖も各自の隨意に何れの課を修むるも妨けなし

◉禮　法

一參賀の作法　一授受奉呈
一拜謁々見の作法　一進饌程儀
一陪宴の作法　一食禮大意
一訪問の作法　一婚禮式
一會食夜會の作法　一賓客接遇の作法
一起居進退　一室內之裝飾
一物品薦徹　一祝祭喪日家庭の儀式
一陪待周旋

◉點　茶

抹　茶
煎　茶

◉挿　花

立　華
生　花

◉割　烹

高等料理　有職部、儀式部
附屬實用作法　實用花結包形
普通料理
懷石料理
折衷(本邦、西洋、支那)料理

雜報

●山階宮妃殿下の御微行

去月中旬の頃、山階宮妃殿下には郊外の散策を思立たせられ、いと質素の御服装に一人の從者を召連れられ、新橋より大森迄は汽車、大森よりは海岸の方へ向つて御徒歩遊ばされしが、當日は穴守神社の大祭にて往さ來るさの人足織るが如く、誰一人貴き御方と心附く者なければ、すれ違ひざま袖袂を觸るゝもあり、大口開いて笑ひ乍ら戯れ言を云ひ合ひ打過るもあり、殿下は斯る雜沓の中を更に御厭ひなく、却つて物珍らしく興に入らせ給ひ、御機嫌愈よ麗はしく田園の春色自然の風趣得も云はれずなど、從者に御言葉を賜はり尚も御足輕げに逍遙遊さるゝ内、不圖故皇太后宮亮林直庸の未亡人繁子の向ふより來る樣が御目に止り、從者をして其方は林ならずやと問はせ給ひしに、未亡人は始めて殿下と心附き恐懼して措く能はざりしを、殿下は御心易げに近く寄り給ひて、路の邊に佇みながら暫く四方山の御物語あらせられ、今日の野歩きは殊の外樂しく思召す旨御意ありしと、實に貴き御身には御目馴れぬ田野村落の景色こそ、とよなう珍らかに思はるゝものならめ。

●島津公爵家の英國女教師傭聘

島津(忠重)公爵家にては、今回英國より才能の譽あり且つ熟練の功を積める家庭女教師ハーウォールド孃を家庭教師として傭聘し、忠重公(十四歳)を始め弟妹諸公子と同居せしめ、語學は勿論、家庭の教育より日常の衛生に至るまで最も進歩せる文明的方法に則りて掌らしめらるゝ筈にて、同孃は三月十八日を以て同家に到着せりと云ふ、孃は前年獨逸に聘せられ、現皇帝陛下の皇子達に語學を教授し、且つ家庭教育を擔任して、宮廷の信用、皇子の愛慕淺からず、又英國駐剳暹羅公使の子を托せられ、教育したることあり、此の他英國知名の士の子女を教育したると多く、而して此等の人々は孰も同孃が少年の才能の適所、天資の長所を發見して之を誘掖し、且つ善良なる性情を陶冶するの技倆を稱賛し、感謝しつゝありと云ふ。

●愛國婦人會の設立

久しく朝鮮に在りて教育事業に力を盡くし深く韓人の上下に信頼せられ居る奥村五百子女史は齢耳順の身を以て遙に遠く北清に入りて、親しく戰地の實況と軍隊の勞苦とを視察し、歸りて後ち戰死せる人々の遺族を救護する道を講ぜんと東奔西走せるが、その熱誠は遂に巾幗社會を動して爰に愛國婦人會の設立を見るに至れり、其發起人及び規則は左の如し。

發起人

公爵夫人　一條悅子
公爵夫人　岩倉久子
公爵夫人　二條あい子
公爵世嗣夫人　九條惠子
公爵夫人　近衞貞子
公爵夫人　島津田鶴子
侯爵夫人　大山捨松
伯爵世嗣夫人　大谷章子
伯爵夫人　板垣絹子
伯爵夫人　大隈綾子
伯爵夫人　松平充子
子爵夫人　伊東みつ子
子爵夫人　岡部なか子
子爵夫人　小笠原秀子
子爵夫人　谷くま子
子爵夫人　松前藤子
男爵夫人　花房千鶴子
男爵夫人　千家さし子
貴族院議員伊澤修二夫人　伊澤千世子
海軍少將伊集院五郎夫人　伊集院繁子
衆議院議員鳩山和夫夫人　鳩山春子
日本銀行監事原亮三郎夫人　原禮子
貴族院議員濱尾新夫人　濱尾作子
衆議院議員河野廣中夫人　河野閑子
衆議院議長片岡健吉夫人　片岡みゆ子
講道館長嘉納治五郎夫人　嘉納すま子
高等女子師範學校教授　武田錦子
貴族院議員山脇玄夫人　山脇房子
橫濱正金銀行頭取相馬永胤夫人　相馬りく子
日本銀行總裁山本達雄夫人　山本たほ子
高等女子師範學校教諭　後閑菊野
麻布中學校長江原素六夫人　江原縫子
跡見女學校々長　跡見花蹊
陸軍少將佐藤正夫人　佐藤猶子
高等女子師範學校教授　佐方鎭子
日本女子大學校教授　三輪田眞佐子
衆議院議員島田三郎夫人　島田信子
華族女學校學監　下田歌子
日本銀行理事森村市左衛門夫人　森村繁子

◉愛國婦人會規則

第一條　本會は戰死及準戰死者の遺族を救護するを以て目的とす

第二條　本會は愛國婦人會と稱し事務所を東京に置く

第三條　本會員々たる者左の如し

一　每年會費として金二圓を納むるもの

一　一時金五十圓以上を寄附するもの

第四條　本會は多少に係らず有志者の寄附金を希望す

第五條　本會の目的を賛成し寄附せられたる金圓は確實なる銀行に保管せしむるものとす

第六條　本會へ收入したる金圓は總裁の裁可を經て遺族へ贈るものとす

第七條　本會に左の職員を置く

總　裁　　一名

會　長　　一名

理　事　　若干名

幹事長　　各府縣に一名

幹　事　　若干名

評議員　　若干名

第八條　本會は右職員の外委員若干名を置き事務に從事せしむ

第九條　本會の事務所に會計報告は每年一回新聞紙を以て報告すべし

◎施行細則

一全國各郡區に幹事若干名を置く各幹事は各醵金を受領し每月末收納金を該府縣幹事長へ出す幹事長は出金者の氏名宿所金額を會長へ報告し收納金を東京森村銀行へ送附し預入るものとす

會長は委員を臨督し事務を處理せしむ但し委員は有給とす

一金高十五圓以上を出金(一時又は數回に)したるものには本會より感章を送與す

一各地の幹事長及幹事は每年出來得る限り會員及寄金募集に盡力するものとす

一教育宗教慈善等に關する諸會に協力を依頼するものとす

一遺族へ分配するには左の方法に依る

(一)各幹事は其受持區内の師團長、區長、郡長並有志婦人と協力して戰死及準戰死者(戰死者同樣の扶助料を官給せられたるもの)の遺族を調査し其分配の程度を定めて每年四月盡日及十月盡日迄の二回に會長に報告すべし

分配の程度は甲乙丙の三種に區分す

甲は衣食に差支なきもの

乙は半ば補助を要するもの

丙は全部補助を要するもの

(二)會長は前項を斟酌し收納金額を顧慮し原案を調製し評議員の議決を經て總裁の許可を仰ぎ各地へ金員を分配する程度を定む

(三)遺族に渡すには區長、郡長並有志婦人の手を經る事又遺族は受領證を直に會長宛にて出す事

明治卅四年二月

東京市麹町區平河町五丁目十六番地

愛國婦人會假事務所

◎和蘭女皇大婚の服裝

本月七日結婚の大典を擧げさせらるゝ和蘭女皇ウイルヘルミナ陛下が當日着用せらるゝ禮服は極めて美麗なるものにして其意匠は巴里にてなされ其驚くべく美しき繡は帝室美術學校の丹精に成りたり其上衣は薄氷

の如き絹に精巧美麗なる銀の飾をなしたるものにして其薄き事紗の如く又た甚た柔かにして若し之を縮むれば容易すく指環の中を通ると云ふ此上衣の裾は地上に引かるゝ事八尺なり和蘭の王室はオレンヂ家にしてオレンヂとは橘の義なるを以て橘は和蘭王統を表はすものなり此上衣には橘の花と枝とを奇麗に紐にて束ねたる模様あり其橘の枝は擴がりて其長き裾に達しオレンヂ家の繁盛を表はす其模様は數多の橘の把にして其一把毎に一の滿開せる花と多くの蕾あり眞珠を以て作られ枝葉は銀糸にて綉はる其他は銀にて唐草の如き模樣及び種々の精巧を極めたる飾あり胸には少しも纈をなさす純白なるブラッセルレースにて飾られたりと

◉鶴久子刀自の略歴

鶴久子刀自舊幕臣松崎權左工門氏の女にして幼より和歌を學び、また書をよくせり、刀自の良人は蜂屋光世と稱し、又和歌を好み且つ古筆の鑑定を爲し號を丹鶴と稱しき、刀自の經歴として別に著るしき事柄はなけれど、妙齡の折には隨分困難をされし由にて、良人の死亡後は長男光美氏と二人にて寡居し、和歌琴書の出教授をなしつゝ日を送り居たり。　其後明治二三年刀自年三十五六の頃有栖川宮へ出仕する事となり、爾來二十年間絶えず同宮家へ務られ、次で宮中へ出仕の身となり、皇后陛下の御歌を初め宮樣方、女官方の御歌を絕へず拜見されつゝありしといふ刀自性温順にして氣品高雅和歌と書は最も好む所ろにして隨つて頗る堪能の聞へあり、昨年十一月十一日病を以て歿せり、其の辭世は載せて卷頭の口繪にあり。

◉市中諸物價

▲呉服類　（織留町丁字屋）

本正一樂織（十四圓より十六圓）同並物（十一二圓）本正繋織（十五七圓）同並物（十二三圓）本正諸糸織（十六八圓）山糸織變り柄（十三五圓）〇一疋に付節糸織本正物（十二三圓）同並物（六圓半より七圓半）黑手黃八丈（十二圓）白一樂織（十八九圓より廿七八圓）同斜子上物（廿圓より廿六七圓）同並物（十三七圓）黑斜子正物（十二七圓）白龜綾疋（十四五圓より廿圓）岸縞（六七圓）同絣（五七圓）同夜具縞（五圓半七圓）博多紬（二圓半より七十錢）本八丹（九圓より十三圓）山仙臺平一具物（五七圓）節仙臺半（九圓より）疋物（十三圓）臺平次平（七圓半より）三具取（九圓半）黑八丈疋物（十四圓より廿圓）白濱縮緬糸目百目に付（八圓半より）同丹後（八圓半）縮緬友仙（十二七圓）同更紗（九圓より十四圓）同板〆中巾（十圓より十五圓）同丹後小巾色糸（七圓より十圓）京染花色糸絹（七圓より十三圓）同小節（六圓より九圓）新本紅（五圓より八圓）同板〆絹（四圓八十錢より五圓半）絹更紗（四圓半より六圓）斜子更紗疋（十二圓より十五圓）同石持羽織着尺反（六圓半

より九圓)本御召反(九圓十五圓)同疋物(十八圓廿五圓)風通御召(十二六圓)同瓦斯入(六圓半八圓)新縮緬疋(六圓九圓)別反物鼠丼に薄色(一圓八十錢より三圓半)桐生銘疋(十圓より十五圓)大和緞子廣(四五圓)繻珍廣(十二圓十九圓)同九寸(五圓より七圓)同繻入繻珍廣(四五圓)同九寸(一圓廿五錢より八十錢)本繻子黒廣(十五圓)同九寸(四圓半六圓半)博多九寸上物(五圓半より七圓)同並(四圓半より五圓半)同尺三(八圓より八圓半)新花糸吉絹(四圓半より五圓半)同小節(三圓半四圓半)秩父紅(三圓半より五圓)猩々紅好(四圓半より五圓半)同板〆絹四圓半より五圓半)絹上代(四圓半五圓半)本織反仙(六圓半より九圓半)本場甲斐絹(九圓半より十四圓)同夜具一組に付(廿三八圓)同上の原(七圓半より九圓半)本場伊勢崎銘仙(十圓半十七圓)同並物(八九圓)本場結城紬(八圓半より十一圓)同木綿(一圓六十錢より二圓)同糸入(二圓半より三圓卅錢)高機結城(八十錢より一圓十五錢)本場秩父縞(九圓より十四圓)同飯能(六圓半九圓半)信州紬(六圓半より八圓半)奉書紬(五圓半より十二圓)秋田八丈反(三圓八十錢より四圓半)本仙臺平(十一三圓)五泉平(九圓より十二圓)博多五寸正物(六圓より九圓)同並物(二圓半より五圓)同節五寸疋物(一圓七十錢より三圓半)瓦斯四ッ織縞物(一圓六十錢二圓六十錢)縞四ッ(一圓三五十錢)四ッ鐵無地(一圓半二圓)細双子縞物(一圓十錢より一圓五十錢)同黄八丈(九十五錢より一圓十五錢)瓦斯細糸入(一圓卅五錢一圓七十錢)同上物(二圓より二圓半)同一樂物(二圓より二圓八十錢)同黄八丈(一圓廿錢より一圓八十錢)寄双子上物(八十五錢より一圓三錢)同並物(六十五錢より八十錢)同絣入疋物(一圓四十錢より七十錢)同黒地黄格子(五十五錢より八十五錢)小倉袴地疋(一圓廿錢より一圓四十錢)同糸入(一圓八十錢二圓半)瓦斯小倉糸入袴地疋(二圓七十錢より四圓) 同無糸 (二圓半三圓)小倉五寸糸入(七十錢より一圓)同紺無地王物(一圓半より二圓卅錢)瓦斯黒八丈(二圓七十錢より四圓半)本場青縞(一圓二十錢より二圓)觀光朱子黒九寸(三圓廿錢より五圓)同色物(三圓六十錢より四圓八十錢)同黒尺一巾(四圓半より六圓半)絹小柳黒額(一圓五十錢)同縞物(一圓六十錢)同飛模樣(一圓七十錢)新秩父縞(四圓半より五圓半)瓦斯大縞紬反(二三圓)紡績夜具地(二圓半より三圓)同黒茶絣(一圓卅錢より二圓)瓦斯縮緬友仙(一圓十錢より三圓)瓦斯甲斐絹色(一圓半より二圓十錢)同縞(一圓九十錢より三圓廿錢)同紋織(二圓六八十錢)有松絞白抜上(一圓十錢より五錢)同並物(六十錢より八十錢)同紺無地(六十錢より一圓)伊豫絣(一圓十錢より四十錢)同夜具縞(九十五錢)筑前博多五寸(六圓より九圓) 三河白木綿上(五十錢)同巾(四十五錢)同下(三十五錢)同長尺(四五十錢)同紡績長尺(卅八錢より五十錢)廣巾帶身地(六十五錢)尾州白木綿長尺(卅錢より四十三錢)知多晒木綿(三十錢より卅九錢)同並物(廿一六錢) 尾州青八十錢より一圓十錢)納戸織(五十五錢より七十錢)伊勢晒木綿(卅五錢より四十五錢

▲洋酒類　(大傳馬町逸見山陽堂)

▲ビールの部一打ニ付エビスビール大瓶(二圓廿五錢)札幌ラガビール同(二圓廿五錢)アサシビール同(二圓廿五錢)淺田ビール同(一圓八十五錢)最上黒(二圓三十錢)ライオンビール(一圓六十錢)キリン大(一圓廿五錢)大黒ビール(一圓十錢)▲和製葡萄酒の部一打に付山鳥印香竄大瓶(三圓)蝶印香竄大(三圓廿五錢)佛國機那印(二圓九十錢)鹿印古加(四圓)▲舶來葡萄酒の部一打に付紫棒(八圓九十五錢)青棒(六圓六十錢)赤棒(六圓)黄棒(十一圓)向獅子印大(八圓五十錢)金棒印大(三十二圓)銀棒 (十圓六十五錢)コテロンカロン大(六圓)サンラノール(十一圓五十錢) ▲舶來ブランデーの部 一打に付ヘンチツトシー金斧印一ッ星(廿四圓五十錢)同 二ッ星(廿九圓六十錢)同三星(三十五圓) 馬乘印(品切)峰巢印(十四圓八十

錢）ラビール（七圓二十錢）ラールトアブラハム（五圓五十錢）▲和洋雜酒の部一打に付天人ベルモット大（七圓五十五錢）同上印（六圓）スコッチウヰスキー（六圓八十錢）赤紙ローヤルブレンド（九圓廿五錢）フランスベルモット（八圓廿五錢）スパニッユポートワイン（八圓八十五錢）ポートワイン大（七圓五十錢）モノポールシヤンパン亦口小（品切）ルイスレノー白ヤコロ大（品切）和製天人ベルモット上大（四圓四十五錢）

▲洋食料品　（同　上）

▲舶來之部地球印バタ一斤入一個（六十三錢）同半斤入一個（卅三錢五）イスニーバタ高罐一斤入一個（九十錢）高同半斤入一個（四十錢）牛印紫罐バタ一斤入一個（五十錢）同半斤入一個（廿四錢）三星印バタ一斤入（四十四錢）イスニー赤罐獅子印一斤入（九十八錢）和蘭金罐バタ一斤（五十二錢）鷲印ミルク一函ニ付（十六圓二十錢）青紙イスバタ四オンス入（三圓三十錢）モルトン白胡椒一打（二圓八十五錢）洋芥子年瓶一打（三圓十錢）アンチヨビソース小一打（三圓八十五錢）マコノチーソー大一打（三圓八十五錢）冠印ソース（二圓七十五錢）イートマンソース小一打（三圓六十錢）馬首印フース（一圓八十錢）ABカレー粉平小瓶（二圓七十錢）チトミール（二斤入一打（四圓四十五錢）ラード三斤入廿個（十二圓十五錢）シモン糖一斤（命切）レーピー洋酢一打（四圓）モートン洋酢同（三圓七十錢）レライチヨコレート一斤（六十四錢）馬首印上一斤（品切）モルトン食鹽一打（三圓廿五錢）鳥印食鹽一打（二圓九十五錢）洋菓子平小瓶半斤入（二圓九十五錢）ニーロー上一斤（六圓）メリケンチース上一斤（三圓三十錢）▲和製之部上等カフヰース角糖罐詰三十箇一箱（十二錢）同中（十一錢五厘）鳥印食鹽大瓶（一圓八十錢）鳳凰印ビスケット二斤入一打（五圓三十錢）同ビスケット五斤入一打（十三圓）日ノ出ミルク一箱四打入（十圓五十錢）ポンス小瓶一打（一圓廿錢）桃太郎ミルク四打入一箱（十一圓五十錢）葡萄ジヤム（一圓八十五錢）花ラツキヨ平瓶（一圓四十五錢）四君子平瓶（一圓九十錢）鳥印ビスケット一斤入一打（二圓八十八錢）牛肉日煮壹箱に付（九圓）牛肉霰煮壹箱に付（十圓）

▲鼈甲及珊瑚　（京橋南傳馬町白牡丹）

本牛大形祝儀差牛京一枚に付（廿圓より三十圓）丙乙（卅五圓より六十圓）同甲（七十五圓より百圓（同特製（百十圓より百五十圓）本牛祝儀差笄長サ七寸五分より八寸迄一本に付胴黒牛入丙（十五圓より廿五圓）乙（三十圓より五十圓）甲（六十圓より八十圓）特製（一百圓）同無地地笄（五十圓より百五十圓迄）本牛並大形牛京二九圓一枚丙（十圓より廿五圓）同乙（三十圓より五十圓）同甲（六十圓より八十圓）同特製（一百圓）本牛胴入小角形中差一本丙（八圓より十五圓）同乙（廿圓より卅五圓）同甲（四十圓より六十圓）同特（八十圓より百圓）引髮本牛はらぶひん櫛上の部一枚に付丙（五圓より七圓半）乙（八圓より十二圓）甲（十五圓より廿圓）特（三十圓）並物一枚に付丙（一圓前後）乙（二圓前後）甲（三圓より四圓）入斑本牛ふ入りびん櫛上の部一枚に付丙（四圓より六圓）乙（七圓より十圓）同甲（十圓より十五圓）待（廿圓）並物拂底印牛物上々ハラ張製大形祝儀差櫛笄一組、付甲（八圓）乙（六圓）丙（五圓）同並形牛京（一圓五十錢二圓半迄）土洲珊瑚地向ウス包根掛の部四分五丸玉村一掛中（卅五圓より廿五圓迄）乙（廿三圓より廿圓）丙（十八圓より十五圓）マレ物（五十圓前後）四分前後丸九玉付一掛中（卅五圓より廿二圓）丙（十五圓より十八圓）內（十五圓より十二圓）マレ物（四十圓前後）二分五厘丸十玉一掛甲（廿二圓より十八圓）乙（十七圓より十三圓）丙（十二圓より九圓）マレ物（三十圓）貫玉の部六分丸一個中（四十圓より三十圓）同乙（廿八圓より廿五圓）同丙（廿二圓より廿圓）同丁（十八圓より十五圓）戊（十三圓より十圓）同巳（九圓より七圓）同特（四十圓）五分半丸一個甲（廿五圓より廿圓）同乙（十六圓より十五圓）同丙（十三圓

より十圓)同丁(八圓より七圓)同持(四十圓)五分丸一個甲(廿圓より十五圓)同乙(十三圓より九圓)同丙(七圓より五圓)同持(十三圓)

▲時計附屬品

時計附屬品流行金製鎖男物十四金(卅圓より五十圓)十八金(四十圓より八十五圓)二十金(五十圓より百圓)二十二金(六十圓より百十圓)同兩提物十四金(卅五圓より六十圓)十八金(四十八圓より九十五圓)二十金(六十圓より百十圓)二十二金(七十圓より百廿圓)プラチナ十八金交(五十圓より九十圓)婦人用十四金(十一圓より十八圓)十八金(十四圓より二十五圓)十八金プラチナ交り(十八圓より廿五圓)二本立緒〆付金製提物十八金方針(三圓より六圓)同彫刻付(四圓より十圓)無双彫刻又は寶石入(十圓より廿五圓、同寫眞入(九圓より廿圓)同鎚(六圓より廿圓)銀製鎖純銀製(一圓五十錢四圓)赤銅製(一圓より六圓)同金張(二圓五十錢より六圓)銀赤銅金着方針寫眞入等(卅錢より一圓)特輸入五ヶ年特金着類(二圓)十ヶ年持同(五圓)十五ヶ年持(七圓)廿ヶ年持同(九圓)卅ヶ年持同(十八圓より廿五圓)白色蜒金鎖(一圓五十錢より二圓)十八金(廿五圓より四十圓)十八金プラチナ交り(卅圓より四十五圓)

◉四恩瓜生會

四恩瓜生會は三月廿日正午より小石川大塚辻町東京市養育院内會堂に例會を開き、山科俊海僧正の法要及び法話あり、倘ほ跡見花蹊女史の演説あるべき豫定なりしに據ろなき差間の爲め出演なかりき、當日來會者の重なるものは岡部子爵夫人、松平男爵夫人、千家男爵夫人、河野廣中氏夫人、岩佐純氏夫人、原亮三郎氏夫人等なり。

◉兒童一時間の動作

西洋の兒童は東洋の兒童に比較すれば、頗る活潑にして從て其腕白さ加減も驚き入るほどなるが、之れに就て一寸面白き家庭談あり、こは近頃英國の或る家にて一人の叔父さんが一時間に其甥が行た丈けの事を書留めて見たるに大要は左の如き動作を爲せり(一)呼吸をも繼かずに十五分間泣き續ける(二)長椅子の布團の孔に塡めんとて叔父の口髯と髪の毛を引きむしる(三)火搔を持つ手を伸し得る丈け高く伸して壁紙を搔破る(四)グラスの鉢の上に腰をかけて之を毀し(五)鈕釘三個と二三條の糸を呑む(六)母の針箱を携げ來つて火鉢の中に打明ける(七)猫の頭を摑んでコップの中に押込み爪で引搔かる(八)妹の大切にする蠟製の人形で翫弄車の釘を打込んとして其首を落す(九)叔父に貰つたステッキを以て窓ガラス二枚を叩き割る(十)高價の鉢二枚を手にして長椅子の上から落ち之れを目茶々々に毀す(十一)石炭箱の中に入り着たる白衣を汚す(十二)叔父が何物か娯み物を與へんと室外に出でたる間に敷物を燒く(十三)長椅子の下に這込んで駄々を捏ね叔父が

ジャムを與へし爲め漸く出來る(十四)椅子の脚の間に狹まれ容易に拔けず已むを得ず椅子を毀して救ひ出す(十五)母の上靴に牛乳の壺を打明ける(十六)一番結局に母の入り來るを見て大に驚き辷り轉んで鼻をしたゝか打つて鼻血を出し同時に衣服を一尺ほど綻ばす

●服裝改良の實行

先頃歐洲より歸朝したる山根警視廳第三部長は、熱心に服裝改良の體育に必要なる所以を主張し、諸處の公會席上にても屢〻其持論を吐露し居る事なるが、今度一種の男女改良服を案出し、既に自家の子女をして之を着用せしめ居るよし。其改良服裝は、男女とも總て筒袖にて腰下までの身丈となし、下には股引(男女其仕立方を異にす)を穿ちて袴を附けしめ、且つ下駄草履を廢して靴となし、女子の頭飾等の如きは一切之を廢するものなりといふ。

●市內理髮と髮結

今回禿頭病流行の爲め警視廳にては消毒法を實施する考にて曩に市內理髮店女髮結の總數を調査せしに本日迄に各署より同廳へ屆出てたるは麴町署管內の理髮業者男五十五人(店主)女百五十二人、本鄕署管內男八十五人、女百七十四人、芝署管內男百四十三人、女二百九十三人、品川署管內男九十七人、女百六十八人、千住署管內男九十四人、女八十五人、小松川署管內男六十四人、女七十八人、府中署管內男五十四人、女十五人、青梅署五日市分署管內男廿一人、女廿四人なりしといふ。

●婦人協會の午餐會

下田歌子女史の會長たる帝國婦人協會にては來三十一日を以て第一回工藝科の卒業證書授與式を擧行する由なるが一昨日午前十時より同會贊助員及び同會贊助の新聞通信員を招待し一々生徒の手工になれる工藝品即ち刺繡、編物、裁縫、繪畫等を縱覽に供し階上廣間に於て卒業生割烹の日本洋理を饗し下田會長より一昨年五月設立以來の經過と將來の希望を演じ德富猪一郎氏の挨拶あり午後一時過散會せしが來會者は谷子爵夫人、山本日本銀行總裁夫人、德富猪一郎氏外三十餘名にして同校職員生徒は其間に立ちて接待の勞を執られたりと。

●興風女學校の擴張

駿河臺の興風女學校は維新勤王家山田時章氏の創設に係り廿年一日の如く女生の薰陶に從事し日常言行の末に至るまで細かに訓誨し評判よき學校なるが今般更に學科を博設し規模を擴張し女敎の振興を計るといふ。

●墨堤の端艇競漕

今月は花節のことゝて例年の如く隅田川の上流に於て催さるべき各學校及び會社銀行の端艇競漕會の日割は左の如く定まる

四月三日	郵船會社	四月廿日	東京中學
同十一日	第一高等學校	同廿一日	日本銀行有志
同十三日	帝國大學	同廿八日	日本銀行全躰
同十四日	高等商業學校	五月五日	高等商業學校
同十六日	學習院輔仁會	同十二日	常盤倶樂部

●三井呉服店の新柄陳列會

去月二十日より本月二十日迄一ヶ月間駿河町三井呉服店内に開會する新柄陳列會は京都桐生其他全國中有名なる各織物地に於て特に出品の目的を以て意匠を凝したる絹木綿一切の呉服物を陳列する趣向にして一種の私立織物共進會なるが衆客の好評を博したる出品に對しては夫れ〴〵賞與を贈る見込なりと云へば出品中新奇の珍柄も多かるべし倘ほ今回を始めとして毎年春秋二期に開會する由

新刊寄書

◎武藏野　民友社發行

獨歩吟客國木田哲夫の隨筆記行小品文を蒐めたるもの文に穠麗の味なしと雖も一本を懷ろにして郊外に散策せば野情津々たるべし

◎看護婦人（第七號）　帝國看護婦人協會

衛生は學理なり、看護は實行なり、學理と實行相俟て始めて衛生の本意達すべし。看護婦人は即ち帝國看護婦人協會の機關雜誌にして實に斯界の曉星たり、編輯主任は黒田湖山氏にして本號より更に其の體裁を改めたり。

◎日本染色雜誌（第一號）　大阪同發行所

學理の進歩と共に染色に化學上の應用益々精巧となれり、本誌は染色の專門雜誌にして卷頭に染糸の標本を添へたり。

◎衛生談話（第二號）　通俗衛生茶話會
◎女子の友（第八十六號）　東洋社
◎史學界（第三卷第二號）　富山房
◎女學講義（第十七卷）　大日本女學會
◎女鑑（第二百廿四號）　國光社
◎大日本婦人敎育會雜誌（第百三十一號）　東京同
◎こゝろの花（第四卷ノ三）　大日本歌學會
◎日本婦人（第十六號）　帝國婦人協會

次號要目

「論說」には、安井哲子女史の女子教育に關する論文「家庭」には、塚本はま子の女子の家庭敎育、某兒科醫の小兒に與ふるお茶とお菓子の注意、その他家庭談及び衛生料理に關する事項「修身」には、野中千代子の女德の續稿「史傳」には中內蝶二氏の佛國女傑コルデー（續）依田學海翁の幸田氏の母の話、中村秋香氏の三十六歌選の續稿、「學藝」には、藤堂氏の燕の話、岡田氏の火の話、桐生法學士の法律談、喜田文學士の地理談、石原大學生の養生訓の話、木村小舟の胡蝶の話、「講義」には、例の如く三文學士の講義を載せ「小說」には、水蔭子が清新の筆になれる磯の淸水の短篇と、藤本藤陰の新作雙々燕を揭ぐ「雜錄」には、三宅花圃の夜半の埋火、石澤文學士の英國女皇、湖畔吟客の不時の歸省等、その他連載の栽縫、造花、割烹原理、書畫談等は其續稿を載すべく、又中村秋香翁の懇切なる文章談を揭ぐべし、各欄の材料いよ／＼豐富、口繪寫眞亦嶄新を選む

每月一回五日發行

定價表

		郵稅
一冊（紙數二百八頁）…金二十錢		一冊 二錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢		
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢		
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢		
內（定刊數……………十二冊 增刊四回…三、六、九、十一月價格同一		

廣告料

二十四字詰	一行	半頁卅二行	一頁六十四行
特等	四十三錢	十三圓七十六錢	割引三十三圓
一等	三十五錢	十一圓二十錢	割引二十七圓
二等	三十錢	九圓六十錢	割引二十二圓
三等			割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵劵代用は一割增にて五厘一錢の分に限る。
●總目錄御入用の方は二錢劵相添へ申込あれ。

明治三十四年四月五日發行 第一卷第五號

編輯人　松原岩五郎
發行人　大橋新太郎
印刷人　石川金太郎
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

熊田宗次郎君著

明治才媛美譚

（再版發賣）

洋裝全一冊 紙數六百頁餘

寫眞口繪拾貳葉入

正價金五拾錢

郵税八錢

明治才媛美譚は、猶ほ百花園の如し、清痩梅の如きもの、艶麗櫻の始きもの、濃麗牡丹の如きもの、嬌紅海棠の如きもの、芳姿芙蓉の如きもの、幽香菊花の如きもの、皆收めて巻中に在り。然れども本書の取る所は、姿色にあらずして、徳操に在り。妙齢の令嬢にして、父母に孝なる、兄弟に友なる、朋友に信なる、婢僕に慈なる、而して才學の卓絶智識の俊邁なる、苟くも**婦女の龜鑑**たるに足るべきものを擇びて、之を取る、女子は必ず讀まざるべからず、女子を有し女子を敎育するものは必ず讀まざるべからず、家庭の讀本蓋し之れより善きは無けん。

本書目次

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

佐々木信綱先生編纂

續日本歌學全書

全部八冊　洋裝美本
紙數一冊五百頁寫眞銅版入四千餘頁

正價　一冊金參拾五錢　四冊前金壹圓參拾錢　全部八冊前金貳圓五拾錢　郵税壹冊に付八錢宛

歌は吾國風にして二千年來吾皇統と共に連綿絶ゆる事なく、歌仙名匠相次いで出で、斯道愈盛なり、本館曩に日本歌學全書拾貳卷（萬葉集、八代集、家集、歌合、歌論）四十部を刊行せしに、大方の賞賛を得て毎卷數版を重ねたりき。然れども後鳥羽帝の頃の歌集を以て終りとせしかば、未だ全書の名を完くせず。こゝに元祿以降、二百年間の歌集歌論六十餘部を輯めて、續日本歌學全書と名けて發刊せり、これら六拾餘部の書は刊本なれば今は稀なるもの、若くは名家秘藏の寫本を借り得しものにして、容易に輯め得がたき書なり、而して毎卷書目を列記するの煩を省き、一時代を代表すべき人の全集と名づく、殊に佐々木氏自ら校訂の責に任じ、誤植なからむ事を期せる、願くは世の歌に志深き諸君一部を座右に備へられむことを。

全部總目次

第参編 本居宣長翁全集

自撰歌 本居宣長
石上私淑言 本居宣長
後鈴屋集 本居春庭
稲葉集 本居太平
歌のしるべ 藤井高尚
詩歌論 横井千秋
詠歌太概評 齋藤彦麿
海士の囀 足代弘訓

第四編 香川景樹翁全集（巻上）

桂園一枝 香川景樹
同拾遺 香川景樹
新學異見 香川景樹
古今正義總論 香川景樹
桂園遺文 香川景樹
中空日記 香川景樹
またぬ青葉 香川景樹
六十四番歌合 香川景樹
うす氷 香川景樹判
大ぬさ 中川自休
歌學提要 内山眞弓輯

第五編 香川景樹翁全集（巻下）

随所師説 香川景樹
かろかや集 松波資之輯
景恒翁歌集 高橋古通
須磨日記 香川景樹
古今正義總論補註 熊谷直好
古今正義觀論補註論 八田知紀
古今正義總論補註論辨 熊谷直好
古今正義序註追考 熊谷直好
浦のしほ貝初篇 熊谷直好
桂の下枝 香川景樹

第六編 小澤蘆庵翁全集

六帖詠草 小澤蘆庵
同拾遺 小澤蘆庵
蘆かひ 小澤蘆庵
或問 小澤蘆庵
振分髪 小澤蘆庵
つゝら草子 上田秋成
閑田百首 伴蒿蹊
垂雲和歌集 垂雲軒澄月
夢宅和歌集 桃澤夢中
杉のしつ枝 荷田蒼生子

第七編 近世名家家集（巻上）

千々廼舎集 千種有功
和漢草 千種有功
日枝の百枝 千種有功
天降言 岡安宗武
三草集 松平定信
常侍集 水野忠邦
あづま歌 加藤枝直
柿園詠草 加納諸平
同拾遺 加納諸平
亮々遺稿 木下幸文

第八編 近世名家家集（巻下）

常山詠亭草季吟
子歌集
岡屋家集
古道家集
春卿家集
魚彦雑集
泊泊舎集
松屋歌集
五家園家集
柳園詠草
五十槻擾葉集
佐喜草
蓮園家集
苔清水
櫃園歌集
草徑集

第九編 近世長歌今様集

近葉菅根集 清水濱臣
藤垣内集 本居太平
ふでの舎集 本居太平
寛居長歌集 足代弘訓
山齊長歌集 鹿持雅澄
ゆらむろ集 僧辨玉
稲舎長歌集 日下田足穂
櫻園長歌集 渡邊重春
今様歌集 佐々木弘綱

第拾編 桂園門下家集

しのふ竹
稲の峯
浦の汐貝拾遺
桂帖翁自歌合
斐雄歌集
船路日記
六帖題和歌
船路のゆきき
殘の夢
蠣島日記
箭園歌集
天満宮影前百首
桂かけ
調の説
芳陰遺草
桂の下枝續篇

第拾壹編 明治名家家集（巻上）

野雁集
眞爾園翁歌集
調鶴集
なつ衣
長恨歌句題和歌
月舎翁歌集
寄居百首
ゆら室集拾遺
わすれ貝
和歌禪話
樅の下枝
自撰歌集
海人の刈藻
蓼の舎集

第拾貳編 明治名家家集（巻下）

梨のかた枝 三條實美
岩倉贈太政大臣集 岩倉具視
釋教百首 福田行誡
落葉集 福田行誡
逍閑雜記 高崎正風
墨水餘滴 黒川眞頼
あさぎぬ 小出粲
花仙堂歌集 松波遊仙
花仙堂歌集拾遺 松波遊仙
御垣の下艸 税所敦子
柳の露 小池道子
竹柏園歌集 佐々木弘綱

（後付の三）

松風庵江刺家空齋宗匠新編

茶の湯大全

●全一册洋裝中判總クロース金文字入頗美本

●紙數五百餘頁　●正價金一圓　●郵稅拾錢

本書は曩に茶道極傳書を著はし、世の好評を博したる有名なる松風庵江刺家空齋宗匠の新編にして、凡そ茶道に關する一切の茶器扱方等のことを挿圖にて詳細說明し、且つ索引に便ならしむる爲め（イロハ）別に爲したり、其他概言せば爐、風爐炭手前より薄茶、濃茶、古風點、流點、臺目點、向切、隅爐、大板、長板、向板、重茶碗、盆點、書、夜咄、朝、曉、飯後、不時、跡見、獨客等の茶の湯手續幷に七事式に至る迄點前等一切の手續及置合のこと、挿圖して平易に詳記したるものなり、故に斯道初步の諸彥と雖も、一讀して容易に獨修することを得べし、實に古今未曾有の珍書なり。



博文館編輯局編纂

●茶の湯と生花

全一册洋裝菊判正價廿錢郵稅六錢

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（後付の四）

華族女學校學監正五位下田歌子女史述

九版

家政學

全二冊和裝美本正價一冊金三拾錢郵税一冊六錢

目次

家政は女子必須の學術なり、而して未だ嘗て好書のあるなし、吾儕常に以て遺憾とす、下田先生多年華族女學校の學監として家政學の教授を主る、今や本書を著はし、凡そ家政の教授に關する事物細大洩らすことなく、尚ほ數多の挿畫を加へて其理解を助けしむ、本書は實に師範學校、高等女學校等家事科の教科書として無双の好書ならん、弊館幸に之れが發兌の榮を得たり世の教育に從事する士女は速に一讀せずむばあらず、

三浦智之君著

實用家事經濟學

附 家内心得隨筆

全壹冊 洋裝袖珍 正價金廿錢 郵税四錢

坪谷善四郎著

家政整理法

全壹冊 定價金五拾錢 郵税六錢

家政整理の任は家の大小と人の貧富に論なく主婦たる者の最とも大切なる務なり金錢の出納を愼しまざれば生計の出入相償はず況して餘裕を貯蓄し益々家運の繁榮を望むを得べからず學内の取締り正しからざれば内には一家の和順を缺き風儀紊れて幸福を減殺し外には世間の交際に當を得ずして公衆の擯斥を免かれず之を要するに成るべく少なきの經費を以て成るべく多くの幸福を求め一家の規律を嚴かにして恩威並び施こし内外の幸福を進むるとを家政整理の主眼とす本書の之を説くと最とも親切なり

博文館發兌

(後付の五)

巖谷漣山人著　有名畫伯揷繪

世界お伽噺

每月壹回發行●全部壹百冊●洋裝菊判美本

正價壹冊七錢●六冊前金四拾錢●拾貳冊前金七拾八錢●郵稅壹冊貳錢

●第二十七編　（片山春帆畫）

獨逸　狐の裁判　上

全壹冊菊判密畫入美本正價金七錢郵稅貳錢

昔獨逸の森の中に一疋の狐が棲んで居まして、森の獸を欺かしては、惡い事ばかりしますので、他の獸が迷惑がり、これを獅子王に訴へますと、狐は三寸の舌頭で、まんまと獅子王をくるめ遂せ、斷罪を免れて、また惡業を働くと云ふ、これが上篇の物語で、其跡はまた下篇で詳しく

●第廿八編　（小島沖舟畫）

獨逸　狐の裁判　下

全壹冊菊判密畫入美本正價金七錢郵稅貳錢

狐の決鬪は狐の裁判の續稿にして、惡智惠あるライネツケ狐が、他の獸類を窘めては、舌三寸に獅子の大王を欺き遂せ、イゼグリムの狼の決鬪を物ともせず、牡猿の知惠も身の毛まで、綺麗さつぱり刈込んで首尾能く狼を退治た處で、獅子大王の一の下臣と爲ると云ふ、智惠あるものは世に榮へ、智惠なきものは世に隱るゝ、眞理を爰に寓たる其物語の後篇なりとす、

既刊目次

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

小說
講談
雜誌

花月世界

毎月、一回
十日、發行

菊判美麗
挿畫數葉

▲定價一册九錢◎郵税一册壹錢◎郵券一割增爲換今川橋局宛▼

◎最美最廉天下無比◎三册前金貳拾六錢〇六册前金五拾錢〇十二册前金九拾八錢〇郵税各壹錢◎全國新聞雜誌店にて販賣す

花月世界は　娯樂と樂天を本領とし無味淡白の文學的理想に偏せず
花月世界は……斬新小說雜誌にして名家の傑作を蒐め趣味極めて豐富
花月世界は……人情、探偵、滑稽、諷刺、時代小說等興味ある短篇を撰ぶ
花月世界は……毎號當時有名なる第一流講談落語家の十八番を記載す
花月世界は……俳優、力士、藝妓、義太夫總て藝人社會の評判記を載す
花月世界は……流行、風俗、名所、花暦、時好料理、遊藝、遊戯等を網羅す
花月世界は……俳諧、狂詩歌、情歌、流行唄、及滑稽一口噺、茶番を載す
花月世界は……毎號懸賞投稿を募集し時報欄に內外の珍聞奇談を掲ぐ
花月世界は……萬案內欄を置き時遊、買物、紹介等總ての便利に供す
花月世界は……卷頭美人、俳優、相撲、名勝、風俗等精巧寫版を挿入す
花月世界は……廉價無比、何人も容易に得べく躰裁亦近來の善美なり
花月世界は……社會萬般の耳目となり必要時機に應じ臨時增刊をなす

全文振假名附極めて平易一字一句皆快文字趣味津々極致を即了す

社會の上中下に通する好雜誌

何人にも愛讀し得る最廉價にして數千の雜誌中及ぶものなし

◎第壹號四月十日發行◎**挿畫**寫眞版四頁には三都花競東西名優兩京力士を精紘す　**祝辭**福地櫻痴居士其他

小說◎おぼろ夜：廣津柳浪◎（題未定）：三宅青軒◎女劍舞　猪波曉花等總て新作の短編　**講談**◎義士大石瀬左衛門：桃川如燕◎花見小僧：圓遊

餘興◎藝者の半面：不通庵◎藝者仲間の禁厭：醉天◎俳優短評：榎本破笠◎評判力士：好角子◎滑稽一口噺：半山子◎其他各欄記事數十項

發行所　東京神田千代田町二番地（電話本局百四十四番）　花月社

（後付の八）

著名學士大家執筆∴有名和洋畫伯挿繪

洋裝菊判美本

世界歷史譚

壹冊百卅頁餘

全部五拾五冊∴毎月壹回發行

第壹編…釋迦…高山文學士著 觀山畫
第貳編…孔子…吉國文學士著 不折畫
第三編…耶蘇…上田文學士著 不折畫
第四編…ビスマーク…笹川法學士著 象堂畫
第五編…ハンニバル…大町文學士著 蒼也畫
第六編…マホメット…阪本文學士著 蓬歲畫
第七編…漢高祖…三浦文學士著 蓬歲畫
第八編…ネルソン…島田法學士著 蓬歲畫
第九編…岳飛…笹川文學士著 金秋畫
第拾編…コロンブス…桐生文學士著 白瀧畫
拾壹編…ガリバルヂー…岸崎法學士著 不折畫
拾貳編…彼得大帝…佐藤文學士著 春汀畫

第貳拾貳編

ナポレオン

文學士 土井晩翠君著

宮川春汀君挿畫

全壹冊 洋裝

正價拾三錢 郵稅四錢

革命の戰雲暗憺たる時に當りて身を「コルシカ」の一孤島に起して佛蘭西皇帝の位に昇り絶大の巨腕を揮ひて列國の兵を驅破し威武を萬世に輝したるしの「ナポレオン」ボナパルト」一さなす而して土井文學士超凡の史眼を以て犀利の筆を揮ひ之を傳す壯絶快絶英雄の面目紙表に躍如たり

拾三編…華聖頓…福山文學士著 古洞畫
拾四編…孔明…安藤法學士著 松亭畫
拾五編…ソクラテス…久保文學士著 不折畫
拾六編…グラッドストーン…近藤法學士著 不折畫
拾七編…歷山大王…幸田文學士著 不折畫
拾八編…王陽明…白河文學士著 春汀畫
拾九編…ガーフヰルド…酒井文學士著 不折畫
貳拾編…デモスセ子ス…十時文學士著 古洞畫
廿一編…シェクスピーア…中村法學士著 春汀畫
廿二編…那破翁…土井文學士著 不折畫
廿三編…成吉汗…太田法學士著 不折畫

定價(前金)●壹冊拾參錢●六冊七拾錢●拾貳冊壹圓參拾錢●廿四冊貳圓五拾錢●郵稅壹冊四錢

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

(金子)

女學世界
毎月一回五日發行
第壹卷第五號
（明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可）
（明治三十四年五月十日發行）

（東京株式會社秀英舍印刷）